

下 志 村 遺 跡

第2次発掘調査

—大在西小学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2005

大分市教育委員会



A区SK140



A区SE450 井戸枠



下志村遺跡第2次調査A区全景

下 志 村 遺 跡

第2次発掘調査

—大在西小学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2005

大分市教育委員会

序 文

本書は、大分市教育委員会が平成14・15年度に大分市立大在西小学校の新設に伴い実施しました下志村遺跡第2次調査の報告書です。

大分市は、「心かよい 緑あふれる 躍動都市」を都市像に掲げ、文化・歴史的風土を活かした個性豊かな都市の創造に向け、県都として、さらに中核都市としての風格を備えた魅力あふれるまちづくりを推進しています。

本市教育委員会におきましても、文化財の保護・保存と活用を図るために、調査・保存・指定・管理・公開等の事業を推進しながら、「自然と史跡を生かした」21世紀の都市づくりに向けて努力いたしているところであります。

さて、下志村遺跡は、従来、弥生・古墳時代の遺跡として周知されていましたが、今回の調査において、新たに中世の集落遺跡としての評価を積み重ねることが出来ました。

この報告書が、今後の学術研究ならびに埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となり、さらに、広く市民の皆様にご利用され、郷土の歴史研究に幅広く活用いただければ幸いと存じます。

本書の刊行にあたり、ご配慮・ご協力を賜りました皆様に対し衷心より謝意を表すとともに、発掘調査ならびに資料整理にご協力下さいました関係各位に對しまして、心から感謝申し上げます。

平成17年3月31日

大分市教育委員会

教育長 秦 政 博

例 言

1. 本書は、平成14・15年度に大分市教育委員会が、同学校整備課の委託を受け実施した大在西小学校の建設工事に伴う、埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査及び報告書作成の費用は、同学校整備課が負担した。
3. 発掘調査は、後藤典幸・荻幸二・上野淳也・水町裕子がこれを主体となっておこない、調査のサポート業務を大分市教育委員会の委託を受けて平成14年度11月～3月の期間を国際航業、平成15年度4・5月の期間を九州埋蔵文化財リサーチがおこなった。
4. 本書の執筆は、第1章を後藤・荻・水町が、第2章2、第5章1・2・4を上野が、第2章1・第5章3・第6章を水町が、第3章1を荻・上野・水町が、第3章2を荻・水町が、第4章を古環境研究所がそれぞれ、担当した。また、出土遺物の整理については、小野裕子・神崎順子（大分市教育委員会文化財臨時職員）がおこなった。
5. 本書の編集は、上野・水町がおこなった。
6. 発掘調査および調査における遺構の写真撮影は、荻・上野・水町がこれをおこなった。
7. 発掘調査における調査区の航空写真撮影は、大分市教育委員会の委託を受け、九州航空がこれをおこなった。
8. 遺構写真は、大分市教育委員会の委託を受け、大分コピーが、スライドフィルムからデジタルスキャニングをおこなった。
9. 遺物の写真撮影は、上野・水町が、デジタル写真撮影をおこなった。
10. 本書における遺構の実測は、国際航業・九州埋蔵文化財リサーチのサポートを受け、調査員がこれをおこなった。
11. 本書における遺物の実測・製図作業は、一部を大分市教育委員会の委託を受け、九州埋蔵文化財リサーチ・雅企画がおこない、その他を荻・上野・水町がおこなった。
12. 本書におけるトレースは、一部を大分市教育委員会の委託を受け、大分コピー・九州埋蔵文化財リサーチ・埋蔵文化財サポートシステム・雅企画がおこなった。
13. 出土遺物、記録資料は、大分市順徳町文化財資料室（大分市順徳町3丁目2-43）に収蔵・保管している。
14. 発掘調査及び報告書作成に際して、下記の方々に指導・御助言を頂いた。

飯沼賢二氏（別府大学）、後藤一重氏（大分県教育委員会）、高橋孝氏（立命館大学）、前川要氏（中央大学）、松井章氏（奈良文化財研究所）、山本悦世氏（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）の御助言をいただいた。

また、遺物の実測・製図作業に関しては、多くの御援助をいただいた。下記に記して、感謝を表します。

神力哲子・杉山美世子・高橋真千代・武田真知子・武藤由紀子

凡 例

1. 本書に用いた方位はすべて座標北(G.N.)である。また、基準点の座標値は国土調査法第Ⅱ座標系による。
2. 本書に用いた遺構略号は、SB：掘立柱建物跡、SD：溝状遺構、SE：井戸遺構、SK：土坑、SP：柱穴遺構、ST：竪堀、SX：性格不明遺構を表している。
3. 土器・陶磁器の編年・種別分類の内、東国東型瓦器碗は後藤一重氏の分類¹⁾、東播系中世須恵器は森田稔氏の編年²⁾、防長系甕鉢の編年・足輪の分類は岩崎仁志氏³⁾、13世紀以前の白磁・青磁は太宰府市教育委員会編の分類⁴⁾、それ以降の白磁は森田勉氏の分類⁵⁾、青磁は上田秀夫氏の分類⁶⁾、中国産染付は小野正敏氏の分類⁷⁾、肥前系陶磁器は大橋康二氏の編年⁸⁾、備前焼は桑岡実氏の編年⁹⁾をそれぞれ用いた。また、日本貿易陶磁学会分類の変更箇所に関しては、日本貿易陶磁学会の活動¹⁰⁾に、肥前系陶磁器の編年の変更箇所に関しては、九州近世陶磁学会の活動¹¹⁾に負った。

4. 古墳時代土師器は、「古墳時代土師器」、中世土師器は、必要な場合を除き「土師器」と表記する。
5. 土器・陶磁器の編年・種別分類の表記方法に関して、東国東型瓦器碗は「●型式」、東播系中世須恵器は「第●期第●段階」、防長系摺鉢は「岩崎編年●期」、防長系足鍋は「岩崎分類●型式」、13世紀以前の白磁・青磁は「大宰府分類●類」、14世紀以降の白磁は「森田分類●群」、青磁は「上田分類●類」、中国産染付は「小野分類●群」、肥前系陶磁器は「大橋編年●期」、備前焼は「桑岡編年●期」と表記する。
5. 本書における時期表記方法に関しては、世紀を初葉・前葉・中葉・後葉・末葉形の5区分で表記する。また、必要に応じて、前・後期および四半世紀表記などをおこなう。

-
- i 後藤 一重 2003「八坂久保田遺跡・八坂本庄遺跡・八坂中遺跡の出土土器について」『八坂の遺跡』Ⅲ大分県教育委員会
 - ii 森田 勉 1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
 - iii 岩崎 仁志 1990「防長型摺鉢について」『山口考古』第19号 山口考古学会
1999「足鍋再考」『陶壇』第12号 山口県埋蔵文化財センター
 - iv 太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV 陶磁器分類編』
 - v 森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
 - vi 上田 秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
 - vii 小野 正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
 - viii 大橋 康二 1989『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社
 - ix 桑岡 実 2000「備前焼摺鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会
 - x 日本貿易陶磁研究会 2000『城館出土の貿易陶磁器』貿易陶磁研究集会 四国大会資料集 日本貿易陶磁研究会－鐵壺前夜の西国大名と貿易－
 - xi 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

目 次

第Ⅰ章	はじめに	1
1.	調査にいたる経過	1
	試掘	1
2.	調査期間	5
3.	調査組織	5
第Ⅱ章	遺跡の立地と環境	7
1.	地理的環境	7
2.	歴史的環境	11
第Ⅲ章	調査報告	15
1.	A区	15
	掘立柱建物跡 (SB)	22
	溝状遺構 (SD)	47
	井戸遺構 (SE)	69
	土坑 (SK)	109
	溜池状遺構 (SX)	122
	性格不明遺構 (SX)	127
	墓墳 (ST)	129
	A区グリッド出土遺物及び一括遺物	138
2.	B区	147
	土坑 (SK)	148
	溝状遺構 (SD)	149
	井戸遺構 (SE)	156
	柱穴遺構 (SP)	161
	B区グリッド出土遺物及び一括遺物	163
第Ⅳ章	自然科学分析	169
1.	下志村遺跡第2次調査出土資料の放射性炭素年代測定	169
2.	下志村遺跡第2次調査における樹種同定	173
第Ⅴ章	考察	177
1.	下志村遺跡第2次調査出土土師器について	177
2.	下志村遺跡第2次調査出土銭貨について	192
3.	掘立柱建物跡について	197
4.	動物祭祀遺構 (SK140) について	206
第Ⅵ章	まとめ	214

図版目次

第1図	調査区配置図 (1/1,800)	1
第2図	試掘時出土遺物実測図① (1/3)	3
第3図	試掘時出土遺物実測図② (2/3)	4
第4図	大地区地籍図 (1/30,000)	8
第5図	周辺主要遺跡分布図 (1/25,000)	9~10
第6図	大佐井郷位置図	11
第7図	A区遺構配置図 (1/200)	15~16
第8図	A区遺構実測図 (1/160)	17~18
第9図	A区東壁・南壁土層断面図 (1/80)	19~20
第10図	A区土層柱状模式図	21
第11図	A区掘立柱建物跡遺構配置図 (1/300)	22
第12図	A区N-1°-W軸掘立柱建物跡遺構配置図 (1/300)	24
第13図	A区N-1°-W軸掘立柱建物跡遺構模式図	25~26
第14図	A区N-1°-W軸掘立柱建物跡遺物等出土柱穴遺構実測図 SP362・SP526・SP324 (1/20)	27
第15図	A区N-1°-W軸掘立柱建物跡柱穴遺構出土遺物実測図 SP133・SP228 (1/3)・SP1117 (2/3)	27
第16図	A区N-14°-W軸掘立柱建物跡遺構配置図 (1/300)	28
第17図	A区N-14°-W軸掘立柱建物跡遺構模式図	29~30
第18図	A区N-14°-W軸掘立柱建物跡遺物等出土柱穴遺構実測図 SP795 (1/20)	31
第19図	A区N-14°-W軸掘立柱建物跡柱穴遺構出土遺物実測図 SP795 (1/3)	31
第20図	A区N-14°-W軸掘立柱建物跡遺物等出土柱穴遺構実測図 SP370・SP375 (1/20)	31
第21図	A区N-14°-W軸掘立柱建物跡柱穴遺構出土遺物実測図 SP370・SP375 (1/3)	32
第22図	A区N-14°-W軸掘立柱建物跡柱穴遺構出土遺物実測図 SP592・SP796・SP564・SP569・SP632・SP206 (1/3)・SP514 (1/2)・SP343 (2/3)	33
第23図	A区その他の軸の掘立柱建物跡遺構配置図 (1/300)	34
第24図	A区N-19.5°-W軸掘立柱建物跡遺構模式図	35
第25図	A区N-19.5°-W軸掘立柱建物跡遺物等出土柱穴遺構実測図 SP185 (1/20)	35
第26図	A区N-19.5°-W軸掘立柱建物跡柱穴遺構出土遺物実測図 SP185 (1/3)	35

第27図	A区N-19.5°-W軸掘立柱建物跡柱穴遺構出土遺物実測図 SP015・SP267 (1/3)	36
第28図	A区N-6°-W軸掘立柱建物跡遺構模式図	36
第29図	A区N-6°-W軸掘立柱建物跡柱穴遺構出土遺物実測図 SP1123 (2/3)	36
第30図	A区N-5°-W軸掘立柱建物跡遺構模式図	36~37
第31図	A区N-5°-W軸掘立柱建物跡遺物等出土柱穴遺構実測図 SP314 (1/20)	37
第32図	A区N-9°-W軸掘立柱建物跡遺構模式図	37
第33図	A区掘立柱建物跡を構成しない柱穴遺構配置図 (1/300)	38
第34図	A区SP275遺構実測図 (1/20)	39
第35図	A区SP275出土遺物実測図 (1/3)	39
第36図	A区SP471遺構実測図 (1/20)	39
第37図	A区SP471出土遺物実測図 (1/3)	39
第38図	A区SP541遺構実測図 (1/20)	40
第39図	A区SP541出土遺物実測図 (1/3)	40
第40図	A区SP554遺構実測図 (1/20)	40
第41図	A区SP554出土遺物実測図 (1/3)	40
第42図	A区SP618遺構実測図 (1/20)	40
第43図	A区SP618出土遺物実測図 (1/3)	40
第44図	A区SP700遺構実測図 (1/20)	41
第45図	A区SP700出土遺物実測図 (1/3)	41
第46図	A区SP802遺構実測図 (1/20)	42
第47図	A区SP802出土遺物実測図 (1/2)	42
第48図	A区SP909遺構実測図 (1/20)	42
第49図	A区SP909出土遺物実測図 (1/3)	42
第50図	A区礎等出土柱穴遺構実測図 SP052・SP389・SP669・SP774・SP832・SP912 (1/20)	43
第51図	A区柱穴遺構出土遺物実測図 SP010・SP054・SP182・SP186・SP236・SP315・SP414・SP456 (1/3)・SP731・SP1029 (2/3)	45
第52図	A区溝状遺構配置図 (1/400)	47
第53図	A区SD003・SD019・SD020遺構変遷図 (1/200)	48
第54図	A区SD003・SD018・SD019・SD020・SD023遺構実測図 (1/80)	49
第55図	A区SD003・SD018・SD019・SD020・SD023土層断面図 (1/60)	49
第56図	A区SD003出土遺物実測図① (1/3)	50
第57図	A区SD003出土遺物実測図② (1/3)	51
第58図	A区SD020出土遺物実測図 (1/3)	52
第59図	A区SD020遺構配置図 (1/200)	52
第60図	A区SD023出土遺物実測図 (1/3)	53
第61図	A区SD023遺構配置図 (1/200)	53

第62図	A区SD012遺構実測図(1/160).....	54
第63図	A区SD012出土遺物実測図(土器1/3、砥石・石鏝2/3).....	54
第64図	A区SD221・SD222遺構実測図(1/160).....	55
第65図	A区SD221・SD222・SK260土層断面図(1/40).....	56
第66図	A区SD221出土遺物実測図(土鏝2/3、他1/3).....	56
第67図	A区SD001・SD025・SD026・SD028・SD021・SD025・SD028・SD029 遺構実測図(1/160).....	57
第68図	A区SD001出土遺物実測図(1/3).....	58
第69図	A区SD001遺構配置図(1/200).....	58
第70図	A区SD025遺構配置図(1/200).....	58
第71図	A区SD025出土遺物実測図(1/3).....	59
第72図	A区SD026出土遺物実測図(1/3).....	60
第73図	A区SD026遺構配置図(1/200).....	60
第74図	A区SD028遺構配置図(1/200).....	60
第75図	A区SD021遺構配置図(1/200).....	61
第76図	A区SD021・SD025・SD029・SD259土層断面図(1/30).....	61
第77図	A区SD021出土遺物実測図(砥石2/3、他1/3).....	62
第78図	A区SD205遺構配置図(1/200).....	63
第79図	A区SD021・SD205土層断面図(1/20).....	63
第80図	A区SD205出土遺物実測図(1/3).....	63
第81図	A区SD208出土遺物実測図(1/3).....	64
第82図	A区SD208遺構配置図(1/200).....	64
第83図	A区SD209遺構配置図(1/200).....	64
第84図	A区SD209出土遺物実測図(土鏝2/3、他1/3).....	65
第85図	A区SD209土層断面図(1/20).....	66
第86図	A区SD212遺構配置図(1/200).....	66
第87図	A区SD350・SD353遺構配置図(1/200).....	67
第88図	A区SD350・SD353土層断面図(1/20).....	67
第89図	A区SD353出土遺物実測図(1/3).....	67
第90図	A区SD400遺構配置図(1/200).....	68
第91図	A区SD400出土遺物実測図(1/3).....	68
第92図	A区井戸遺構配置図(1/400).....	69
第93図	A区SE380遺構実測図・断面見通し図(1/30).....	70
第94図	A区SE380出土遺物実測図(1/3).....	71
第95図	A区SE097遺構実測図・断面見通し図(1/20).....	72
第96図	A区SE097出土遺物実測図①(1/3).....	73
第97図	A区SE097出土遺物実測図②(石臼1/4、他1/3).....	74
第98図	A区SE097出土遺物実測図③(1/4).....	75
第99図	A区SE097出土遺物実測図④(1/4).....	76
第100図	A区SE097出土遺物実測図⑤(1/4).....	77
第101図	A区SE097出土遺物実測図⑥(1/4).....	78

第102図	A区SE230遺構実測図・断面見通し図(1/30).....	79
第103図	A区SE230出土遺物実測図(1/3).....	80
第104図	A区SE290土層断面図(1/30).....	81
第105図	A区SE290出土遺物実測図①(1/3).....	81
第106図	A区SE290遺構実測図・断面見通し図(1/30).....	82
第107図	A区SE290出土遺物実測図②(1/4).....	83
第108図	A区SE290出土遺物実測図③(1/4).....	84
第109図	A区SE290出土遺物実測図④(1/4).....	85
第110図	A区SE290出土遺物実測図⑤(1/4).....	86
第111図	A区SE290出土遺物実測図⑥(1/4).....	87
第112図	A区SE290出土遺物実測図⑦(1/4).....	88
第113図	A区SE450土層断面図(1/30).....	89
第114図	A区SE450遺構実測図・断面見通し図(1/20).....	90
第115図	A区SE300遺構実測図・断面見通し図・土層断面図(1/20).....	91
第116図	A区SE820出土井戸実測図(1/5)・模式図.....	92
第117図	A区SE820遺構実測図・断面見通し図(1/20).....	93
第118図	A区SE435遺構実測図・土層断面図(1/30).....	94
第119図	A区SE435出土遺物実測図①(土鏝2/3、他1/3).....	95
第120図	A区SE435出土遺物実測図②(鉄滓1/2、砥石2/3).....	96
第121図	A区SE435出土遺物実測図③(1/4).....	97
第122図	A区SE118遺構実測図・土層断面図(1/40).....	98
第123図	A区SE118出土遺物実測図(1/3).....	98
第124図	A区SE117遺構実測図・土層断面図(1/40).....	99
第125図	A区SE117出土遺物実測図(1/3).....	99
第126図	A区SE239遺構実測図・土層断面図(1/40).....	100
第127図	A区SE239出土遺物実測図(1/3).....	100
第128図	A区SE202遺構実測図・土層断面図(1/40).....	101
第129図	A区SE202出土遺物実測図(1/3).....	101
第130図	A区SE131遺構実測図・土層断面図(1/40).....	102
第131図	A区SE131出土遺物実測図(1/3).....	102
第132図	A区SE165遺構実測図・土層断面図(1/30).....	103
第133図	A区SE165出土遺物実測図①(1/3).....	104
第134図	A区SE165出土遺物実測図②(1/2).....	105
第135図	A区SE155遺構実測図・土層断面図(1/60).....	106
第136図	A区SE155出土遺物実測図①(1/3).....	107

第137図	A区SE155出土遺物実測図②(土鍾2/3、他1/3).....	108
第138図	A区SE830遺構実測図・土層断面図(1/30).....	108
第139図	A区土坑遺構配置図(1/400).....	109
第140図	A区SK006・SK007出土遺物実測図(SK006(1/3)・SK007(2/3)).....	110
第141図	A区SK140遺構実測図・断面見通し図(1/10).....	111
第142図	A区SK140出土遺物実測図①(1/3).....	112
第143図	A区SK140出土遺物実測図②(鉄釘1/2、他1/3).....	113
第144図	A区SK145遺構実測図・土層断面図(1/20).....	114
第145図	A区SK145出土遺物実測図(1/3).....	114
第146図	A区SK156・SK250・SK258・SK263出土遺物実測図(土鍾(2/3)・鉄釘(1/2)、他1/3).....	115
第147図	A区SK265遺構実測図・断面見通し図(1/20).....	115
第148図	A区SK265出土遺物実測図(1/3).....	115
第149図	A区SK270遺構実測図・断面見通し図(1/20).....	116
第150図	A区SK270出土遺物実測図(1/3).....	116
第151図	A区SK280遺構実測図・断面見通し図(1/20).....	116
第152図	A区SK280出土遺物実測図(1/3).....	116
第153図	A区SK285遺構実測図・断面見通し図(1/20).....	117
第154図	A区SK285出土遺物実測図(1/3).....	117
第155図	A区SK360遺構実測図・断面見通し図(1/20).....	118
第156図	A区SK360出土遺物実測図(1/3).....	118
第157図	A区SK630遺構実測図・土層断面図(1/40).....	119
第158図	A区SK643出土遺物実測図(土師器1/3、土鍾2/3、土壁1/2).....	119
第159図	A区SK680遺構実測図・土層断面図(1/40).....	119
第160図	A区SK730遺構実測図・断面見通し図(1/20).....	120
第161図	A区SK1094遺構実測図・土層断面図(1/40).....	121
第162図	A区SK1094出土遺物実測図(1/3).....	121
第163図	A区溜池状遺構配置図(1/400).....	122
第164図	A区SX260遺構実測図・土層断面図(1/80).....	123
第165図	A区SX260出土遺物実測図①(1/3).....	124
第166図	A区SX260出土遺物実測図②(羽口・鉄棒1/2、他1/3).....	125
第167図	A区SX260出土遺物実測図③(2/3).....	126

第168図	A区性格不明遺構配置図(1/400).....	127
第169図	A区SX200遺構実測図・土層断面図・断面見通し図(1/20).....	128
第170図	A区SX420出土遺物実測図(砥石2/3、他1/3).....	128
第171図	A区近世・近代墓遺構配置図(1/400).....	129
第172図	A区近世墓A・B群遺構実測図(1/160).....	130
第173図	A区ST210・ST220遺構実測図・断面見通し図(1/20).....	130
第174図	A区ST216・ST237遺構実測図・断面見通し図(1/20).....	131
第175図	A区ST243・306遺構実測図・断面見通し図(1/20).....	132
第176図	A区ST323・ST342出土遺物実測図(1/3).....	132
第177図	A区ST297・ST296・ST303遺構実測図・断面見通し図(1/20).....	134
第178図	A区ST298・ST299・ST301遺構実測図・断面見通し図(1/20).....	136
第179図	A区ST005・ST014出土遺物実測図(石臼1/4、石鍾2/3).....	137
第180図	A区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図①(1/3).....	138
第181図	A区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図②(1/3).....	140
第182図	A区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図③(1/3).....	141
第183図	A区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図④(1/3).....	142
第184図	A区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図⑤(羽口1/2、他1/3).....	144
第185図	A区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図⑥(2/3).....	145
第186図	A区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図⑦(1/4).....	146
第187図	B区遺構配置図(1/400).....	147
第188図	B区SK04遺構実測図・断面見通し図・土層断面図(1/10).....	148
第189図	B区SK04関連出土遺物実測図(1/3).....	149
第190図	B区SD13遺構実測図・土層断面図(1/40).....	150
第191図	B区SD13出土遺物実測図(1/3).....	150
第192図	B区SD08遺構実測図・土層断面図(1/40).....	151
第193図	B区SD08出土遺物実測図(石器1/1、他1/3).....	152
第194図	B区SD03出土遺物実測図(1/3).....	153
第195図	B区SD01出土遺物実測図(青磁1/3、石器2/3).....	153

第196図	B区SD02出土遺物実測図(石鍾2/3、石白1/4、他1/3).....155
第197図	B区SD10出土遺物実測図(1/3).....156
第198図	B区SE25遺構実測図・断面見通し図・土層断面図(1/30).....157
第199図	B区SE25出土遺物実測図(1/3).....158
第200図	B区SE26遺構実測図・断面見通し図・土層断面図(1/30).....159
第201図	B区SE26出土遺物実測図①(1/3).....160
第202図	B区SE26出土遺物実測図②(2/3).....161
第203図	B区SP23遺構実測図・土層断面図(1/40).....162
第204図	B区SP23出土遺物実測図(1/3).....162
第205図	B区SP24・SP27・SP29遺構実測図・土層断面図(1/40).....162
第206図	B区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図①(1/3).....164
第207図	B区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図②(2/3).....165
第208図	B区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図③(1/2).....166
第209図	下志村遺跡第2次調査出土土師器器種分類表(1/6).....177
第210図	大友氏館系土師器設定表(1/6).....178
第211図	大友氏館跡第6次・第10次調査区出土土師

	器基本層序対応表(1/6).....	179
第212図	下志村遺跡第2次調査出土土師器編年試案(1/6).....	185
第213図	旧海部郡内出土土師器(1/6).....	187
第214図	柳井城関連遺跡出土土師器編年試案(1/6).....	188
第215図	A区出土銭貨出土状況(1/400).....	192
第216図	下志村遺跡第2次調査出土銭貨拓本・実測図(1/1).....	193
第217図	A区独立柱建物跡間関係図.....	201
第218図	A区SK140遺物検出状況(1/10).....	206
第219図	A区SK140祭祀過程復元案(1/20).....	208
第220図	A区SK140出土牛頭骨白歯位置図.....	209
第221図	A区SK140出土土師質土器類(1/3)・鉄鉾(1/2).....	210
第222図	A区SK140出土遺物祭祀過程概念図(1/6).....	211
第223図	下志村遺跡第2次調査遺構変遷図1.....	215
第224図	下志村遺跡第2次調査遺構変遷図2.....	216
第225図	下志村遺跡第2次調査遺構変遷図3.....	216
第226図	③14世紀～15世紀頃遺構配置図(1/300)・模式図.....	218
第227図	地籍図上における調査区配置図(1/1500).....	220

表 目 次

第1表	遺跡地名表.....7
第2表	独立柱建物跡一覧表.....23
第3表	試掘出土土鍾観察表.....168
第4表	試掘出土土器観察表.....168
第5表	A区出土土鍾観察表.....168
第6表	A区出土土器観察表.....168
第7表	B区出土土鍾観察表.....168

第8表	B区出土土器観察表.....168
第9表	試料と方法.....169
第10表	放射性炭素年代測定結果.....170
第11表	下志村遺跡第2次調査出土土製品の樹種同定結果.....174
第12表	下志村第2次調査出土銭貨一覧表.....195
第13表	柱穴配置別柱痕直径.....198

グラフ目次

Fig. 1	A区SK140出土土器付着炭化物.....172
Fig. 2	A区SE820出土井戸枠.....172
Fig. 3	A区SP362出土木材.....172
Fig. 4	身舎柱痕直径と身舎面積.....198
Fig. 5	柱痕直径の基数分布.....198
Fig. 6	桁行間数と身舎面積.....198
Fig. 7	梁行間数と身舎面積.....198

Fig. 8	身舎面積と桁行柱間寸法.....198
Fig. 9	建物軸と身舎面積.....198
Fig. 10	柱穴遺構下地標高.....198
Fig. 11	遺跡別独立柱建物跡身舎面積.....202
Fig. 12	釘野千軒遺跡 桁行間数と身舎面積.....203
Fig. 13	釘野千軒遺跡 身舎面積と桁行柱間寸法(桁行3間の建物跡).....203

写真図版目次

巻頭図版1	上A区SN40・下A区SE450井戸枠
巻頭図版2	下志村遺跡第2次調査区A区全景
自然科学分析	1. A区SE820井戸枠サンプル
	2. A区SE165出土土製品②サンプル

	3. A区SE165出土土製品①PI3 サンプル..... 175
図版 1	1. A区SP362 2. A区SP314 3. A区SP618 4. A区SP802

	5. A区SD023	6. A区SD025	
	7. A区SD028	8. A区SE380	
	9. A区SE097		223
图版2	1. A区SE230井戸枠	2. A区SE230	
	3. A区SE290井戸枠1段目		
	4. A区SE290井戸枠3段目		
	5. A区SE450井戸枠	6. A区SE300	
	7. A区SE820井戸枠	8. A区SE435	 224
图版3	1. A区SE118	2. A区SE117	3. A区SE239
	4. A区SE202	5. A区SE131	6. A区SE165
	7. A区SE155	8. A区SE830	 225
图版4	1. A区SK140	2. A区SK280	3. A区SK285
	4. A区SK730	5. A区SK1094	6. A区SX260
	7. A区SX200	8. A区SX390	 226
图版5	1. A区ST210	2. A区ST220	3. A区ST237
	4. A区ST306	5. A区ST297	6. A区ST303
	7. A区ST298	8. A区ST299	 227
图版6	1. B区全景	2. B区SE25井戸枠	
	3. B区SE25	4. B区SE26	5. B区SK04
			228
图版7	A区SK140出土遺物①		229
图版8	A区SK140出土遺物②		230
图版9	1. A区SE435出土遺物		
	2. A区SE118出土遺物		
	3. A区SE117出土遺物		
	4. A区SE239出土遺物		

	5. A区SE202出土遺物	
	6. A区SE131出土遺物	
	7. A区SE165出土遺物	
	8. A区SE155出土遺物	 231
图版10	1. A区SE165 P13出土木製品	
	2. A区SE165出土木製品	
	3. A区SE097出土五輪塔 梵字①	
	4. A区SE097出土五輪塔 梵字②	
	5. A区SE290 P1出土五輪塔 梵字	
	6. A区SE290 P19出土五輪塔 梵字①	
	7. A区SE290 P19出土五輪塔 梵字②	
	8. A区SE290 P19出土五輪塔 梵字③	
	9. A区SE290 P19出土五輪塔 梵字④	 232
图版11	1. A区SD221出土遺物	
	2. A区SD025出土遺物	
	3. A区SD026出土遺物	
	4. A区SP618出土遺物	
	5. A区SP802出土遺物	
	6. A区SK285出土遺物	
	7. A区SX260出土遺物	
	8. A区ST306出土遺物	
	9. B区SE26出土遺物	
	10. B区SK04出土遺物	 233
图版12	下志村遺跡第2次調査 出土銭貨	 234

下志村道路第2次調査を報告するにあたり、発掘調査時の遺構番号を変更した遺構がある。変更した遺構に関しては、以下に記す。

A区

報告書掲載遺構番号	調査時遺構番号
SP370	SP375
SP375	SP370
SD012	SD144
SD018	SD019
SD019	SD020
SD020	SD023
SD023	SD018
SD021	SD021・SD112
SD205	SD110
SD208	SD259
SD209	SD022
SD259	SD111
SE155	SE029
SE165	SE030
SE435	SE004
SK643	SK1094
SK1094	SK643

B区

報告書掲載遺構番号	調査時遺構番号
SD02	SD10
SD05	SD08
SD08	SD05
SD10	SD15
SD15	SD02

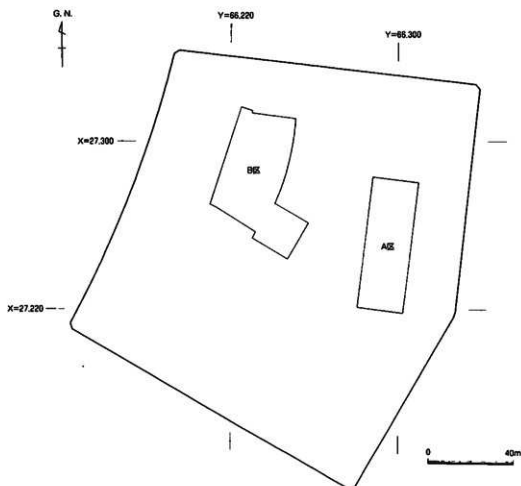
第I章 はじめに

1. 調査に至る経過

学校整備課の依頼により、平成13年7月3～9日に、大在西小学校建設予定地の確認調査を行ったところ、遺構・遺物が確認された。このため、大在西小学校新設工事設計図をもとに、同課との協議を行い、グラウンド側は現状保存とし、校舎側については再度、平成14年10月17～25日に確認調査を実施した。その結果、東側校舎(約1350㎡)と、西側体育館前テラス予定地(約2100㎡)の2ヵ所に調査が必要であると判断され、平成14年11月7日より、東側校舎の調査区をA区、西側体育館前テラスの調査区をB区と設定し、本調査を実施することになった。

試掘

平成13年度と平成14年度に、2度の確認調査をおこなったところ、古墳時代、中世、近世の遺構を数多く確認した。注目される遺構としては、古墳時代前期の長頸丸底甕と入れ子状の小形丸底甕が、寄り添うように埋設された土器埋設遺構と、15世紀後半～16世紀前半の在地系土師器坏2点を伴う土坑が挙げられる。また、近世の溝状遺構、土坑なども確認しており、当調査地は古墳時代、中世、近世の複合遺跡であることが確認された。



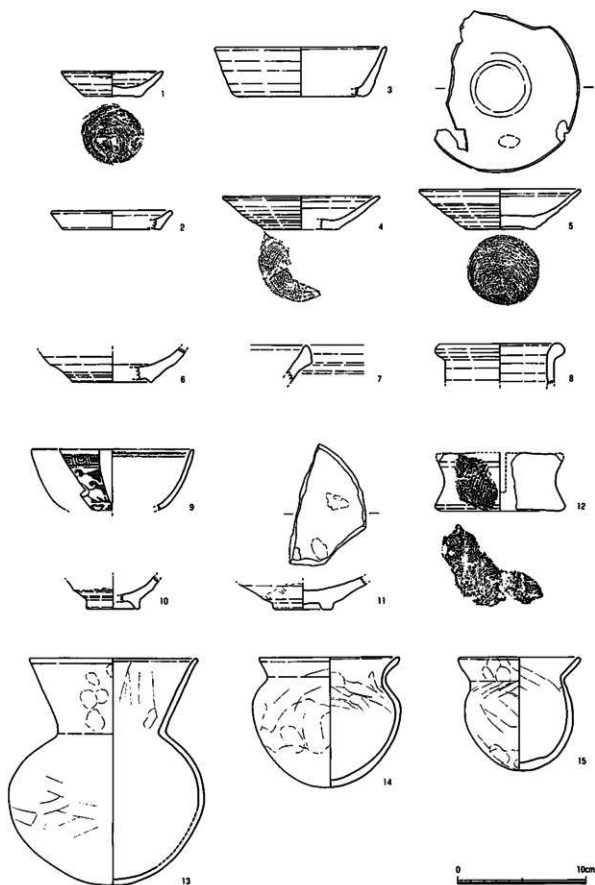
第1図 調査区配置図 (1/1800)

出土遺物 (第2・3図)

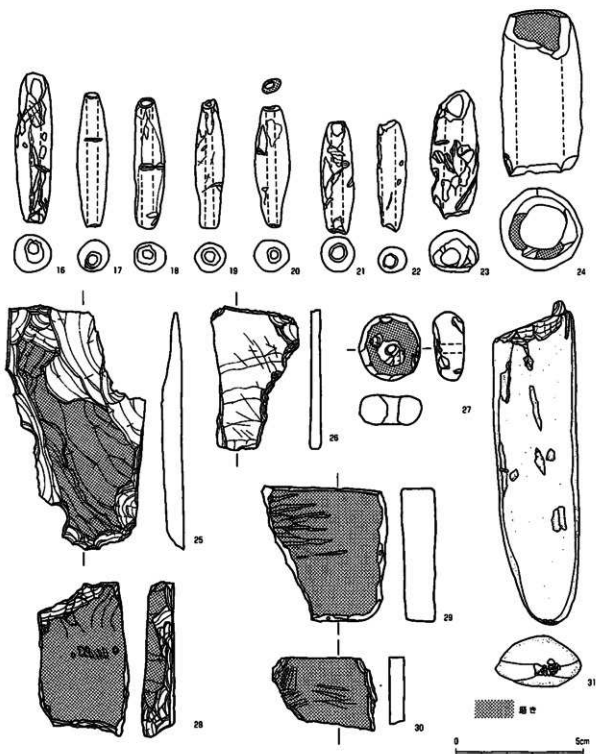
1は土師器灯皿と考えられ、2は土師器小皿である。1は復元口径8.0cm、器高2.0cm、復元底径4.8cmを測る。煤の付着の状況から、少なくとも灯皿として2回以上使用したものと考えられる。2は復元口径9.4cm、器高1.45cm、底径8.6cmを測る。3～5は土師器杯である。3は復元口径13.6cm、器高3.9cm、復元底径9.8cmを測る。4・5は15世紀後半～16世紀前半のもので、先に述べた土坑から出土した。4は復元口径12.4cm、器高2.6cm、復元底径6.0cmを、5は復元口径12.6cm、器高3.15cm、復元底径5.6cmを測る。5の器面は、外面体部下位から底部にかけて成形時のへら挽き痕が、明瞭な段となっている。6は東国東型瓦器のⅡ-b型式(13世紀前半)で、高台径6.2cmを測る。器面調整は、内外面とも回転ナデが施されており、断面が三角形の低い高台を持つ。7は東播系中世須恵器鉢鉢或いはこね鉢である。第Ⅱ期第2段階(12世紀末葉～13世紀初頭)に比定される。口縁部の断面は三角形を呈し、外面は横方向のナデを施す。内面は口縁部付近にナデを施し、その下にはケズリが施されている。8は白磁四耳壺で、11世紀後半～12世紀前半のもと考えられ、復元口径9.4cmを測る。胎土は白色を呈し、釉は若干灰色がかかった白色をしている。頸部と胴部との境に刷毛ぎの痕がみられる。9は中国産染付碗である。小野分類E群(16世紀後半)で、復元口径12.6cmを測る。二次的に火を受けており、全体の釉が溶けている。10は高取・上野系天目碗である。17世紀のもので、復元高台径4.1cmを測る。窯変が筋状に流れており、外面体部下半から高台の外面にかけて無釉である。11は、大饗編年Ⅰ期の胎土目紋み段階(1580～1610年代)の唐津系陶器皿で、復元高台径4.3cmを測る。灰釉を施し、外面体部下半から高台の外面にかけて無釉である。現状で目紋が2ヵ所見受けられる。12は土師質の燗台である。上面はナデを施している。また、側面は指ナデを施し、布目痕がある。底部には、回転系切り痕が見られる。13～15は古墳時代土師器で、先に述べた土器埋設遺構から出土した。13は長頸丸底壺、14・15は小形丸底壺である。13～15は、ほぼ完形で、布留式新相併行期に比定される。14・15の底部は、二次的に火を受け、胴部に煤が付着していることから、煮炊きなどに使用されたと考えられる。

16～24は土鍾である。土鍾が9点出土しているが、胎土から全て中世の所産と考えられる。16は土師質の有孔土鍾である。表面には、若干の擦痕や、中央部に掛け紐によると推測される圧痕と剝離痕が認められる。上端を若干欠いている。17は土師質の有孔土鍾で、表面には、丁寧なミガキ整形が施されており、擦痕も認められる。18は土師質の有孔土鍾で、表面には、擦痕が若干認められる。19は土師質の有孔土鍾で、上端を若干欠損し、表面には、擦痕が認められる。20は土師質の有孔土鍾で、上端にはミガキ整形が認められる。表面には、擦痕が看取される。21は土師質の有孔土鍾で、表面には、擦痕が多く認められる。22は土師質の有孔土鍾で、中央部に使用によると考えられる抉り痕が認められる。23は土師質のやや大柄な有孔土鍾である。上下端を若干欠損し、擦痕・剝落が多く認められる。24は土師質のかなり大柄な有孔土鍾である。外面には指ナデ整形の痕が顕著に認められ、上下端と内面はミガキ整形が施されている。上端は若干欠損している。

25～31は石器である。遠隔地の熊本県産天草石製と近接の佐賀県町産と考えられる結晶片岩製の砥石が5点と垂玉が1点出土している。時期は厳密には不明だが、遺跡の状況からすると前者は中世の可能性が高く、中者は弥生～古墳時代と考えられる。25は結晶片岩製の砥石である。右側縁上半・左側縁は裏から表への折れによる欠損が認められ、表面中央部は焼けによる剝落が見られる。また、全面に焼けによる赤化が認められる。表面・上端・左右側縁は磨き整形が施されている。26は天草石製の砥石である。上端・左側縁と右側縁の下端は折れにより欠損し、表面には焼けによる赤化が認められる。表裏面には磨き整形が施されている。また、表面には使用による擦痕が多い。27は凝灰岩製の垂玉で、全面に焼けによる赤化が認められる。表裏面に磨き整形を施した後に、表裏両面から穿孔しているが、孔径が表面で1.10cm、裏面で0.95cmと異なる。28は天草石製の砥石である。上端は表から裏への、下端は裏から表への折れによる欠損が見られ、表裏面・左側縁は磨き整形が認められる。また、表裏面には使用による擦痕が見られる。29は天草石製の砥石である。上半は表から裏への折れによる欠損が見られ、表裏面及び左右側縁には磨き整形が認められる。また、表面には使用による擦痕が見られる。30は頁岩製の砥石である。



第2圖 試掘時出土遺物実測図① (1/3)



第3図 試掘時出土遺物実測図② (2/3)

上端・左側縁は表から裏へ、下端は裏から表への折れによる欠損が見られ、裏面には焼けによる赤化が認められる。表裏面に磨き整形が施されている。また、表面には使用による擦痕が見られる。石材が良質で、仕上げ砥石の可能性が高い。31は結晶片岩製の敲石で、棒状の自然礫をそのまま使用している。上端は使用によって欠損していると推測され、下端には使用による割れ痕が看取される。

2. 調査期間

本調査 平成14年11月7日～平成15年5月29日

3. 調査組織

調査主体者 大分市教育委員会

調査責任者 大分市教育委員会 教育長 秦 政博

事務局 大分市教育委員会

平成14年度 帯刀 修一（文化財課課長）
木村幾多郎（文化財課参事兼大分市歴史資料館館長）
玉永 光洋（同上 参事）
熊谷 一秋（同上 課長補佐兼管理係長）
讃岐 和夫（同上 課長補佐兼文化財係長）
姫野 公徳（同上 指導主事）
桑原 治（同上 主任）
幸 裕美（同上 主任）
三浦 亜紀（同上 主事）

調査担当 後藤 典幸（同上 指導主事）
萩 幸二（同上 嘱託）
水町 裕子（同上 嘱託）

平成15年度 帯刀 修一（文化財課課長）
木村幾多郎（文化財課参事兼大分市歴史資料館館長）
玉永 光洋（同上 参事）
讃岐 和夫（同上 課長補佐兼文化財係長）
久多羅岐明（同上 管理係長）
平野 勝敏（同上 主査）
姫野 公徳（同上 指導主事）
桑原 治（同上 主任）
安部 一成（同上 主任）
三浦 亜紀（同上 主事）

調査担当 後藤 典幸（同上 指導主事）
萩 幸二（同上 嘱託）
上野 淳也（同上 嘱託）
水町 裕子（同上 嘱託）
秦 さとみ（同上 嘱託）

調査応援 五十川雄也（同上 事務員）
松尾 聡（同上 嘱託）
松竹 智之（同上 嘱託）
大野 聡恵（同上 嘱託）
江上 正高（同上 嘱託）

発掘作業員 藤沢 香織・宇都宮幸子・坂本亜矢子（以上、別府大学学生）
麻生 浩昭・一宮 安男・岩本 逸雄・江藤 隼人・上村 隆康・神田ムツ子
後藤トシ子・斉藤 徳義・坂口 忠徳・佐々木盛子・佐藤 良江・佐藤 之義
秦 忠次・杉谷 玲子・富永 妙子・林 スミエ・古曾尾元生・御手洗幸子
茂藤 秋男・茂藤佐津美・八木 友美・幸 富蔵・幸 将志・渡辺ヒデ子
池辺 勝也・植木エミ子・上野 美奈・江藤 艶子・坂本サグヨ・長岡 照実
長岡 直義・長岡 宣子・柳井 治夫・佐藤 公信・安部いつよ・近藤 智史
佐藤 健良・島田 栄子・姫野 学・古谷 哲男・白岩 令子・直野 俱枝
幸 房代・半田 豊馬・津田 悦子・後藤 康子・清水やす子・西田 勝子
草野扶美子・清水 雅人・坂田ルリ子・杉山美世子

整理作業員 小野 裕子・神崎 順子（同上 臨時職員）

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

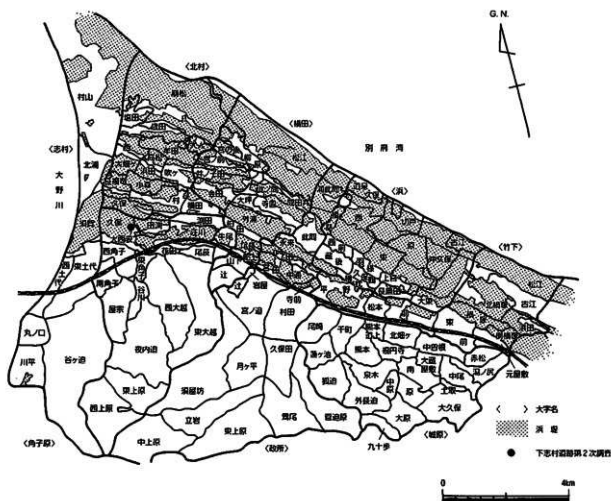
1. 地理的環境

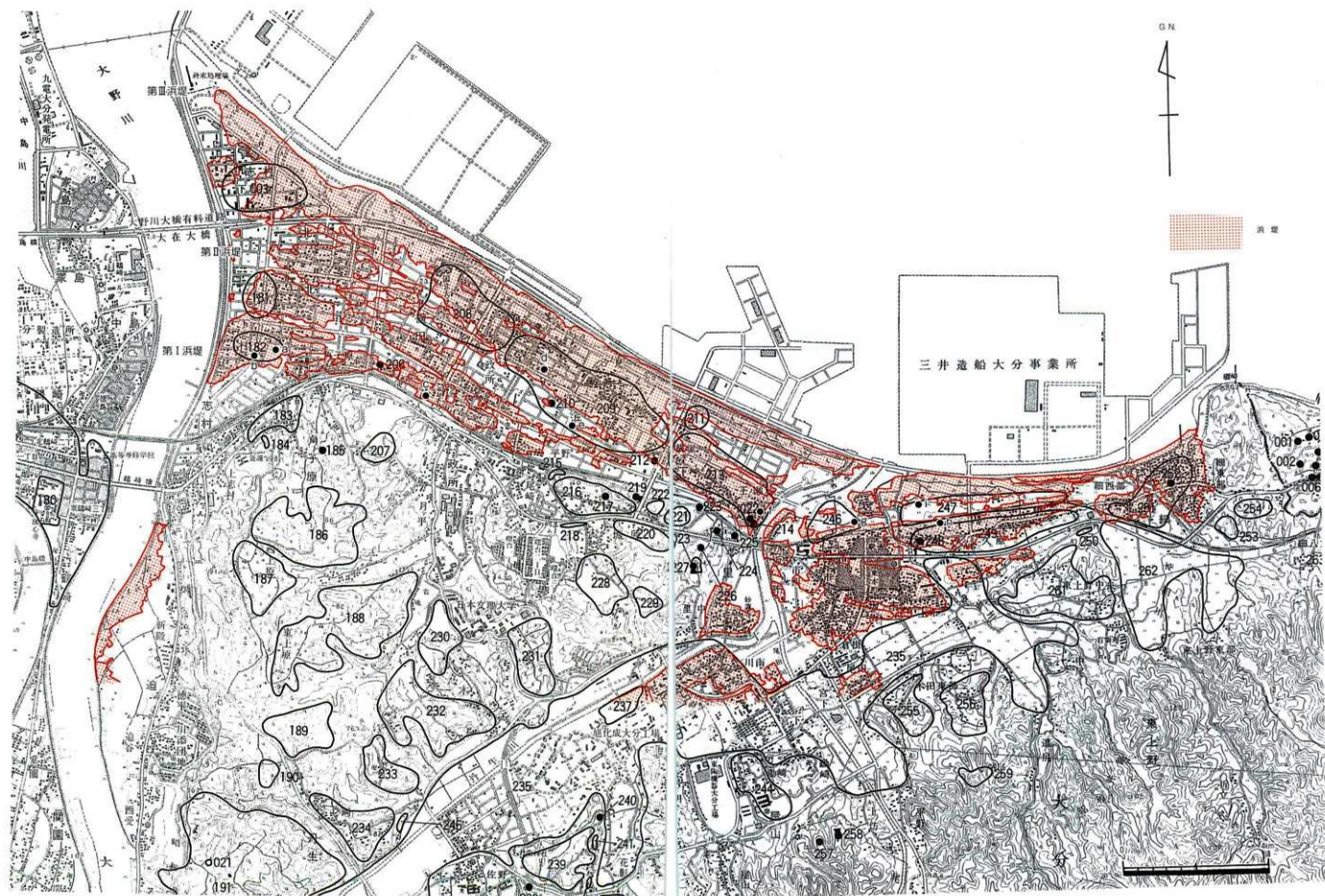
大分市のある大分平野は、大分川・大野川の注ぐ別府湾を北に臨み、三方を山に囲まれた海岸平野で、内陸には豊州系群に由来する丘陵や台地が、河川沿いには沖積地が広がる。大分平野の東部を流れる大野川は、下流域左岸に鶴崎台地、右岸に丹生台地があり、河口左岸の鶴崎では三角州、右岸の大在以南では、海岸線に並行するかたちで3列の浜堤が発達している。今回調査をおこなった下志村遺跡は、この大野川河口右岸に位置する。昭和48年から実施された土地区画整理事業以前の大在・坂ノ市地区では、浜堤上に集落・果樹園・畑などが分布し、浜堤と浜堤の間にある後背湿地に水田が分布していた。しかし、土地区画整理事業によってその地形は、大きく改変され、現在、旧地形をほとんど留めていない。よって、地形復元図などを参考にして、今回の調査地の地形を把握できるよう、また、今後の遺跡調査の手助けとなるよう、浜堤を復元し、『大分市文化財地図』¹と字図²に重ね合わせた。第5図において、海岸に対して並行なのが、浜堤である。そして、河川に沿うかたちで展開する、自然堤防などの微高地も、一部復元してある。『大分市史 上』³の表記に従うと、角子原・北へ政所へ平野と坂ノ市市街地の南半の浜堤が第1浜堤、北へ横塚へ王ノ瀬と坂ノ市市街地北半へ久原へ細の浜堤が第2浜堤、旧海岸線付近の新舞子浜へ国立大病院へ日吉原へ細に連なっている浜堤が第3浜堤にあたる。

全国的な浜堤の形成時期は、縄文時代前期～中期に1つ目の浜堤、縄文時代後期～弥生時代前期に2つ目の浜堤、古墳時代以降に3つ目の浜堤が形成されたと考えられている。大在以南の沖積平野において、水田関連の遺跡を除いた多くの遺跡は、浜堤などの微高地上に展開している。これまで確認された遺跡としては、第1浜堤上に下志村遺跡、大在古墳、大在政所遺跡、第2浜堤上に浜遺跡・浜遺跡第2地点、横塚古墳、横塚第2遺跡、王ノ瀬石棺、王ノ瀬古墳、久原遺跡、松崎銅戈出土地が挙げられる。第2浜堤上に位置する横塚第2遺跡では、二次堆積の包含層から縄文時代後期の土器などが出土しており、浜遺跡でも縄文時代後期中頃の土器が出土している。また、第2浜堤上には、弥生時代中期から古墳時代にかけての遺跡が集中しており、縄文時代後期～弥生時

第1表 遺跡地名表

003	北 遺 跡	214	王ノ瀬古墳	247	久原第2遺跡
022	王ノ瀬石棺	215	尾崎横穴墓群	248	松崎銅戈出土地
023・227	亀塚古墳	216	城原C遺跡	249	久原遺跡
181	天満宮裏遺跡	217	城原天神社裏古墳	250	飛山横穴墓群
182	下志村遺跡	218	城原横穴墓群	251	細 遺 跡
183	大越遺跡	219	大蔵古墳	252	細銅戈出土地
184	屋宗横穴墓群	220	城原原口遺跡	253	東 遺 跡
185	大越石棺	221	城原B遺跡	254	土穴遺跡
186	西上ノ原北遺跡	222	城原A遺跡	261	東上野遺跡
187	上ノ原北遺跡	223	湯ノ尻古墳	262	細地区条里跡
188	東上ノ原遺跡	224	辻古墳1号墳	a	下志村遺跡第2次調査
206	大在古墳	225	辻古墳2号墳	b	下志村遺跡(1991年調査)
207	角子原遺跡	226	小亀塚古墳	c	大在政所遺跡
208	政所遺跡	228	中安遺跡	d	浜遺跡第2地点
209	浜 遺 跡	229	城原D遺跡	e	浜・長無田遺跡
210	浜遺跡銅剣出土地	230	経蔵原遺跡	f	横塚第2遺跡
211	横塚遺跡1	235	丹生川坂ノ市条里跡	g	浜中遺跡(1992年調査)
212	横塚古墳	237	丹生川遺跡	h	久原遺跡(1990年調査)
213	横塚遺跡2	246	浜 中 遺 跡	i	久原第2遺跡(1995年調査)





第5図 周辺主要道路分布図 (1/25,000)

2. 歴史的環境

有史の大在 (第6図)

神元元(724)年編纂の『豊後国風土記』によれば、豊後の国には、8つの郡がおかれた。『和名類聚抄』(935)によると大分郡・海部郡・日田郡・球珠郡・国崎郡・速見郡・大野郡・直入郡の8つが挙げられている¹⁾。現行行政単位である大分県下には、豊前国の宇佐郡・下毛郡の2郡を加えると、古代の行政単位が10郡含まれていたことになる²⁾。

『豊後国風土記』(724)の記載によると、海部郡は、丹生郷・佐尉郷・惣門郷の3つの郷によって構成され³⁾、現大在地区は、その中の「佐尉郷」に含まれていた。同記によると、佐尉郷は、海部郡の東に位置し、この郷の旧名は「酒井」であったことが記されている。

しかし、この佐尉郷は、王朝国家が在地領主の地域支配を認め、それにふさわしい地方支配を実現してゆく過程において、「大佐井」とその南に隣接する「小佐井」に分割された。この古代に「佐尉」と呼ばれた地域の北部を指す地区が「大佐井」である。

「大佐井」は、後に「大在」と記されるようになる。大在は、志村・北村・横田・浜・竹下・角子原・政所・城原の8つ、小佐井は市尾・屋山・里の3つの大字に別れる。その内、大佐井の「城原」と小佐井の「里」にまたがる城原・里遺跡第2次～第4次調査区(中安遺跡)では、7世紀後半～8世紀後半の期間に官衙的遺構配置が認められる遺構群が確認されている⁴⁾。この遺跡で発見された大型の建物群が、8世紀段階において海部郡庁であったことは、ほぼ間違いない。また、城原・里遺跡第5次～第7次調査においては、更に、それを遡る7世紀後半段階の官衙的特徴を備える建物群が確認され、「評」段階の施設である可能性を示しつつある。

推定の古代官道との位置関係を考慮してみても海部郡衙の位置は、この海部北部の地にふさわしく、代々、この地に據られていたものと考えられる。これを由来としてか、従来、中世において、海部郡北部地域に国衙領が集中して形成された理由としては、交通の要衝であるためとの指摘がなされてきた。

『豊後国弘安田代注進状』(1285)によると、海部郡内に展開する郷庄としては、国領が佐賀郷・佐賀岡⁵⁾・大佐井郷・小佐井郷・柴山村・毛井村、荘園が白杵庄・丹生庄・佐伯庄となっている。大分郡毛井村・大野郡柴山村をも海部郡所屬としているのは、河川交通の要衝として国が管理する必要からであったとされる。

それぞれの役割は、佐賀岡を擁する海の要所である佐賀郷、大野川上流からの物資集積の要所であり渡河点としての要所でもあった毛井村と、それぞれ、交通の要所としての機能が評価されてきた。これらと比較して、佐尉郷の交通上の重要性は曖昧な指摘にとどまっていた。しかし、城原・里遺跡の調査成果により、佐尉郷は、海部郡衙を擁する郷であるとの確証が加わった。更に、この郡衙施設に付随していた支配機構・交通網という、その副産物を所持する郷であるとの評価が加えられ、それを含む海部北部地域自体の評価が見直されつつある。



第6図 大佐井郷位置図

この海部郡面を中心として形成された国領は、平安末期から中世への胎動期に当たって在地領主たる武士団を育んだ。すなわち、在地領主の地域支配は、この海部郡面の存在に起因する地勢や在地秩序という遺産を最大限に利用したものと考えられる。

以上のように、交通の要衝であり、軍事上の拠点でもある海部郡の国領は、鎌倉時代の早い時期に北条得宗家が領有した。『豊後国弘安田代注進状』(1285)では、佐賀郷と大佐井郷は相模守(北条貞時)の領するところとなっている。この両郷は、地理的にも完結しており、海浜部の掌櫃がねらいであったと考えられ、亀谷刑部大輔仲能および亀谷刑部大輔(女子)が地頭職を務めていた。

大佐井は、南北朝時代(元弘3年10月3日(正慶2年)(1333))に、一時、阿蘇神社領となるが、南北両統の取束の時期である永和元(1375)年には、足利義満から北朝方に付いた大友親世(10代)へ、小佐井・佐賀郷・高田荘とともに安堵されている。次代の親著(11代)は、大佐井と隣接する丹生庄に菩提寺である大恵寺を建立したと考えられ、また、墓もその近隣に残されている。大友持直(12代)は、永享7(1435)年に白杵と津久見の境に位置する姫嶽に籠城するが、その合戦において津久見衆等の海部衆との連繋が見られる。この領地を得た親世、菩提寺・墓を建立した親著、海部衆と連繋し戦った持直と、この三代は、海部郡との繋がり非常に重要視した三代であったといえる。

前述の通り、大在には、志村・北村・横田・浜・竹下・角子原・政所・城原という8つの大字地名が残っている。この内に、「政所」という地名が確認されるが、「政所」とは、豊後における荘園制的所職の一形態である。豊後における「政所」という機構は、その意味と機能を変化させながら戦国末まで存続することが知られている。一般的に政所とは、荘園に見られる荘園所や地頭政所などを指すが、大友治世下における「政所体制」に関しては、南北朝～戦国時代にかけて整備された政治機構のことを指す。この「政所体制」とは、「荘園・郷単位の「政所」と、郡・国レベルの「方分」、それに、これらの支配関係を調整する役割をもつ「方角」という制度」で、おそらくは前述の親世期に始まり、大友親治・義長期に整備が進み、義隆期にほぼ完成するといわれている。大在における政所地名の由来を追及することは、今後の課題であるが、この地名が大字城原の隣接地に残っているという事実は評価すべきである。

中世の支配機構或いは親世に始まる大友氏の支配機構は、大佐井郷に海部郡面が存在したという地勢や在地秩序という遺産を利用して、この海部郡北部に設置され、この地域支配に利用されたものと考えられる。

国領領大佐井に居住した郷民の活動を知る手がかりとしては、『賀米社遷宮等次第記』に、文亀元(1501)年の賀米社における作原神宮の御遷宮祭における流鏑馬などの神役を「国領沙汰郷々役」として勤めた記録がある。国領役として、郷民の意識の向上につながる神事であったと考えられる。

また、『天正十六年参宮帳写』は、天正19(1591)年に御伊勢参りをおこなった大在の住人が書き記した参宮帳の写しである。

天正十九年

六月廿三日

(大在)

豊後符中しゆ 大さいしゆ二人

櫻町彌三郎殿 大さいの新三郎殿

参拝者自らが記した「大さいしゆ」という記載から、豊後の中心的都市たる「府中衆」に対し、「大在衆」という自らの帰属する集団を認識していたことが把握される。

大佐井郷に関しては、古文書類の伝世が僅少である。しかし、戦国時代、大在の地には、キリシタンが多く居住していたようで、フロイスの『日本史』には、「大在」の記載が数度確認される。この点に関しては、やや下る

が、日本の記録にも元和3年(1617)10月28日付で「豊後国種具村・丹生・志村・大佐井(大在)村」のキリシタン代表が連署した文書が現存している。また、丹生からは、キリシタン遺物も出土している。

フロイスの『日本史』には、大在が七名の頭によって治められていたことや、七名の頭の内、その主だった一人が奴留湯殿(原綴り"Nuruidono")であったことが記されている。しかし、日本側の史料には、奴留湯氏が大在の地を領有していたことを確かめるものではなく、本国に対するやや誇張した報告をおこなっていることが判明しているフロイスの報告に対しては、やや慎重にならざるをえない。

日本側の史料にある奴留湯氏は、由布の一領主である。奴留湯氏は、「戸次系図」によると、大友3代頼泰の次弟戸次重秀(大友戸次氏初代)の孫、頼時の子(直光の弟)に「奴留湯 井上」とあることから、戸次氏の庶流であると考えられている。この奴留湯殿の出自である奴留湯という地名に関しては、大分県湯布院町大字川上に湯湯(奴留湯)と、熊本県阿蘇郡小国町宮原に奴留湯という地名が知られるが、後者は、大友氏除国後、小国に移り住んだもので、元来は、由布院の出自であることがわかっている。

フロイスの『日本史』第四五章(第二部一〇章)を参照すると、奴留湯殿に関しては、「……彼にはパンタリアン(原綴り"Pantaleao"(f.33))という教名が与えられた。(奴留湯殿)は(さらに)父や兄弟をもキリシタンにしたが、彼らの間では(キリシタン信仰)熱が大いに高まって、家臣、親族、友人、知人などがその後、短期間に改宗して、府内から七里のところにある由布の地では千名を超えるキリシタンが誕生した。そこには聖ミゲル(に奉獻された)教会が建立され、そこを基点としてデウスの教えが広まって行き……」という記載からは、父や兄弟、家臣、親族、友人、知人が由布の地に存在していたと考えられ、由布の奴留湯氏家系にあったことが推察される。また、第四五章(第二部一〇章)と第五三章(第二部二二章)・第五四章(第二部二三章)には、大在に教会が建てられていたことが記されている。

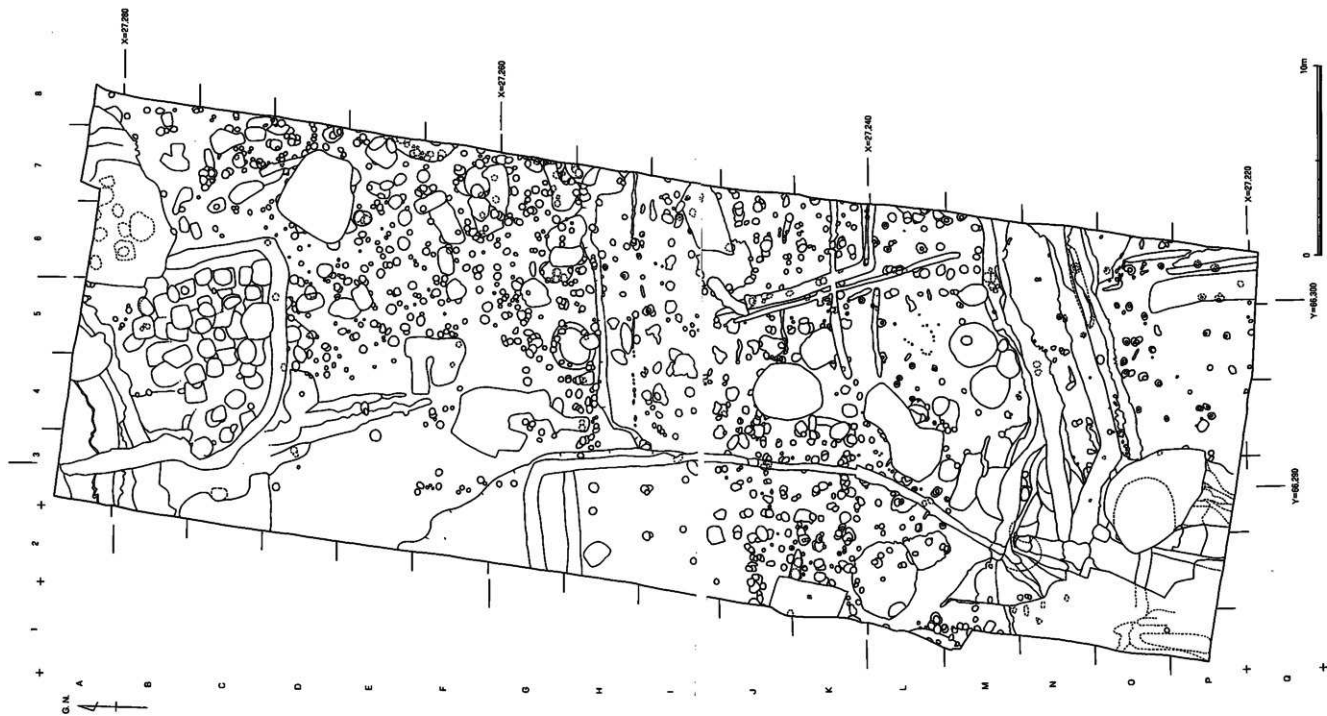
前述のとおり、海部郡は、佐尉郷・佐賀郷・毛井村といった国衙領と、荘園である丹生荘・臼杵荘・佐伯荘で構成される。大佐井郷は、この海部郡に含まれ、また、この郡の行政的な要衝の地として位置付けられていた。この海部地域の氏族は、豊後における中世史において重要な役割を果たす。

これら海部郡内の郷や荘の名を冠する氏族として知られるのは、治承・寿永の内乱時に源範頼軍に兵船82艘を提供した臼杵氏や佐賀氏、文明13年発給の段銭認取状に名前が見られる大佐井美濃守安義、1550年に二階崩れの変において義隆を殺害した津久見美作守や大佐井の斎藤氏、臼杵庄の田口氏、同変において殺害された小佐井大和守、弘治2(1556)年の小原鑑元(他姓加判衆)の乱⁴に加わり梶牟礼城に立てこもった佐伯惟教、毛井氏、丹生氏など、その氏族名は、豊後国の中世史を織り成す。

以上のように、豊後の地勢は、古代以来、畿内と九州北部との狭間という瀬戸内海を介した絶妙の位置に據されており、まさにその舵取りをしたのが、浦部や海部と呼ばれる海民の存在であったといえる。

- i. 網野善彦によると、西国の国衙領は、基本的に『和名類聚抄』の郷を単位としてしているとされている。
- ii. 因みに、古代律令体制下においては、北の国崎郡・速見郡そして日田郡の5郡が、ほぼ宇佐宮及び宇佐弥勒寺領とされるのに対し、南の大分郡・海部郡・大野郡・直入郡の4郡は、若干の皇室領・摂関家領等の荘園を含むが、そのほとんどが国衙領とされた。球珠郡は、皇室領によって占められる。
- iii. 後の『和名類聚抄』によると、所管郷として佐加郷が加えられている。令制上の区分で下郡に相当し、郡司としては大領・少領・主帳の各一名の任命となる。
- iv. 『豊後国風土記』(724)に、郡の西に丹生郷、東に佐尉郷、南に徳門郷が位置するとの記載がある。これを郡衙からの位置関係と仮定した説が存在する。この説に従うと、丹生・佐尉の両郷の境界付近で、徳門郷の北に位置していたと想定され、里・市尾の字界付近が候補地として挙げられていた。
- v. かつては、(少なくとも文治年中には、)佐賀郷に含まれていた。

- vi. 飯沼賢治ほか 1997 『大分県の歴史』 山川出版社
- vii. 松田毅一・川崎桃太郎本 1978 『フロイス日本史』中央公論社には、以下のような注釈が付けられている。
- 従軍の武将の中に「奴留湯」の名を見出す(「九州記」一七一ページ)。
 - 『豊筑乱記』に出ている奴留湯左馬之助は、キリシタンで由布院の犬身という点では同一人物と思えるが、同書が通俗書であって傍証に欠けるので断定はできない。この奴留湯左馬之助について同書が記していることを要約すると、左馬之助は戸次山城守の与力であった。由布院の犬身で、山城守に暇を乞うて領地の由布院に帰ったが、近年天竺宗(キリシタン宗)に改宗し、仏神を破滅することを好んだ。内山の多宝山浄水寺において、下人どもに下知して放火し、本尊をはじめ同寺を全焼せしめた。だが彼はほどなく重病をわずらって死去し、子孫も絶えた(二二八ページ)。
- viii. 小原鑑元・本庄新左衛門尉・中村長直・佐伯惟教らが共謀して謀反を企てた。惟教は、一族を率いて伊予に脱出した。他姓衆の反乱である。



第7图 A区地质剖面图 (1/7200)



第8图 A区地质素描图 (1/100)



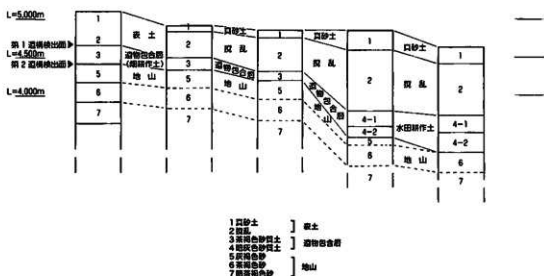
第三章 調査報告

1. A区

A区は、調査地点の北東に位置し、調査面積は1350㎡である。A区では、中世から近・現代にかけての遺構が確認された。主な遺構としては、竪立柱建物跡40棟、溝状遺構24条、井戸遺構17基、土坑44基、溜池状遺構2基、近世・近代墓37基、整地層などが挙げられる。遺物は、一部に弥生時代や古墳時代のものもあるが、その多くは、遺構同様、中世から近・現代に帰属する。遺物の種類は豊富で、中世土師器・陶磁器、近世陶磁器をはじめ、土錘、砥石、籠羽口、鉄滓、鉄貨などが出土している。

A区では、現代の客土を取り除いたところ、調査区中央部付近において段差が確認され、北側が高く、南側が70cmほど低くなっている(以後、北側を上段、南側を下段とする)。先の地理的環境でも述べたが、この高低差は、土地区画整理事業以前の地図における標高5mの等高線とほぼ一致している。また、調査により上段では畝跡を、下段では水田層を確認しており、A区は、近代以降、上段を畑、下段を水田として利用していたと考えられ、明治時代の地籍図においても、そのことを確認している。近世以前の遺構は、この耕作土直下に展開している。遺構検出面の標高は、上段4.5m～4.2m(北～南)、下段3.5m～3.3m(北～南)を測り、A区の北に設定した試験掘トレンチでは、4.7mを測る。このことから、遺構検出面の標高は、北から南に向かって傾斜する傾向が顕え、浜堤の傾斜を反映していると考えられる。

A区の遺構分布には、疎密があり、D～J-2～4グリッド付近では、柱穴遺構が、若干のまとまりをもって点在する程度で、それ以外の部分に比べ、その遺構密度の差は歴然である。次に遺構の種類ごとにその分布を見ると、竪立柱建物跡は、上段の西側部分を除いた、柱穴遺構の展開する部分すべてに存在する。溝状遺構は、北西端と下段の南部分に位置するものが、ほぼ同位置で何度も踏襲される傾向にあり、その2ヵ所に溝状遺構の7割が集中する。井戸遺構の大半は下段、特に南部分の溝状遺構周辺で確認されている。土坑は、他の遺構の周辺に分布する傾向にあり、近世・近代墓の大半が、調査区の北側部分に密集している。以上のように遺構の種類によっては、分布に偏りが見られる。



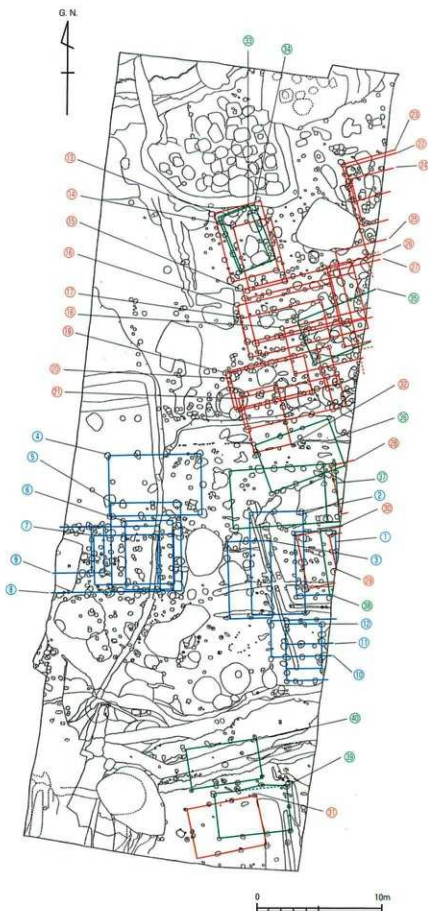
第10図 A区土層柱状模式図

掘立柱建物跡

(第11図・第2表)

A区には、1000基近くの柱穴遺構があり、それらの一部からなる掘立柱建物跡を40棟確認した。この掘立柱建物跡40棟の建物軸は、座標北(G.N.)から 1° 、 5° 、 6° 、 9° 、 14° 、 19.5° それぞれ西に傾いており、この建物軸を基に、40棟を6つのグループに分けることができる。

確認された掘立柱建物跡は、いくつかの特徴がある。先に述べたように、全ての建物軸は座標北(G.N.)からやや西に傾き、その中でも、 $N-1^{\circ}-W$ 、 $N-14^{\circ}-W$ といった特定の建物軸に、掘立柱建物跡が集中する。そして、SB跡を除いたすべての掘立柱建物跡は、桁・梁行、庇の柱穴遺構が、一直線上に並ぶ。身舎桁行の柱穴配置は、建物長軸の中心線(梁行の垂直二等分線)で、線対称となっている。また、建物軸が 5° 、 6° 、 9° 、 14° 、 19.5° 西に傾いている掘立柱建物跡の大半は、桁行の柱間寸法が均等となっている。 $N-1^{\circ}-W$ 建物軸の掘立柱建物跡も、総柱建物跡を除けば、ほとんどの建物跡において、桁行の



第11図 A区掘立柱建物跡遺構配置図 (1/300)

柱間寸法が、均等となっている。

40棟の身舎の桁行間数は、4間以下となっている。梁行間数は、総柱建物跡では3間を数えるが、その他は1間或いは2間となっている。また、梁行間数が両面とも2間となる建物跡は、現状で確認できていない。総柱建物跡や屋内柱を持つ掘立柱建物跡の身舎面積は、他に比べると広く、N-1°-W建物軸の掘立柱建物跡に多い。同じ建物軸の掘立柱建物跡は、同軸内で切り合いによる先後が確認され、同軸建物内でも時期差があることが分かった。また、同じ柱穴配置を持つ建物跡が、重複したり、近接したりして建てられた痕跡があり、建物の建替えも考えられる。

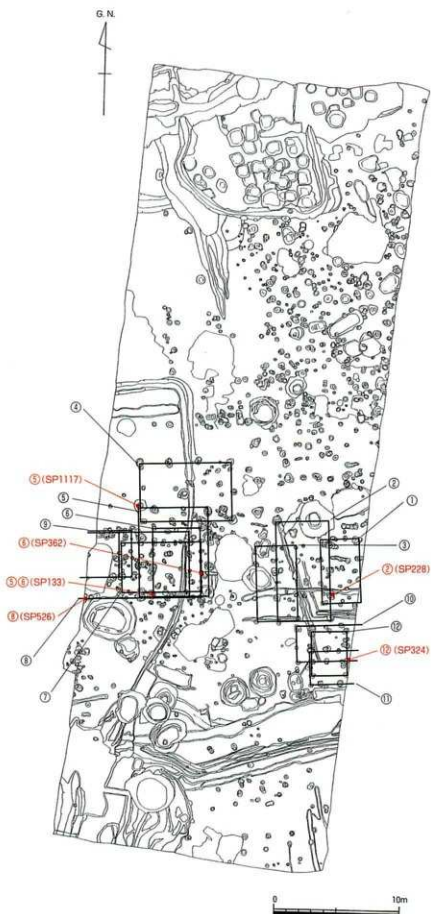
掘立柱建物跡を構成していない柱穴遺構からも根石や柱・柱痕が確認されており、掘立柱建物跡が40棟を超える可能性がある。よって、掘立柱建物跡を構成していない柱穴遺構についても併せて報告する。

掘立柱建物跡については、6つの建物軸ごとに柱穴配置を基に分類し、報告することとした。

第2表 掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	建物軸方向	桁行間数	梁行間数	身舎面積 (㎡)	桁行柱間 (m)	梁行柱間 (m)
SB①	N-1°-W	3	1	14.4	1.6 1.6 1.6(北より)	3.0
SB②	N-1°-W	4	2/1	32.76	1.95 1.95 1.95 1.95(北より)	2.1 2.1(西より) / 4.2
SB③	N-1°-W	3	1	17.8	1.85 1.85 1.85(北より)	3.2
SB④	N-1°-W	3	1/2	34.5	2.5 2.5 2.5(西より)	4.6 / 2.3 2.3(北より)
SB⑤	N-1°-W	3	3	36.18	2.5 2.0 2.2(北より)	1.0 2.2 2.2(西より)
SB⑥	N-1°-W	3	1	20.9	2.0 1.5 2.0(北より)	3.8
SB⑦	N-1°-W	3(+1)	1	19.76	1.6 1.8 1.8 (1.2) (西より)	3.8
SB⑧	N-1°-W	4*	3	39.5*	2.0 2.0 2.2 1.7(西より)	1.8 1.6 1.6(北より)
SB⑨	N-1°-W	0*(+1)	2	-	(1.0)	1.8 1.8(北より)
SB⑩	N-1°-W	3*	2	9.72*	1.2 1.2 1.2(西より)	1.6 1.1(北より)
SB⑪	N-1°-W	2*	2	-	1.2 1.1(西より)	1.4 1.4(北より)
SB⑫	N-1°-W	3	2/1	10.08	1.2 1.2 1.2(北より)	1.4 1.4(西より) / 2.8
SB⑬	N-14°-W	3*	2	21.09*	1.85 1.85 1.85(北より)	1.9 1.9(西より)
SB⑭	N-14°-W	3*	1	16.2*	1.8 1.8 1.8(北より)	3.0
SB⑮	N-14°-W	4	1(+2)	31.08	2.1 2.1 2.1 2.1(西より) (1.9 2.3 2.2 2.0) (1.8 2.1 2.1 -)	(0.8) 3.7 (0.8) (北より)
SB⑯	N-14°-W	4	2/1	21.3	1.7 1.8 1.8 1.8(西より)	1.4 1.6(北より) / 3.0
SB⑰	N-14°-W	3	1	21.78	2.2 2.2 2.2(西より)	3.3
SB⑱	N-14°-W	3*	1	21.09*	1.9 1.9 1.9(西より)	3.7
SB⑲	N-14°-W	4(+1)	1/2	21.6	1.8 1.8 1.8 1.8 (0.9)(西より)	3.0 / 1.7 1.3(北より)
SB⑳	N-14°-W	4	1	18.0	1.5 1.5 1.5 1.5(西より)	3.0
SB㉑	N-14°-W	4(+1)	1	18.2	1.9 1.7 1.7 1.7 (0.7)(西より)	2.6
SB㉒	N-14°-W	1*	2	-	2.0	1.5 1.5(北より)
SB㉓	N-14°-W	4*	0*	-	1.8 1.8 1.8 1.8(北より)	-
SB㉔	N-14°-W	1*	2	-	1.7	1.9 1.9(北より)
SB㉕	N-14°-W	4*	1*	-	1.9 1.9 1.9 1.9(北より)	1.9
SB㉖	N-14°-W	3	0*	-	1.9 1.9 1.9(北より)	-
SB㉗	N-14°-W	1*	2	-	1.8	2.1 2.1(北より)
SB㉘	N-14°-W	2*	0*	-	1.8 1.8(北より)	-
SB㉙	N-14°-W	2*	0*	-	1.3 1.3(北より)	-
SB㉚	N-14°-W	1*	2	-	2.5	2.0 2.0(北より)
SB㉛	N-14°-W	3	1	20.52	1.8 1.8 1.8(西より)	3.8
SB㉜	N-14°-W	3	1	14.21	1.8 1.9 1.2(北より)	2.9
SB㉝	N-19.5°-W	3*	2	12.15*	1.5 1.5 1.5(北より)	2.4 / 1.2 1.2(西より)
SB㉞	N-19.5°-W	3*	2	10.8*	1.5 1.5 1.5(北より)	2.7 / 1.35 1.35(西より)
SB㉟	N-19.5°-W	3*	1	19.76*	1.8 1.6 1.8(西より)	3.8
SB㊱	N-19.5°-W	3*	1	22.8*	2.0 2.0 2.0(西より)	3.8
SB㊲	N-6°-W	3(+1)	2/1(+3)	27.6	2.3 2.3 2.3 (1.0) (西より)	2.2 1.8(北より) / 4.0 (1.1 1.8 1.1)
SB㊳	N-5°-W	3*	0*	-	1.7 1.7 1.7(北より)	-
SB㊴	N-5°-W	3	1/2	20.52	1.9 1.9 1.9(西より)	3.6 / 1.8 1.8(北より)
SB㊵	N-9°-W	3	1	16.2	1.8 1.8 1.8(西より)	3.0

*…以上 () …底



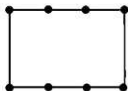
第12圖 A区N-1* -W軸掘立柱建物跡遺構配置圖 (1/300)

N-1'-W建物軸の孤立柱建物跡（第12図）

この建物軸の孤立柱建物跡は、総柱建物跡2棟を含む12棟で、調査区の南半に集中する。

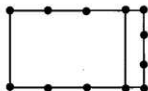
桁行3間×梁行1間（SB①・SB③・SB⑥）

身舎の桁行×梁行は3間×1間で、SB①・SB③・SB⑥がこれにあたる。この建物跡3棟は、梁行柱間が、桁行柱間より広く、梁間一間型住居と言われるタイプの孤立柱建物跡である。身舎面積は、14.4～20.9㎡を測る。SB①、SB③は、桁行の柱間寸法は均等だが、SB⑥においては、不規則である。



桁行3間×梁行1間 梁側に庇1面（SB⑦）

身舎の桁行×梁行は3間×1間で、梁側に1面庇が付く。SB⑦がこれにあたる。梁行柱間が、桁行柱間より広い梁間一間型住居で、前述の3間×1間のタイプに庇が1面付いたものと考えられる。身舎面積は、19.8㎡を測り、桁行の柱間寸法はばらつきがある。庇の柱間寸法も、不規則であるが、身舎から等しく1.2m離れている。



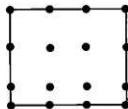
桁行3間×梁行1間・2間（SB④・SB⑫）

身舎の桁行は3間で、梁行は片側が1間、その反対側が2間で、SB④、SB⑫がこれにあたる。身舎面積は、SB④が34.5㎡、SB⑫が10.1㎡を測る。SB④は、建物跡を構成する柱穴遺構が、他の孤立柱建物跡のそれに比べ、規模の大きいものが多い。また、身舎面積は30㎡を超え、40棟の孤立柱建物跡の中でも規模の大きい建物跡に属する。SB⑫は、桁行の柱間寸法が1.2mと他に比べ狭く、身舎面積も狭い。桁行の柱間寸法と梁行の柱間寸法は、2棟とも均等となっている。



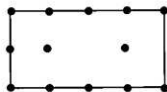
桁行3間×梁行3間（SB⑤）

身舎の桁行×梁行は、3間×3間で、SB⑤がこれにあたる。身舎面積は、36.2㎡を測り、梁行の柱間寸法が極端に狭い箇所があるが、総柱建物跡と考えられる。30㎡を超える身舎を持ち、孤立柱建物跡の中でも規模の大きい建物跡に属する。桁行の柱間寸法と梁行の柱間寸法ともに、不規則である。



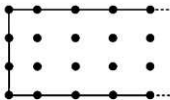
桁行4間×梁行1間・2間（SB②）

身舎の桁行は4間、梁行は片側が1間、その反対側が2間となっており、屋内に2本の柱を持つ。SB②がこれにあたり、身舎面積は、32.8㎡を測り、規模の大きい建物跡に属する。SB②は、総柱建物の一部の柱穴を省いたとも考えられるが、梁行の片側が1間であり、また屋内の柱穴遺構の省略が不規則であることから、側柱建物に屋内柱を加えたものと考えられる。桁行の柱間寸法は、等しく1.95mを測る。



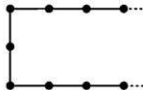
桁行4間以上×梁行3間 (SB⑩)

身舎の桁行は4間以上、梁行は3間の総柱建物と考えられる建物跡で、SB⑩がこれにあたる。調査区西壁に柱穴遺構の一部が掛かり、調査区外への展開も考えられ、桁行の間数は確定できていない。身舎面積は39.5㎡以上で、40棟の中で最大面積となっている。桁行の柱間寸法と梁行の柱間寸法ともに、不規則である。



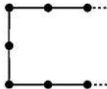
桁行3間以上×梁行2間 (SB⑪)

身舎の桁行は3間以上、梁行の一方は2間で、SB⑪がこれにあたる。この掘立柱建物跡は、調査区外への展開の可能性があり桁行・梁行間数は確定していない。身舎面積は、9.7㎡以上を測る。桁行の柱間寸法は、等しく1.2mを測り、SB⑩と同じであるため、SB⑪は、規模や柱の配置がSB⑩と同様の掘立柱建物跡と推定される。



桁行2間以上×梁行2間 (SB⑫)

身舎の桁行は、2間以上、梁行は2間で、SB⑫がこれにあたる。桁行の柱間寸法は、1.2mと1.1mで、ばらつきがあり、梁行は、等しく1.4mを測る。SB⑫は、柱間寸法が、他に比べて狭いため、SB⑩・SB⑪と同規模の掘立柱建物跡と推察される。



梁行2間 梁側に庇1面 (SB⑬)

身舎の梁行は2間で、梁側の1面以上に庇が付くと考えられ、SB⑬がこれにあたる。桁行は、調査区外への展開が考えられ、間数は不明である。梁行の柱間寸法は、等しく1.8mを測る。庇は柱間寸法が1.8mで、身舎から1m離れる。欄列遺構の可能性もある。



遺物等出土の掘立柱建物跡 (第14図)

SB⑭ (SP362)

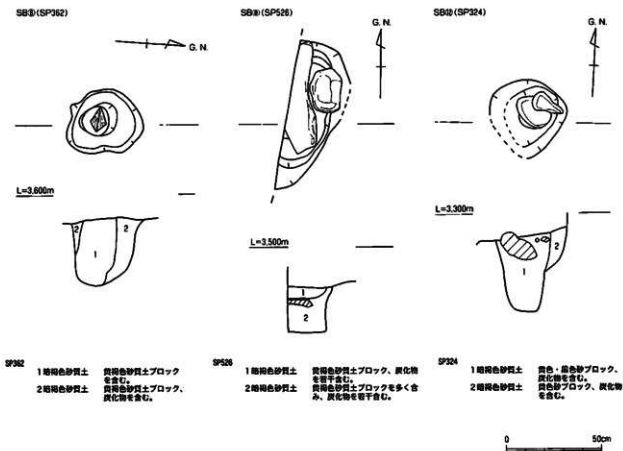
SP362は、SB⑭を構成する柱穴遺構の一つである。現状で直径32cm、深さ36cmを測る。柱の一部と考えられる木材が、直立した状態で出土した。この木材を放射性炭素により年代測定したところ、AD1440～1520年、AD1580～1630年という値がでた。

SB⑮ (SP526)

SP526は、SB⑮を構成する柱穴遺構の一つである。調査区西壁にその一部がかかっており、現状で直径79cm、深さ24cmを測る。礎を2点確認している。柱を支えていた礎の可能性が有る。

SB⑯ (SP324)

SP324は、SB⑯を構成する柱穴遺構の一つである。現状で直径37cm、深さ43cmを測る。礎を2点確認しており、柱を支えていた可能性が有る。



第14図 A区N-1' -W軸掘立柱建物跡遺物等出土柱穴遺構実測図 SP362・SP526・SP324 (1/20)

掘立柱建物跡出土遺物 (第15図)

SB② (SP228)

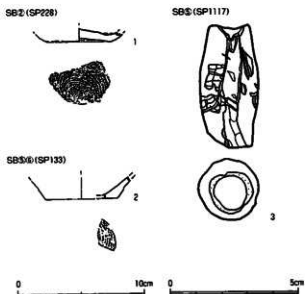
1は、土師器小環である。復元底径5.0cmを測る。器面調整は、内外面ともロクロナデを施す。底部には回転糸切り痕を残す。

SB⑤・SB⑥ (SP133)

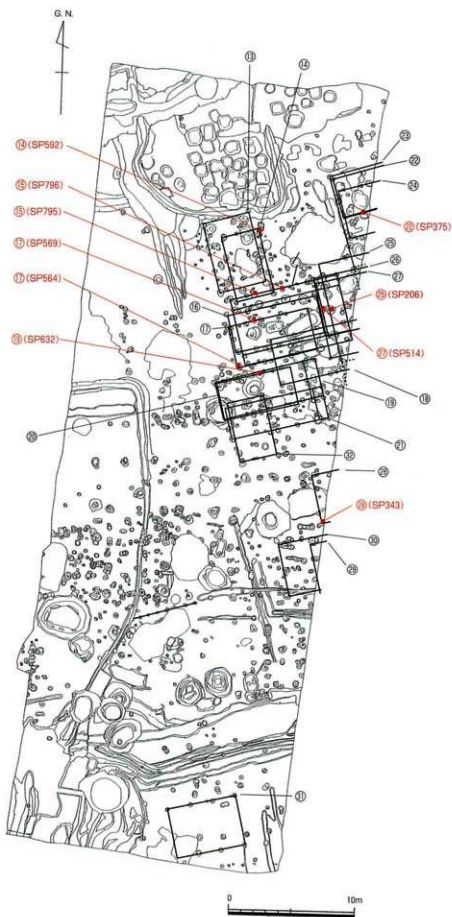
2は、土師器環で、復元底径5.8cmを測る。器面調整は、内外面ともロクロナデを施す。底部には、回転糸切り痕を残す。

SB⑤ (SP1117)

3は、土師質で太形短形の有孔土錘で、やや紡錘形を呈する。下端面にミガキ調整が施されている。外面に網によると考えられる擦痕が多く見られる。掛け紐によると推測される、圧痕が表面中央の上から下にかけて、欠損と剥落が上端中央付近に、若干の欠損が下端左側に認められる。



第15図 A区N-1' -W軸掘立柱建物跡柱穴遺構出土遺物実測図 SP133・SP228 (1/3)・SP1117 (2/3)



第16图 A区N-14°-W轴独立柱建物跡遺構配置図 (1/300)

N-14°-W建物軸の竪立柱建物跡（第16図）

この建物軸の竪立柱建物跡は、20棟あり、ほとんどが調査区の東部分、特に北東部分に集中している。

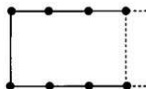
桁行3間×梁行1間（SB⑦・SB⑪・SB⑫）

身舎の桁行×梁行は3間×1間で、SB⑦、SB⑪、SB⑫がこれにあたる。この建物跡3棟は、梁行柱間が、桁行柱間より広く、梁間一間型住居と言われるタイプの竪立柱建物である。身舎面積は、14.2～21.8㎡を測る。SB⑦・SB⑫は、桁行の柱間寸法は均等で、SB⑪は、不規則である。



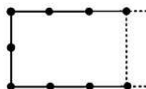
桁行3間以上×梁行1間（SB⑭・SB⑮）

身舎の桁行は3間以上、梁行の一方は1間で、SB⑭、SB⑮がこれにあたる。身舎面積は、SB⑭が16.2㎡以上、SB⑮が21.1㎡以上である。この2棟は、調査区外への展開が考えられることから、桁行の間数が確定していない。桁行の柱間寸法は均等で、SB⑭が1.8m、SB⑮が1.9mを測る。



桁行3間以上×梁行2間（SB⑯）

身舎の桁行は3間以上、梁行の一方は2間で、SB⑯がこれにあたる。身舎面積は、21.1㎡以上で、近世の遺構による削平により、桁行の間数が確定しておらず、また一方の梁行の間数も不明である。桁行の柱間寸法は、等しく1.85mを測る。



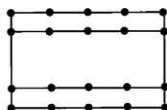
桁行4間×梁行1間（SB⑰）

身舎の桁行×梁行は4間×1間で、SB⑰がこれにあたる。この建物は、梁行柱間が、桁行柱間より広く、梁間一間型住居と言われるタイプの竪立柱建物である。身舎面積は、18.0㎡で、桁行の柱間寸法は、等しく1.5mを測る。



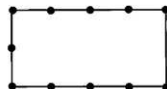
桁行4間×梁行1間 桁側に底2面（SB⑱）

身舎の桁行×梁行は、4間×1間で、桁側の両面に底が付く竪立柱建物で、SB⑱がこれにあたる。この建物は、梁行柱間が桁行柱間より広く、梁間一間型住居と言われるタイプの竪立柱建物である。身舎面積は、31.1㎡で、40棟の中でも面積の広い建物跡に属し、N-14°-W建物軸の建物跡の中で、最大身舎面積を持つ。身舎における桁行の柱間寸法は、等しく2.1mを測る。一方、底の柱間寸法は、不規則である。



桁行4間×梁行1間・2間（SB⑲）

身舎の桁行は4間で、梁行は片側が1間、その反対側が2間で、SB⑲がこれにあたる。身舎面積は、21.3㎡を測る。桁行の柱間寸法は、1ヵ所のみ1.7mを測り、他は1.8mを測る。2間側の梁行の柱間寸法は、1.4mと1.6mとなっており、不規則である。



桁行4間×梁行1間 梁側に庇1面 (SB㉑)

身舎の桁行×梁行は、4間×1間、梁側の一方に庇が付く掘立柱建物で、SB㉑がこれにあたる。この建物は、梁行柱間が、桁行柱間より広く、梁間一間型住居と言われるタイプの掘立柱建物である。身舎面積は、18.2㎡を測る。身舎の桁行の柱間寸法は、ほぼ1.7mでそろっており、庇は身舎より0.8m離れている。



桁行4間×梁行1間・2間 梁側に庇1面 (SB㉒)

身舎の桁行は4間となっている。梁行は片側が1間、その反対側が2間で、庇が1面付く。SB㉒がこれにあたり、身舎面積は、21.6㎡を測る。身舎における桁行の柱間寸法は、等しく1.8mを測るが、梁行の柱間寸法は不規則である。庇は身舎より0.9m離れている。SB㉒とSB㉑は、柱穴配置や柱間寸法などが、近似している。



桁行1間以上×梁行2間 (SB㉓・SB㉔・SB㉕・SB㉖)

身舎の桁行は1間以上、梁行の一方は2間で、SB㉓、SB㉔、SB㉕、SB㉖がこれにあたる。この4棟は、調査区外への展開が考えられ、桁行及び、片方の梁行の間数は確定できていない。4棟とも、梁行の柱間寸法は均等になっている。



桁行4間以上×梁行1間以上 (SB㉗)

身舎の桁行は、4間以上、梁行は1間以上で、SB㉗がこれにあたる。調査区外への展開が考えられるため、桁行・梁行間数とも確定していない。桁行の柱間寸法は、等しく1.9mを測る。



桁行4間以上 (SB㉘)

身舎の桁行は4間以上で、SB㉘がこれにあたる。調査区外への展開が考えられ、桁行・梁行間数とも確定していない。桁行の柱間寸法は、等しく1.8mを測る。櫓列遺構の可能性もある。



桁行3間 (SB㉙)

身舎の桁行は3間で、SB㉙がこれにあたる。調査区外への展開が考えられ、梁行の間数は確定していない。桁行の柱間寸法は、等しく1.9mを測る。櫓列遺構の可能性もある。



桁行または梁行2間以上 (SB㉚・SB㉛)

身舎の桁行または梁行が2間以上で、SB㉚、SB㉛がこれにあたる。調査区外への展開が考えられ、確認されている柱穴遺構が、桁・梁のいずれを構成するものかは不明で、桁行・梁行間数とも確定していない。櫓列遺構の可能性もある。



遺物等出土の掘立柱建物跡

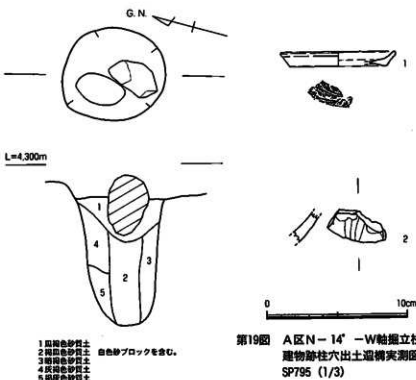
SB⑤ (SP795) (第18図)

SP795はSB⑤を構成する柱穴遺構の1つである。現状で直径53cm、深さ61cmを測る。土師器小皿、甗・甗系青磁碗、焼けた礫が出土している。礫は、柱の抜き取り後、または腐食などによる柱の消滅後に、周囲もしくは柱穴遺構の裏込め土から混入した可能性が高い。

出土遺物 (第19図)

1は、土師器小皿で、法量は、復元口径8.0cm、器高1.8cm、復元底径7.4cmを測る。器面調整は、内外面ともクロナデを施し、底部には回転糸切り痕を残す。

2は、甗・甗系青磁碗である。上田分類B-Ⅲ類で、15世紀前半と考えられる。外面は片切彫りの蓮弁文と思われる文様がある。胎土は灰色で、軸はくすんだ緑色を呈している。



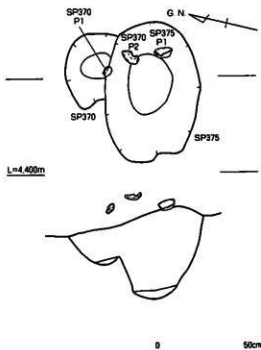
第18図 A区N-14'-W軸掘立柱建物跡遺物等出土柱穴遺構実測図 SP795 (1/20)

SB② (SP375) (第20図)

SP375は、SB②を構成する柱穴遺構の1つである。現状で直径約37cm、深さ約49cmを測る。遺構の上層から、土師器小皿が出土している。また、出土した土師器片の一部が、SP275出土の土師器と接合した。なお、接合したものについては、SP275にて報告する。

出土遺物 (第21図)

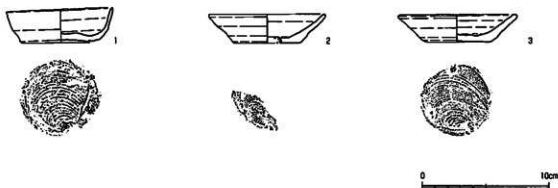
1 (P1) は、土師器小皿である。法量は、口径8.25cm、器高2.65cm、底径6.2cmを測る。器面調整は内外面ともクロナデを施す。底部に回転糸切り痕を残す。



第20図 A区N-14'-W軸掘立柱建物跡遺物等出土柱穴遺構実測図 SP370・SP375 (1/20)

SP370 (第20図)

この柱穴遺構は、掘立柱建物跡を構成する柱穴遺構ではなく、SP375 (SB②) と切り合い関係があるため、この項で、詳述する。当遺構は、SP375より新しく、現状で直径28cm、深さ33cmを測る。遺構の上層で土師器小皿が2点出土している。出土遺物 (第21図)



第21図 A区N-14°-W軸掘立柱建物跡柱穴遺構出土遺物実測図 SP370・SP375 (1/3)

2 (P1)・3 (P2) は土師器小皿である。2 は、復元口径11.5cm、器高2.25cm、復元底径7.35cmを測る。3 は、口径8.9cm、器高2.15cm、底径5.0cmを測る。2・3の器面調整は、内外面ともロクロナデで、底部には回転糸切り痕を残す。

掘立柱建物跡出土遺物 (第22図)

SB⑭ (SP592)

1 は、龍泉窯系青磁碗である。上田分類B-1類 (13世紀末～14世紀初頭) で、復元口径18.7cmを測る。外面には、片切彫りの蓮弁文を持つ。胎土は白味がかった灰色で、釉はくすんだ緑色を呈す。

SB⑮ (SP796)

2 は、瓦質土器細鉢で、復元口径25.4cmを測る。内面はヨコナデが施される。外面は口縁部にヨコナデを施し、胴部に指頭圧調整痕が残る。

SB⑯ (SP564・SP569)

3 は、SP569出土の土師器小皿である。法量は、復元口径7.25cm、器高0.9cm、復元底径6.4cmを測る。器面調整は内外面ともロクロナデで、底部に回転糸切り痕を残す。4 は、SP564出土の土師器環である。復元口径10.7cm、器高4.0cm、復元底径9.0cmを測る。器面調整は、内外面ともロクロナデを施すが、外面の底部付近は成形時の水挽き痕を残す。底部には回転糸切り痕を残す。

SB⑰ (SP632)

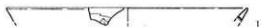
5 は、土師器環である。法量は、復元口径12.7cm、器高4.1cm、復元底径9.3cmを測る。器面調整は、内外面ともロクロナデを施すが、外面の一部に不定方向のナデを施す。底部には回転糸切り痕を残す。

SB⑱ (SP206)

6 は、土師器環である。復元口径8.8cmを測る。器面調整は、内外面ともロクロナデを施す。

7 は、瓦器碗である。復元口径13.2cmを測る。器面調整は、内外面ともにミガキ調整を施す。

SB㉓ (SP592)



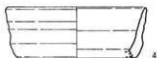
SB㉔ (SP569)



SB㉕ (SP796)



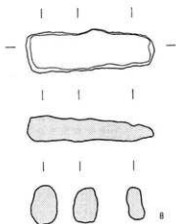
SB㉖ (SP564)



SB㉗ (SP632)



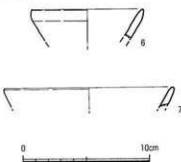
SB㉘ (SP514)



SB㉙ (SP343)



SB㉚ (SP206)



0 5cm

0 5cm

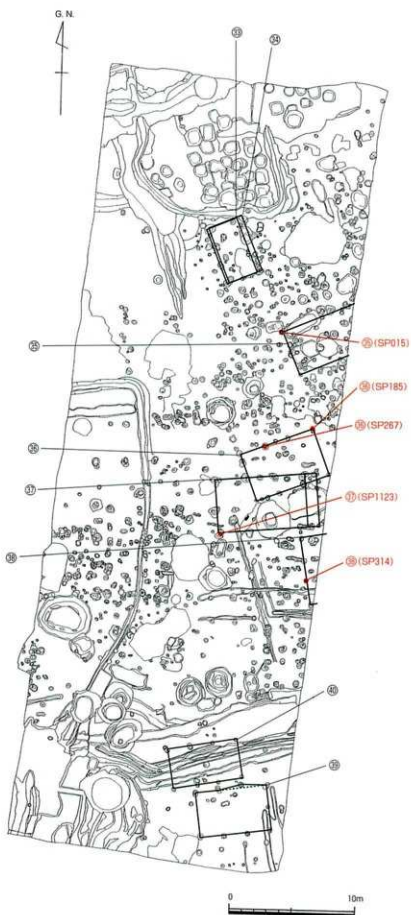
第22図 A区N-1* -W軸掘立柱建物跡柱穴遺構出土遺物実測図
SP592・SP796・SP564・SP569・SP632・SP206 (1/3) SP514 (1/2)・SP343 (2/3)

SB㉘ (SP514)

8は、鉄器である。現状で、長さ6.75cm、幅2.1cm、厚さ2.05cmを測る。

SB㉙ (SP343)

9は、瓦質で細形土管形の有孔土鍾である。上半を欠損する。表面の左上から左下にかけて掛け紐によると推測される圧痕が認められる。



第23図 A区その他の軸の掘立柱建物跡遺構配置図 (1/300)

その他の建物軸の掘立柱建物跡（第23図）

N-19.5°-W建物軸の掘立柱建物跡は、4棟あり、N-14°-W建物軸の掘立柱建物跡同様、北東部分に分布する。N-6°-Wは1棟、N-5°-Wは2棟、N-9°-Wは1棟、それぞれ確認している。

N-19.5°-W建物軸の掘立柱建物跡

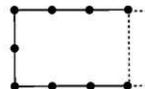
桁行3間以上×梁行1間（SB㉔、SB㉕）

身舎の桁行3間以上、梁行1間で、SB㉔、SB㉕がこれにあたる。この建物は、梁行柱間が、桁行柱間より広く、梁間一間型住居と言われるタイプの掘立柱建物の可能性がある。調査区外への展開が考えられるため、桁行間数が確定していない。身舎面積はSB㉔が19.8㎡以上、SB㉕が22.8㎡以上を測る。SB㉔における桁行の柱間寸法SB㉕は、不規則であるが、SB㉔のそれは、等しく2.0mを測る。



桁行3間以上×梁行2間（SB㉔、SB㉕）

身舎の桁行は3間以上、梁行の一方は2間で、SB㉔、SB㉕がこれにあたる。近世の遺構に削平されているため、桁行は確定できていない。身舎面積は、SB㉔が10.8㎡以上、SB㉕が12.15㎡以上となっている。2棟とも桁行・梁行の柱間寸法は等しい。



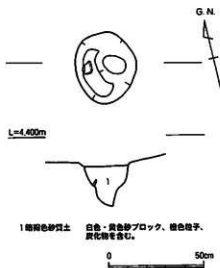
遺物等出土の掘立柱建物跡

SB㉔（SP185）（第25・26図）

SP185は、SB㉔を構成する柱穴遺構の1つである。現状で直径28cm、深さ21cmを測る。埋土から瓦質土器鍋が出土している。

出土遺物（第26図）

1は、瓦質土器鍋で、複元口径は27.0cmを測る。外面は口縁部にヨコナデを施す。内面は、ヨコナデを施した後、ヨコ方向のハケメを施したと考えられる。



第25図 A区N-19.5°-W軸掘立柱建物跡
遺物等出土柱穴遺構実測図 SP185（1/20）



第26図 A区N-19.5°-W軸掘立柱建物跡
柱穴出土遺物実測図 SP185（1/3）

掘立柱建物跡遺物出土（第27図）

SB㉟（SP015）

1は、検出時に出土した中国産染付皿である。小野分類B1群（15世紀後半～16世紀前半）で、復元口径11.8cmを測る。端反り皿で、内外面とも口縁部は界線、外面胴部は唐草文が描かれる。

SB㉟（SP015）



SB㉟（SP267）



SB㉟（SP267）

2は土師器小坏で、底径6.4cmを測る。E-7グリッド出土の土師器片と接合した。器面調整は、内外面ともロクロナデを施し、底部に回転糸切り痕を残す。

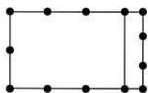


第27図 A区N-19.5°-W軸掘立柱建物跡柱穴遺構出土遺物実測図
SP015・SP267（1/3）

N-6°-W建物軸の掘立柱建物跡

桁行3間×梁行1間・2間 梁側に庇1面（SB㉟）

身舎の桁行は3間となっている。梁行の一方は1間、その反対側は2間で、庇が1面付く。SB㉟がこれにあたる。身舎面積は27.6㎡を測る。桁行の柱間寸法は、等しく2.3mを測るが、2間ある梁行の柱間寸法は、不規則である。庇の間数は3間で、柱間寸法は、不規則である。庇は、身舎から1.0m離れている。



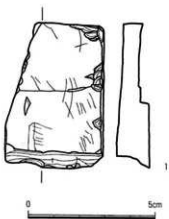
遺物等出土の掘立柱建物跡

SB㉟（SP1123）

当遺構は、長さ83cm、幅77cm、深さ49cmを測り、遺構形状は、不定形である。

出土遺物（第29図）

1は、天草石製の砥石である。下端は表から裏への折れによる欠損が認められる。表裏面・上端面・左右側面は磨き整形が施されている。表面には、左上-右下、上-下と右上-左下の三方向の研ぎによる擦痕が認められる。裏面は上半が剥落しており、また下半部には表面と同様の研ぎによる三方向の擦痕が若干見られる。また、左側面には上-下方向の擦痕が見受けられる。



第29図 A区N-6°-W軸掘立柱建物跡柱穴遺構出土遺物実測図
SP1123（2/3）

N-5°-W建物軸の掘立柱建物跡

桁行3間×梁行1間・2間（SB㉟）

身舎の桁行は3間、梁行の一方は1間、その反対側は2間で、SB㉟がこれにあたる。身舎面積は20.5㎡を測る。桁行の柱間寸法は、等しく1.9mを測り、2間ある梁行の柱間寸法も、等しく1.8mを測る。一方の桁行において、柱穴遺構の1つが、柱筋から外れており、確認された40棟の掘立柱建物の中で、SB㉟のみ、一直線上に柱穴遺構が配置されていない。



桁行3間以上 (SB㊟)

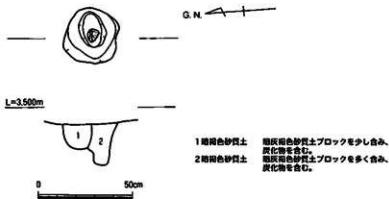
身舎の桁行3間以上で、SB㊟がこれにあたる。調査区外への展開が考えられるため、桁行・梁間数が確定していない。桁行の柱間寸法は、等しく1.7mを測る。櫛列遺構の可能性もある。



遺物等出土の掘立柱建物跡

SB㊟ (SP314) (第31図)

SP314は、SB㊟を構成する柱穴遺構の一つである。遺構形状は、ほぼ円形を呈し、現状で直径29cm、深さ21cmを測る。柱の一部と考えられる木材が、直立した状態で出土した。木材の断面形状は、円形で、現段階での直径は約6cmを測るが、当遺跡は、砂地であり、木材の萎縮なども考えられ、使用当時の直径とは断定できない。

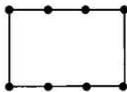


第31図 A区N-5°-W軸掘立柱建物跡
遺物等出土柱穴遺構実測図 SP314 (1/20)

N-9°-W建物軸の掘立柱建物跡

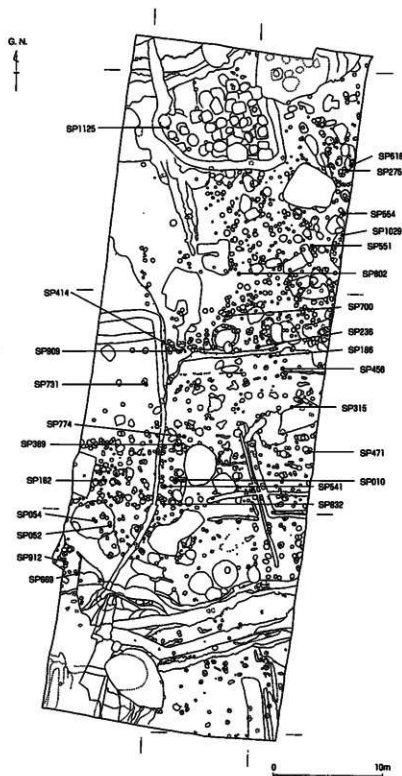
桁行3間×梁行1間 (SB㊟)

身舎の桁行×梁行は、3間×1間で、SB㊟がこれにあたる。この建物は、梁行柱間が、桁行柱間より広く、梁間一間型住居と言われるタイプの掘立柱建物である。身舎面積は、16.2㎡を測る。桁行の柱間寸法は、等しく1.8mを測る。



i 梁間一間型住居…総柱建物跡を除いた掘立柱建物跡の中で、梁間が桁行柱間の1.5～2倍程度に広がった掘立柱建物跡のこと。

宮本長次郎 1999『日本中世住居の形成と発展』『建築史の空間』



第33図 A区独立柱建物跡を構成しない柱穴遺構配置図 (1/300)

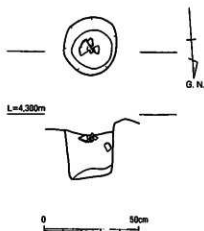
掘立柱建物構成しない柱穴遺構（第33図）

SP275（第34図）

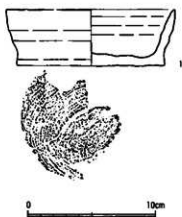
現状で、直径28cm、深さ26cmを測る。円形のプランを持つ柱穴遺構で、土師器環が1点出土している。この環は、SP375出土の土師器片と接合した。

出土遺物（第35図）

1は土師器環で、復元口径13.1cm、器高4.35cm、復元底径12.0cmを測る。器面調整は、内外面ともロクロナデを施し、底部に回転糸切り痕を残す。SP375の土師器片と接合した。



第34図 A区 SP275 遺構実測図 (1/20)



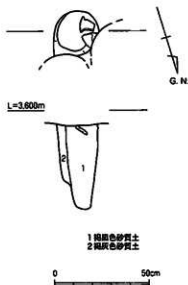
第35図 A区 SP275 出土遺物実測図 (1/3)

SP471（第36図）

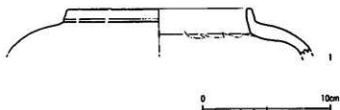
円形のプランを持ち、現状で直径22cm、深さ44cmを測る。柱痕の埋土から瓦質土器壺が出土しており、柱の抜き取り後或いは、柱が腐食などにより消失した後に、埋土中に入ったものと考えられる。

出土遺物（第37図）

1は瓦質土器壺で、復元口径13.2cmを測る。器面調整は、内外面とも回転ヨコナデだが、内面の屈曲部に指頭圧調整痕が残る。



第36図 A区 SP471 遺構実測図 (1/20)



第37図 A区 SP471 出土遺物実測図 (1/3)

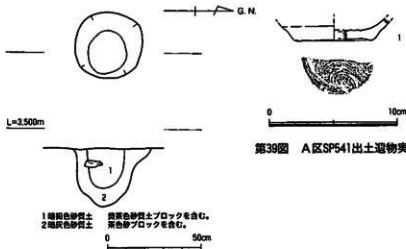
SP541（第38図）

円形のプランを持ち、現状で直径36cm、深さ31cmを測る。土師器皿が、甔形の埋土に一部かかった状態で出土

した。柱痕の埋土の遺物と考えられ、柱の抜き取り後或いは、柱が腐食などにより消失した後に、埋土中に入ったものと推測される。

出土遺物 (第39図)

1は土師器小皿である。復元底径6.2cmを測る。器面調整は内外面ともロクロナデを施す。底部には回転糸切り痕を残す。



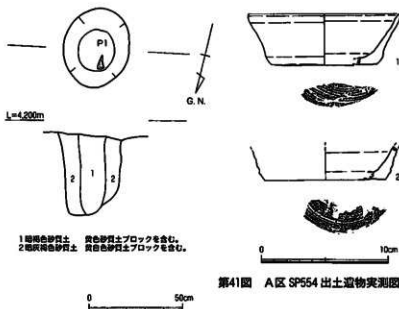
第39図 A区SP541出土遺物実測図 (1/20)

SP554 (第40図)

円形のプランを持ち、現状で直径36cm、深さ43cmを測る。土師器坏が2点出土している。

出土遺物 (第41図)

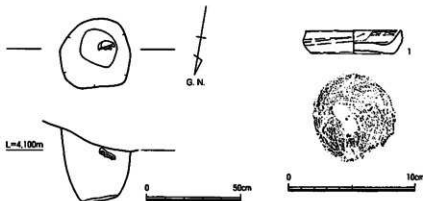
1 (PI)・2は土師器坏である。1の法量は、復元口径11.85cm、器高4.0cm、復元底径8.3cmを測る。内外面ともロクロナデを施すが、外面の底部付近は成形時の水挽き痕を残す。底部には回転糸切り痕が残る。2の法量は、復元底径9.5cmを測る。器面調整は内外面ともロクロナデを施し、底部には回転糸切り痕を残す。



第40図 A区SP554 遺構実測図 (1/20)

SP618 (第42図)

円形のプランを持ち、現状で直径38cm、深さ40cmを測る。ほぼ完形の土師器小皿が、出土している。この小皿は、3つに割れており、それら3片が伏せられた状態で重なり、出土した。小皿の出土状況や土層観察から、柱の抜き取り後に、小皿を意図的に割り、埋めたものと考えられる。



第42図 A区SP618 遺構実測図 (1/20)

第43図 A区SP618 出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第43図)

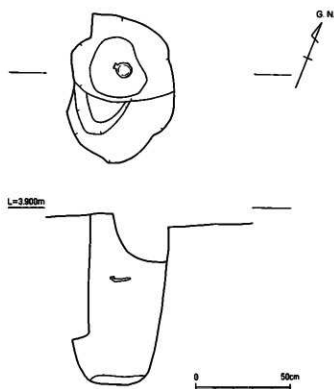
Ⅰは土師器小皿である。ほぼ完形で、法量は、口径7.6cm、器高1.9cm、底径6.6cmを測る。器面調整は、内外面ともロクロナデを施し、底部には回転糸切り痕を残す。割れた状態で出土したが、ほぼ完形状態に接合できたことなどから、意図的に割ったものと考えられる。

SP700 (第44図)

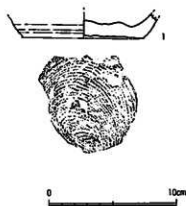
遺構の一部を他の柱穴遺構に破壊されているが、おそらく楕円形のプランだったと考えられる。現状で、長さ79cm、幅52cm、深さ90cmを測る。土師器坏が、柱痕の埋土から出土しており、柱の抜き取り後或いは、柱が腐食などにより消失した後に、埋土中に混入したものと考えられる。

出土遺物 (第45図)

Ⅰは土師器坏である。復元底径9.5cmを測る。器面調整は、内外面ともロクロナデを施し、底部には回転糸切り痕を残す。



第44図 A区 SP700 遺構実測図 (1/20)



第45図 A区 SP700 出土遺物実測図 (1/3)

SP802 (第46図)

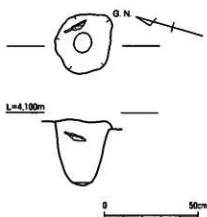
円形のプランを持ち、現状で直径29cm、深さ35cmを測る。小刀と考えられる鉄器が出土した。この鉄器は、柱の抜き取り後或いは、柱が腐食などにより消失した後に、埋土中に混入したものと考えられる。

出土遺物 (第47図)

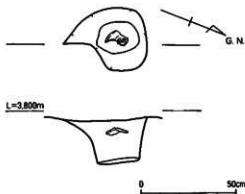
Ⅰは、小刀と考えられる鉄器で、現状で長さ12.50cm、最大幅2.20cm、厚さ0.55cmを測る。

SP909 (第48図)

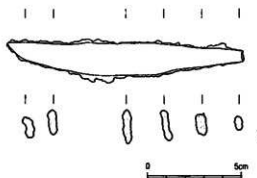
遺構の一部を他の柱穴遺構に破壊されているが、おそらく楕円形のプランであったと考えられる。現状で、長



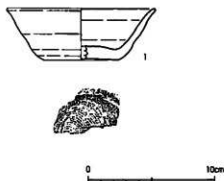
第46図 A区 SP802 遺構実測図 (1/20)



第48図 A区 SP909 遺構実測図 (1/20)



第47図 A区 SP802 出土遺物実測図 (1/2)



第49図 A区 SP909 出土遺物実測図 (1/3)

さ 44 cm、幅 33 cm、深さ 25 cm を測る。土師器環が、柱根の埋土から出土しており、柱の抜き取り後或いは、柱が腐食などにより消失した後に、埋土中に混入したものと考えられる。

出土遺物 (第49図)

1 は土師器環で、復元口径 12.5 cm、器高 4.05 cm、復元底径 6.8 cm を測る。器面調整は、内外面ともロクロナデを施し、底部には回転糸切り痕を残す。

礫等出土の柱穴遺構 (第50図)

SP052

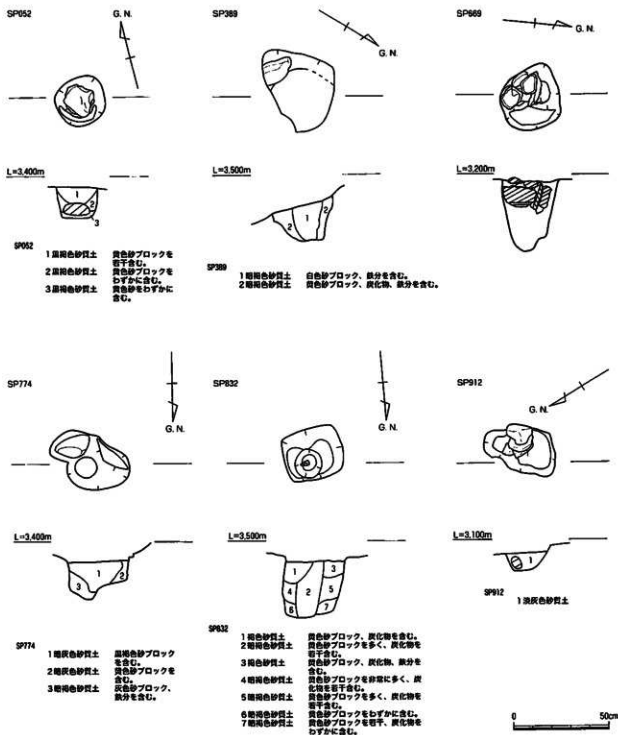
円形のプランを持ち、現状で直径 27 cm、深さ 16 cm を測る。礫が 1 点出土している。この礫は、土層の堆積状況などから、柱の根石であった可能性がある。

SP389

他の柱穴遺構からの削平により、不定形のプランを持つ。現状で幅 31 cm、深さ 25 cm を測る。土層観察などから、礫は、柱を支えていた可能性が考えられる。

SP669

隅丸方形に近いプランを持ち、現状で幅 31 cm、深さ 37 cm を測る。礫が、折り重なるようにして 6 個出土した。平らな面を持つ礫が多く、柱穴遺構の根石として使用していた礫を意図的に廃棄した可能性がある。



第50図 A区礫等出土柱穴掘削実測図 SP052・SP389・SP669・SP774・SP832・SP912 (1/20)

SP774

不定形のプランを持ち、現状で幅33cm、深さ19cmを測る。礫が1点出土している。土層観察などから、礫は柱を支えていた可能性が指摘される。

SP832

方形のプランを持ち、現状で幅31cm、深さ29cmを測る。柱の一部であったと考えられる木材が、直立した状態で出土した。

SP912

不定形のプランを持ち、現状で幅33cm、深さ9cmを測る。罫が折り重なって4個出土した。罫は、柱を支えていた可能性もあるが、断定できない。

柱穴遺構出土遺物（第51図）

SP010

当遺構は、他の遺構の削平を受けているが、おそらく円形のプランであったと考えられる。現状で、直径45cm、幅19cmを測る。

出土遺物

1は、土師器環で、復元口径13.2cm、器高3.25cm、復元底径8.2cmを測る。器面調整は、内外面ともクロコナデを施す。底部には、回転糸切り痕を残す。

SP054

円形のプランを持ち、現状で直径30cm、深さ9.5cmを測る。SE155と切り合い関係があり、当遺構の時期は、SE155より新しい。

出土遺物

2は肥前系磁器染付皿である。大橋編年V期の中でも1780～1820年代のもので、蛇の目凹形高台を持つ。復元高台径8.7cmを測る。内面見込み部分に華文と界線、外面は胴部と高台の境に界線が描かれる。高台内には、焼き雜文とされる文字が残る。

SP182

楕円形のプランを持ち、現状で、長さ55cm、幅43cm、深さ46cmを測る。

出土遺物

3は、土師器小杯である。復元底径5.7cmを測る。内面はクロコナデを施し、底部には回転糸切り痕を残す。4は土師器小杯である。復元口径8.8cmを測る。器面調整は、内外面ともクロコナデを施す。

SP186

円形のプランを持ち、現状で直径42cm、深さ40cmを測る。

出土遺物

5は、東播系中世須恵器榴鉢或いはこね鉢である。復元口径25.0cmを測る。第Ⅱ期第2段階(12世紀末葉～13世紀初頭)のものとされる。口縁部は、内外面とも回転コナデを施す。

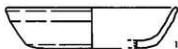
SP236

隅丸方形に近いプランを持ち、現状で長さ43cm、幅35cm、深さ41cmを測る。

出土遺物

6は、土師器小皿で、復元口径7.8cm、器高1.8cm、復元底径6.8cmを測る。器面調整は、内外面ともクロコナデを施し、底部の切り離しは、回転糸切りと考えられる。

SP010



SP054



SP182



SP186



SP236



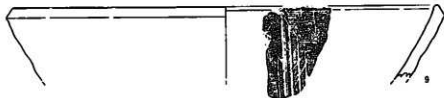
SP315



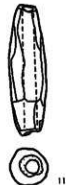
SP414



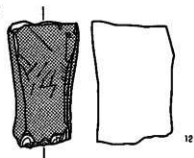
SP456



SP731



SP1029



第51图 A区柱穴遺構出土遺物実測図 SP010・SP054・SP182・SP186・SP236・SP315・SP414・SP456 (1/3)・SP731・SP1029 (2/3)

SP315

円形のプランを持ち、現状で直径29cmを測る。

出土遺物

7は土師器坏で、復元口径13.0cmを測る。器面調整は内外面ともロクロナデを施す。

SP414

楕円形のプランを持ち、現状で長さ42cm、幅30cm、深さ50cmを測る。

出土遺物

8は、土師器小坏で、復元口径7.6cmを測る。器面調整は内外面ともロクロナデを施す。

SP456

円形のプランを持ち、直径35cm、深さ27cmを測る。

出土遺物

9は、瓦質土器繻鉢で、復元口径33.0cmを測る。内面の口縁部は、回転ヨコナデを、その下方は横方向のハケメを施す。外面の口縁部は回転ヨコナデを施し、その下方には指頭圧調整痕が残る。

SP551

当遺構からは、銭貨が出土している。(第V章2参照)

SP731

当遺構は、SP732とSB④のSP149からの削平を受けているが、おそらく円形のプランであったと考えられる。現状で、直径41cm、深さ17cmを測る。

出土遺物

10は、土師質で細形土管形の有孔土罐である。上半と下端付近を欠損している。掛け紐によると考えられる、欠損が下端左側に、裏面の上から下にかけて剥落痕が認められる。外面に網によると推測される若干の擦痕が見られる。11は、土師質で細形紡錘形の有孔土罐である。外面・上下端面にミガキ調整が施されている。また、外面の一部にハケメが認められる。

SP1029

当遺構は、他の遺構に削平され、また調査区外へ展開するため、遺構形状は不明である。

出土遺物

12は幅が狭く、甲高なタイプの天草石製の砥石である。表面・左右側面は磨き整形が施されている。上端・裏面は切断面のままで、若干の擦り切り痕を残す。下端は左側から右側への折れによる欠損が認められる。表面に左上→右下と右上→左下の二方向の研ぎによると考えられる擦痕が見られる。

SP1125

当遺構からは、銭貨が出土している。(第V章2参照)

溝状遺構 (第52図)

溝状遺構は、概ね、以下の3つの群に分けることができる。

A群 SD003・SD018・SD019・SD020・SD023・SD163

B群 SD012

C群 SD221・SD222

D群 SD001・SD021・SD209・SD025・SD026・SD028・SD212・SD205・SD208

以下、群ごとに溝状遺構の報告をおこなう。

A群

SD003 (第53～55図)

SD003は、溝状遺構の僅か一部分を調査したに過ぎないが、大量の近代～中世に渡る遺物を出土した。

出土遺物 (第56・57図)

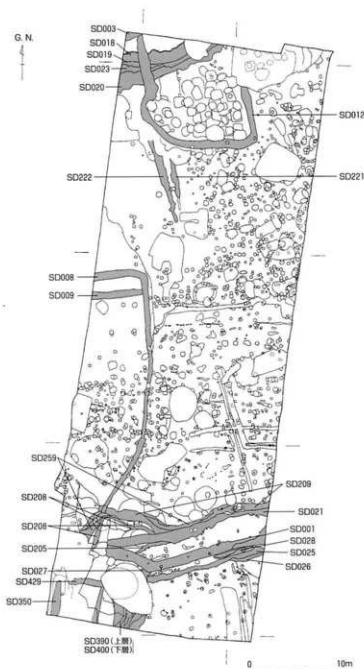
1～3は、土師器小杯である。法量は、それぞれ、1は復元口径7.4cm、器高2.3cm、復元底径5.0cm、2は復元底径6.0cm、3は復元底径7.4cmを測る。4～11は、土師器杯の底部である。法量は、4は復元底径6.8cm、5は復元底径8.4cm、6は復元底径6.8cm、7は復元底径7.8cm、8は復元底径6.8cm、9は復元底径8.8cm、10は復元底径7.4cm、11は復元底径8.0cmを測る。

12は、瓦器碗の口縁部である。復元口径14.8cmを測り、口縁部内外面にのみヘラミガキ調整がおこなわれている。

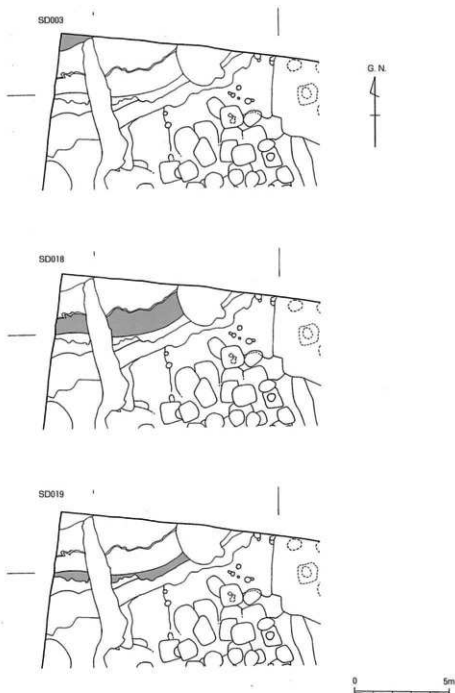
13は、瓦質土器壺である。

14は、龍泉窯系青磁碗である。復元高台径5.2cmを測り、見込み部分に花を意匠としたスタンプ文が施されている。14世紀後半～15世紀代の製品と考えられる。

15～17は、肥前系磁器染付碗である。端反碗で、大橋編年V期に該当し製作年代は1820～1860年代の内、1780～1820年代に比定される。法量は、それぞれ、15は復元口径10.9cm、



第52図 A区溝状遺構配置図 (1/400)



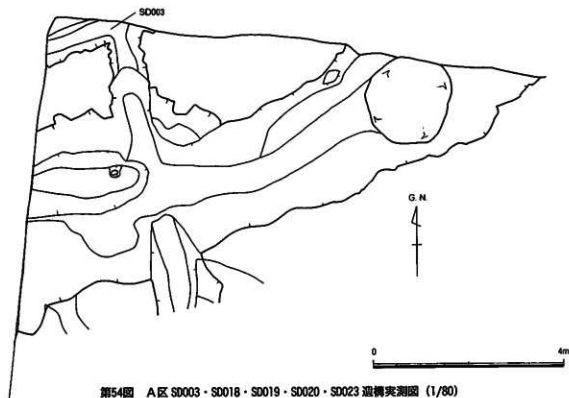
第53図 A区 SD003・SD019・SD020 遺構変遷図 (1/200)

器高5.45cm、復元底径4.4cm、16は復元底径10.7cm、器高5.7cm、復元底径4.3cm、17は復元口径10.9cmを測る。15・16は、ともに外面と見込み部分に斜め格子文が染め付けられ、内底面には蛇ノ目軸ハギと軸着痕が確認される。16には、口縁部内面に格子文が施されている。

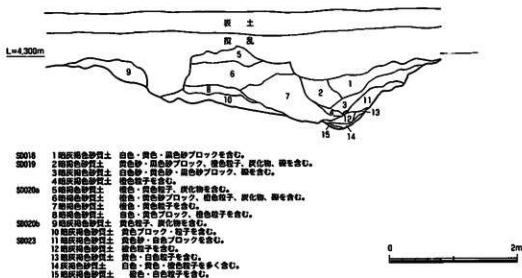
17は、外面に格子と螺、口縁部内面に格子文が染め付けられている。18は、肥前系陶胎染付碗の高台部分である。製作年代は、18世紀前半に比定される。復元底径5.4cmを測る。19・20は、肥前系磁器染付皿である。それぞれ、19は復元口径8.0cm、器高2.3cm、復元底径2.4cm、20は復元口径14.0cm、器高8.6cm、復元底径3.0cmを測り、見込みに「太明」という文字が染め付けられている。19は、大橋編年Ⅱ期に該当し、製作年代は1610～1650年代に比定される。20は、蛇ノ目凹形高台を有する。内面には丸文、外面には唐草文が染め付けられている。大橋編年Ⅴ期

のもので、製作年代は、1780～1860年代の内、1780～1820年代に比定される。21は、瀬戸美濃産染付皿である。製作年代としては、製作年代の上限が1855年に求められる「海文皿」に酷似することから近世末～近代初頭頃に位置付けられる。法量は、復元口径10.35cm、器高1.75cm、復元底径5.9cmを測り、見込み部分に、荒波の上空を飛ぶ鷺を表現したスタンプ文が施されている。22は、肥前系磁器染付蕎麦箸口である。外面に龍を意匠とした文様が、内底面には花文が染め付けられている。法量は、復元口径9.3cm、器高6.2cm、復元底径8.5cmを測る。大橋編年IV期のもので、製作年代は1690～1780年代の内、1690～1740年代に比定される。

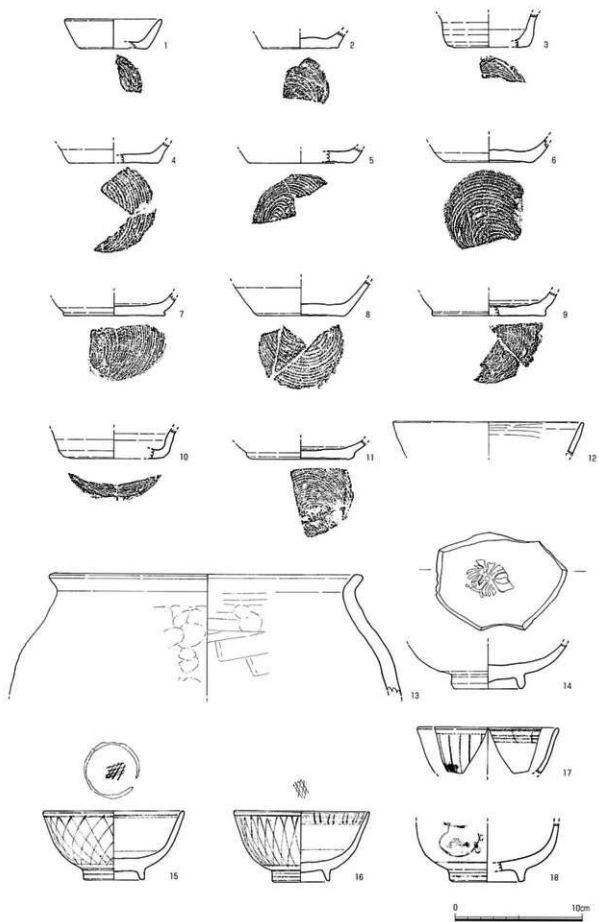
23は、唐津系陶器碗で薬灰釉が施されている。復元口径13.4cmを測る。大橋編年I期のもので、製作年代は、1580～1610年代に比定される。



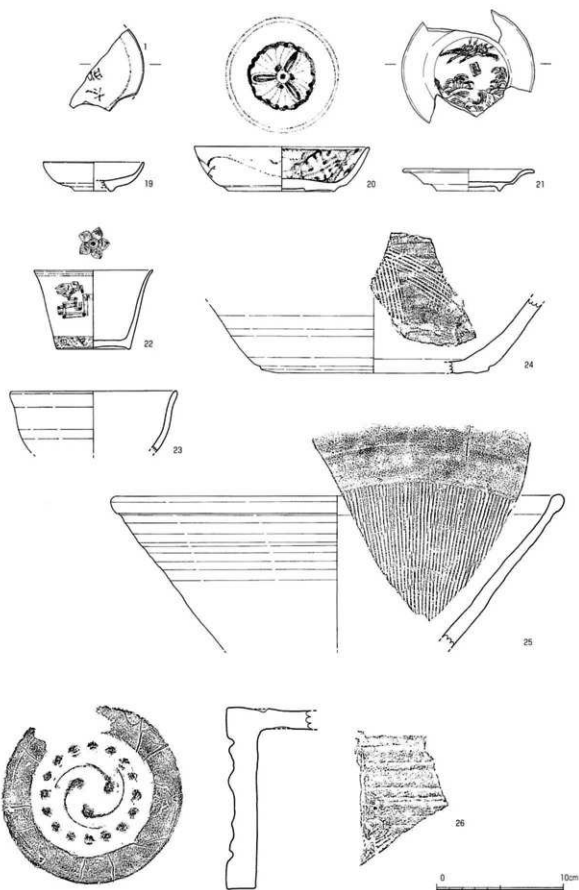
第54図 A区 SD003・SD018・SD019・SD020・SD023 遺構平面図 (1/80)



第55図 A区 SD003・SD018・SD019・SD020・SD023 土層断面図 (1/60)



第56图 A区 S0003 出土遺物実測図① (1/3)



第57图 A区 S0003 出土遺物実測図② (1/3)

24は、備前焼播鉢である。復元口径18.1cmを測る。交差摺り目が確認され、乗岡編年近世1期(16世紀後半～17世紀初頭)に該当する。

25は、唐津系陶器播鉢である。復元口径35.0cmを測る。大橋編年V期のもので、製作年代は、1780～1860年代に比定される。

26は、軒丸瓦である。瓦当部分は、直径14.5cmを測り、3つの巴文の周りを16個の珠文が廻る。内面には、ヘラケズリ痕が残る。

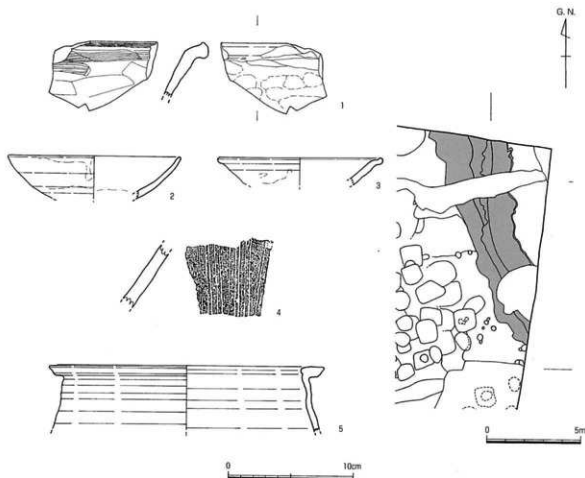
SD018・SD019 (第53～55図)

SD018は、土層断面観察からSD003→SD012→SD018→SD019→SD020→SD023と掘り返しをおこないながら維持されたものであったことが判明した。便宜上、SD018溝状遺構群と総称する。SD019とSD018からは、近世の遺物が少量出土している。或いは、溜池状に改修したものである可能性も考えられる。

SD020 (第59図)

出土遺物 (第58図)

1は、瓦質土器鍋の口縁部である。口縁部は外側に屈曲するタイプで、内面にハケメ調整痕、外面に指頭圧調整痕が確認される。2・3は、唐津系陶器皿である。2は、唐津系陶器溝緑皿で、復元口径13.2cmを測る。大橋編年II期のもので、製作年代は、1600～1650年代に比定される。3は、唐津系陶器銅緑釉皿で、復元口径13.6cmを測る。器面は、灰釉施軸後に銅緑釉を施しており、内底面に蛇ノ目軸ハギをおこなっている。大橋編年III期のもの



第58図 A区 SD020 出土遺物実測図 (1/3)

第59図 A区 SD020 遺構配置図 (1/200)

ので、製作年代は、1650～1690年代に比定される。

4は、丹波産焼締陶器罎鉢で木戸雅寿氏の分類B6類に該当し、製作年代は1570～1580年代頃に比定される。

5は、唐津系陶器甕で、外側に折り返して口縁部を作っている。復元口径は、21.8cmを測る。

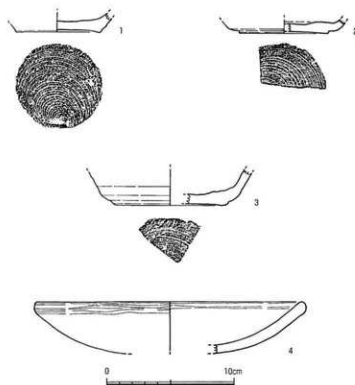
SD023 (第61図)

SD023は、SD018溝状遺構群の中で、最古の層位に位置付けられるものである。遺物は、中世遺物のみによって構成される。当遺構は、SD023溝状遺構群の起源が中世まで遡り得る可能性を示すものであるといえる。

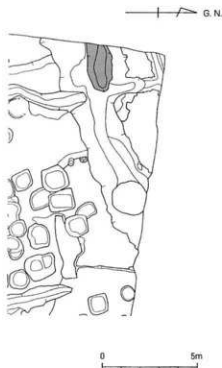
出土遺物 (第60図)

1～3は、土師器坏の底部である。それぞれ、1は6.7cm、2は7.0cm、3は8.8cmの復元底径を測る。

4は、瓦質土器火鉢である。口縁部内外面に、ミガキ風のケズリ調整が施されている。



第60図 A区SD023出土遺物実測図 (1/3)



第61図 A区SD023遺構配置図 (1/200)

B群

SD012 (第62図)

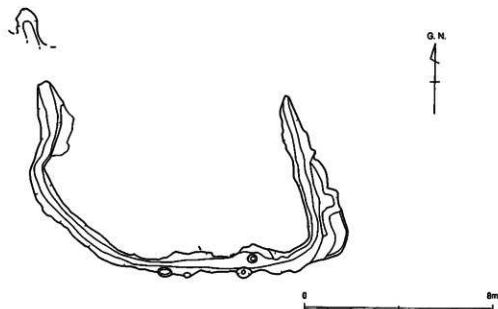
墓域を画するように、「コ」の字状に廻る溝状遺構である。比較的新しい墓域に関しては、逆に、溝に規制を受けて墓域列が形成されている。

出土遺物 (第63図)

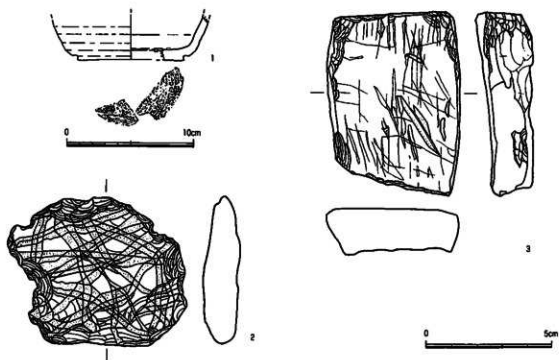
1は、土師器坏の底部である。復元底径8.8cmを測る。

2は、結晶片岩製の石錘である。扁平な剥片を素材にしている。まず、上・左・下側縁に折断による整形を為し、次いで、表裏面に面的な調整を施し、上端に裏面から、右側縁に表面から整形のための二次加工を行なっている。掛け紐によると考えられる。表裏面に右上-左下、左上-右下の2方向の浅い窪み、上端右端、左側縁中央、右側縁上半部に半円状の欠損、上端中央・左右側縁の半円状の欠損の周辺に薄い剥落が看取される。3は、結晶片岩

製の砥石である。下半は欠損しており、裏面は剥落している。上端は擦り切り面が、左側面は折断面が残る。右側面は大部分に磨き整形を施しているが、一部磨き残しており、整形痕が残存する。表面は磨き整形されており、研ぎによると推測される縦横及び左上-右下の3方向の擦痕が顕著に看取される。



第62図 A区 S0012 遺構実測図 (1/160)



第63図 A区 S0012 出土遺物実測図 (土器 1/3、砥石・石鏝 2/3)

C群

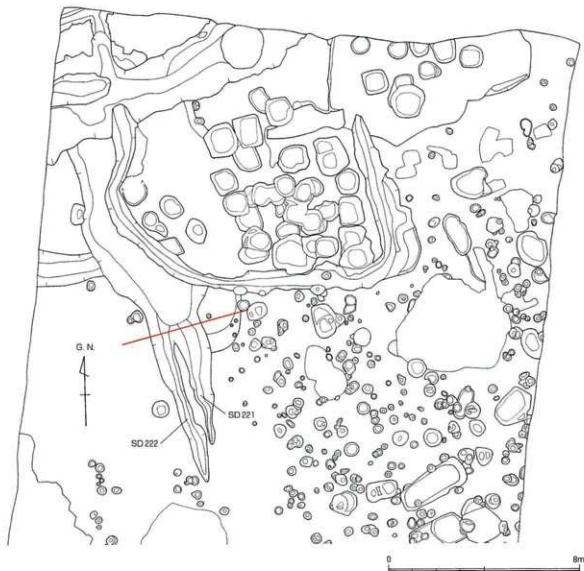
SD221 (第64・65図)

SD221は、SX260に取り付く水路である。溝状遺構は、方位N-14°-Wの掘立柱建物群と方位を同一にし、本来は途切れることなく建物群の背後を区画していたと考えられ、背割り溝的な機能も果たしていたと考えられる。
出土遺物 (第66図)

1～7は、土師器・皿類である。2～5・7は、底部に回転糸切り痕を残す。1は、小皿である。器高1.8cmを測り、底部の厚みは1cmを測る。2は、底径4.2cmを測る。3は、復元底径5.3cmを測る。4は、復元口径9.2cm、器高2.3cm、復元底径7.1cmを測る。口縁部に一段強いナデが施される。6・7は、坏である。6は、復元底径6.0cmを測る。7は、復元口径12.6cm、器高2.65cm、復元底径8.9cmを測る。

8・9は、瓦器碗である。8は、内面にミガキ調整が施され、口縁端部は外側に屈曲する。9は、瓦器碗の底部で、復元高台径5.4cmを測る。高台部分は、貼り付け高台である。東国東型瓦器碗のⅡ型式に該当し、13世紀前半前後頃の所産であると考えられる。

10は、土師質土器鍋である。復元口径28.0cmを測り、内面には、ハケメ調整痕が観察される。



第64図 A区 SD221・SD222遺構実測図 (1/160)

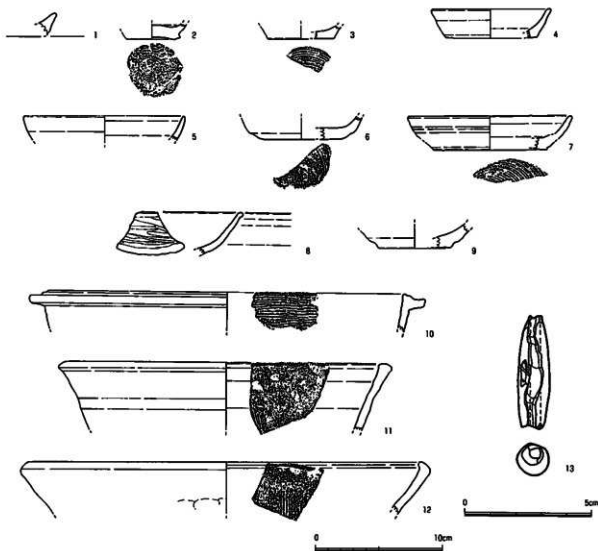
L=4.400m



- | | | |
|-------|----------|------------------|
| SD21 | 1 暗褐色砂質土 | 黄褐色砂ブロック、炭化物を含む。 |
| | 2 暗褐色砂質土 | 黄褐色砂ブロック、炭化物を含む。 |
| | 3 暗褐色砂質土 | 黄褐色砂ブロック、炭化物を含む。 |
| SD22 | 4 暗褐色砂質土 | 黄褐色砂ブロック、炭化物を含む。 |
| | 5 暗褐色砂質土 | 黄褐色砂ブロック、炭化物を含む。 |
| SD260 | 6 暗褐色砂質土 | 黄褐色砂ブロック、炭化物を含む。 |
| | 7 暗褐色砂質土 | 黄褐色砂ブロック、炭化物を含む。 |
| | 8 暗褐色砂質土 | 黄褐色砂ブロック、炭化物を含む。 |

0 1m

第65図 A区 SD21・SD22・SX260 土層断面図 (1/40)



第66図 A区 SD221 出土遺物実測図 (土層 2/3、他 1/3)

11・12は、瓦質土器揃鉢である。それぞれ、口縁端部はツمام上げ状に内湾する。11は、復元口径24.3cmを測り、外面に指頭圧調整痕が観察される。内面には、摺り目が施されている。12は、復元口径30.6cmを測り、外面に指頭圧調整痕が、内面にハケメ調整痕が観察される。内面には、4条で一単位の摺り目が施されている。

13は、土師質で細形紡錘形の有孔土罐で上下端を若干欠損している。掛け紐によると考えられる、若干の剥落が上端付近に、圧痕が表面中央の上から下にかけて認められる。また、外面に網と推測される擦痕が見られる。

D群 (第67図)

D群溝は、方位N-76°-Eにおいて重複関係が見受けられ、自然地形或いは人為的な地割りに規制を受けた点が考えられる。前述方位は、掘立柱建物群の方位N-14°-Wと直交する方位軸である点に注目すべきである。明治初頃の地図図を参照すると、溝状遺構の検出された位置は、水田境に照合することが判明する。したがって、少なくとも近世段階に用水路や道に伴う溝であった可能性が指摘される。しかし、同軸に乗る遺構に、SD025・SD026・SD028など中世に遡る遺構も確認されており、掘立柱建物跡群との関係を考慮する必要がある。

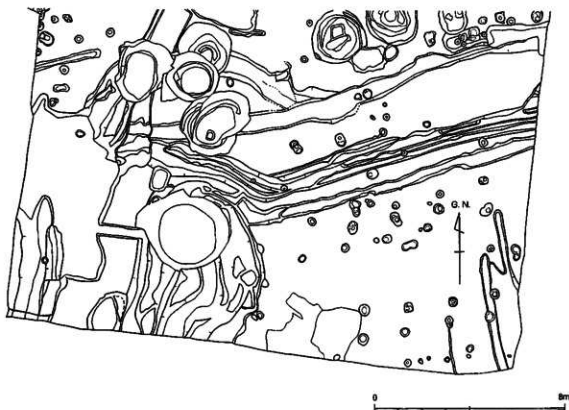
また、SD121とSD212間は、遺構密度が低く、井戸遺構が形成される以前は道路遺構であった可能性がある。

SD001 (第69図)

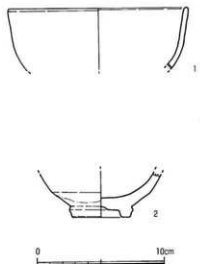
SD001は、近・現代遺物を出土し、同時期の遺物を含むSE380を回避するように屈曲する溝状遺構である。

出土遺物 (第68図)

遺物は、近・代遺物を含むが近世以前のものを選んで掲載している。1・2ともに唐津系陶器碗である。1は、口縁部で復元口径11.8cmを測る。大鶴編年Ⅲ期のもので、製作年代は、1650～1690年代に比定される。2は、高台部で復元底径4.5cmを測る。大鶴編年Ⅱ期のもので、製作年代は、1600～1650年代に比定される。



第67図 A区 SD001・SD025・SD026・SD028・SD021・SD205・SD208・SD209 遺構実測図 (1/160)



第68図 A区 SD001 出土遺物実測図 (1/3)

SD025 (第70図)

SD025は、D群の中でも最も南側に位置する溝状遺構である。

出土遺物 (第71図)

1は、土師器小皿で、復元口径7.6cm、器高1.8cm、復元底径6.1cmを測る。2～7は、土師器杯である。それぞれ、2は復元口径11.1cm、器高2.55cm、復元底径7.7cm、3は復元口径11.0cm、器高2.85cm、復元底径8.0cm、4は復元口径11.4cm、器高2.65cm、復元底径9.0cm、5は復元口径13.6cm、器高3.15cm、復元底径9.6cm、6は復元口径9.2cm、7は復元口径12.0cmを測る。8は、土師器小皿で、復元口径10.2cmある。

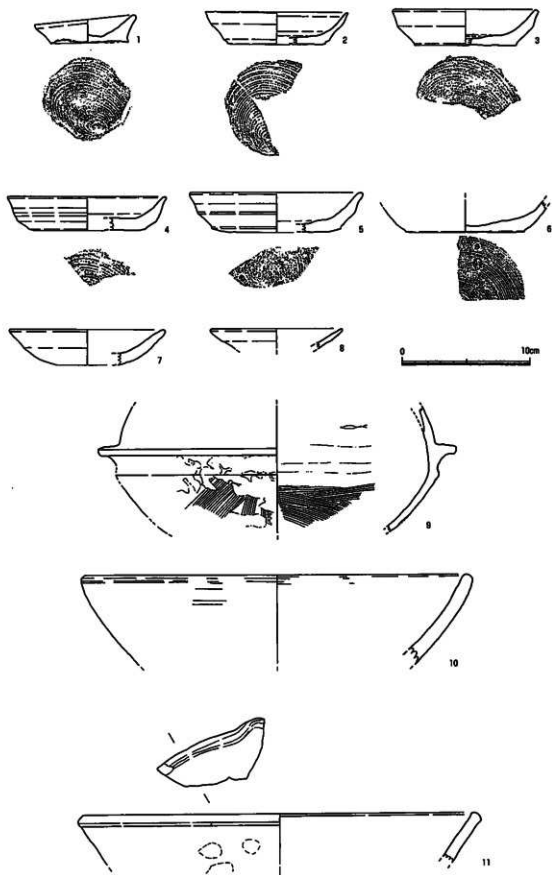
9～11は、瓦質土器である。9は、瓦質土器茶釜で、最大径28.2cmを測る。器面の内外面には、体部下半にハケメ調整痕が確認される。体部上半外面には、ヘラミガキ調整が施されていたと考えられる。鈔以下の二次焼成が激しいため、おそらくは鉄製の鑪などを使用して用いられたと考えられる。10は、瓦質土器火鉢で、復元口径30cmを測る。口縁部内外面に、ヘラミガキ調整痕が確認される。11は、瓦質土器のこね鉢で、復元口径30.7cmを測る。体部外面には、指頭圧調整痕が確認される。



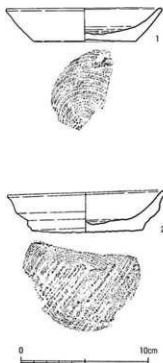
第69図 A区 SD001 遺構配置図 (1/200)



第70図 A区 SD025 遺構配置図 (1/200)



第71图 A区 S0025 出土器物类器图 (1/3)



第72図 A区 SD026 出土遺物実測図 (1/3)



第73図 A区 SD026 遺構配置図 (1/200)

SD026 (第73図)

SD026は、SD025の下層遺構で、あまり時期差がないものと考えられる。

出土遺物 (第72図)

土師器の坏が2点出土している。法量は、それぞれ、1は復元口径12.0cm、器高2.7cm、復元底径8.1cm、2は復元口径12.3cm、器高3.1cm、復元底径8.7cmを測る。ともに、内底面に回転クロナデ調整痕をよく残し、底部には回転糸切り調整痕を残す。2には、口縁部に強い一段ナデが施され、底部には板状圧痕が確認される。

SD028 (第74図)

SD028は、SD025完掘後に検出される遺構である。遺物は、出土しなかったが層位により、中世の所産であることは間違いない。



第74図 A区 SD028 遺構配置図 (1/200)

SD021 (第75・76図)

SD021は、方位N-14°-Wの掘立柱建物群と方位を同一にし、土層断面観察から、北側の溝とSD021→SD205→SD208→SD209という順に切り合い関係にある。元来、蛇行する溝状遺構であったものが掘り返しをおこないながら維持され、SD021の時期に直線的に改修されたものと考えられる。

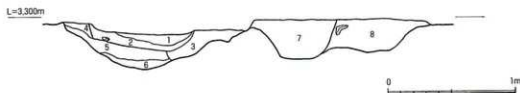
出土遺物 (第77図)

1・2は、瓦質土器である。1は、瓦質土器鍋である。復元口径22.4cmを測る。羽釜の形状を採り、鉄製の鋳等を用いて使用されたものと考えられる。2は、瓦質土器壺である。復元口径29.1cmを測る。

3は、肥前系磁器染付碗で、復元口径12.0cmを測る。大橋編年Ⅳ期のもので、製作年代は、1690～1780年代に比定される。4は、信楽系陶器碗で、復元口径11.2cmを測る。器面全体に灰釉を施し、口縁部にのみ緑釉を施す。製作年代は、18世紀後半頃に比定される。5は、唐津系陶器器手碗の高台部分で、復元底径4.8cmを測る。大橋編年Ⅲ期のもので、製作年代は、1650～1690年代に比定される。6は、唐津系陶器皿の高台部分で、復元高台径5.0cmを測る。内底面に砂目積みの痕跡を残す。大橋編年Ⅱ期のもので、製作年代は、1610～1650年代に比定される。

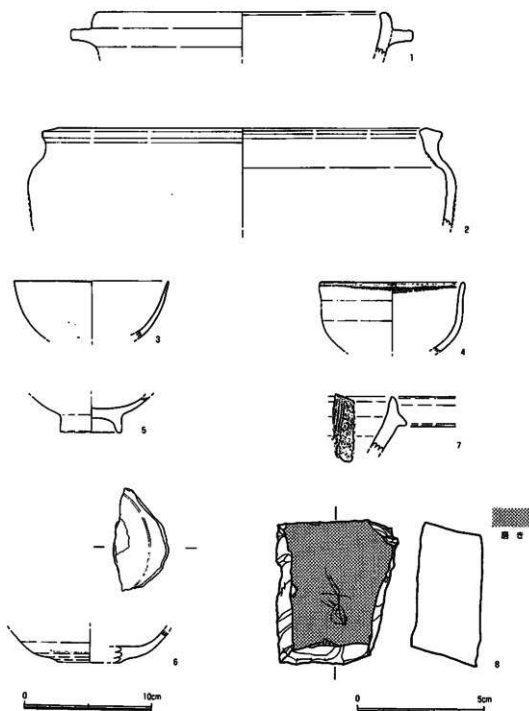


第75図 A区 SD021 遺構配置図 (1/200)



- | | | |
|-------|----------|-------------------|
| SD021 | 1 黄褐色砂質土 | 褐色砂質土ブロック、鉄分を含む。 |
| | 2 褐色砂質土 | 鉄分を含む。 |
| | 3 褐色砂質土 | 鉄分を含む。 |
| SD205 | 4 褐色砂質土 | 鉄分を含む。 |
| | 5 褐色砂質土 | 鉄分を含む。 |
| | 6 灰色砂質土 | 白黄色砂質土を含む。 |
| SD208 | 7 褐色砂質土 | 黄褐色砂質土を含む。 |
| SD259 | 8 褐色砂質土 | 黄褐色砂質土、黄褐色砂質土を含む。 |

第76図 A区 SD021・SD205・SD209・SD259 土層断面図 (1/30)



第77図 A区 S0021 出土遺物実測図 (砥石 2/3・他 1/3)

7は、備前焼掘鉢の口縁部である。乗興編年中世40期(15世紀前半)に比定される。

8は、安山岩製の砥石である。表面にのみ磨き整形が施され、若干の擦痕が見られる。上下端面・左側面・裏面は分割面である。右側縁は欠損している。また、表面には焼けによる赤化が認められる。

SD205 (第78・79図)

SD001に削平され、SE097・SE230を削平して、東西に流れる溝状遺構である。

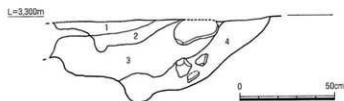
出土遺物 (第80図)

遺物は中世遺物で構成される。1・2は、瓦質土器である。本来は、同一個体であったと考えられるが、接合関係は、確認できなかった。

1は、瓦質土器火鉢の口縁部で復元口径36.0cmを測る。口縁部内面に工具によるナデ上げ痕が確認される。突帯の間にスタンプによる蔵手文が施されている。2は、脚付の瓦質土器火鉢底部ある。1と同様、突帯間にスタンプによる蔵手文が施されている。復元底径34.0cmを測る。

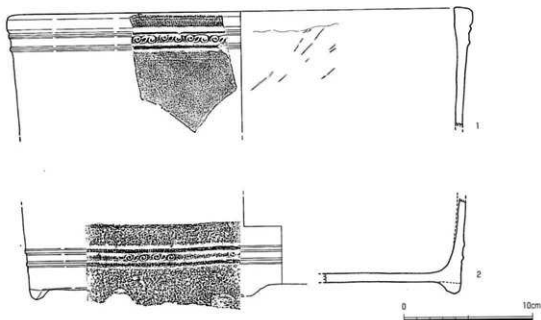


第78図 A区 SD205 遺構配置図 (1/200)



第79図 A区 SD021・SD205 土層断面図 (1/20)

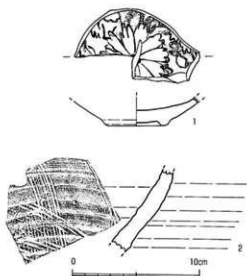
- | | | |
|-------|----------|----------------------------|
| SD021 | 1 暗褐色砂質土 | 黒褐色・白色・暗灰褐色砂質土ブロックを含む。 |
| | 2 黄色砂 | 暗褐色砂質土ブロック、橙色砂粒を含む。 |
| | 3 暗褐色砂質土 | 赤褐色砂質土ブロック、黄色砂粒を含む。 |
| SD205 | 4 黒褐色砂質土 | 白色・黄色・橙色砂質土ブロックを特に下部に多く含む。 |



第80図 A区 SD205 出土遺物実測図 (1/3)

SD208 (第82図)

SE097・SE230を避けるように屈曲する溝状遺構である。最終的には、SD350・353に取り付くように排水もしくは貯水されたものと考えられる。



第81図 A区 SD208 出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第81図)

遺物としては、最新のものとして近世陶磁器が出ている。1は、肥前系磁器染付皿で、内底面に菊花文が染め付けられる。大橋編年Ⅱ期のもので、製作年代は、1610～1650年代に比定される。復元高台径5.0cmを測る。

2は、備前焼掘鉢の体部が出土している。交差折り目が確認され、乗岡編年近世Ⅰ期(16世紀後半～17世紀初頭)に該当する。

SD209 (第83・85図)

出土遺物 (第84図)

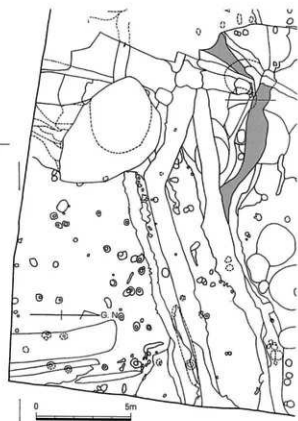
1～3は、瓦質土器である。1は、瓦質土器鉢で復元口径21.5cmを測る。外面に指頭圧調整痕、内面にはハケメ調整痕を残す。2は、瓦質土器火鉢であると考えられる。復元口径は、27.4cmを測る。3は、瓦質土器掘鉢の体部である。内面には、5条一単位の折り目が施されている。

4は、龍泉窯系青磁碗の高台部分で、復元高台径6.8cmを測る。5は、中国産の青磁であると考えられるが、器種は不明である。復元底径8.2cmを測る。

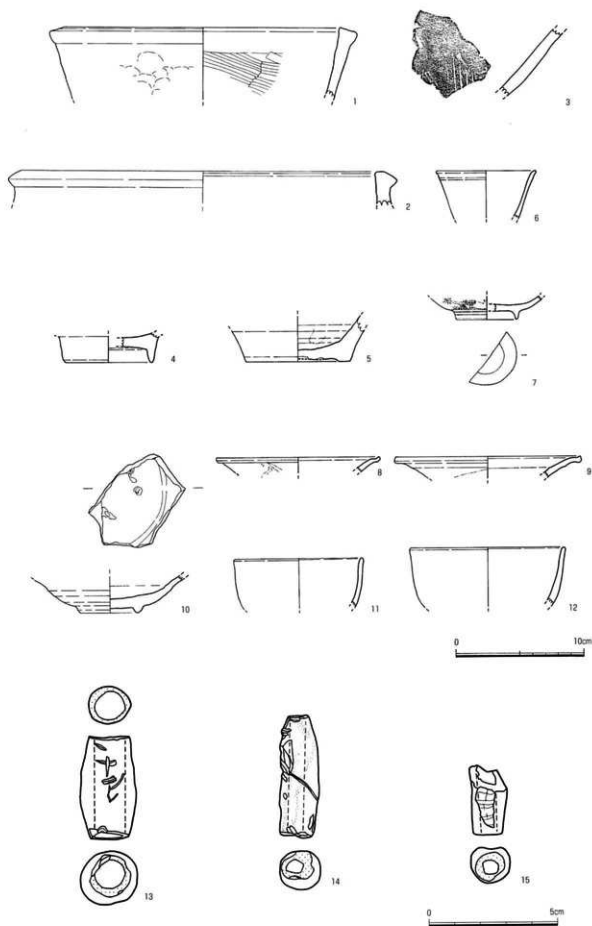
6・7は、肥前系磁器である。6は、肥前系白磁



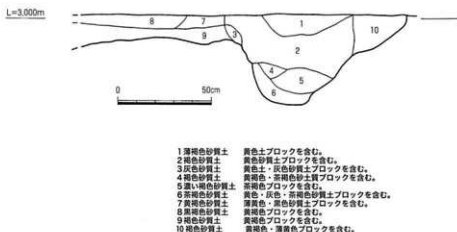
第82図 A区 SD208 遺構配置図 (1/200)



第83図 A区 SD209 遺構配置図 (1/200)



第84图 A区 SD209 出土遺物実測図 (土鍾 2/3、他 1/3)



第85図 A区 SD209 土層断面図 (1/20)

小杯で、復元口径7.7cmを測る。大橋編年IV期のもので、製作年代は、1690～1780年代に比定される。7は、肥前系磁器染付碗で、復元高台径4.7cmを測る。大橋編年IV期のもので、製作年代は1690～1780年代の内、1690～1740年代に比定される。

8～10は、唐津系陶器皿である。8・9は、唐津系陶器溝縁皿の口縁部である。それぞれ、8は復元口径11.9cm、9は復元口径14.4cmを測る。大橋編年II期のもので、製作年代は、1600～1650年代に比定される。10は、唐津系陶器皿の高台部分である。内底面には、胎土目積み痕跡を残す。大橋編年I期のもので、製作年代は、1580～1610年代に比定される。11・12は、唐津系陶器碗である。それぞれ、11は復元口径10.0cm、12は復元口径11.9cmを測る。大橋編年III期のもので、製作年代は、1650～1690年代に比定される。

13～15は、土鍾である。13は、土師質・太形短形で、やや紡錘形を呈する有孔土鍾。上下端面にミガキ調整が施されている。外面に網によると推測される若干の擦痕が見られる。また、上よりの刻みは「十」ないしは「十一」と彫り込んだ可能性がある。14は、土師質で細形土管形の有孔土鍾。外面に網によると考えられる擦痕多く、同様の剥落も見られる。掛け組によると推察される、欠損が上端左側に、圧痕が右上から左下にかけて認められる。上下端面にミガキ調整が施されている。15は、土師質で細形土管形の有孔土鍾。上半を欠損している。表面中央部



第86図 A区 SD212 遺構配置図 (1/200)

には欠損前の、掛け紐によると推測される剥落が認められる。下端面はミガキ調整が施されている。

SD350・SD353 (第87・88図)

SD353埋没後、SD350を踏襲する形で掘り返したと思われる。近・現代の遺物が出土するSE380からSD429を通じて給水を受けていた溜池の溝状遺構であると考えられる。大在地区は、農業用水の便が悪く最近まで「長池」と呼ばれる多くの溜池が機能していたと伝えられ、当遺構もこの「長池」に該当するものと考えられる。溝底からは、大量の梅の種が検出されている。

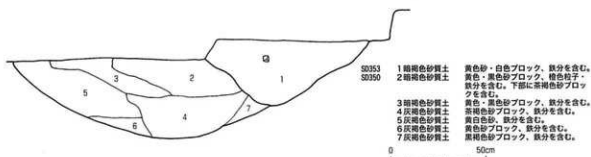
出土遺物 (第89図)

1は、SD353出土肥前系磁器染付丸碗である。大橋編年Ⅴ期に該当し、製作年代は、1780～1860年代に比定される。



第87図 SD350・SD353 遺構配置図 (1/200)

L=3,400m



第88図 A区 SD350・SD353 土層断面図 (1/20)



第89図 A区 SD353 出土遺物実測図 (1/3)

SD400 (第90図)

SD400は、僅かな部分しか調査できていないので、機能の特定には至らないが、版築状の埋め立て地業が確認されており、可能性としては溝状遺構であったものが埋め立て後、道路遺構として機能したものと考えられている。

出土遺物 (第91図)

1・2は、肥前系青磁盤で波佐見の製品であると考えられる。九州陶磁 (中野) 編年Ⅲ～Ⅳ期のもので、製作年代は、1630～1680年代に比定される。

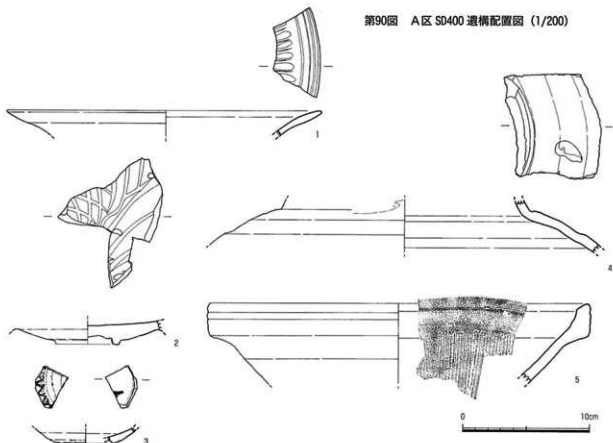
3は、中国産染付皿で、高台部は基筒底状を呈し、小野分類C群に該当し、15世紀後半頃に比定される。

4は、唐津系陶器壺で大橋編年Ⅰ期に該当する。内面には、同心円タタキ痕が確認され、製作年代は1580～1610年代に比定されるものである。

5は、備前焼掘鉢の口縁部である。乗岡編年近世3期 (17世紀後半～18世紀前半) に比定される。



第90図 A区SD400遺構配置図 (1/200)



第91図 A区SD400出土遺物実測図 (1/3)

井戸遺構 (第92図)

大在地区は、砂丘列地形であるため、遺構面は砂質土上に形成される。砂質土は、保水力が弱く、本来は水田耕作には向かないが、この地区に住まう人々は、長年、井戸や溜池を作ることによって、生活用水を得ていたことが伝えられている。実際、A区からは、実に17基もの井戸遺構が確認されている。

A区において①井戸枠が竹組みの井戸(近・現代)、②井戸枠は川原石を乱積みにし、集水施設には凝灰岩製の五輪塔や宝篋印塔といった石塔材を転用するもの、③集水施設に近隣で採取される結晶片岩の板石を用いたもの、④井戸枠・集水施設ともに石塔材を転用するもの、⑤井戸枠は川原石を乱積みにし、集水施設には曲げ物を使用するもの、⑥掘形が円筒状の断面形状を呈する素掘り井戸、⑦掘形がロート状の断面形状を呈する素掘り井戸、⑧掘形が露天掘り状の断面形状を呈する素掘り井戸、⑨掘形が逆台形状の断面形状を呈する素掘り井戸などが確認されている。

SE380 (第93図)

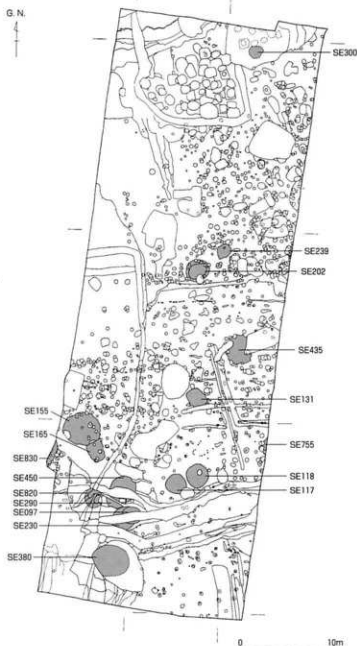
SE380は、竹組みの井戸遺構である。遺物としては、近・現代の遺物を含むため、この時期の所産であると考えられる。井戸底からは、竹を用いた井戸枠が検出されている。

SE380に取り付け溝状のSD429内には、鉄製のボルトで固定された木片が検出されている。このボルトと木片は、用水ポンプの設置痕跡であると考えられ、当遺構は近・現代まで使用された農業用の野井戸であったと考えられる。

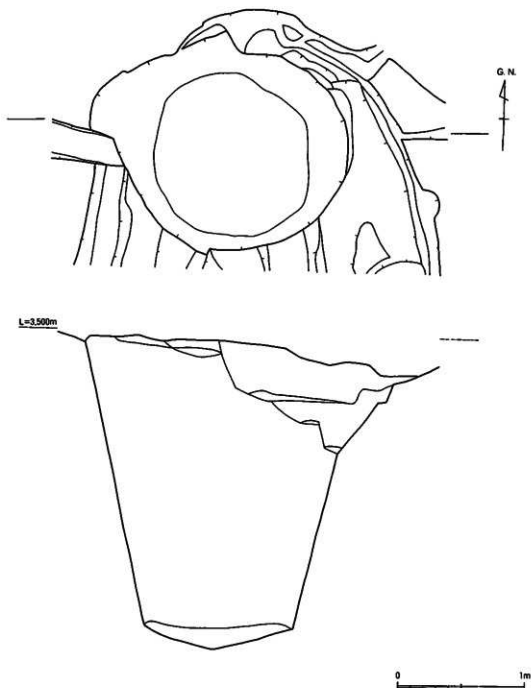
出土遺物 (第94図)

出土遺物は、近・現代を除いた近世以前の遺物を掲載した。1～6は、肥前系磁器染付である。1～3は、碗である。1は、外面に染付けが施されている。復元口径9.3cmを測る。大橋編年Ⅱ期のもので、製作年代は1610～1650年代に比定される。

2は、くらわんか碗の高台部分である。復元高台径5.1cmを測る。見込み部分にコンニャク印判による五弁花文が染付けられている。大橋編年Ⅳ期のもので、製作年代は、1690～1780年代の内、18世紀後半に比定される。3は、端反碗の口縁部である。復元口径11.0cmを測る。外面



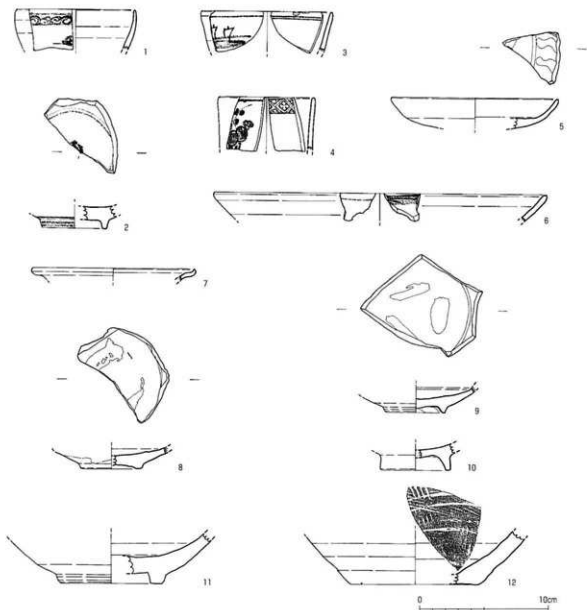
第92図 A区井戸遺構配置図 (1/400)



第93図 A区 SE380 遺構実測図・断面見通し図 (1/30)

に帆掛け舟の文様が染め付けられている。大橋編年Ⅴ期に該当し、製作年代1780～1860年代の内、1820～1860年代に比定される。4は、筒形碗の口縁部である。復元口径7.4cmを測る。外面に草花文、内面に四方椿文が染め付けられている。大橋編年Ⅴ期に該当し、製作年代1780～1860年代の内、1780～1820年代に比定される。5・6は、肥前系磁器染付皿である。5は、ロクロ挽き後、型押し成形が施されている。復元口径12.9cmを測る。6は、復元口径26.0cmを測る。5・6ともに、大橋編年Ⅱ期に該当し、製作年代は、1610～1650年代に比定される。

7～11は、唐津系陶器皿である。7は、清緑皿の口縁部である。復元口径12.6cmを測る。8・9は、砂目積み段階の皿の高台部分である。それぞれ、8は復元高台径4.3cm、9は復元高台径4.6cmを測る。7～9は、大橋編年Ⅱ期のもので、製作年代は、1610～1650年代に比定される。10は、呉器手碗の高台部分である。復元高台径



第94図 A区 SE380 出土遺物実測図 (1/3)

5.3 cmを測る。大橋編年Ⅱ期のもので、製作年代は、1610～1650年代に比定される。11は、鉢の高台部分である。復元高台径7.8 cmを測る。大橋編年Ⅱ期のもので、製作年代は、1610～1650年代に比定される。

12は、備前焼揃鉢の底部である。復元底径9.9 cmを測る。内面に、交差摺り目が確認され、乗岡編年近世Ⅰ期(16世紀後半～17世紀初頭)に該当する。

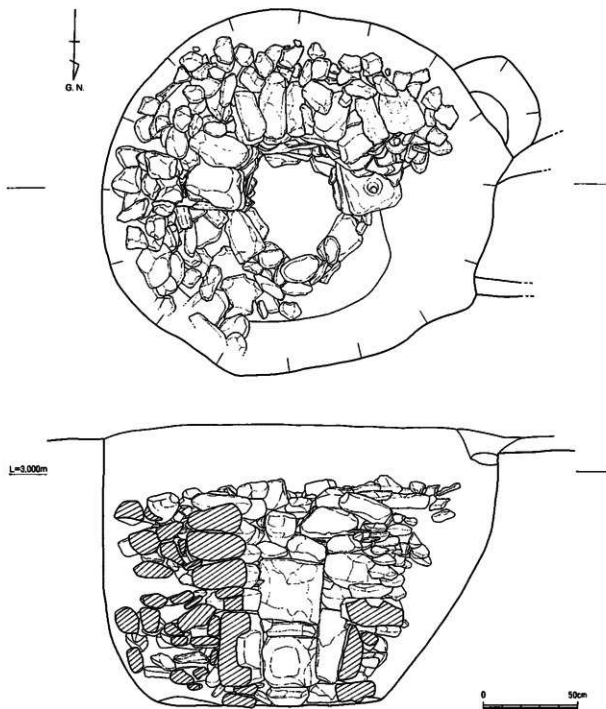
SE097 (第95図)

SE097は、井戸枠は川原石を乱積みに、集水施設には凝灰岩製の五輪塔や宝篋印塔・石幢といった石塔材を転用し組み合わせて構築した井戸遺構である。最下位は、平らな川原石でレベリングをおこなっていた。

出土遺物 (第96～101図)

1・2は、土師器坏である。1は、口縁部で復元口径12.0 cmを測り、2は底部で復元底径8.5 cmを測り、回転系切り痕を残す。3は、瓦器碗の底部である。回転系切り痕を残し、高台は貼り付け高台である。復元高台径6.4 cmを測る。東国東型瓦器碗のⅡ型式に該当し、13世紀前半前後頃の所産であると考えられる。

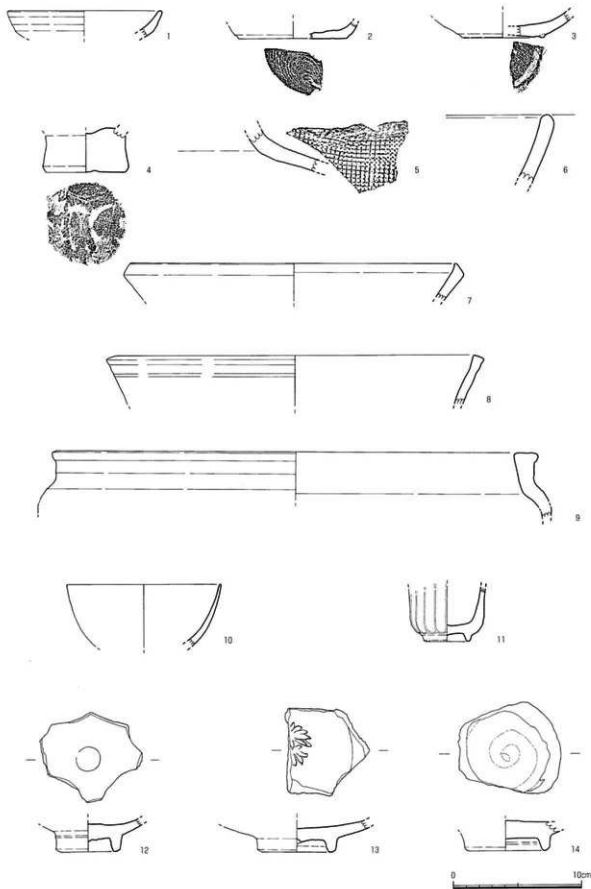
4は、土師質の燭台形土器である。底部は、復元底径6.2 cmを測り、回転系切り痕を残す。



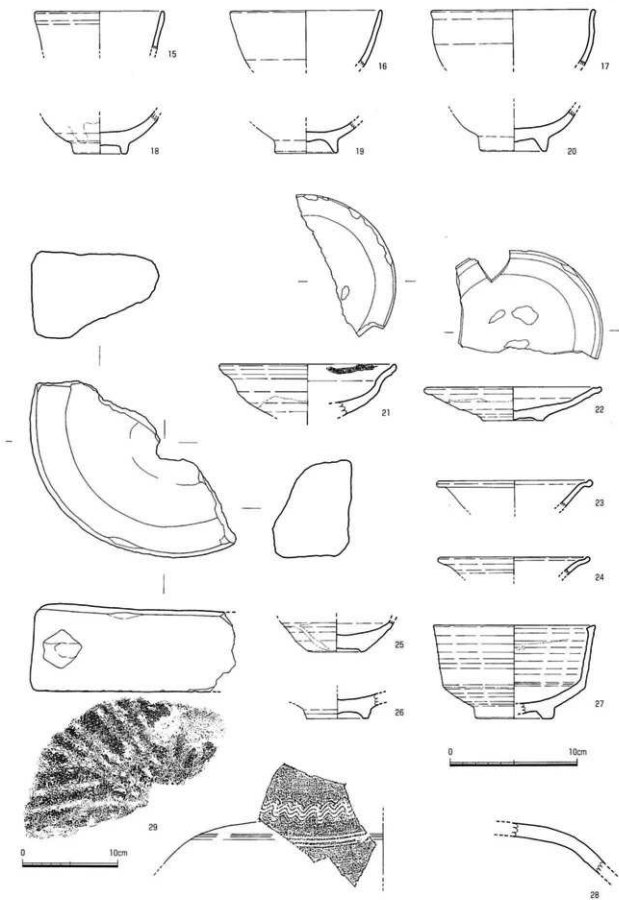
第95図 A区 SE097 遺構実測図・断面見通し図 (1/20)

5～9は、瓦質土器である。5は、瓦質土器甕である。外面に、格子目状のタタキ痕を残す。6は、瓦質土器火鉢である。7・8は、瓦質土器鍋である。それぞれ、7は復元口径25.4cm、8は復元口径28.0cmを測る。9は、瓦質土器壺である。復元口径37.4cmを測る。

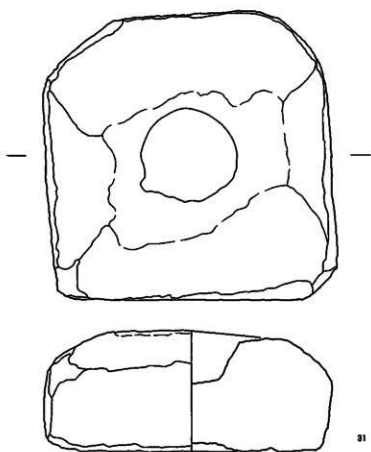
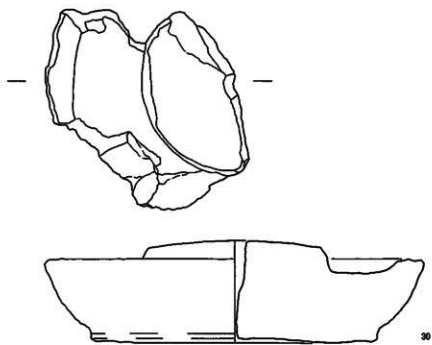
10・11は、肥前産磁器である。10は、白磁碗で、復元口径12.1cmを測る。大崎縄文中期のもので、製作年代は、1650～1690年代に比定される。11は、瑠璃釉碗である。復元口径3.4cmを測る。外面に縦彫り装飾を施した後、



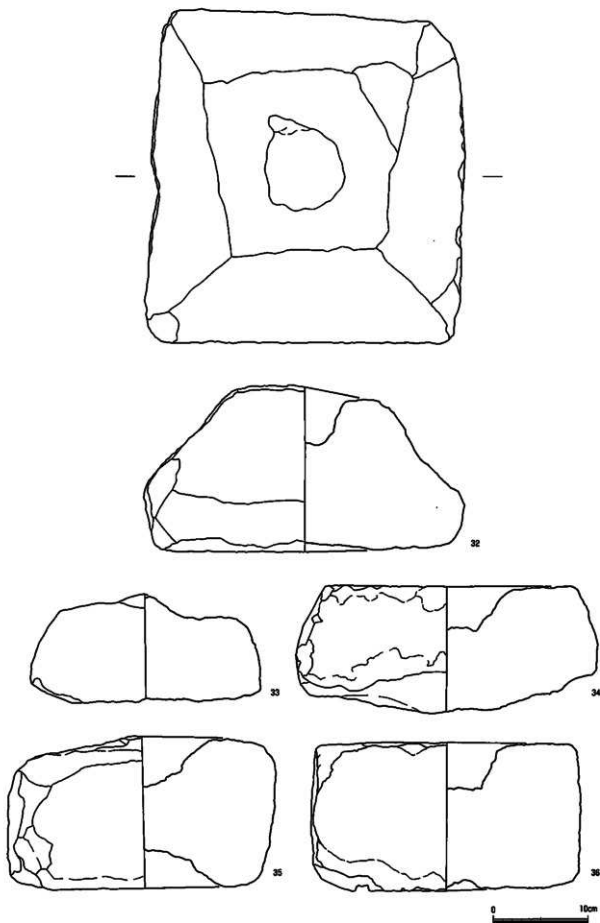
第96图 A区 SE097 出土遺物実測図① (1/3)



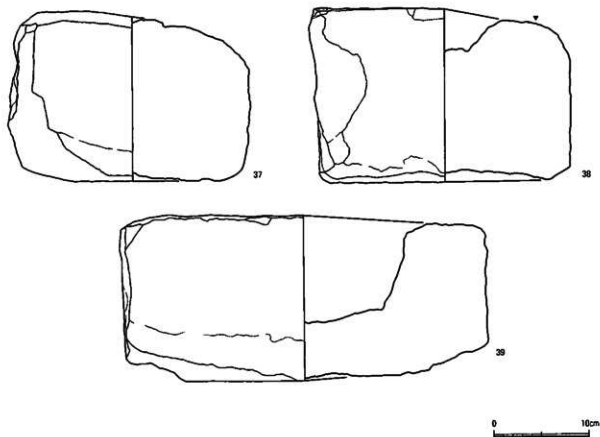
第97图 A区 SE097 出土遗物实测图② (石白 1/4、他 1/3)



第98图 A区 SE097 出土遺物実測図③ (1/4)



第99图 A区 SE097 出土遗物夹测图④ (1/4)



第100図 A区 SE097 出土遺物実測図⑤ (1/4)

磨瑯軸を施してある。大橋編年Ⅱ期に該当し製作年代としては1610～1650年代の内、Ⅱ-Ⅰ期1610～1630年代に比定される。

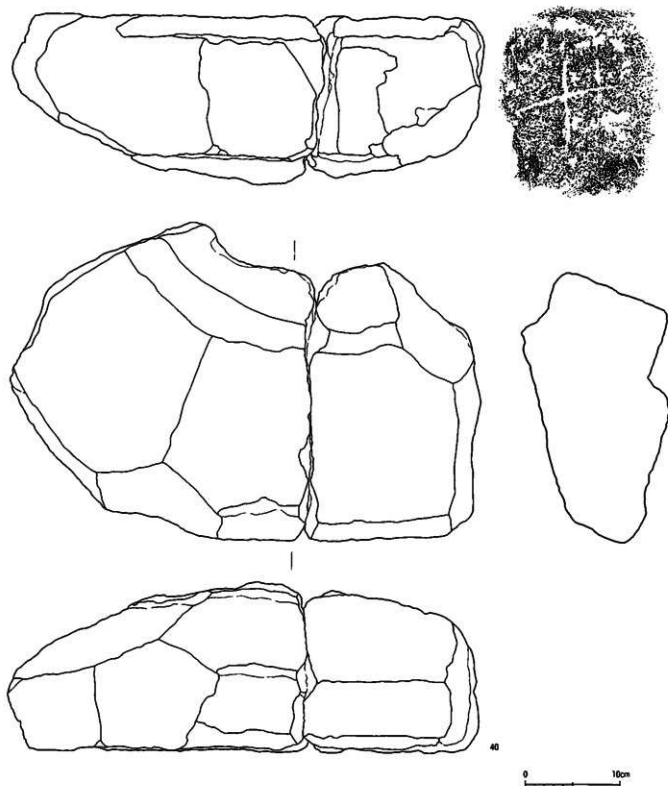
12～14は、龍泉窯系青磁碗である。それぞれ、12は高台径5.1cm、13は高台径6.2cm、14は高台径6.0cmを測る。12・14の内面見込み部分には、顕著にロクロ目が残されている。13の内面見込み部分に、花のスタンプ文が施されている。いずれも、14世紀後半～15世紀代の製品と考えられる。

15～27は、唐津系陶器である。15～20は、唐津系陶器碗である。15～17は、口縁部で、それぞれ、15は復元口径10.0cm、16は復元口径12.0cm、17は復元口径12.6cmを測る。18～20は高台部である。18は復元高台径4.2cm、19は復元高台径4.8cm、20は復元高台径5.0cmを測る。15は、大橋編年Ⅰ期に該当し製作年代としては1580～1610年代の内、Ⅰ-Ⅱ期1594～1610年代に比定される。16～20は、大橋編年Ⅱ期のもので、製作年代は、1610～1650年代に比定される。21～26は、唐津系陶器皿である。21は、唐津系陶器鉄絵皿で、復元口径14.0cmを測る。大橋編年Ⅰ期に該当し製作年代としては1580～1610年代の内、Ⅰ-Ⅱ期1594～1610年代に比定される。22～24は、唐津系陶器清緑皿である。大橋編年Ⅱ期のもので、製作年代は、1610～1650年代に比定される。25・26は、唐津系陶器皿の高台部分である。25は、基筒底状を呈し、高台径3.6cmを測る。胎土目積み段階に比定され、大橋編年Ⅰ期に該当し製作年代としては1580～1610年代の内、Ⅰ-Ⅱ期1594～1610年代に比定される。27は、銅緑軸を施した灰入れである。内面は、口縁部を除いて無軸である。法量は、復元口径12.6cm、器高7.3cm、高台径5.9cmを測る。大橋編年Ⅲ期のもので、製作年代は、1650～1690年代に比定される。

28は、備前焼壺である。肩部には、拂書きで波状文が施されている。

29は、安山岩製石臼である。サイズは、直径21.6cm以上、高さは9.2cmを測る。30は、安山岩製茶臼である。サイズは、中央臼部分が復元直径18.1cm、受けの部分が復元直径40.0cm、高さ10.7cmを測る。

31～40は、凝灰岩製五輪塔の部材で、31・32は火輪、33は水輪、34～39は地輪部分である。31は、縦30.4



第101図 A区 SE097出土遺物実測図⑤ (1/4)

cm×横31.0cm×高さ12.8cmを測る。32は、縦34.1cm×横34.0cm×高さ15.6cmを測る。33は、直径約24cm、高さ11.4cmを測る。34は、縦32.3cm×横32.0cm×高さ18.4cmを測る。35は、縦28.0cm×横28.9cm×高さ16.2cmを測る。36は、縦29.0cm×横28.7cm×高さ15.8cmを測る。37は、縦25.4cm×横26.6cm×高さ18.0cmを測る。38は、縦27.1cm×横28.5cm×高さ18.4cmを測る。3側面に虫書で梵字が記されている。39は、宝篋印塔の部材であると考えられる。縦38.5cm×横38.9cm×高さ17.4cmを測る。40は、角閃石凝灰岩製で直径約80cm

ほど、高さ 17.8 cm の石輪の笠部分であると考えられる。表面に、十字の彫り込みが確認される。

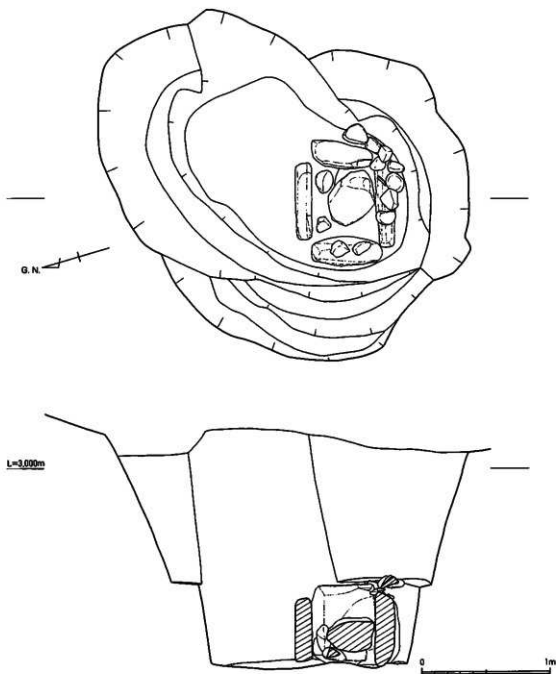
SE230 (第 102 図)

SE230 は、北西部分を SE097 に削平を受けている井戸遺構である。構造としては、井戸枠を確認することはできなかったが、集水施設は近隣で採取される結晶片岩の板石を「ロ」の字形に組んだものが確認されている。

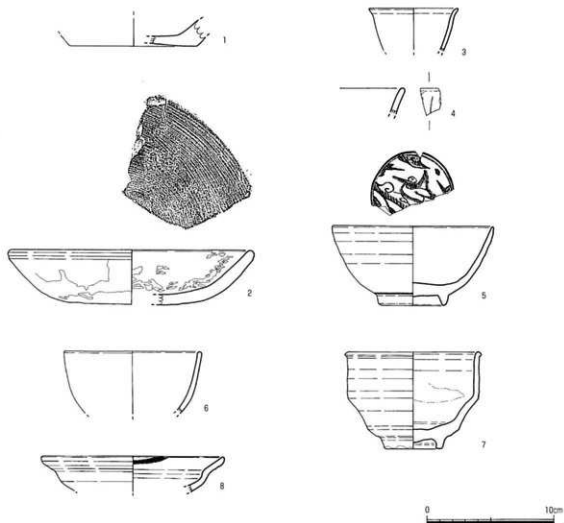
出土遺物 (第 103 図)

1 は、東播系中世須恵器こね鉢の底部である。復元底径 10 cm を測る。2 は、瓦質土器火鉢である。丸底で、内面にハケメ調整痕が観察される。法量は、復元口径 19.2 cm、器高 3.8 cm を測る。内外面に、灰や煤が付着する。

3 は、肥前系白磁小坏である。復元口径 6.9 cm を測る。口縁部が外反する。大橋編年Ⅲ期のもので、製作年代は、1650～1690 年代に比定される。



第102図 A区 SE230 遺構実測図・断面見通し図 (1/30)



第103図 A区 SE230 出土遺物実測図 (1/3)

4は、龍泉窯系青磁碗の口縁部である。外面に串描き蓮弁文が施されている。上田分類B-Ⅳに該当し、16世紀代の製品であると考えられる。

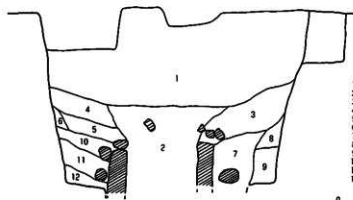
5は、漳州窯系染付碗である。内底面が盛り上がり、形状としては饅頭心形状を取る。法量は、復元口径12.6cm、器高6.2cm、復元高台径4.9cmを測る。内底面には、鷺文が染め付けられている。胎土は陶器質で、潮れ目に漆継ぎの痕跡が確認される。16世紀後半～17世紀初頭頃の製品であると考えられる。

6・7は、唐津系陶器碗である。6は、丸碗で復元口径10.6cmを測る。7は、天目碗的な形状を採り、有田町清六ノ辻2号窯製品に類似形状が見られる。法量は復元口径10.1cm、器高7.5cm、復元高台径4.4cmを測る。6・7ともに、大橋編年Ⅱ期のもので、製作年代は、1610～1650年代に比定される。8は、唐津系陶器鉄絵皿である。灰釉が施され、内面には鉄絵が施されている。復元口径14.2cmを測る。大橋編年Ⅰ期に該当し、製作年代としては1580～1610年代の内、Ⅰ～Ⅱ期1594～1610年代に比定される。

SE290 (第104・106図)

SE290は、井戸枠・集水施設ともに凝灰岩製の五輪塔や宝篋印塔を組み合わせて構築した井戸遺構である。石塔材の底合わせには川原石を用いている。平面形状は、不整形ではあるが六角形を意図して組んでいる。遺構の埋没状況は、井筒もしくは最上位の井戸枠を掘り起こし引き抜き、井戸本体を埋めた後、掘り返しを埋め立てている(第104図参照)。掘形は、2段掘りで、解体した石塔を積み上げながら裏込めを版築状に埋め固めている。

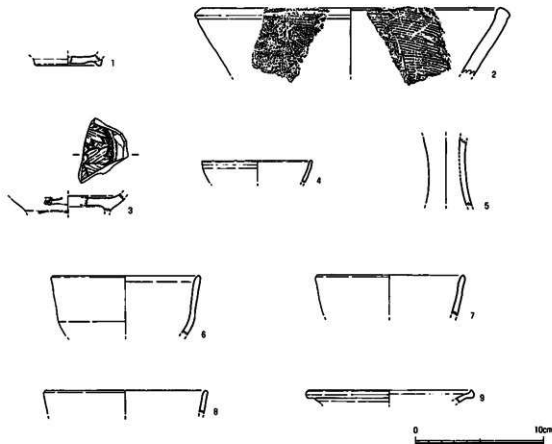
L=3,400m



- 1 灰褐色砂質土
 - 2 暗褐色砂質土
 - 3 灰褐色砂質土
 - 4 暗褐色砂質土
 - 5 灰褐色砂質土
 - 6 暗褐色砂質土
 - 7 灰褐色砂質土
 - 8 暗褐色砂質土
 - 9 暗褐色砂質土
 - 10 暗褐色砂質土
 - 11 暗褐色砂質土
 - 12 第9層に類似
- 第5層より明るい
第2層より明るい

0 2m

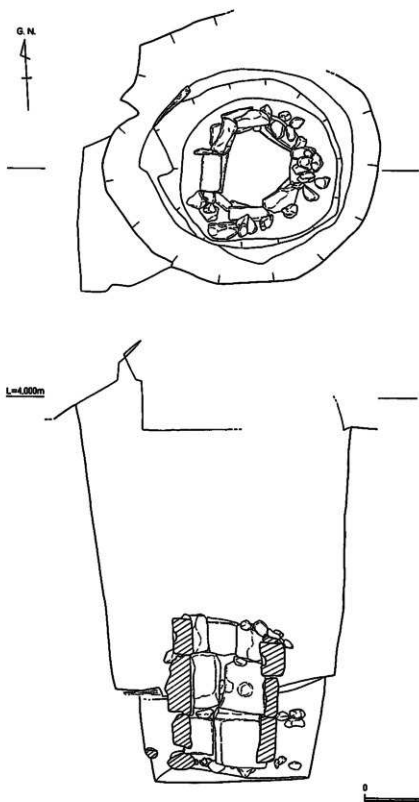
第104図 A区 SE290 土層断面図 (1/30)



第105図 A区 SE290 出土遺物実測図① (1/3)

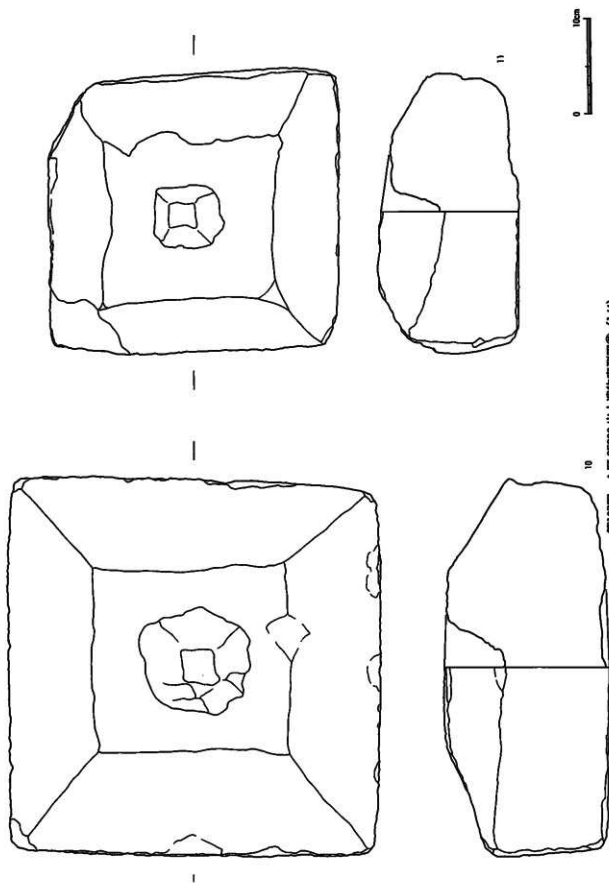
出土遺物 (第105・107～112図)

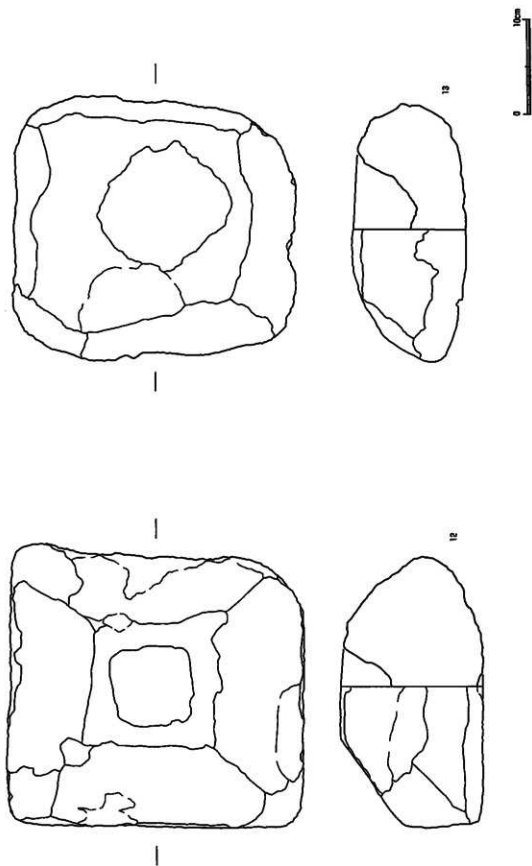
1は、瓦器碗の高台部分である。復元高台径5.0cmを測る。2は、瓦質土器甕鉢である。復元口径24.7cmを測る。3は、中国産染付碗である。内底面が盛り上がり、形状としては饅頭心形状を取る。小野分類E群に該当し、16世紀後半頃の所産である。



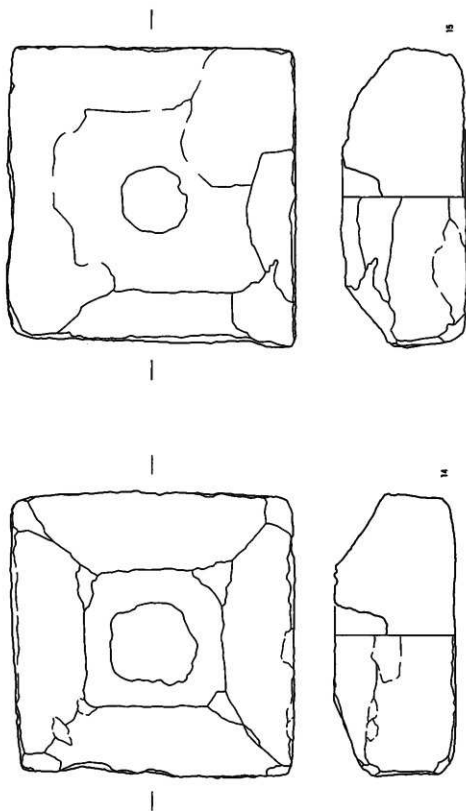
第106図 A区 SE290 遺構実測図・断面見通し図 (1/30)

4は、中国産白磁皿である。復元口径8.7cmを測る。森田分類E群に該当し、16世紀の所産であると考えられる。
5は、肥前産染付瓶の頸部である。

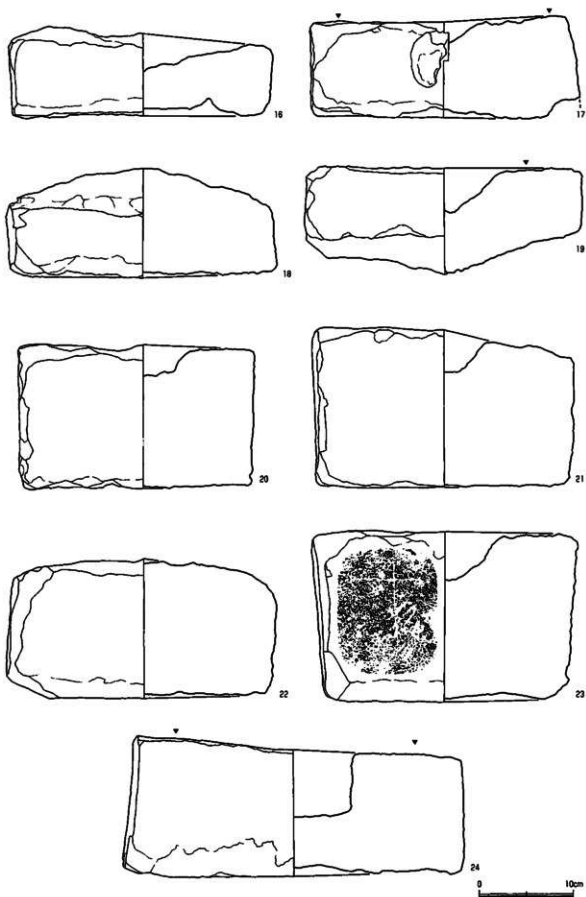




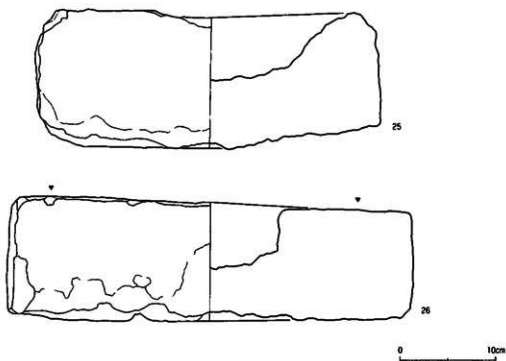
第108圖 A区 SE280 出土遺物実測図③ (1/4)



第109圖 A區 SE230 出土遺物実測図④ (1/4)



第110圖 A区 SE290 出土遺物実測図⑤ (1/4)



第111図 A区 SE290 出土遺物実測図⑥ (1/4)

6～9は、唐津系陶器である。6～8は、唐津系陶器碗で、それぞれ、6は復元口径11.4cm、7は11.5cm、8は12.6cmを測る。9は、唐津系陶器消線皿で、復元口径12.7cmを測る。6が大橋編年Ⅲ期のもので、製作年代は、1650～1690年代、7～9は大橋編年Ⅱ期のもので製作年代は、1610～1650年代に比定される。

10～28は、凝灰岩製五輪塔である。10～15は火輪で、上面に空風輪を乗せる穴が穿孔されている。16～23は地輪部分である。24～28は、宝篋印塔であると考えられる。10～23に関しては、宝篋印塔の笠や基礎の部分も含まれると思われるが、解体された状況では確かめようがないのが現状である。

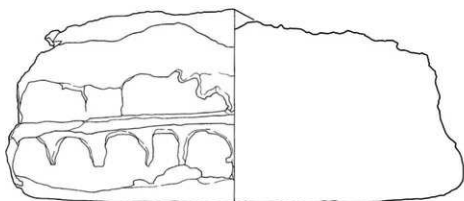
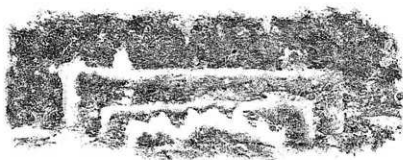
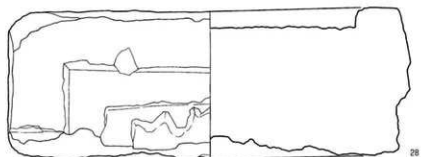
10は、縦39.3cm×横40.05cm×高さ17.5cmを測る。11は、縦30.8cm×横30.1cm×高さ14.9cmを測る。12は、縦31.6cm×横30.0cm×高さ15.3cmを測る。13は、縦30.2cm×横27.8cm×高さ12.7cmを測る。14は、縦30.1cm×横30.0cm×高さ12.8cmを測る。15は、縦30.6cm×横31.5cm×高さ13.55cmを測る。

16は、縦30.1cm×横30.0cm×高さ12.8cmを測る。17は、縦29.7cm×横28.6cm×高さ10.9cmを測る。18は、縦28.2cm×横28.4cm×高さ11.6cmを測る。19は、縦28.55cm×横29.7cm×高さ11.4cmを測る。20(P19)は、縦26.0cm×横26.25cm×高さ15.2cmを測る。4側面に墨書で梵字が記されている。21(P1)は、縦28.0cm×横27.8cm×高さ17.0cmを測る。4側面に梵字が墨書で記されている。22は、縦27.9cm×横29.2cm×高さ14.9cmを測る。23は、縦29.1cm×横28.5cm×高さ17.9cmを測る。表面に、「十」字の彫り込みが確認される。

24は、縦36.2cm×横36.6cm×高さ15.2cmを測る。1側面に梵字が墨書で記されている。25は、縦36.6cm×横36.8cm×高さ15.3cmを測る。2側面に梵字が墨書で記されている。26は、縦30.4cm×横43.0cm×高さ13.1cmを測る。27は、縦43.7cm×横42.9cm×高さ15.9cmを測る。

28は、縦45.1cm×横43.0cm×高さ15.9cmを測る。29は、縦47.1cm×横48.4cm×高さ20.5cmを測る。16～19は、上下面いずれかに削痕が見られるため、五輪塔の地輪を二つに分割し井戸枠に転用する石材数を増やしたものと考えられる。

17・19～21・23には、上面に水輪を乗せるための穿孔が見られる。28・29には、4面に陰刻が施されている。24～29に関しては、宝篋印塔の部材であると考えたほうが良いと思われる。



0 10cm

第112图 A区 SE290 出土遗物实测图⑦ (1/4)

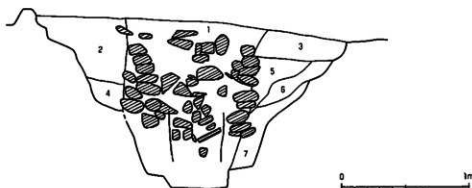
SE450 (第113・114図)

SE450は、堀形が露天掘り状の断面形状を呈する。地下施設に関しては、井戸枠は川原石を乱積みにしたものを用い、集水施設には曲げ物を用いるといった、複合構造を呈した井戸遺構である。

露天掘り状に堀形を掘り、集水施設である曲げ物を設置した後に、井戸枠として川原石を積み上げている。最終埋没時には、川原石が多数落下しており、当遺構を放棄する時点で井戸枠或いは井筒など地上施設の破壊をおこなっているようである。

井戸の集水施設として、用いられている曲げ物は、スギ材によると推察される容器の底を抜き、転用したものと考えられる。しかし、SE820も同製品と考えられる下部構造を有しているため、或いは、井筒専用の製品として取り扱われていたものである可能性も指摘される。

L=3500m



- 1 暗褐色砂質土
- 2 暗褐色砂質土と灰色・白灰色砂質土の混成層
- 3 暗褐色砂質土 上部の黄褐色土・白灰色砂質土ブロックを含む。
- 4 灰白色砂質土 黄褐色土ブロック、灰分を含む。
- 5 暗褐色砂質土 上部砂質土に黄褐色砂質土を含む。
- 6 灰白色砂質土 黄褐色土・暗褐色砂質土ブロックを含む。
- 7 灰褐色砂質土

第113図 A区 SE450 土層断面図 (1/30)

SE300 (第115図)

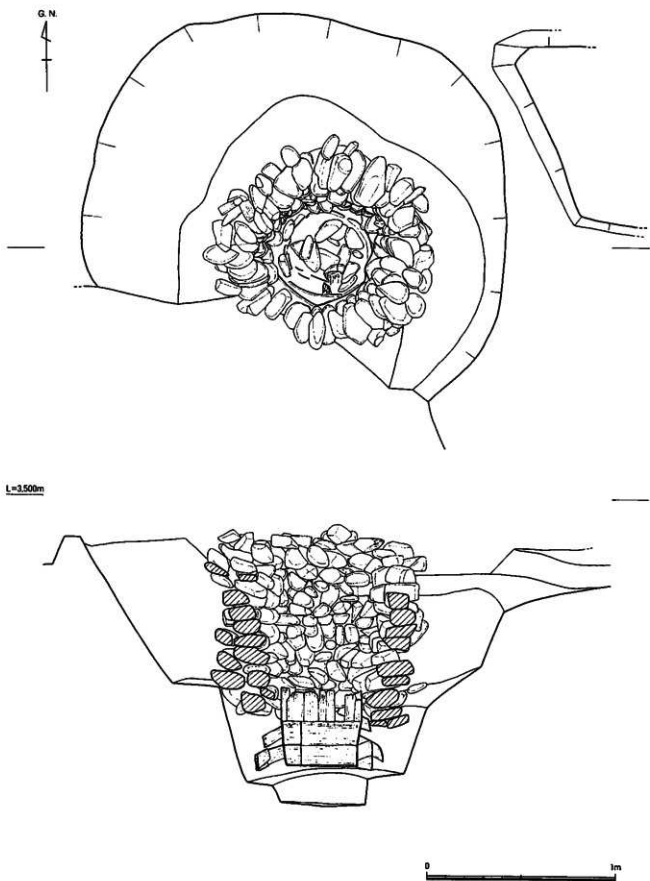
SE300は、掘形が露天掘り状に2段の段差の付いた堀形を呈し、下部構造は集水施設に曲げ物を用いた井戸遺構である。当遺構は、墓地改葬時に著しい削平を受けているため、井戸枠は確認できていない。

曲げ物内面には、スギと推察される板材を曲げるための刃物によるスジが微細に施されていた。曲げ物は、劣化が著しく実測図作成には耐え得るものではなかったため、実測図の作成は断念せざるを得なかった。

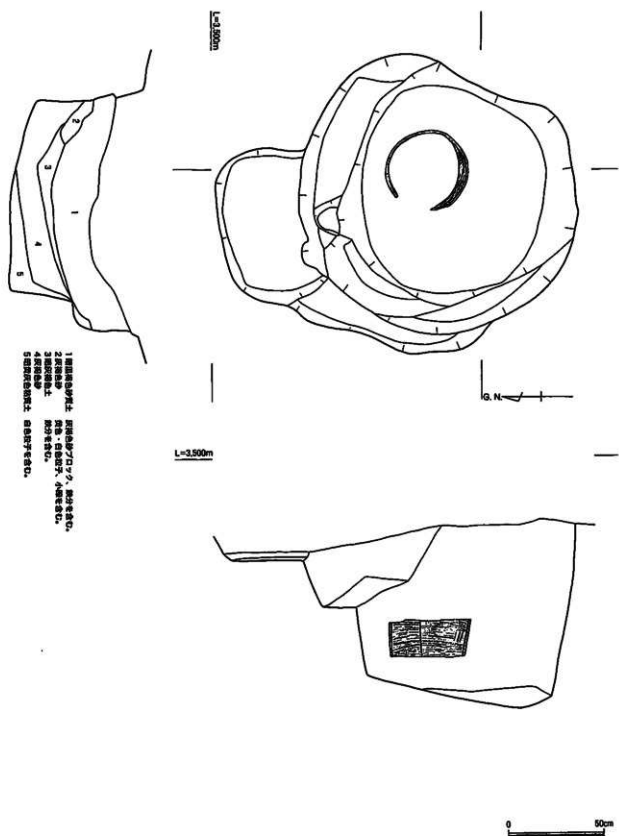
SE820 (第117図)

SE820は、掘形が2段の段差の付いた掘り状の断面形状を呈する。下部構造は、集水施設に曲げ物を用いており、他の井戸と比較して井戸底が浅いのが特徴である。

井戸の井筒として、曲げ物容器の底を抜き転用したものと考えられる。しかし、SE450も同製品による下部構造を有しているため、或いは、井筒専用の製品として取り扱われていたものである可能性も指摘される。当遺構の曲げ物は、樹種同定によりスギ材を用いていることが判明している。また、C 14年代測定法により、AD1440～1640の年代幅が把握されている。



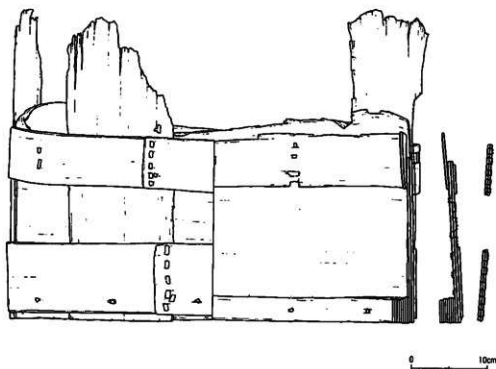
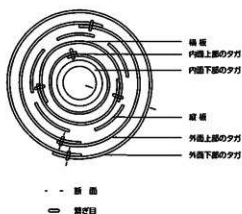
第114図 A区 SE450 遺構実測図・断面見渡し図 (1/20)



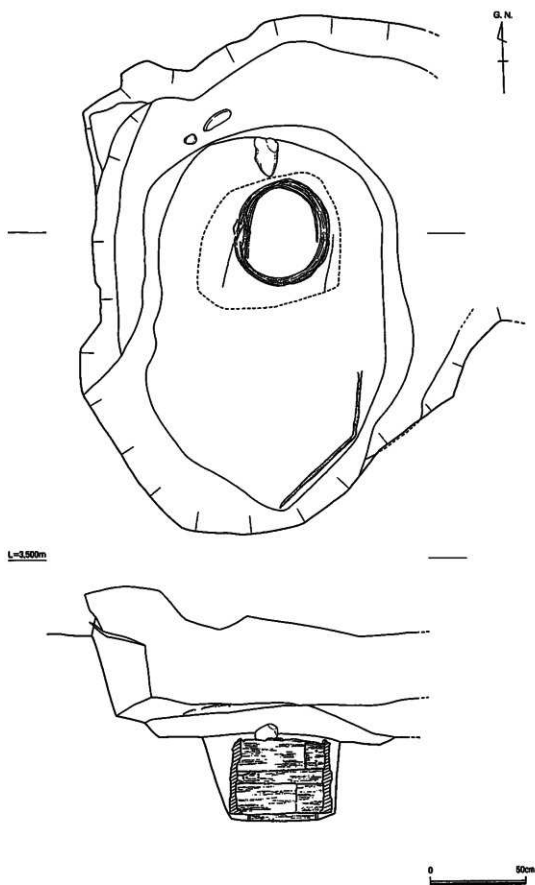
第115図 A区 SE300 遺構実測図・断面見通し図・土層断面図 (1/20)

出土遺物 (第116図)

1 は、曲げ物の井戸枠である。現状で、直径 53.5cm、高さ 41.3cm、材の厚さは、0.3cm を測る。この曲げ物は、縦板と横板、この 2 つを固定するタガで構成されている。横板は 2 枚を繋ぎ合わせて輪状にし、その横板を外側から、幅約 14cm の縦板 5 枚が支えている。横板材の端部から繋ぎ目付近にかけて、材を曲げ易くするために、刃物により 2cm ほどの間隔で縦方向に 8 本のスジを入れていることが確認された。横板と縦板を固定しているタガは、縦板の外側と横板の内側からそれぞれ上下 2 本、計 4 本で、固定している。外面下部のタガは 1 枚で、外面上部は横板同様、材 2 枚を繋ぎ合わせて輪状にしている。内面下部のタガは、曲げ物の強度を保つためか、8 枚の材を重ね合わせてある。横板やタガの繋ぎ目部分は、サクラの樹皮で作られたと考えられる紐により、なみ縫いで繋ぎ合わされている。



第116図 A区 SE820 出土井戸枠実測図 (1/5)・模式図



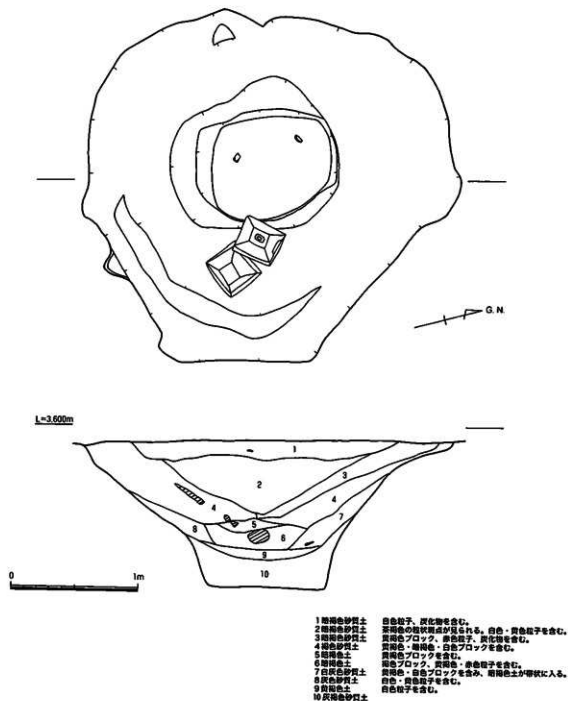
第117図 A区 SE820 遺構実測図・断面見通し図 (1/20)

SE435 (第118図)

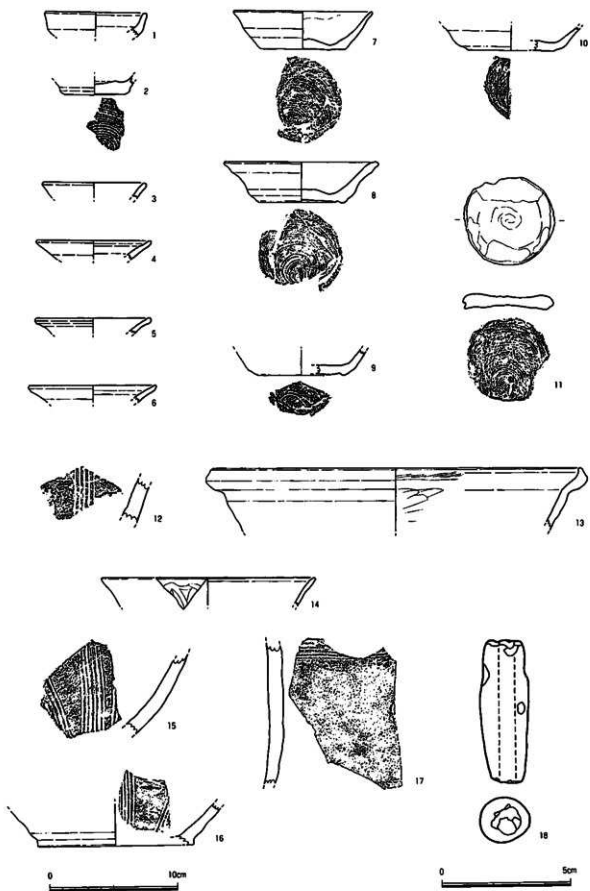
SE435は、楕形がロート状の断面形状を呈する井戸遺構である。

出土遺物 (第119～121図)

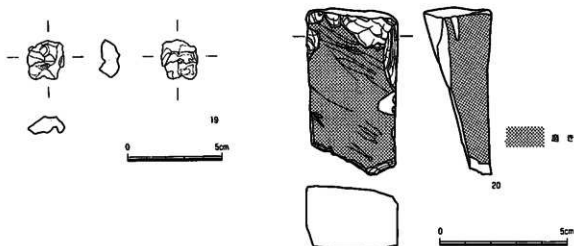
1～11は、土師器・皿類である。1・2は、土師器小坏である。それぞれ、1は復元口径7.8cm、2は底部に回転糸切り痕を残し、復元底径4.7cmを測る。3～6は、土師器小皿である。それぞれ、3は復元口径8.0cm、4・5は復元口径9.0cm、6は復元口径10.0cmを測る。7～10は、土師器坏である。7・8いずれも、底部に回転糸切り痕を残す。7は、口縁部を薄く挽き出し外反させており、復元口径10.8cm、器高3.0cm、底径6.7cmを測る。口縁部には、煤痕が確認される。8は、口縁下を強く挽くことによって結果、口縁部が外反している。復元口径12.0cm、器高3.1cm、復元底径6.8cmを測る。9・10は、土師器坏の底部で、9は復元底径6.9cm、10は復元底径6.7cmを測る。11は、土師器坏の底部をメンコ状に再加工したものである。現状で、底径7.1cm、厚み1.1cm



第118図 A区 SE435 遺構実測図・土層断面図 (1/30)



第119图 A区 SE435 出土器物实测图① (土罐 2/3、他 1/3)



第120図 A区 SE435 出土遺物実測図②(鉄滓 1/2・砥石 2/3)

を測る。底部に回転糸切り痕を残す。

12・13は、瓦質土器である。12・13は、瓦質土器摺鉢である。12は、外面に指頭圧調整痕が、内面にハケメ調整痕が観察される。内面には、5条で一単位のリ目か施されている。13は、瓦質土器鍋である。口縁部は、外反した後、つまみ上げられたかのように直立する。復元口径28.9cmを測る。外面に指頭圧調整痕が、内面にハケメ調整痕が観察される。防長系の製品であると考えられ岩崎分類Ⅲ～Ⅳ型式に該当する。

14は、龍泉窯系青磁碗である。口縁部は、若干外反気味で、外面には片切彫りによる蓮弁文が施されている。復元口径16.7cmを測る。上田分類B-I類に該当し、13世紀代の所産であると考えられる。

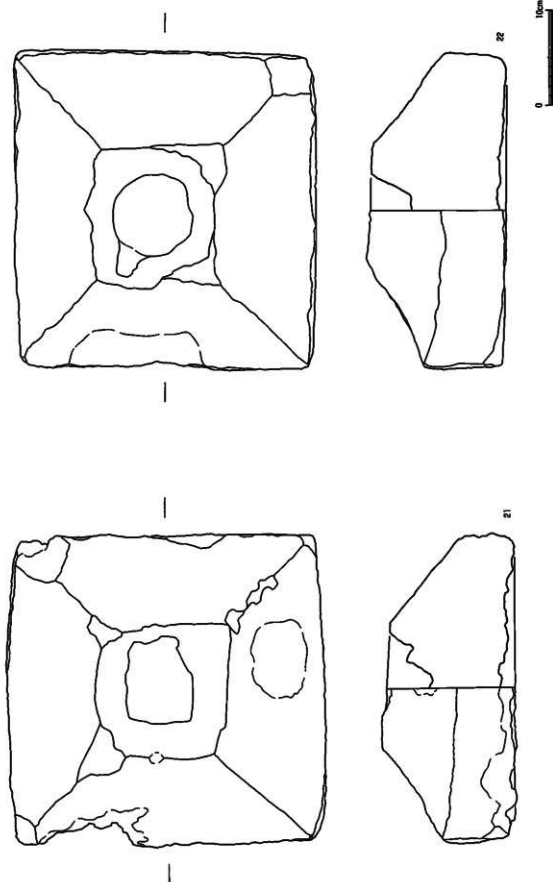
15～17は、備前焼である。15は、摺鉢の体部である。16は、備前焼摺鉢の底部である。15・16は、6条で一単位のリ目か施されている。17は、壺の胴部で、外面に脚置き装飾が施されている。

18は、土師質で細形土管形の有孔土鍾だが、外径が大きな部類に入る。外面に網によると推測される若干の擦痕が見られる。上端には掛け紐によると推察される剥落が認められる。

19は、鉄滓で、粒状滓であると考えられる。

20は、天草石製の砥石である。下端は表から裏への折れによって欠損している。表裏面・左右側面には磨き整形が施されている。上端は切断面であり、切り出し時の擦り切り痕あり。また、稜の割れが多く見られる。表面には左上～右下方向の研ぎによる擦痕が認められる。

21・22は、五輪塔の火輪部分である。いずれも、凝灰岩製である。21は、縦16.6cm×横16.65cm×高さ14.7cmを測る。22は、縦33.8cm×横32.7cm×高さ14.15cmを測る。



第121圖 A区 95435 出土物線圖③ (1/4)

SE118 (第122図)

SE118 は、掘形がロート状の断面形状を呈する井戸遺構である。

出土遺物 (第123図)

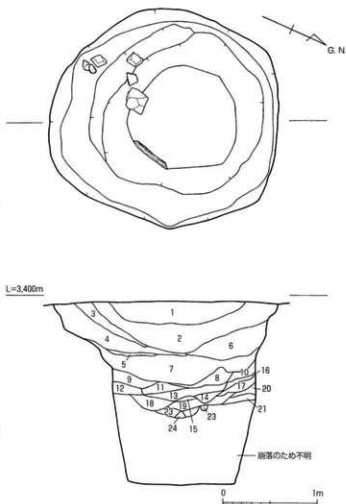
1・2は土師器杯・皿類である。1は、土師器小杯である。復元底径4.7cmを測る。2は、土師器杯で、復元口径12.2cm、器高3.6cm、復元底径6.6cmを測る。

3は、瓦器椀の高台部分である。復元底径6.8cmを測る。東国東型瓦器椀のⅡ型式に該当し、13世紀前半前後頃の所産であると考えられる。

4～6は、瓦質土器鉢鉢である。4は、口縁端部を内側に折り曲げ、口縁部内側に三角突帯状に緑が付けられる。復元口径28.8cmを測る。防長系の製品であると考えられ岩崎編年Ⅱ期に該当する。5は、復元口径28.8cmを測る。

7は、備前焼壺の肩部である。

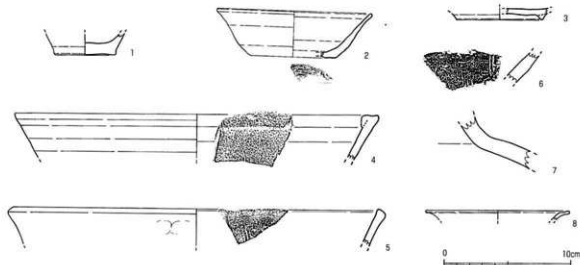
8は、中国産白磁皿の口縁部で、大宰府分類白磁皿Ⅳ-1b類に該当する。



- 1 緑褐色砂質土 棕色粒子、酸化物、小隙を含む。
- 2 黒灰褐色砂質土 黄白色砂・淡褐色粘質土ブロック、灰化物、鉄分を含む。
- 3 黒褐色砂質土 黒褐色砂質土、灰化物を含む。
- 4 黒褐色砂質土 黄白色・緑白色砂ブロックを含む。
- 5 黄褐色砂 緑褐色・砂質土粒子を含む。
- 6 黒灰褐色砂質土 黄褐色・赤褐色砂ブロックを含む。
- 7 黒褐色砂質土 黄褐色・黒褐色砂質土ブロックを含む。
- 8 黒褐色砂質土 第7層に比べやや暗い。黄褐色・褐色粒子を含む。
- 9 黒灰褐色砂質土 黄褐色砂ブロックを含む。
- 10 黒褐色砂質土 黄褐色・灰白色砂ブロックを含む。
- 11 黒褐色砂質土 黄褐色ブロック、灰白色粒子を含む。
- 12 淡黄灰色砂質土 白色粒子を含む。

- 13 淡黄灰色砂質土 黄褐色ブロック、白色粒子を含む。
- 14 黄褐色砂質土 白色粒子を含む。
- 15 黄褐色砂質土 黄褐色砂質土。
- 16 黄褐色砂質土 黄褐色砂質土。
- 17 淡黄灰色砂質土 黄褐色砂質土。
- 18 黄褐色砂質土 黄褐色砂質土。
- 19 淡黄灰色砂質土 黄褐色砂質土。
- 20 黄褐色砂質土 黄褐色砂質土。
- 21 灰白色土 白色粒子を含む。
- 22 黄褐色砂質土 黄褐色砂質土。
- 23 淡黄灰色砂質土 黄褐色砂質土。
- 24 黄褐色砂質土 黄褐色砂質土。

第122図 A区 SE118 遺構実測図・土層断面図 (1/40)



第123図 A区 SE118 出土遺物実測図 (1/3)

SE117 (第124図)

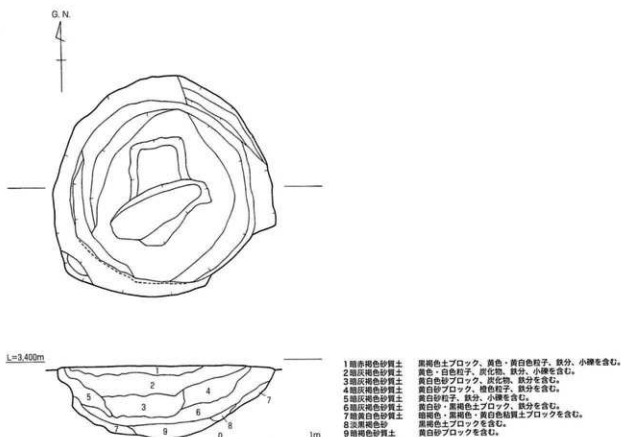
SE117は、掘形が逆台形状の断面形状を呈する井戸遺構である。

出土遺物 (第125図)

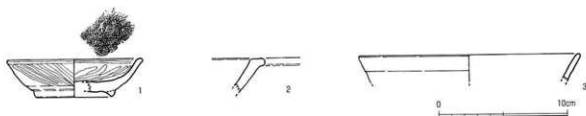
1は、瓦質土器皿である。復元口径10.5cm、器高3.05cm、復元底径5.8cmを測る。高台は、貼り付け高台である。口唇部内外面には、口縁部に対し平行に、体部には斜状に粗いヘラミガキが施されている。内面には、布目圧痕が確認され、内型成形時の痕跡であると考えられる。口縁部には、灯明芯痕と考えられる箇所が2ヵ所確認される。

2は、瓦質土器鍋である。口縁部は、外側に折れる形状を呈する。

3は、龍泉窯系青磁碗である。復元口径17.2cmを測る。



第124図 A区 SE117 遺構実測図・土層断面図 (1/40)



第125図 A区 SE117 出土遺物実測図 (1/3)

SE239 (第126図)

SE239は、廓形が円筒状の断面形状を呈する井戸遺構である。

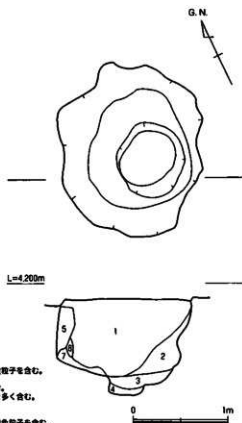
出土遺物 (第127図)

1～3は、土師器小坏である。いずれも、底部に回転糸切り痕が確認される。1は、器壁が厚く、外面に対し、内面の傾斜が緩い。法量は、復元口径7.4 cm、器高1.95 cm、復元底径5.4 cmを測る。2は、器壁が薄い。法量は、復元口径8.0 cm、器高2.0 cm、復元底径5.6 cmを測る。3は、復元底径6.1 cmを測る。

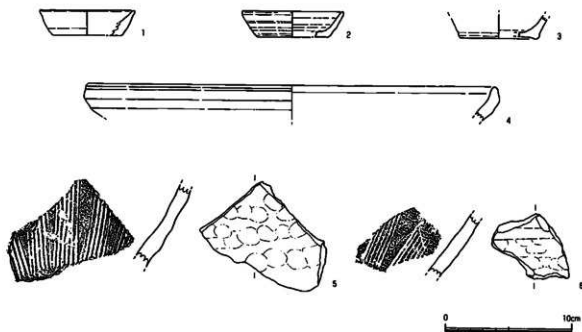
4は、瓦質土器鉢の口縁部である。口縁部は、体部から口縁部にかけて内湾した後、端部は丸く収められる。復元口径32.2 cmを測る。5は、瓦質土器鉢鉢の体部である。外面に指頭圧調整痕が観察される。内面には、5条で一単位の摺り目が施されている。

6は、備前焼鉢鉢の体部である。外面に指頭圧調整痕が観察される。内面には、6条で一単位の摺り目が施されている。

- | | |
|----------|-----------------------|
| 1 暗褐色砂質土 | 灰褐色砂ブロック、褐色・灰質粘土を含む。 |
| 2 暗褐色砂質土 | 第1層よりやや暗い。 |
| 3 暗褐色砂質土 | 褐色・灰質粘土ブロックを含む。 |
| 4 暗褐色砂質土 | 第3層より白色砂質ブロックを多く含む。 |
| 5 暗褐色砂質土 | 褐色粘土を含む。 |
| 6 暗褐色砂質土 | 灰褐色砂ブロック、灰褐色・褐色粘土を含む。 |
| 7 暗褐色砂質土 | |



第126図 A区 SE239 遺構実測図・土層断面図 (1/40)



第127図 A区 SE239 出土遺物実測図 (1/3)

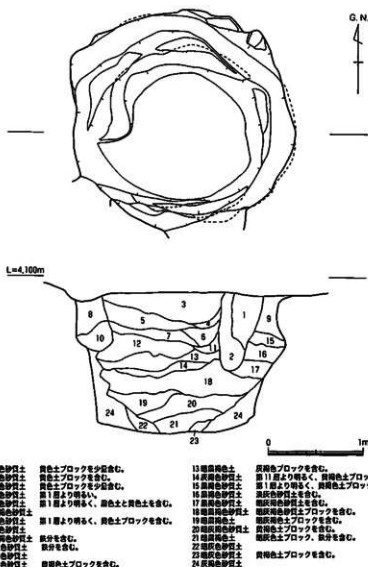
SE202 (第128図)

SE202は、掘形か円筒状の断面形状を呈する井戸遺構である。

出土遺物 (第129図)

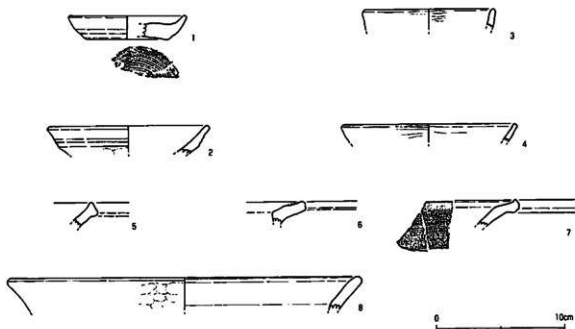
1は、土師器小皿である。法量は、復元口径9.1cm、器高1.8cm、底径6.6cmを測る。底部の厚みは1cmを測る。底部には、回転糸切り痕を残す。2は、土師器坏で、復元口径12.1cmを測る。口縁部に強い回転横ナデ調整が施されている。3・4は、細片ではあるが瓦器碗の口縁部である。それぞれ、3は復元口径10.0cm、4は復元口径13.3cmを測る。器面には、内外面ともに口縁部付近にのみヘラミガキ調整が確認される。

5～8は、土師質土器鍋である。5～7は、口縁端部に面取り調整が施され、8は端部が丸く収められている。7の口縁部は、外反した後、つまみ上げられたかのように直立する。外面に指頭圧調整痕が、内面にハケメ調整痕が観察される。8は、外面に指頭圧調整痕が観察される。



- | | | | |
|----------|-----------------------|---------|-----------------------|
| 1 黒褐色砂質土 | 黄色土ブロックを少量含む。 | 13 褐色黒土 | 灰褐色土ブロックを含む。 |
| 2 黒褐色砂質土 | 黄色土ブロックを少量含む。 | 14 褐色黒土 | 第1層より明るく、黄褐色土ブロックを含む。 |
| 3 黒褐色砂質土 | 第1層より明るく、 | 15 褐色黒土 | 灰褐色土ブロックを含む。 |
| 4 黒褐色砂質土 | 第1層より明るく、黄褐色土と黄色土を含む。 | 16 褐色黒土 | 灰褐色土ブロックを含む。 |
| 5 黒褐色砂質土 | 第1層より明るく、黄褐色土と黄色土を含む。 | 17 褐色黒土 | 灰褐色土ブロックを含む。 |
| 6 褐色黒土 | 第1層より明るく、黄褐色土と黄色土を含む。 | 18 褐色黒土 | 灰褐色土ブロックを含む。 |
| 7 褐色黒土 | 第1層より明るく、黄褐色土と黄色土を含む。 | 19 褐色黒土 | 灰褐色土ブロックを含む。 |
| 8 褐色黒土 | 灰分を含む。 | 20 褐色黒土 | 灰褐色土ブロックを含む。 |
| 9 褐色黒土 | 灰分を含む。 | 21 褐色黒土 | 灰褐色土ブロックを含む。 |
| 10 褐色黒土 | 灰褐色土ブロックを含む。 | 22 褐色黒土 | 灰褐色土ブロックを含む。 |
| 11 褐色黒土 | | 23 褐色黒土 | 灰褐色土ブロックを含む。 |
| 12 褐色黒土 | | 24 褐色黒土 | 灰褐色土ブロックを含む。 |

第128図 A区 SE202 遺構実測図・土層断面図 (1/40)



第129図 A区 SE202 出土遺物実測図 (1/3)

SE131 (第130図)

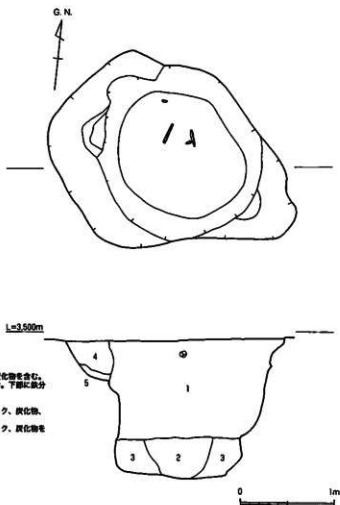
SE131は、甔形が円筒状の断面形状を呈する井戸遺構である。第2層は採水坑が埋没したもので、第3層は、その裏込め土であると考えられる。

出土遺物 (第131図)

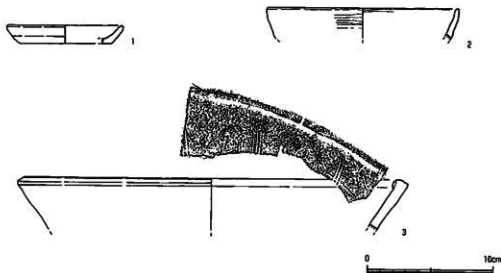
1は、土師器小皿である。法量は、復元口径9.3cm、器高1.4cm、復元底径7.4cmを測る。

2は、瓦器桶である。法量は、復元口径15.0cmを測る。器面には、内外面ともに口縁部付近にのみヘラミガキ調整が確認される。

3は、瓦質土器桶鉢である。復元口径29.9cmを測る。内面には、4条で一単位のリ目目が施されている。口縁部内面に突帯状の縁が付けられる。



第130図 A区 SE131 遺構実測図・土層断面図 (1/40)



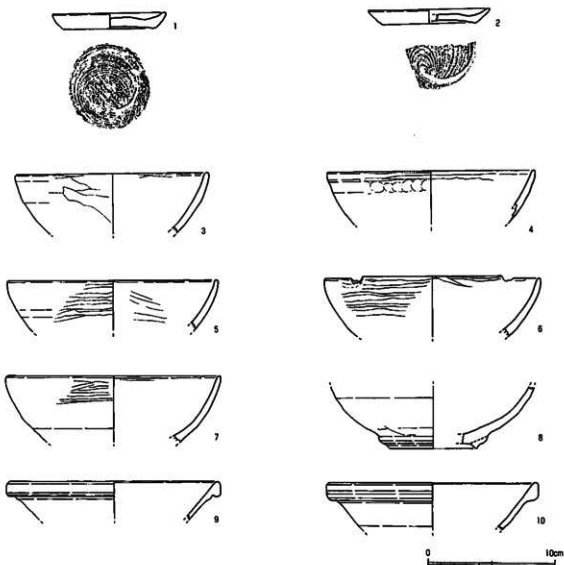
第131図 A区 SE131 出土遺物実測図 (1/3)

SE165は、掘形が逆台形状の断面形状を呈する井戸遺構である。第8～10層は、裏込め土であると考えられる。
出土遺物（第133・134図）

3~8は、瓦葺構である。3~7は、口縁部で、8は底部である。それぞれ、3は15.0 cm、4は16.2 cm、5は16.5 cm、6は16.8 cm、7は16.8 cmの復元口径を測る。4は、口唇部のみミガキ調整が施され、その下部には指頭圧調整痕が確認される。5・6は、口縁部から体部内外面にミガキ調整が、6・7に関しては、外面は口縁部から体部にかけてミガキ調整が、内面には口唇部のみミガキ調整が施されている。6には、器壁の粘土継接合痕が確認されている。また、8の高台は、貼り付け高台で、高台径6.3 cmを測る。

9・10は、中国産白磁碗である。ともに、16.4 cmの復元口径を測る。玉縁状の口縁を呈し、大宰府分類碗Ⅳ類に該当し、C期(11世紀後半～12世紀前半)・D期(12世紀中頃～後半)に比定される。

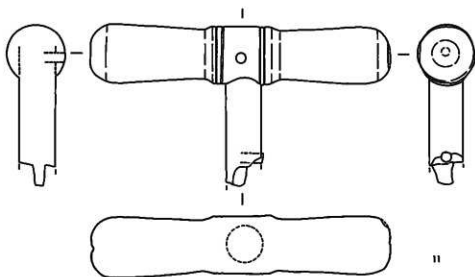




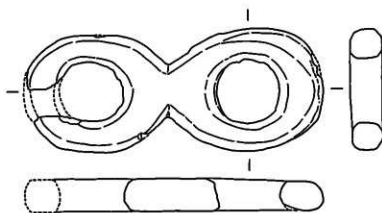
第133図 A区 SE165 出土遺物実測図① (1/3)

11・12は、用途不明の木製品である。樹種同定により、11はカバノキ属、12はコナラ属アカガシ亜属と判明した。11は、T字状の形態を呈し、横木の幅15.8cm、直径3.15cm、縦木の直径1.9cmを測る。横木と縦木の接合部は、横木の中央部に穴を穿ち、そこに縦木を差し込み、木釘で1ヵ所、固定している。この木釘は、直径0.5cmを測り、同様のサイズの木釘が、縦木の破損部でも確認された。この木製品は、漆器の本地などと同じように、ロクロによって成形されたと考えられ、横木の左右両側面端部には、ロクロ挽きの時に、ロクロに固定されていたと考えられる痕跡が残っている。横木の接合部の左右それぞれに、沈線を2条施している。

12 (P13) は、両面から穴が穿たれており、長さ15.6cm(復元)、最大幅6.4cm、内径3.3cm、厚さ1.7cmを測る。片面が平らに削られており、この木製品は、板材から作られた可能性がある。



11



12



第134图 A区 SE165 出土器物实测图② (1/2)

SE155 (第135図)

SE155は、楕形が逆台形状の断面形状を呈する井戸遺構である。

出土遺物 (第136・137図)

1～12は、土師器・皿類である。1～6は、土師器小皿である。1～3は、それぞれ、1は1.2cm、2は1.1cm、3は1.2cmの器高を測る。4は復元口径8.6cm、器高1.6cm、復元底径7.2cm、5は復元口径9.0cm、器高1.3cm、復元底径4.6cm、6は復元口径9.4cm、器高1.5cm、復元底径8.4cmを測る。2～6には、回転糸切り痕が確認される。7～12は、土師器杯である。7は、口縁部で、復元口径12.2cmを測る。8～12は、底部でいずれも回転糸切り痕を残す。それぞれ、8は7.0cm、9は7.6cm、10は7.6cm、11は7.8cm、12は7.2cmの復元底径を測る。

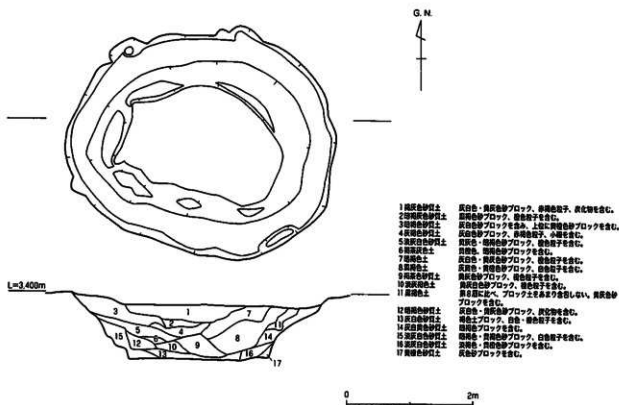
13～21は、瓦器碗である。13～15は、口縁部、16・17は底部、18～21は底部である。13は、復元口径13.0cmを測り、内外面にミガキ調整が確認される。14・15は、それぞれ、復元口径13.2cm、復元口径14.7cmを測り、口唇部のみにミガキ調整が施されている。18～21は、いずれも、貼り付け高台である。19～21に関しては、回転糸切り痕を残す。20は、東国東型瓦器碗のⅠ型式に該当し12世紀後半頃の所産、18～19・21は、東国東型瓦器碗のⅡ型式に該当し、13世紀前半前後頃の所産であると考えられる。

22は、土師質土器鉢である。口縁部は外側に屈曲する。復元口径24.0cmを測る。

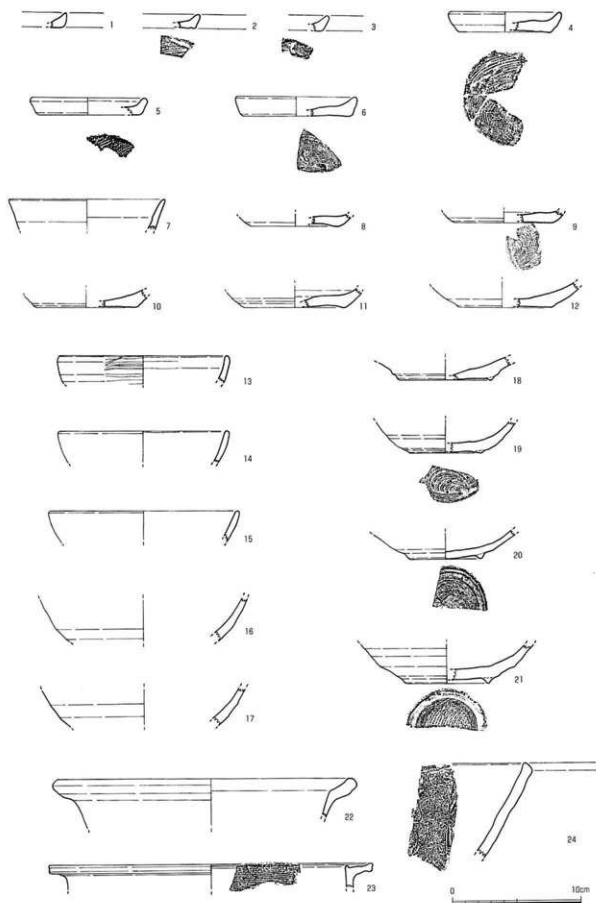
23～26は、瓦質土器である。23は、瓦質土器鉢である。内面にハケメ調整痕が観察される。復元口径25.4cmを測り、口縁部外側には鈎状に緑帯が付けられ、焼成は非常に堅緻で外来系の瓦質土器であると考えられる。24は、瓦質土器摺鉢である。外面に指頭圧調整痕が観察される。内面には摺り目が確認できる。

25・26は、東播系中世須恵器こね鉢である。それぞれ、25は復元口径25.0cm、26は復元口径29.4cmを測る。第Ⅱ期第2段階(12世紀末～13世紀初頭)に該当する。

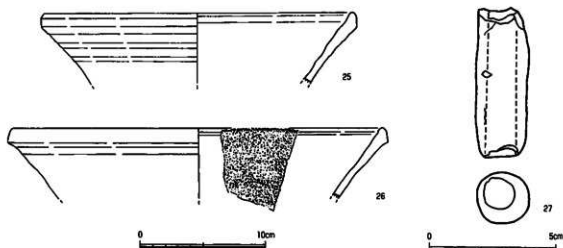
27は、土師質で細形土管形の有孔土鉢だが、やや外径が太い部類に入る。上端は欠損し、下端は掛け紐によると考えられる若干の欠損が認められる。外面には網によると推測される若干の擦痕が見られる。



第135図 A区 SE155 遺構実測図・土層断面図 (1/60)



第136図 A区 SE155 出土遺物実測図① (1/3)

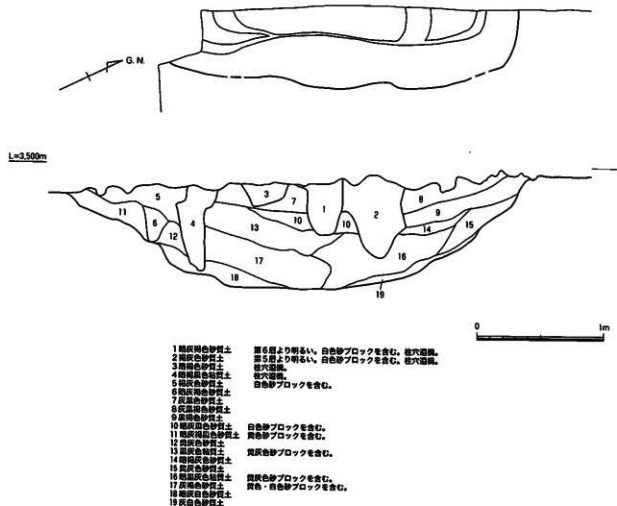


第137図 A区 SE155 出土遺物実測図② (土鍾 2/3、他 1/3)

SE830 (第 138 図)

SE830は、堀形が逆台形状の断面形状を呈する井戸遺構であると推察される。当遺構は、遺構プランの大半が調査区外に存在するため不明な点を多く残している。近接する SE155・SE165 と土層堆積状況や土質、プランや断面形状の類似から、井戸遺構と判断した。

調査は、一部分に留まるため、遺物の出土は極少量である。瓦器碗の小破片などが出土している。



第138図 A区 SE830 遺構実測図・土層断面図 (1/30)

土坑 (第139図)

A区では44基の土坑を確認した。土坑は、概ね掘立柱建物跡、溝状遺構、井戸遺構周辺に分布する傾向にある。特に、調査区北東部分の掘立柱建物跡、調査区南部分の溝状遺構・井戸遺構周辺で多く確認された。本書では、遺物が出土したものや企画性のある20基の土坑について報告する。20基の土坑の多くは、出土遺物などから中世に比定されるが、SK006・SK007は他構との切り合い関係から近・現代以降に比定される。20基以外の土坑についても、その多くは中世と推察されるが、一定量近世以降の土坑も含まれていると考えられる。第139図では、報告する20基の土坑のみ、遺構番号を明記した。

SK006

当遺構は、ST014を削平しており、近・現代以降に比定される。遺構形状は、不明である。紡錘車が出土しているが、当遺構は、近・現代以降に比定されるため、この紡錘車は混入品と考えられる。

出土遺物 (第140図)

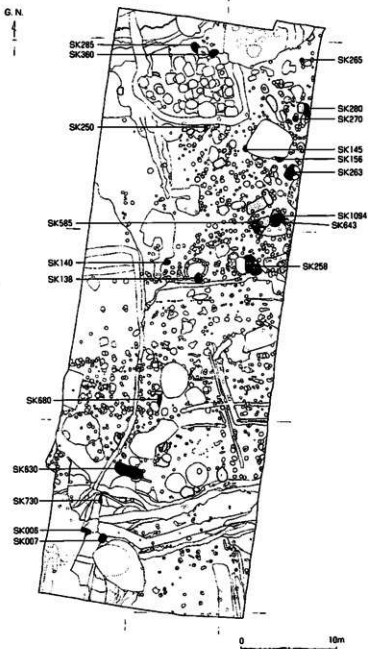
1は土師質の紡錘車である。上面直径3.55cm、下面直径4.8cm、高さ3.35cmを測る。中心の孔の直径は0.7cmで、上面と下面の両方から穿孔している。

SK007

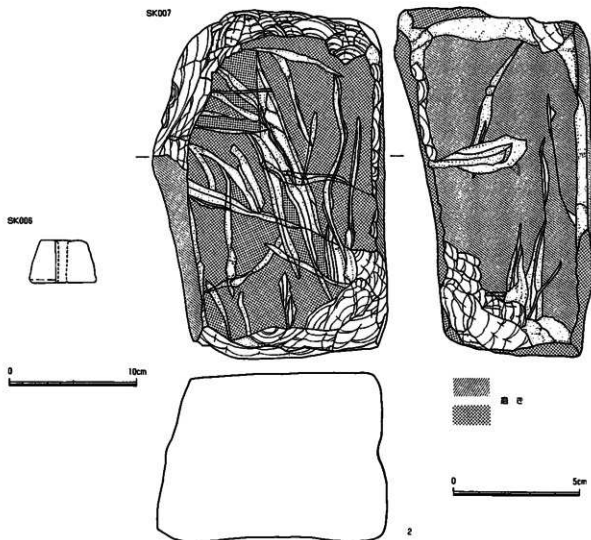
当遺構は、長方形のプランを持ち、長さ106cm、幅76cm、深さ25cmを測る。SD001を削平しており、近・現代以降に比定される。

出土遺物 (第140図)

2は砂岩製の砥石である。上下端は折断面が残る。表裏面・左右側面の4面を研ぎ面として使用し、磨き整形が認められる。右側面上半は若干欠損している。表面及び左側面は使用のため内湾し、裏面は中央が浅く窪む。4面とも研ぎによる擦痕が認められるが、特に表面は縦方向だけでなく、横・左上-右下などの多方向の擦痕も見られ、顕著である。粗砥石と考えられる。



第139図 A区土坑遺構配置図 (1/400)



第140図 A区 SK006・SK007 出土遺物実測図 (SK006 (1/3)・SK007 (2/3))

SK140 (第141図)

土坑の平面形状は、長径80cm、短径50cmの楕円形を呈する。SK140からは、土師器坏15点と土師器小坏7点、底の破れている瓦質土器鍋1点、そして、動物遺存体として牛歯が5点出土した。土師器は、伏せられた坏が8点、合わせ口の小坏が2点、その他の坏7点と小坏5点、計12点は正位置に置かれていた。

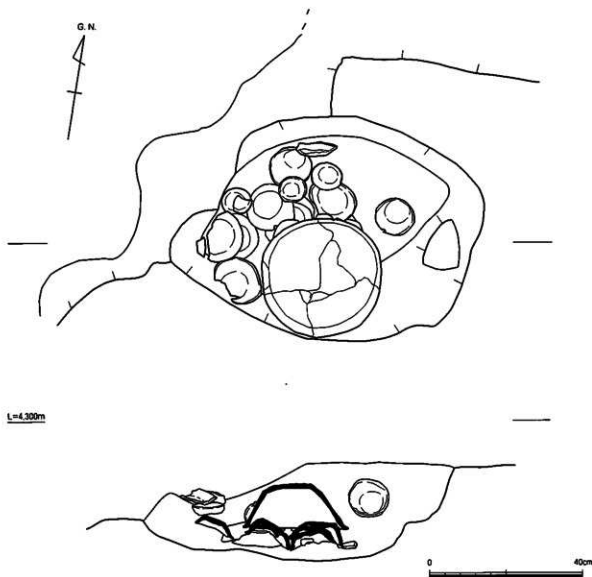
当遺構に関しては、土坑という閉じた遺構の中に、動物骨と土器を遺構内で意図的に配置したもので、明らかに埋葬や廃棄行為と区別されるものである。また、出土状況を検討することによって、ある程度の埋置過程、すなわち動物祭祀の一過程を復元することが可能であると考えられる。

詳細な検討は、第V章4にておこなう。

出土遺物 (第142・143図)

坏は、全て右回転のロクロ成形で、体部下半を粘土柱から外へ1cmほど押し広げた後、薄く外反するように挽き上げる。口縁端部には、面取り調整が施される。法量は、概ね口径約12cm・器高約4cm・底径約7cmを測る。

小坏も全て右回転ロクロ成形で、体部下半は強いロクロナデが施され、口縁端部は面取り調整をおこないながらも丸くおさめる。法量は、概ね口径約8cm・器高約2.6cm・底径約6cmを測る。坏・小坏いずれも、石英・赤色粒子・角閃石・結晶片岩を胎土に含み、特に結晶片岩粒は、在地産であることを示すものであると考えられる。

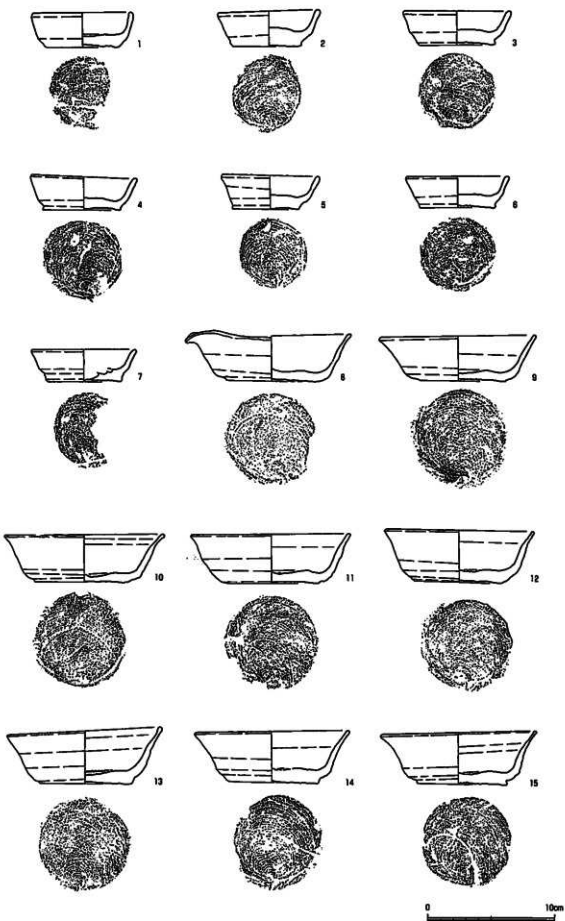


第141図 A区 SK140 遺構実測図・断面見通し図 (1/10)

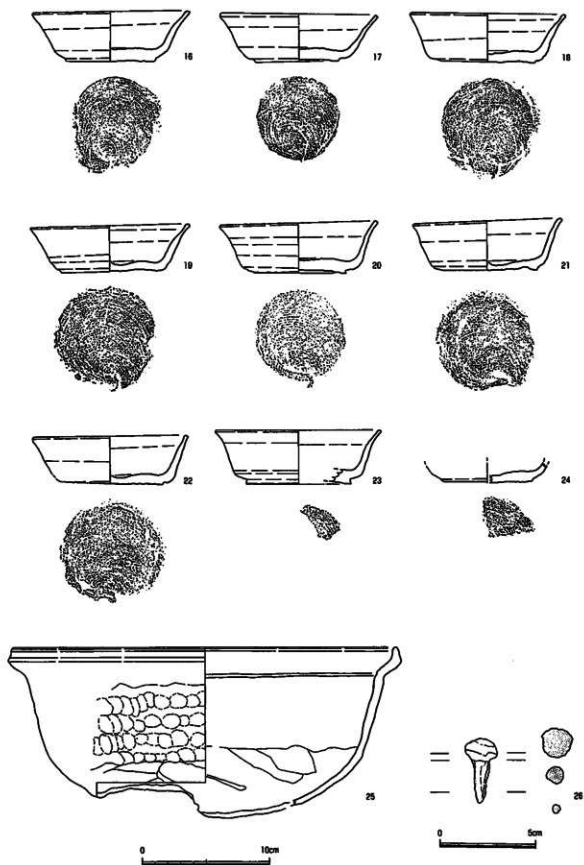
出土した牛歯は、5点全てが上顎大臼歯で、頭骸骨に付属するものである。臼歯は、右側が上顎第1・第2・第3大臼歯、左側が上顎第1・第2大臼歯との鑑定を受けた。臼歯は、骨格上、正位置に並び、歯根を土坑底面に向けた状態で検出された。

当遺構では、土師質土器鍋が牛頭付に被せられた状態で出土している。SK140出土土師質土器鍋は、口縁部形態のみを見れば、防長型足鍋Ⅳ型式の特徴を備える。すなわち、「口縁部は、端部を内側へ屈曲させ、内面に蓋受け状の段が見られる」形態を採る。しかし、当遺構出土土師質土器鍋には、足は付いておらず、防長型鍋の特徴である格子目のタタキ痕も有さない。胎土も、防長型のものが白色であるのに対し、当遺構出土資料は赤褐色の色調を呈する。また、鍋の底は、故意に打ち破られている。器面観察における所見として、器面内面が、やや黒色に変色し使用痕があまり観察されないのに対し、器面外面は、底部に直径18cmほどの円形状に無煤の部分がある以外は、吹きこぼれや煤が多量に付着している点が指摘される。

また、土師質土器鍋に付着していた炭化した吹きこぼれをC14年代測定法にて計測をおこなったところ、暦年代校正した2σ暦年代範囲AD1300～1420年が得られている。



第142图 A区 SK140 出土器物夹刻图① (1/3)



第143图 A区 SK140 出土遺物実測図② (鉄鉋 1/2、他 1/3)

SK138

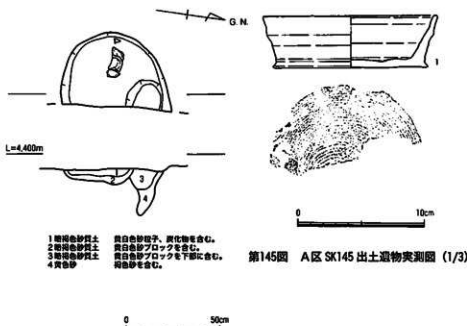
当遺構からは、天福通竇と開元通竇が出土している。(第V章2参照)

SK145 (第144図)

当遺構は、掘乱によって削平されており、遺構形状は不明である。現状で幅57cm、深さ26cmを測り、遺構上面で、土師器環が1点出土した。この環は土層観察から、遺構の廃棄時或いは、埋没過程のものだと判断される。

出土遺物 (第145図)

1は土師器環で、復元口径13.5cm、器高4.05cm、復元底径11.7cmを測る。器面調整は、内外面ともロクロナデで、内面見込み部分には、一方向ナデが施される。底部は、回転系切り痕を残す。



第145図 A区 SK145 出土遺物実測図 (1/3)

第144図 A区 SK145 遺構実測図・土層断面図 (1/20)

SK156

当遺構は、掘乱によって削平されており、現状で幅99cm、深さ28cmを測る。

出土遺物 (第146図)

1は土師質で細形紡錘形の有孔土鍾である。上下端にミガキ調整が施されている。表面の上下端近くに掛け紐によると推測される擦痕が認められる。

SK250

SK250は、SX200やSD012の削平を受けており、遺構の平面形状と規模は不明である。

出土遺物 (第146図)

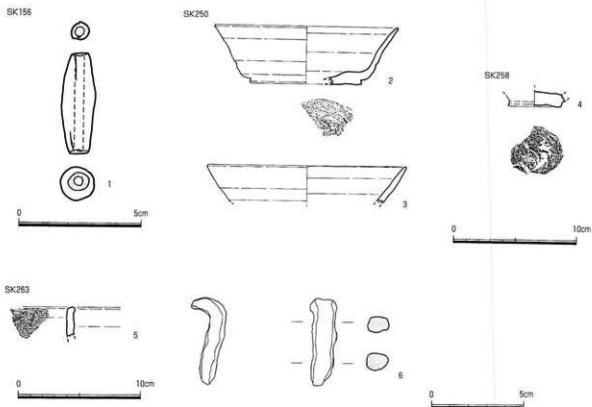
2・3は土師器環である。2は、復元口径14.8cm、器高4.7cm、復元底径9.0cmを測り、器面調整は内外面ともにロクロナデで、外面の底部付近は成形時の水挽き痕を残す。また、底部は、回転系切り痕を残す。3は、復元口径16.0cmを測り、器面調整は内外面ともロクロナデを施す。

SK258

当遺構は、削平を受けており、現状で長さ230cm、幅145cm、深さ18cmを測る。

出土遺物 (第146図)

4は土師器小環である。底径4.3cmを測る。器面調整は内外面ともロクロナデで、底部は回転系切り痕を残す。



第146図 A区 SK156・SK250・SK258・SK263 出土遺物実測図（土鍾（2/3）、鉄釘（1/2）、他 1/3）

SK263

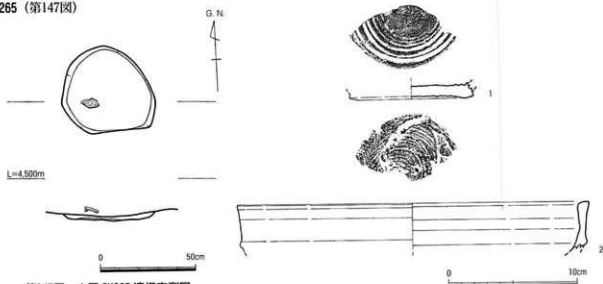
当遺構は長方形のプランを持ち、現状で長さ170cm、幅92cm、深さ42cmを測る。

出土遺物（第146図）

5は、土師質土器鍋である。内面には横方向のナデが施される。

6は、鉄釘である。形状はL字状を呈している。現状で長さ4.75cm、幅1.2cm、厚さ0.9cmを測る。

SK265（第147図）



第147図 A区 SK265 遺構実測図
・断面見通し図（1/20）

第148図 A区 SK265 出土遺物実測図（1/3）

当遺構のプランは、ほぼ円形を呈し、現状で直径49cm、深さ3cmを測る。土師器環と土師質土器焙烙が出土している。環は、遺構の上面から、内面見込み部分を上にした状態で出土した。

出土遺物 (第148図)

1は土師器環で、復元底径8.4cmを測る。見込み部分にはロクロナデを施し、底部には回転糸切り痕を残す。

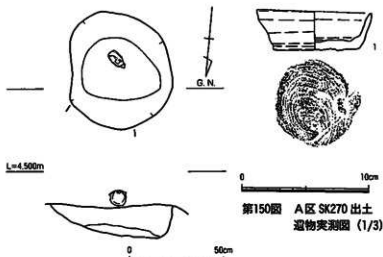
2は土師質土器焙烙である。復元口径27.3cmを測る。内外面とも回転ヨコナデを施す。

SK270 (第149図)

当遺構は、不整な円形を呈し、現状で長さ60cm、幅53cm、深さ18cmを測る。上層から土師器小環が1点出土した。この環は土層観察から、遺構の廃棄時或いは、埋没過程のものと判断される。

出土遺物 (第150図)

1は土師器小環である。法量は、口径8.4cm、器高3.0cm、底径6.6cmを測る。器面調整は、内外面ともロクロナデを施す。底部には、回転糸切り痕を残す。

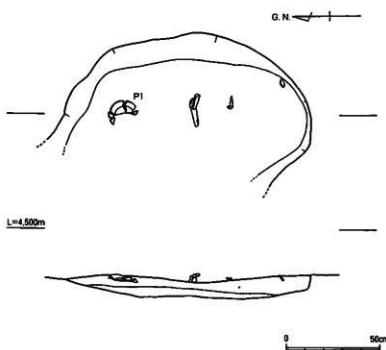


第149図 A区 SK270 遺構実測図・断面見過し図 (1/20)

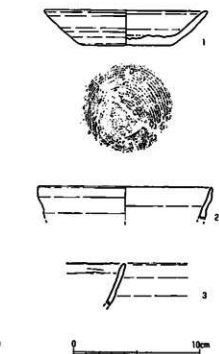
第150図 A区 SK270 出土遺物実測図 (1/3)

SK280 (第151図)

他の遺構に掘削されており、本来の遺構形状は不明だが、現状で長さ129cm、深さ11cmを測る。土師器環2点、瓦器碗1点、獣骨が出土した。土師器環(P1)は、見込み部分を上にに向けた状態で上層より出土し、獣骨も上層より



第151図 A区 SK280 遺構実測図・断面見過し図 (1/20)



第152図 A区 SK280 出土遺物実測図 (1/3)

り出土している。土師器環(P1)は、埋土中から出土した他の土師器片と接合し、ほぼ完形に復元できた。このことより、当初、土師器環(P1)は、完形で破損しておらず、見込み部分を上に向けた状態であったと考えられ、土師器環(P1)と骸骨は、意図的に廃棄或いは埋設された可能性がある。

出土遺物 (第152図)

1 (P1) は、土師器環である。この環は、ほぼ完形で、口径12.7cm、器高2.8cm、底径6.9cmを測る。器面調整は、内外面ともロクロナデを施すが、外面の底部付近は成形時の水挽き痕を残す。底部には回転糸切り痕を残す。2は、土師器環である。復元口径13.6cmを測る。器面調整は、内外面ともロクロナデを施す。

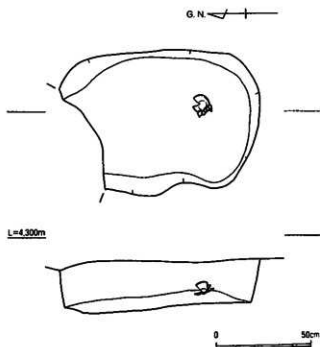
3は、瓦器碗である。器面調整は、内外面ともナデの後にミガキ調整を施している。

SK285 (第153図)

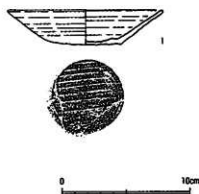
近世墓に一部削平されているが、長方形のプランをであったと考えられる。現状で長さ104cm、幅75cm、深さ27cmを測る。土師器皿が、見込み部分を上に向けた状態で、土層より出土した。土層観察や土師器皿の出土状況から、皿の見込み部分を意図的に上に向け、廃棄或いは埋設した可能性が考えられる。また、墓壇の可能性も指摘される。

出土遺物 (第154図)

1は土師器皿である。口径12.0cm、器高2.7cm、底径5.6cmを測る。内面と外面口縁部はロクロナデを施す。外面は、成形時にへら挽きをおこなっているため、稜が見られる。また、器壁が薄くなるように成形している。底部には板状圧痕が残り、その下には回転糸切り痕が見受けられる。



第153図 A区 SK285 遺構実測図・見通し断面図 (1/20)



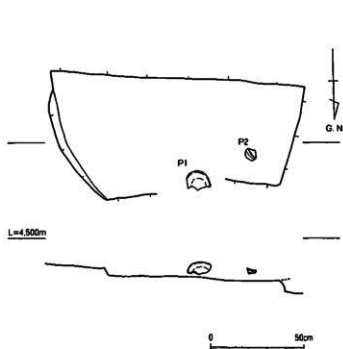
第154図 A区 SK285 出土遺物実測図 (1/3)

SK360 (第155図)

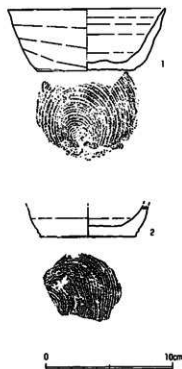
当遺構は、近世墓によって大幅な削平を受けており、遺構の平面形状は不明である。土師器環が2点出土している。

出土遺物 (第156図)

1・2は土師器環である。1 (P1)は、口径12.4cm、器高4.8cm、7.65cmを測り、2 (P2)は、復元底径7.4cmを測る。1 (P1)は内外面ともロクロナデを施し、底部は回転糸切り痕を残す。2 (P2)は、内外面ともロクロナデを施すが、外面の底部付近は成形時の水挽き痕を残す。



第155図 A区 SK360 遺構実測図・断面見通し図 (1/20)



第156図 A区 SK360 出土遺物実測図 (1/3)

SK585

当遺構からは、元祐通寶が出土している。(第V章2参照)

SK630 (第157図)

当遺構は、長土坑で、長さ321cm、幅124cm、深さ36cmを測る。礎が2点、並んだ状態で最下層から出土している。

SK643

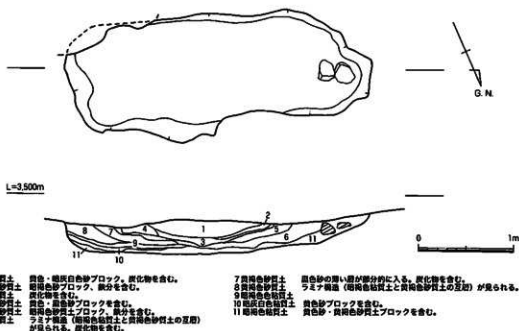
当遺構は、円形のプランを持ち、現状で直径65cm、深さ41cmを測る。

出土遺物 (第158図)

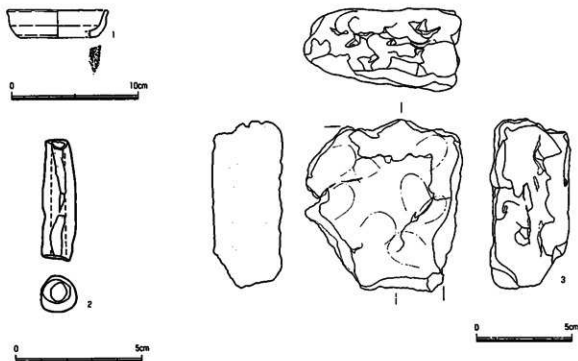
1は土師器環である。復元口径7.75cm、器高2.15cm、復元底径6.0cmを測る。器面調整は内外面ともロクロナデを施すが、底部付近に成形時の水挽き痕を残す。底部は回転糸切り痕を残す。

2は土師質で細形土管形の有孔土罐である。上端面にのみミガキ調整が施されている。掛け紐によると推測される、若干の欠損が上端付近に、圧痕が表面中央の上端から下端にかけて認められる。

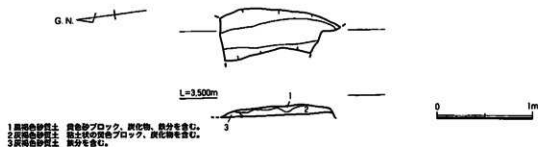
3は壁土と考えられる。厚さ3.7cmを測る。一方の面には指頭圧調整痕が残る。また、器面には繊維質の圧痕が見受けられる。



第157図 A区 SK630 遺構実測図・土層断面図 (1/40)



第158図 A区 SK643 出土遺物実測図 (土師器 1/3・土罐 2/3・土壁 1/2)



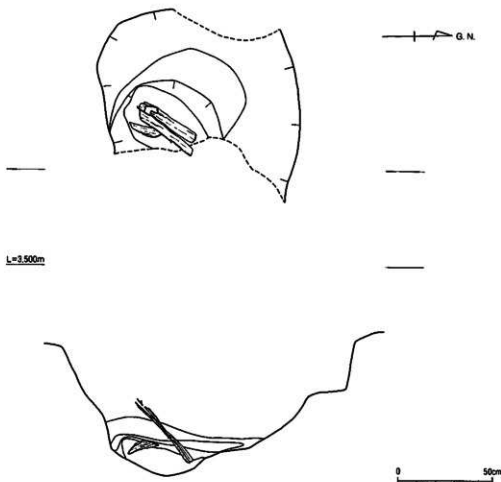
第159図 A区 SK680 遺構実測図・土層断面図 (1/40)

SK680 (第159図)

遺構の両端を他の遺構に削平されており、平面形状と長さは不明で、現状で幅42cm、深さ9cmを測る。遺物は出土していないが、他構との重複状況から中世以前に比定される。また、この遺構は、N-1°-W建物軸の竪立柱建物跡と主軸が同じであり、この軸の竪立柱建物跡に伴う土坑の可能性もある。

SK730 (第160図)

遺構の両端を他の遺構に削平されており、平面形状と長さは不明で、現状で幅101cm、深さ66cmを測る。木製の板材が出土した。当遺構の周囲は、溝状遺構や井戸遺構が密集している。特に SE290・SE450・SE820 とは切り合い関係にあり(新)SE290→SK730→SE450・SE820(旧)となっている。SE290では切石で組まれた井戸枠、SE820では曲げ物の井戸桶、SE450では小口積みで組まれた石の井戸枠と曲げ物の井戸桶が、それぞれ確認されている。当遺構は、板材の出土や遺構の立地から、これらの井戸遺構と関連する可能性がある。

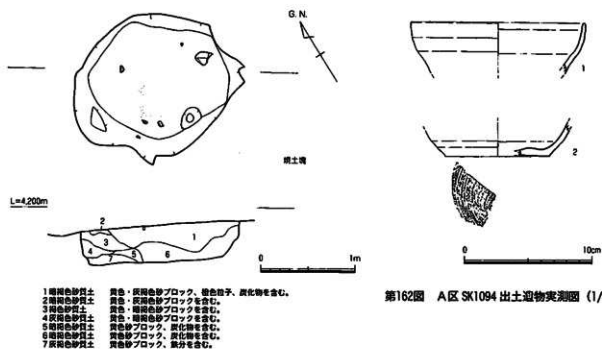


第160図 A区 SK730 遺構実測図・断面見過し図 (1/20)

SK1094 (第161・162図)

当遺構は、他の遺構からの削平を受け、不定形な形をしており、現状で長さ165cm、幅147cm、深さ40cmを測る。遺構内から土師器坏、碟、焼土塊などが出土した。遺物の多くは、土師器の破片で、それらは第1層～第4層より出土している。出土遺物の種類・状態、出土状況を鑑みると、廃棄されたものと考えられる。

出土遺物 (第162図)



第162図 A区 SK1094 出土遺物実測図 (1/3)

第161図 A区 SK1094 遺構実測図・土層断面図 (1/40)

1・2は土師器坏である。1は、復元口径13.4cmを測り、器面調整は内外面ともロクロナデを施す。2は、復元底径8.1cmを測る。器面調整は、内外面ともロクロナデで、底部は回転糸切り痕を残す。

溜池状遺構 (第163図)

大在地区は、砂丘列地形であるため、遺構面は砂質土上に形成される。砂質土は、保水力が弱く、本来は水田耕作に向かないが、この地区に住まう人々は、溜池を作ることによって、その弱点を補おうとした。

A区において検出された溜池状遺構は、一段高い調査区北側に作られ、また、掘立柱建物群との配置関係にも注目する必要がある。

灌漑用の溜池か或いは池状遺構であるかの判断には、慎重を要するが、本遺構の深さが湧水レベルまで達していない点において、どちらの観点においても「水を溜める」という機能の保持においては困難なものであった点が指摘できる。

SX260 (第164図)

SX260は、楕円形の溜池状遺構である。SD221とSD222という採水の用途が考えられる新田2条の水路が取り付く。溜池の北端は、SD003群により削平を受けており全長は不明であるが、南北幅は10mを超えないものと考えられる。現状では、東西幅約6.4m、南北幅約8.4+ α mを測る。SD221とSD222は、方位N-14°-Wの掘立柱建物群と方位を同一にし、建物群の背後を区画していたと考えられ、背割り溝的な機能も果たしていたと考えられる。

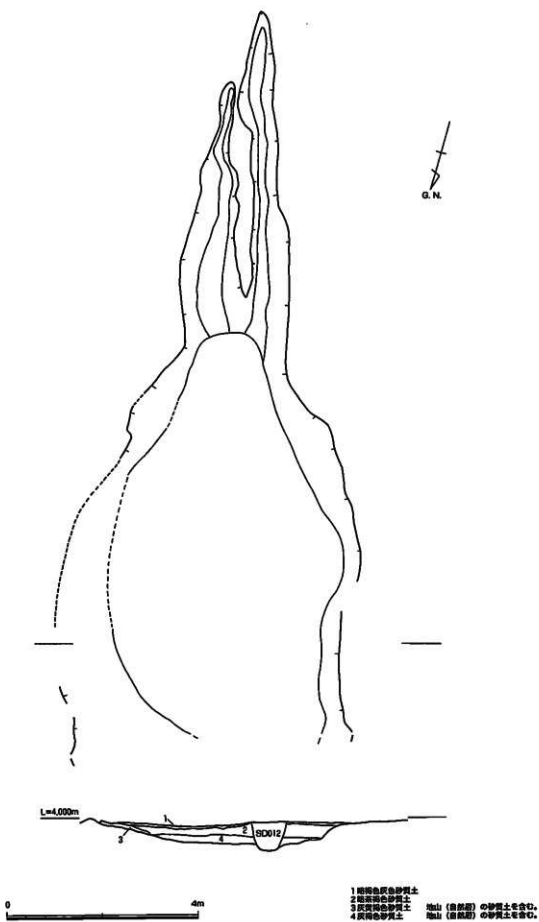
出土遺物 (第165～167図)

1～5は、土師器環である。1・2は、口縁部で、体部から口縁部にかけて外反する。1は、復元口径11.9cm、2は12.2cmを測る。3～5は、底部である。いずれも外底面に回転糸切り痕を残す。3は、底径6.8cmを測る。4は、底径5.8cmを測る。5は、底径6.2cmを測る。

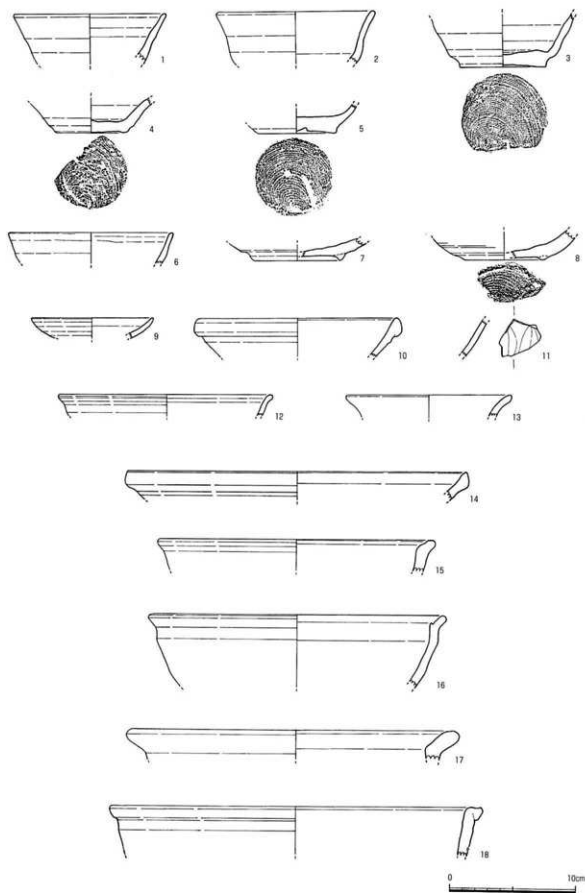
6～8は、瓦師碗である。6は、口縁部で、復元口径12.8cmを測る。口唇部内外面にミガキ調整が施されている。7・8は、高台部である。7は、復元高台径6.9cmを測る。8は、復元高台径6.2cmを測る。それぞれ、貼り付け高台であるが、7の外底面の回転糸切り痕はナデ消されている。



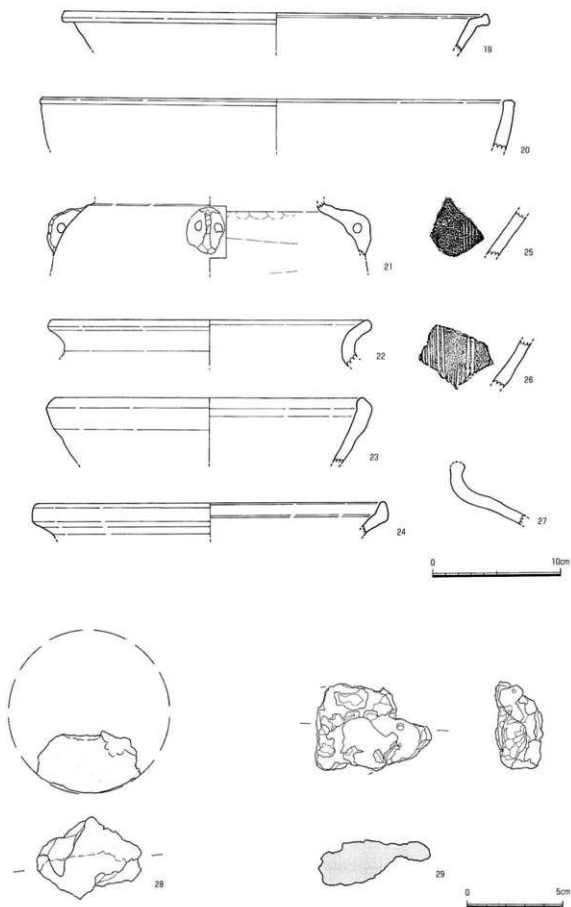
第163図 A区溜池状遺構配置図 (1/400)



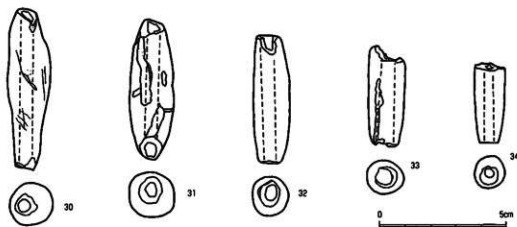
第164図 A区 SX260 遺構実測図・土層断面図 (1/80)



第165図 A区 SX260 出土遺物実測図① (1/3)



第166図 A区 SX260 出土遺物実測図② (羽口・鉄滓 1/2、他 1/3)



第167図 A区 SX260 出土遺物実測図③ (2/3)

7・8ともに、東国東型瓦器碗のⅡ型式に該当し、13世紀前半前後頃の所産であると考えられる。

9は、中国産白磁皿である。復元口径9.6cmを測る。森田分類D群に該当するものである可能性が高い。10は、玉縁状口縁の白磁碗である。復元口径15.8cmを測る。大宰府分類碗Ⅳ類に該当し、C期(11世紀後半～12世紀前半)・D期(12世紀中頃～後半)に比定される。

11～13は、龍泉窯系青磁碗である。11は、体部で、片切彫りの蓮弁文裝飾が施されている。上田分類B-1類に該当するものである。12・13は、口縁部が外反する碗である。それぞれ、12は復元口径16.8cm、13は復元口径12.9cmを測る。12・13ともに、14世紀後半～15世紀頃の所産であると考えられる。

14は、東播系中世須恵器こね鉢で、復元口径27.3cmを測る。第Ⅱ期第2段階に該当し、12世紀末～13世紀初頃の製品であると考えられる。

15～19は、土師質土器鍋である。15～17は、口縁部が外反するものである。15は、復元口径27.7cmを測り、外面に指頭圧調整痕が、内面にハケメ調整痕が観察される。16は、復元口径22.9cmを測る。17は、復元口径25.5cmを測る。18は、復元口径29.4cmを測り、口縁部外側に鈎状に緑帯が付けられる。19は、復元口径33.2cmを測り、口縁部は、外反した後、つまみ上げられたかのように直立する。20は、復元口径36.8cmを測る。

21～27は、瓦質土器である。21は、茶釜で、紐が1カ所残存している。外面がかなりの被熱を受けており器面がはじけている。22は、壺である。復元口径25.0cmを測る。23・24は、鉢である。23は、復元口径24.2cmである。外面に指頭圧調整痕が、内面にハケメ調整痕が観察される。24は、復元口径26.9cmである。25・26は、楕鉢である。外面に指頭圧調整痕が観察される。内面には、磨り目が施されている。27は、壺である。内外面ともに二次被熱を受けて赤変している。

28は、土師質の輪郭口である。直径8.6cmが復元される。

29は、碗形滓である。

30～34は、土鍾である。30・31は、土師質で細形紡錘形の有孔土鍾である。31は、外面に網によると考えられる擦痕が若干見られる。また、掛け紐によると推測される欠損が上端に認められる。32は、掛け紐によると推測される、欠損が上下端に、圧痕が表面左上から下端中央にかけて認められる。また、外面に網によると推察される若干の擦痕が見られる。32～34は、土師質で細形土管形の有孔土鍾である。32は、上端には掛け紐によると考えられる欠損が認められる。33は、上半を欠損している。掛け紐によると推測される、若干の欠損が裏面下端に、圧痕が表面左寄りに中央部から下端にかけて認められる。34は、下端がやや細くなっている。上半は欠損している。下端はヘラ切り。使用痕は認められない。

性格不明遺構 (第168図)

機能が不明かいは不確実な遺構として、SX200とSX390・SX420の3つの遺構を挙げた。

SX200 (第169図)

SX200は、扁平な川原石を、サンワ土状の土を用いて浅い掘り込み内に固定したものである。掘り込みは、楕円形で長軸52cm、短軸37cmを測る。川原石の上面は、摩滅して光沢を放っており、川原石上面を使用する遺構と考えられる。遺構の機能としては、SD012が取り囲むA墓群を望むように配置されていることから、墓群に折りを擧げる基壇調のものである可能性が考えられる。栃木県下古館遺跡では、同様の遺構が竪柱建物跡の開口側に配置されることから、建物に対する上り口遺構であると考えられている。

SX390

SX390は、整地層である。整地土は、地山直上に造成された黒色砂質土層である。

出土遺物 (第170図)

1～4は、土師器杯の底部で、法量は、それぞれ、1は復元底径7.1cm、2は復元底径7.6cm、3は復元底径9.25cm、4は復元底径8.5cmを測る。いずれも、回転糸切り痕を残す。

SX420

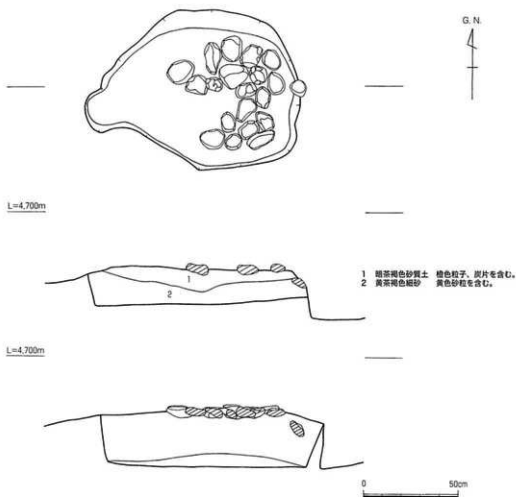
SX420は、溜まり状の窪みに施された整地層である。整地土は、黒色砂質土層である。

出土遺物 (第170図)

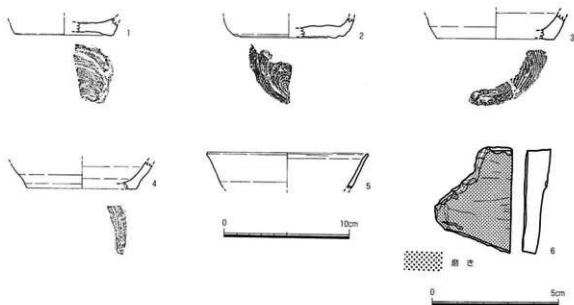
5は、中国産白磁碗の口縁部である。口ハゲの皿で、復元口径12.6cmを測る。大宰府分類ⅢIX類に該当し、大宰府磁器編年F期(13世紀中頃～14世紀初頭前後)の標識磁器である。6は、天草石製の礫石である。裏から表への折れで左側縁・下半を欠損している。表裏面・左側面に磨き整形が施されている。裏面は上端の一部を除いて剥落している。表面には左～右の研ぎによる擦痕が見られる。



第168図 A区性格不明遺構配置図 (1/400)



第169図 A区 SX200 遺構実測図・土層断面図・断面見通し図 (1/20)



第170図 A区 SX420 出土遺物実測図 (砥石 2/3、他 1/3)

近世・近代墓群 (第171図)

角子原の明治初頭における地籍図を参照すると、当調査区の北側には、埋葬地という記述が成されている。墓域は大きく3つに分けることができる。便宜上、A群とB群、C群に分けて記述をおこなう。当報告においては、人骨及び棺材・遺物が検出された墓域のみ、個別実測図を掲載した。

- A群 ST210・ST215・ST216・ST217・ST220・ST237・ST243・ST244・ST245・ST246・ST247・ST252・ST254・ST261・ST278・ST282・ST296・ST297・ST303・ST306・ST317・ST322・ST323・ST326・ST327・ST329・ST338・ST342・ST364
- B群 ST296・ST297・ST298・ST299・ST300・ST301・ST302・ST303
- C群 ST005・ST014

A群 (第172図)

A群は、前述のごとく、SD012により墓域を画されている一群である。比較的新しい墓域に関しては、逆に、SD012に規制を受けて墓域列が形成されている。切り合い状況による遺構の新旧関係から、平面形状に方形を採る遺構が新しく、平面形状に円形を採る墓域が古いという傾向が把握される。

ST210 (第173図)

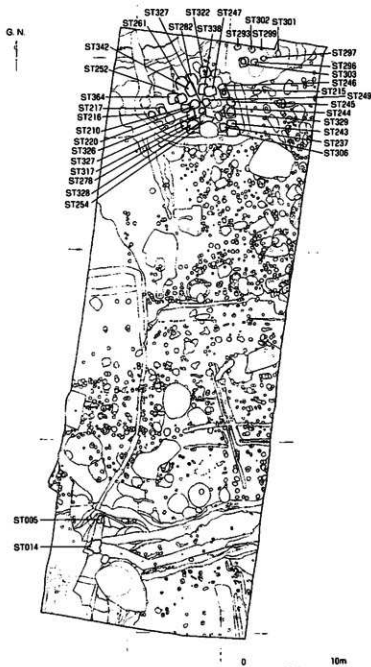
掘形の平面形状に方形プランを採る墓域で、座棺を埋葬した墓域であると推定される。人骨が検出されており、下顎骨や四肢骨の一部が出土している。

ST220 (第173図)

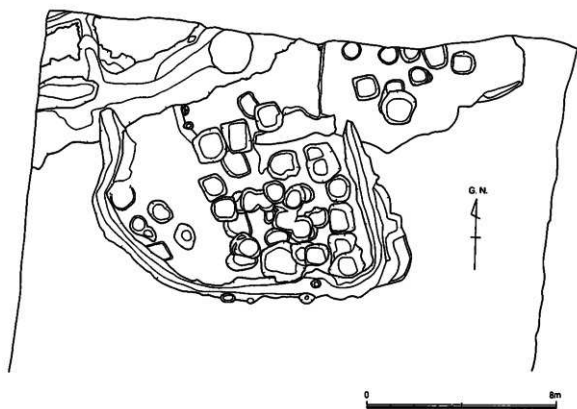
掘形の平面形状に円形プランを採る墓域である。早稲を埋葬した墓域であると推定される。人骨が検出されており、頭骸骨や四肢骨の一部が出土している。

ST216 (第174図)

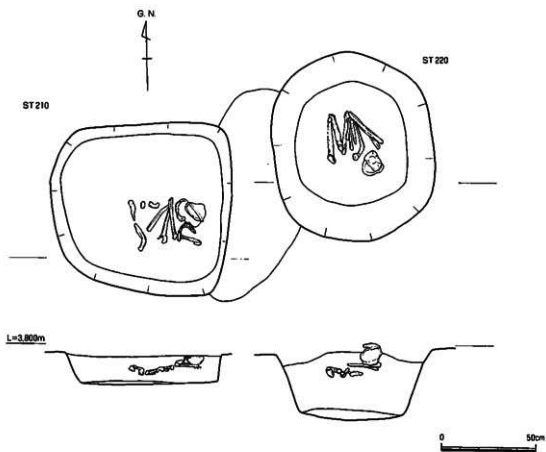
掘形の平面形状に円形プランを採る墓域である。早稲を埋葬した墓域であると推定される。人のものと考えられる歯が出土している。



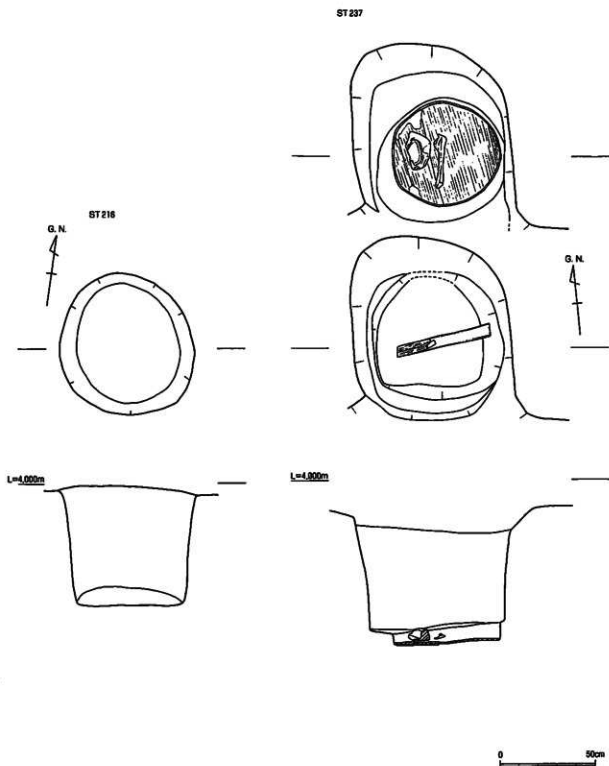
第171図 A区近世・近代墓域配置図 (1/400)



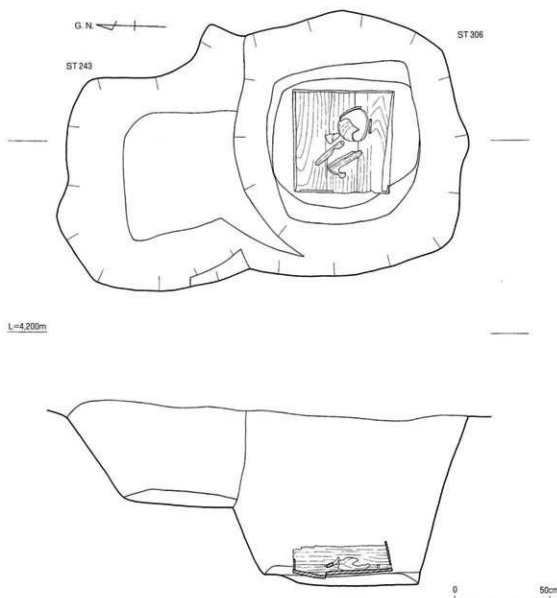
第172図 A区近世墓A・B群遺構実測図 (1/160)



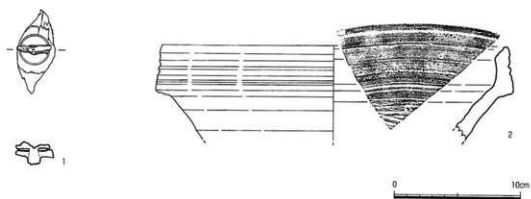
第173図 A区 ST210・ST220 遺構実測図・断面見通し図 (1/20)



第174図 A区 ST216・ST237 遺構実測図・断面見通し図 (1/20)



第175図 A区 ST243・306 遺構実測図・断面見通し図 (1/20)



第176図 A区 ST323・ST342 出土遺物実測図 (1/3)

ST237 (第174図)

掘形の平面形状に円形プランを採る墓墳である。墓墳底面から、早桶の底が検出された。また、早桶底の下からは、早桶を運搬する時に用いたと考えられる板材が出土している。人骨が検出されており、骨盤と脚の骨と考えられる部分が出土している。

ST306 (第175図)

掘形の平面形状に方形プランを採る墓墳である。墓墳底面から、座棺の底が検出された。人骨が検出されており、頭骸骨や四肢骨の一部が出土している。

ST323

掘形の平面形状が方形プランを採る墓墳である。

出土遺物 (第176図)

掘り下げ時に、棺材の一部であると考えられる板状の木材が出土している。木材には、割りピン状の紙で銅銭が固定されている。

ST342

掘形の平面形状が方形プランを採る墓墳である。

出土遺物 (第176図)

遺構検出時に、備前焼掘鉢の口縁部が出土している。口径27.2cmが復元される。掘鉢内面には、交差摺り目が確認され口縁部の形状から、乗岡編年近世Ⅰ期(16世紀後半～17世紀初頭)に該当するものと考えられる。

B群 (第172図)

B群は、区画整理の際に、改葬がおこなわれているようで、墓墳の上位は削平を受けていた。

ST297 (第177図)

掘形の平面形状に楕円形プランを採る墓墳である。墓墳底面からは、早桶の底が検出された。

ST296 (第177図)

掘形の平面形状は、本来、方形プランを採る墓墳であると考えられる。墓墳底面からは、早桶の底が検出された。

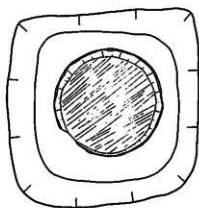
ST303 (第177図)

掘形の平面形状に方形プランを採る墓墳で、墓墳底面からは早桶の底が検出された。早桶は、棺材の位置から、墓墳中央に埋置されたことが確認できた。

ST298 (第178図)

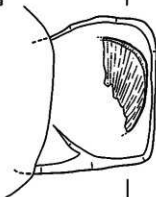
掘形の平面形状が円形プランを採る墓墳である。墓墳底面から、早桶の底が検出された。

ST 303



L=3.500m

ST 298



L=3.500m

G.N.

ST 287



L=3.500m



0 50m

ST299 (第178図)

楕形の平面形状が円形プランを採る墓墳である。墓墳底面から、早桶の底が検出された。棺内からは、蓋材と考えられる板材が出土している。

ST301 (第178図)

楕形の平面形状が方形プランを採る墓墳である。墓墳底面から、座棺の底が検出された。

C群

C群に関しては、近・現代の遺物が出土しており、ここでは出土した遺物のみを紹介する。

出土遺物

ST005 (第179図)

1は、安山岩系石材の石臼である。

ST014 (第179図)

2は、結晶片岩製の石鍾である。扁平な剥片を素材とし、先ず面的な調整を施している。その後、周縁に整形のための二次加工を行ない、更に下端中央、右側縁上半、左側縁中央に打ち欠きによる抉りを入れている。表裏面に縦横2方向の掛け紐によると推測される浅い窪みが看取される。

ST 298



L=3,500m



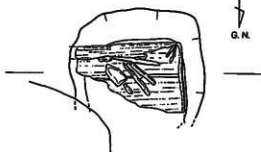
ST 299



L=3,500m



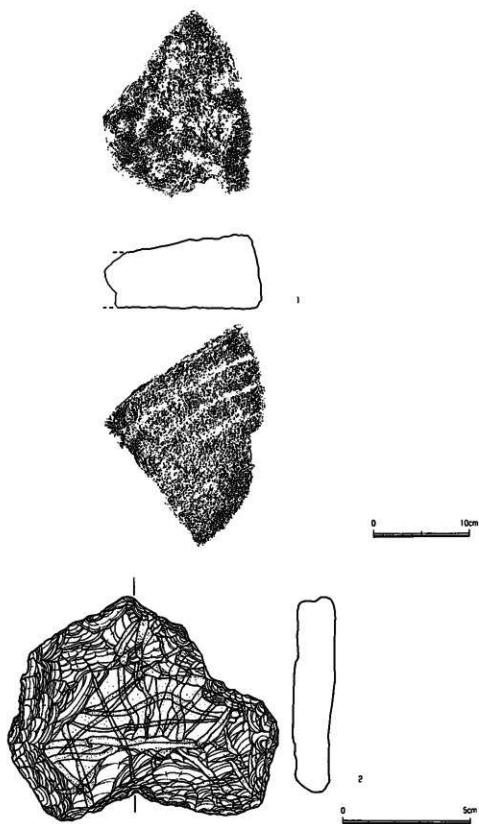
ST 301



L=3,500m



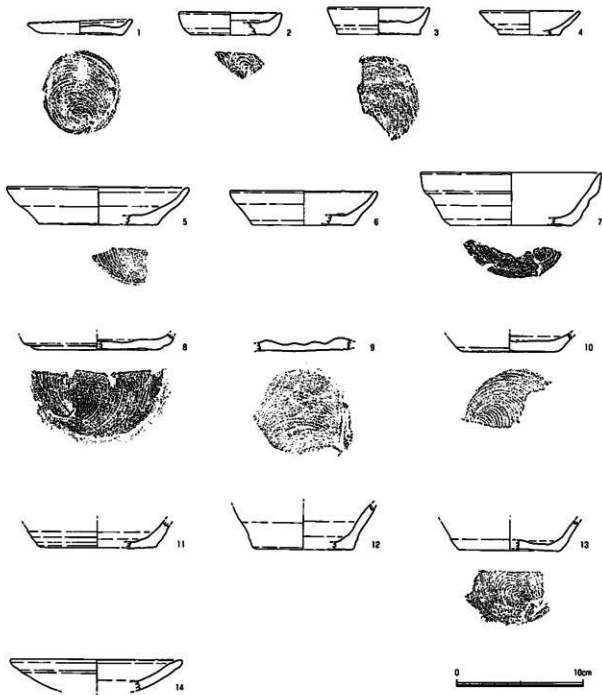
第178図 A区 ST298・ST299・ST301 遺構平面図・断面見通し図 (1/20)



第179圖 A区 ST005・ST014 出土遺物実測図 (石白 1/4、石離 2/3)

A区グリッド出土遺物及び一括遺物 (第180～186図)

1～4は土師器小皿である。1は口径7.9cm、器高1.05cm、底径6.1cm、2は復元口径8.0cm、器高1.76cm、復元底径6.3cm、3は復元口径7.95cm、器高2.15cm、復元底径6.6cmを測る。1～3の器面調整は内外面ともロクロナデで、底部は回転糸切り痕を残す。4は、復元口径7.6cm、器高1.9cm、復元底径4.8cmを測る。器面調整は内外面ともロクロナデを施し、内面の一部に不定方向のナデが施される。底部は回転糸切り痕を残す。5～13は土師器坏である。5は復元口径14.0cm、器高3.0cm、復元底径9.1cm、6は復元口径11.6cm、器高2.6cm、復元底径8.1cm、7は復元口径14.1cm、器高4.15cm、復元底径9.6cmを測る。5・6の器面調整は、内外面ともロクロナ



第180図 A区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図① (1/3)

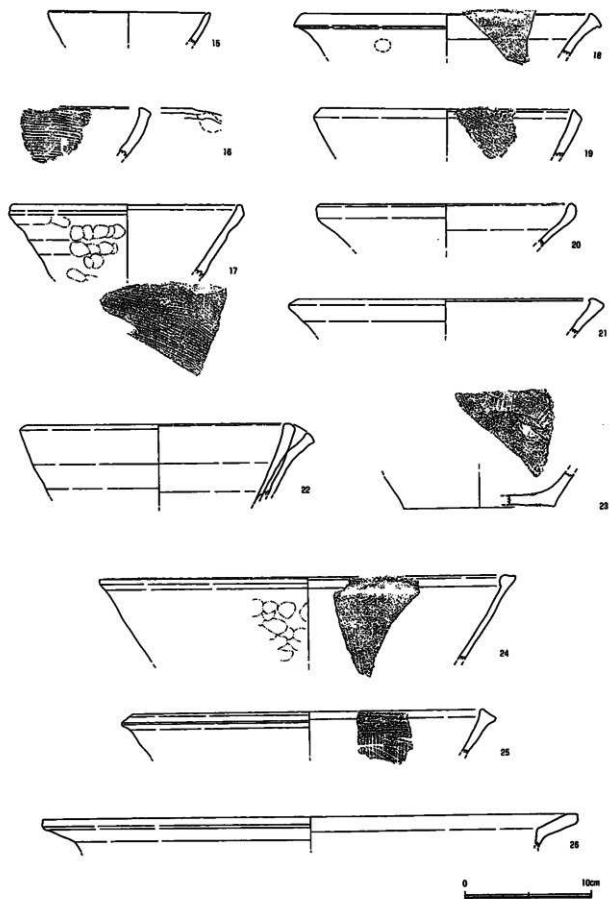
デで、底部には回転系切り痕を残す。7は内外面ともロクロナデを施すが、外面の底部付近に成形時の水挽き痕を残す。それぞれの復元口径は、8が9.1cm、10が9.3cm、11が7.7cm、12が8.0cm、13が8.0cmを測る。8～10・12・13の器面調整は内外面ともロクロナデを施し、底部は回転系切り痕を残す。11は、内外面ともロクロナデを施すが、外面底部付近に成形時の水挽き痕を残す。14は土師器Ⅲ(京部系土師器Ⅲ)である。復元口径13.3cmで、内面と外面の口縁部はヨコナデを施す。また、口縁端部はヨコナデにより、やや外反し、外面には沈線が残る。

15は瓦器碗である。復元口径12.6cmを測る。器面調整は内外面ともミガキを施す。

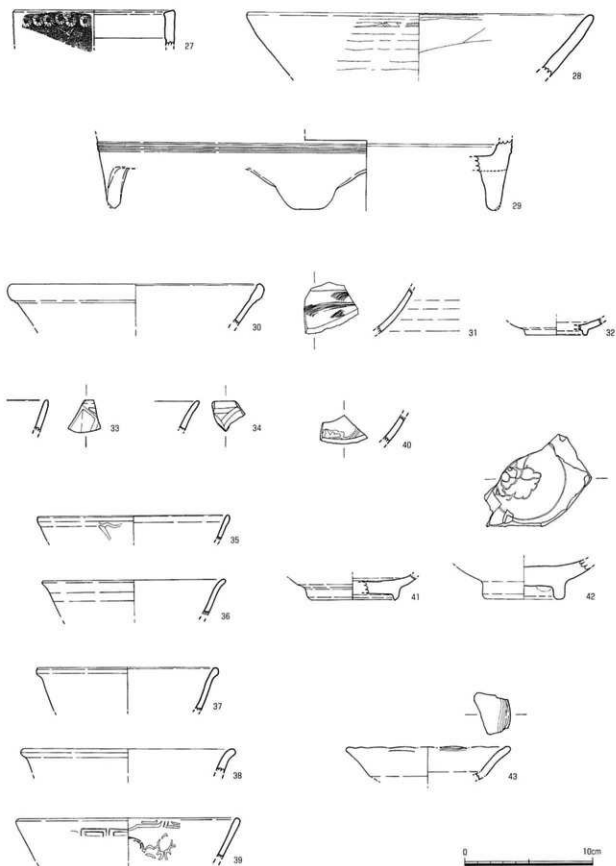
16～21は瓦質土器こね鉢である。16は、注口部分に近い。内面は横方向のハケメを施し、外面は口縁部にハケメを、その下位はナデを施す。17は復元口径17.8cmを、19は19.8cmを測る。ともに内面はハケメで、外面の口縁部付近は回転ヨコナデを施す。17は、外面口縁部の下位に、指頭圧調整痕が残る。18は、復元口径22.7cmを測る。内面と外面の口縁部は回転ヨコナデを施し、外面の口縁部下位には指頭圧調整痕を残す。20は復元口径19.8cmを測る。内面口縁部および外面にナデを施す。21は復元口径23.0cmを測る。内面と外面口縁部に回転ヨコナデを施す。防長系揃鉢の可能性もある。22～25は瓦質土器揃鉢である。22は、復元口径26.0cmを測る。注口部で、内面と外面口縁部付近にナデを施し、外面口縁部下位には指頭圧調整痕を残す。23は復元口径11.8cmを測る。摺り目は5条・単位で、内外面ともナデを施す。備前焼の可能性もある。24は防長系揃鉢である。口縁内部に半円系の粘土帯を貼り付けている。内外面とも口縁部はナデを施し、口縁部以下の内面はハケメを、外面はナデを施す。岩崎編年Ⅱ期にあたり15世紀頃のものと考えられる。25は復元口径27.8cmを測る。内外面とも器面は回転ヨコナデを施す。26は瓦質土器鍋である。復元口径42.1cmを測る。器面調整は、内外面とも回転ヨコナデを施す。27は瓦質土器香炉である。復元口径12.4cmを測る。器面調整は内外面とも回転ヨコナデを施し、内面には粘土帯の織目が残る。口縁部外面には菊花文のスタンプが施される。28・29は瓦質土器火鉢である。28は復元口径27.0cmを測る。器面調整は内外面ともハケメを施した後に、ミガキを施す。29は口径32.0cmを測る。足が貼り付けられている。器面調整は内外面ともナデが施され、外面には凸線が2条施される。

30～32は中国産白磁碗である。30は大宰府分類Ⅳ類で、C期(11世紀後半～12世紀前半)に比定される。復元口径19.5cmを測り、胎土、釉ともに灰色味がかった白色を呈する。31の胎土は灰色味がかった白色、釉は黄色味がかった白色を呈し、内面に御目文を施す。32は大宰府分類Ⅴ類で、D期(12世紀中頃～後半)に比定される。復元口径4.8cmを測る。胎土・釉ともに灰色味がかった白色を呈する。内面見込みの釉は輪状に拭き取られ、外面は胴部下端から高台内にかけて無釉である。

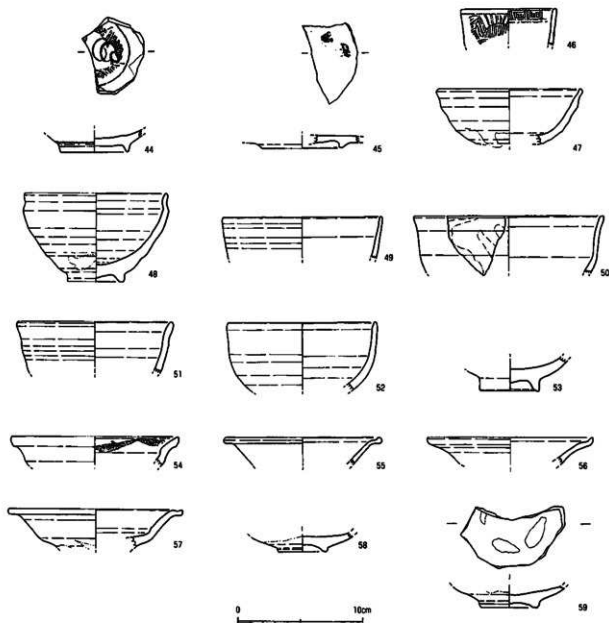
33～42は龍泉窯系青磁碗、43は龍泉窯系青磁皿である。33～35は片切彫りの蓮弁文を有し、上田分類B類にあたる。33・34は上田分類B-I類で、13世紀末～14世紀初頭に比定される。胎土は灰色、釉はくすんだ緑色を呈する。35は上田分類B-Ⅲ類で15世紀のものと考えられる。復元口径14.7cmを測り、胎土は淡灰色、釉はくすんだ緑色を呈す。36～38は口縁が外反しており、上田分類D-II類にあたる。口縁部形態が36から38へと変化し、作りが鈍くなっていく。時期は36が14世紀後半で、37・38が15世紀頃のものと考えられる。36は復元口径14.0cmを測る。胎土は灰色、釉は灰色味がかった緑を呈する。37は復元口径14.0cmを測り、胎土は灰色、釉はくすんだ緑を呈する。38は復元口径16.4cmをはかり、胎土は灰白色で、釉は緑を呈する。39は上田分類C-II類で、15世紀頃のものと考えられる。復元口径17.1cmを測る。内外面の口縁部に雷文帯、内面の胴部に文様が片切彫りで描かれる。胎土は淡灰色、釉は緑色を呈する。40は片切彫りの文様が胴部内面に描かれる。胎土は淡灰色、釉は緑色を呈する。上田分類C-II類の可能性もある。41は復元高台径6.6cmを測る。胎土は黄色味がかった淡灰色で、釉は茶黄色を呈する。高台内は無釉で、内面の見込みも円形に釉剥ぎされる。外面の釉には、貫入が認められる。42は復元高台径5.95cmを測る。胎土は淡灰色で、釉は灰色味がかった緑を呈し、貫入が認められる。高台の内側まで施釉し、底部は無釉である。内面見込みにスタンプ文がある。43は復元口径12.6cmを測り、胎土は淡灰色、釉は黄色味がかった緑色を呈する。口縁端部に輪花を有し、二又片刀で分割線が描かれている。



第181図 A区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図② (1/3)



第182図 A区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図③ (1/3)



第138図 A区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図④ (1/3)

44 は中国産染付碗である。小野分類染付碗C群で、15 世紀後半～16 世紀前半に比定される。復元底径 5.2 cm を測る。外面は胴部と高台の境に界線を、内面は見込み部分に法螺貝と考えられる文様が描かれている。皿付きのみ露胎になっている。45 は肥前系磁器染付皿である。大橋編年Ⅲ期のもので、1650～1690 年代に比定される。復元高台径 6.4 cm を測り、皿付きのみ露胎で、砂が溶着している。46 は肥前系磁器染付碗である。いわゆる筒型碗と呼ばれるもので、大橋編年Ⅴ期の中でも 1820～1860 年代に比定され、復元口径 7.6 cm を測る。口縁部内面の雷文帯などの文様が、線描きのみで描かれる。

47 は瀬戸美濃産天目碗である。復元口径 11.0 cm を測る。外面の軸は胴部の中ほどまで掛かり、内面の胴部下半に縦方向の窯変がある。断面には漆掻きの跡が見られる。48 は唐津系陶器天目碗である。大橋編年Ⅱ期のもので、

1600～1650年代に比定される。復元口径11.1cm、器高6.93cm、高台径4.4cmを測る。外面胴部下位から高台内にかけて無軸となっている。49～53は唐津系陶器碗である。49～51は、大橋編年Ⅱ期のもので、1600～1650年代に比定される。49は、器壁が薄く、復元口径12.6cmを測る。50は、復元口径14.8cm、51は復元口径12.0cm、を測る。52は、大橋編年Ⅲ期のもので、1650～1690年代に比定される。復元口径17.0cmを測る。53は、大橋編年Ⅱ期のもので、1600～1650年代に比定される。底径4.5cmを測り、皿付きのみ露胎で、高台内部に糸巾がある。54～59は唐津系陶器皿である。54・58はともに大橋編年Ⅰ期のもので、54は1594年～1610年代に、58は1580～1610年代に比定される。55～57・59は大橋編年Ⅱ期で、1600～1650年代に比定される。54は、復元口径13.2cmを測る鉄絵皿である。55～57は襷絵皿で、55は復元口径12.2cm、56は13.55cm、57は13.0cmを測る。58は、復元高台径3.9cmを測る胎土目積み段階の皿である。外面胴部下位から高台内にかけて無軸となっている。59は復元高台径3.9cmを測る。胴部下半から高台内は無軸で、内面の見込み部分に砂目積みの跡が少なくとも3ヵ所ある。

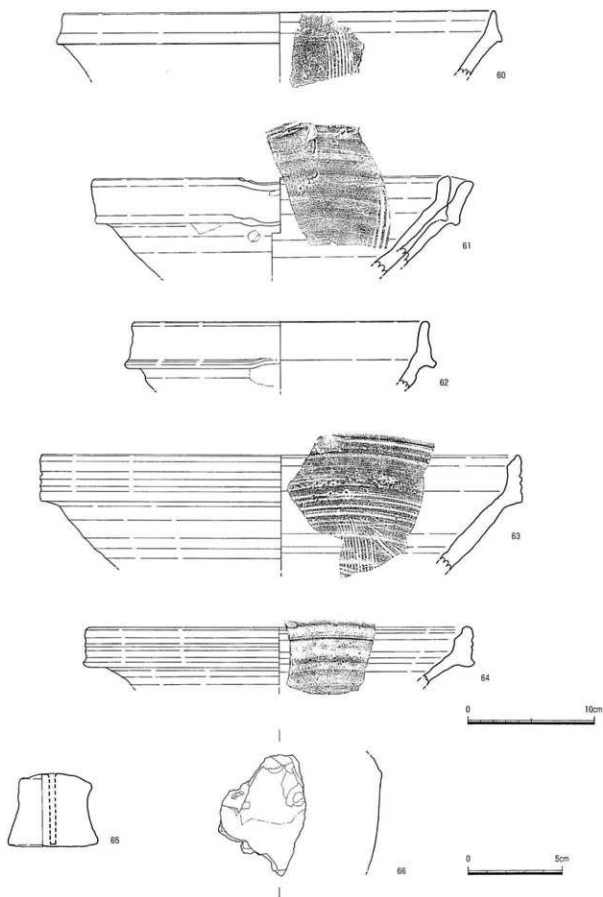
60～64は備前焼留鉢である。60は乗岡編年中世4期で、15世紀前半のものと考えられる。復元口径34.0cmを測る。口縁部断面は三角形で、器面は内外面とも回転ヨコナデを施し、茶褐色を呈する。61・62は乗岡編年中世6期のもので、16世紀前半に比定される。口縁部は薄板作りとなっている。61は復元口径28.0cmを測り、器面は内外面とも回転ヨコナデで、指ナデで注口部を成形している。口縁部に灰降りがある。62は23.0cmを測り、内外面とも回転ヨコナデで、口縁部外面に灰降りがある。指ナデで注口部を成形している。63は乗岡編年近世1b期で、16世紀末葉のものと考えられる。交差摺り目を持ち、口縁部は薄板作りで、外面に3条の凹線を持つ。復元口径は37.6cmを測り、器面は内外面とも回転ヨコナデで、胴部内面に灰降りが見られる。64は、交差摺り目をもつ、乗岡編年近世1c期のものと考えられ、17世紀初頭に比定される。口縁部断面は三角形で、外面には凹線が2条ある。器面は内外面とも回転ヨコナデを施す。

65は燗台である。土師質で、高さ7.0cmを測る。側面は縦方向に指ナデを施し、上面にはナデによりものと考えられる輪状の窪みがある。

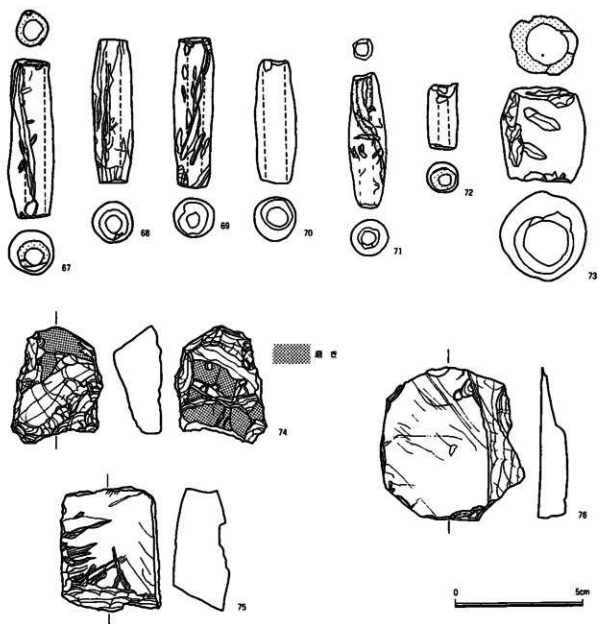
66は轆轤口である。内面が欠損している。弁内に入っていた部分が黒色に変色し、火眼れている。

67～73は土師である。67は土師質で細形土管形の有孔土師で、上下端面にはミガキ調整が施される。外面及び下端に網によると推測される擦痕が、外面左側に広い剥落が見られる。表面左上から下部中央にかけてと、裏面の対置する位置にも、掛け組によると推察される圧痕も認められる。また、表面下端及び裏面上端には掛け組によると思われる剥落が看取される。68は土師質で細形土管形の有孔土師だが、上下端が若干窄まる。上下端面はミガキ調整が施されている。外面に網によると考えられる擦痕が多く見られる。掛け組によると推察される、欠損が裏面上端付近に、圧痕が表面の上から下にかけて認められる。69は土師質で細形土管形の有孔土師で、上下端面にミガキ調整が施されている。掛け組によると推測される剥落が上端付近に、圧痕が表面右上から左下にかけて認められる。また、外面に網によると推察される擦痕が僅かに見られる。70は土師質で細形土管形の有孔土師である。裏面に見られる大きな欠損は掛け組によると考えられる。71は土師質で細形紡錘形の有孔土師で、圧痕が表面左上から右下にかけて認められる。掛け組によると推測される欠損が上下端に見られる。72は、土師質で細形土管形の有孔土師である。弥生～古墳時代の所産と考えられる。上半はガジリによると思われる欠損が認められる。73は土師質で太形矩形の有孔土師である。上端面は磨き調整が見られる。外面に使用によると推測される剥落が多い。口径はA区出土のものでは最大で1.75cmを測る。

74～76は石器である。74は天草石製の砥石である。左右側面下端面は欠損している。上端面及び表裏面に磨き整形が施されている。表面には右上←左下方向の研ぎによる凹みか顕著である。裏面には研ぎによる、左上→右下と右上←左下の二方向の擦痕と、上部に左上→右下方向の凹みか認められる。75は天草石製の砥石である。下半は裏から表への折れによる欠損が認められる。上端・左側面は切断による平坦面で、表裏面・右側面は磨き整



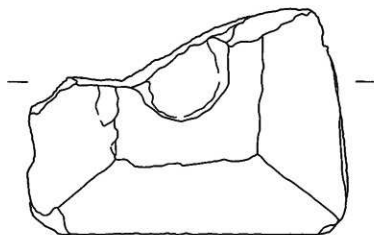
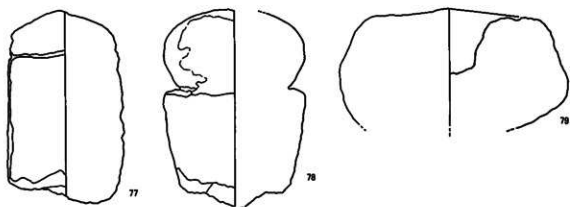
第184図 A区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図5 (羽口 1/2、他 1/3)



第185図 A区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図⑤ (2/3)

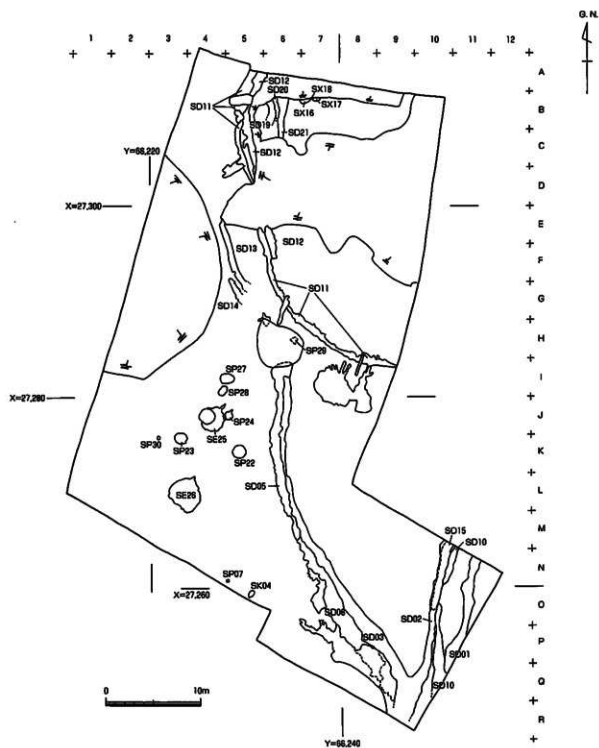
形が施されている。裏面は半ばが焼けによって剥落している。また、全面に使用後と考えられる焼けによる赤化が認められる。表面には左上ー右下と右上ー左下の二方向の研ぎによると推測される擦痕が認められる。また、裏面にも若干の擦痕が見られる。76は頁岩製の砥石である。右側縁は裏から表への折れによる欠損が認められる。表裏面・側面には磨き整形が施されているが、側面には若干の擦り切り痕も残存している。裏面上半は剥落している。表面には左上ー右下方向の研ぎによる擦痕が認められる。石材が良質で仕上げ砥石の可能性が高い。

77～80は、石塔である。77は、縦12.45cm、横12.4cm、高さ20.4cmを測る。78は、五輪塔の空風輪で、幅15.8cm、高さ20.6cm以上を測る。空輪の1側面、風輪の2側面に墨書で文字が記されている。79は、五輪塔の水輪で、幅23.6cm以上、高さ12.5cmを測る。80は、五輪塔の火輪で、縦23.7cm、横34.0cm、高さ12.0cmを測る。



第186図 A区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図⑦ (1/4)

2. B区



第187图 B区流網配置圖 (1/400)

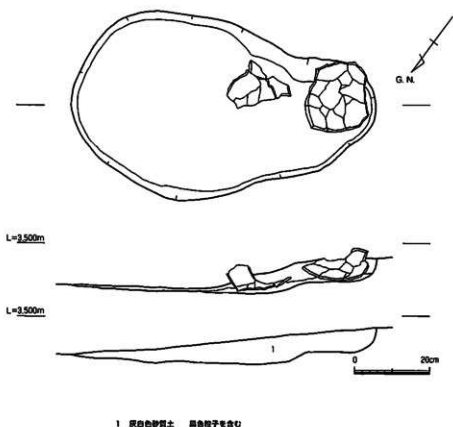
B区 (第187図)

B区は、調査地の北西に位置する約2100㎡の調査区で、溝状遺構14条、井戸遺構2基、土器埋設土坑1基、柱穴遺構8基、性格不明遺構3基を検出した。当調査区で検出された遺構は、遺構検出面直上までが攪乱層であったことから、大幅な削平を受けているものと考えられる。時期の判明した遺構の中で、古墳時代前期の土器埋設土坑以外は、すべて中世から近・現代にかけての遺構であり、以下、古墳時代と中世～近世の遺構について概観する。出土遺物は弥生土器、古墳時代土器・須恵器、中世土器・陶磁器、近世陶磁器、砥石、櫛羽口、鉄滓などが出土している。

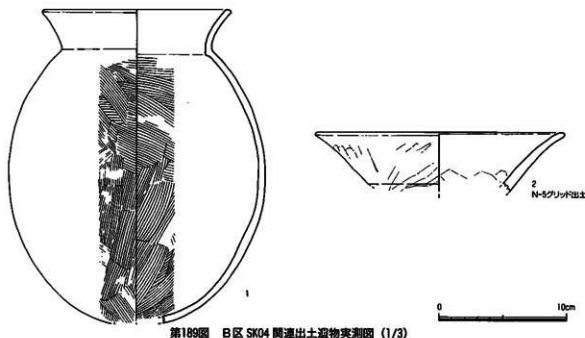
土坑

SK04 (第188図)

当遺構は、O-5グリッドで検出され、試掘で確認された古墳時代土器の埋設遺構の南東に位置する。長径約80cm、最大幅約50cm、深さ約7cmの不定形の掘り込みを伴うもので、布留式新相併行期(古墳時代前期)の土器甕が1個体埋設されていた。他の遺構同様、遺構検出面直上までが攪乱層であり、また、遺構北西のN-5グリッドに甕の一部を含む古墳時代土器片が集積していたことから、遺構がかなりの削平を受けていると推察され、甕は原位置を保っていないと考えられる。N-5グリッドの古墳時代土器集積地点から出土した土器器片を接合したところ、甕の一部のほかに、甕と同時期の高杯の坏部が1個体分収元できた。当遺構のプランは、甕1個体を埋設するには大きく、前述したように、甕の一部を含む土器器片の集積地点からは、高杯の坏部が出土している。また、試掘時に検出された古墳時代土器の埋設遺構とも同時期であることから、当遺構も本来は、複数の土器が埋設されていた可能性が考えられる。そして、浜堤上という立地、試掘時に確認された埋設遺構出



第188図 B区 SK04 遺構実測図・断面見通し図・土層断面図 (1/10)



土の壺が入れ子状で埋設されていたこと、当遺構において高坏と甕のセットという埋設を想定できることから、祭祀の様相が強いものと思われる。

SK04 関連出土遺物 (第189図)

1 は古墳時代土師器甕である。SD04 から出土し、N-5 グリッドの古墳時代土師器集積地点から出土した土師器片と接合した。布留式新相併行期のもので、内外面とも胴部にはハケメ調整が施され、頸部から口縁部には横方向のナデが施されている。2 は古墳時代土師器の高坏の坏部である。N-5 グリッドの古墳時代土師器集積地点より出土した。布留式新相併行期に比定される。器面調整は、内外面ともにヨコナデを施し、坏屈曲部付近には、ケズリが施されている。

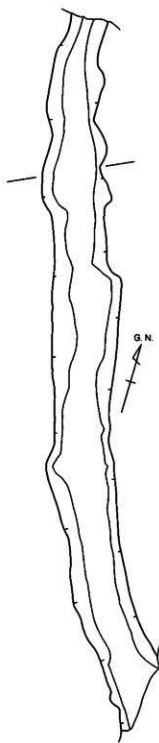
溝状遺構

B区では、14条の溝状遺構が確認されており、出土遺物により時期が判明している9条のうち、中世のものは2条で、その他は近世と近代のものである。しかし、使用時期或いは廃絶時期が近世・近代の溝状遺構であっても、すべての溝状遺構において一定量の中世の遺物を含んでいるため、中世の溝状遺構と合わせて詳述する。SD19・SD20・SD21は遺物が出土しておらず、時期は不明である。SD15・SD05の時期に関しても先の3条の溝状遺構同様、遺物は出土していないが、遺構同士の切り合い関係から、前者が18世紀以前、後者が15世紀から18世紀に使用或いは廃絶したと考えられる。

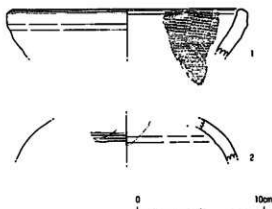
踏襲しているSD03・SD05・SD08と、並走または踏襲しているSD01・SD02・SD10・SD15とをそれぞれ一つのまとまりとして捉えた場合、2つのグループはともに14世紀後半から近代までの遺物が出土しており、14世紀後半以降ほぼ同位置に、断続的或いは継続的に溝状遺構が存在していたこととなる。SD11・SD12、SD13・SD14、SD19・SD20・SD21も、並走もしくは踏襲しており、上記2グループと同様の状況だったと推察される。A区においてもB区同様、溝状遺構が長期間にわたり踏襲または並走する状況がみられ、溝状遺構が、自然地形による規制を受けて形成されていた可能性が考えられる。

SD13 (第190図)

A～G-4・5グリッドに位置し、北西から南東方向に走る溝状遺構で、両端が削平されており、現状では、長



第190図 B区SD13 遺構実測図・土層断面図 (1/40)



第191図 B区SD13 出土遺物実測図 (1/3)

さ約7.5 m、幅約0.7 m、深さ約0.3 mを測る。遺物は、古墳時代土師器、中世土師器、瓦質土器槽鉢、古瀬戸瓶子が出土しており、当遺構は古瀬戸瓶子から、少なくとも14世紀中葉～15世紀中葉以降には機能していたと考えられる。

出土遺物 (第191図)

1は瓦質土器こね鉢で、下層より出土している。部位は、注口に近い部分と思われ、内面は横方向のハケメ調整が施され、外面は口縁部から胴部上半にかけてナデが施されている。

2は古瀬戸瓶子の肩部である。外面には灰釉が掛けられ、淡い緑色に発色し、その一部は口縁部から内面に流れている。また、外面には3条の櫛歯文による沈線が施されている。施釉方法や軸の傾斜などから、14世紀中葉～15世紀中葉のものと考えられる。

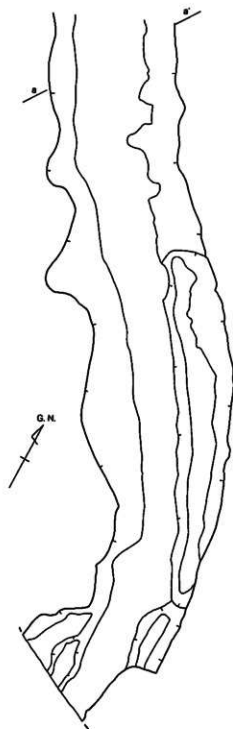
SD08 (第192図)

M～P-6～8グリッドに位置し、北から南東にかけて走る溝状遺構である。当遺構を踏襲しているSD03・SD05により削平され、現状で、長さ約18.9 m、幅約2.2 m、深さ約0.5 mを測る。出土遺物としては、土師器小坏・坏、瓦器碗、土師質土器、瓦質土器、白磁皿、龍泉窯系青磁碗・盤、備前焼壺・槽鉢などが挙げられる。これらの出土遺物には、15世紀前半の遺物が多く含まれることから、当遺構は、少なくとも15世紀前半には機能していた可能性がある。

出土遺物 (第193図)

1は第3層より出土した土師器小坏である。復元口径7.6 cm、器高2.0 cm、復元底径5.1 cmを測る。器面調整は、内外面ともクロコナデで、外面胴部下半に強いナデを施す。底部には、回転系切り痕を残す。2は第3層より出土した土師器坏で、元底径9.8 cmを測る。内外面はクロコナデを施すが、外面の底部付近は成形時の水掻き痕を残す。底部には、回転系切り痕を残す。

3は、中国産白磁皿である。森田分類D群で、15世紀前半のものと考え



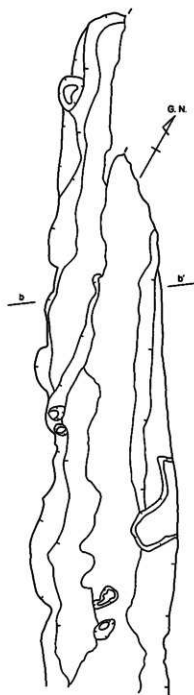
S008a - a'

- | | |
|----------|------------------|
| 1 暗褐色土 | 炭分、炭色塊を含む。 |
| 2 暗褐色砂質土 | 炭色砂粒子、小礫を含む。 |
| 3 暗褐色砂質土 | 炭色砂粒子、炭化塊、小礫を含む。 |
| 4 暗褐色砂 | 暗褐色砂質土、炭色塊を含む。 |

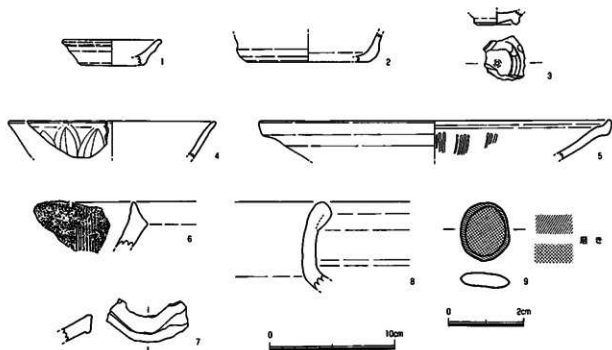


S008b - b'

- | | |
|--------------|------------|
| 1 暗褐色砂質土 | 炭化物、炭分を含む。 |
| 2~4 a-a' と同じ | |



第192図 B区 S008 遺構実測図・土層断面図 (1/40)



第193図 B区SD08出土遺物実測図(石器1/1、他1/3)

えられる。復元高台径は3.0cmを測る。胎土は、灰色がかった白色で、軸は白色を呈し、外面は無軸である。高台は挟り高台となっている。

4・5は、龍泉窯系青磁である。4の碗は、上田分類B-I類で、13世紀末～14世紀初頭のものと考えられる。復元口径16.4cmを測り、片切彫りの蓮弁文で、中心の柄がはっきりしている。胎土は淡灰色で、軸はくすんだ緑色を呈する。5の壁は、15世紀に比定され、復元口径約27.7cmを測る。口縁部は、横に屈曲させた後に、端部を上方につまみ上げている。内面に4条一単位の縦線を施している。胎土は淡灰色で、軸はくすんだ緑色を呈している。

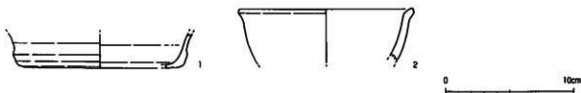
6～8は、備前焼である。6の掬鉢は、乗岡編年中世3期で、14世紀末～15世紀初頭のものと考えられる。黄茶褐色を呈す。口縁部の断面形状は三角形をしている。7は、掬鉢の注口部。器面は、灰色を呈しており、口縁の形状とも考え合わせると、乗岡編年中世3b期と考えられる。8の甞は、乗岡編年中世3b期で、14世紀前半のものと考えられる。口縁部を折り曲げて玉縁状とし、器面は暗褐色を呈す。器面調整は、内外面とも回転ヨコナデが施され、外面の口縁部と肩部に自然軸が掛かる。

9は、最下層出土の蛇紋岩製の基石と考えられる石製品である。形状は楕円形で、表裏面には磨き整形が施されている。

SD03

I～R-6～9グリッドに位置し、北から南東にかけて走る溝状遺構で、SD05とSD08を踏襲している。遺物は、18・19世紀の肥前系磁器染付などが出土しており、溝状遺構は19世紀頃に機能していた可能性がある。土師器環、土師質土器、瓦質土器、龍泉窯系青磁碗、備前焼といった中世の遺物も出土しているが、当遺構はSD08を破壊しており、また、遺物の時期がSD08出土遺物の時期と重なるため、これらの遺物はSD08からの流れ込みと思われる。18世紀の肥前系磁器染付なども一定量出土しており、SD05からの流れ込みの可能性もあるが、当遺構は、18世紀頃より使用されていた可能性もある。

出土遺物(第194図)



第194図 B区 SD03 出土遺物実測図 (1/3)

1 は、土師器坏である。器面調整は内外面ともロクロナデを施し、外面の底部付近は成形時の水挽き痕を残す。底部は回転系切り痕を残す。

2 は、龍泉窯系青磁碗である。上田分類D-II類のもので、15世紀前半のものと考えられる。口縁部は外反しており、SD01の1より口縁部の作りが鈍く、また器壁が厚い。胎土は灰色で、軸はくすんだ緑色を呈している。

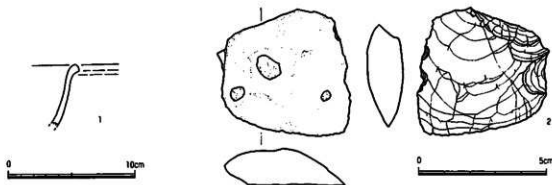
SD01

N～Q・10・11グリッドに位置し、北東から南西に走る溝状遺構で、寛永通寶、肥前系磁器染付などが出土しており、溝状遺構の使用時期或いは廃絶時期は18世紀に比定されるが、土師器、瓦器碗、龍泉窯系青磁碗といった中世の遺物も出土している。龍泉窯系青磁碗が14世紀後半に比定されることから、当遺構は、自然地形による規制を受け、数回の掘り返しをおこない断続的に使用した可能性も指摘できる。しかし、当遺構がSD10の一部を破壊していることから、これらの遺物は、並走している他溝からの流れ込みの可能性が強いと考えられる。

出土遺物 (第195図)

1 は龍泉窯系青磁碗である。上田分類D-II類で、15世紀前半のものと考えられる。口縁部は外反し、やや玉緑状を呈する。胎土は淡灰色で軸は緑色を呈している。

2 は検出面出土の流紋岩製の幅広剥片である。表面は全面が自然面であるが、複刺離打面が残存しており、かなり初期に剥離された剥片の一枚であるのは確かである。



第195図 B区 SD01 出土遺物実測図 (青磁 1/3、石器 2/3)

SD02

M～R・9・10グリッドに位置し、北東方向から南西方向に走り、SD15を踏襲している溝状遺構である。唐津系陶器碗、備前焼播鉢など近世の遺物の他、近代の染付片が出土しており、当遺構の使用時期或いは廃絶時期は、近代と考えられる。また、土師器小皿・小坏、防長系足鍋、龍泉窯系青磁碗、中国産染付碗といった中世の遺物も出土している。当遺構がSD10・SD15を破壊していることから、12世紀後半・14世紀後半から18世紀までの遺物は、破壊されている溝状遺構からの流れ込みと考えられる。

出土遺物 (第196図)

1は土師器小皿、2は土師器小杯で、1は復元口径8.8cm、器高1.3cm、復元底径8.4cmを測る。器面調整は、内外面ともクロコナデで、底部には回転糸切り痕を残す。2は復元口径10.7cm、器高1.85cm、復元底径9.3cmを測り、器面調整は内外面ともクロコナデである。

3・4は龍泉窯系青磁碗である。3は大宰府分類Ⅰ類で、D期(12世紀中頃～後半)に比定される。復元口径14.3cmを測る。胎土は淡灰色で、軸はやや黄色味がかった緑色をしている。龍泉窯系としているが、小片であり、同安窯系の可能性もある。4は、口縁部形状、胎土から大宰府分類Ⅰ類と考えられる。復元口径17.1cmを測り、胎土は灰色で、軸はくすんだ緑色をしている。

5は防長系足締鍋の足である。直径は2.8cmを測り、全面にケズリが施されている。岩崎分類Ⅳ～Ⅵ型式で、16世紀に比定されるものと考えられる。

6は中国産染付磁器碗である。小野分類E群で、假頭心タイプと考えられ、16世紀後半に比定される。見込み部分は、やや盛り上がり、華文が描かれる。外面には唐草文で、高台内には路が描かれているようである。

7は唐津系陶器皿である。内野山窯系のもので、大橋編年Ⅰ期の胎土目撃品段階(1580～1610年代)に比定され、復元高台径5.5cmを測る。見込み部分に砂目の跡があり、また、高台内にも目跡が残る。胎土は黄色がかった白色を呈し、畳付き部分のみ露胎で、他は透明釉が掛かる。上野系楽園古場窯でも類似品が出土している。8は、唐津系陶器碗である。大橋編年Ⅲ期のもので、1650～1690年代に比定される。復元高台径5.0cmを測る。胎土は黄色味がかった白色をしており、畳付き部分のみ露胎で、他は透明釉が掛かる。

9は結晶片岩製の石鐘である。扁平な割片を素材とし、裏面は糸節理面が残る。表面に若干の面的な加工を施した後、右側縁・下端には裏面から、上端には表面から整形のための二次加工を行ない、更に右側縁に2カ所の打ち欠きによる抉りを入れている。左側縁は折断面である。表裏面に掛け紐によると推測される、縦横2方向の複数の浅い窪みと、下端の右端付近と左側縁中央やや上寄りに穿孔状の欠損が看取される。

10は石臼である。上臼で、復元直径35.0cm、高さ7.7cmを測る。下面の中央に芯棒受があり、主溝によって5分割されていると考えられ、副溝は主溝から4条刻まれている。側面には、方形の挽手穴が1カ所穿たれている。

SD10

M～Q-10・11グリッドに位置し、北東方向から南東方向に走る溝状遺構である。肥前系磁器染付、唐津系陶器などが出土しており、溝状遺構の使用時期或いは廃絶時期は18世紀と考えられる。当遺構はSD15の一部を破壊しており、土師質土器揃鉢、同安窯系青磁碗などの12世紀後半の遺物、14・15世紀の遺物は、SD15からの流れ込みの可能性が強いと考えられる。また、当遺構からは17世紀の遺物が出土しており、17世紀より使用されていた可能性がある。

出土遺物 (第197図)

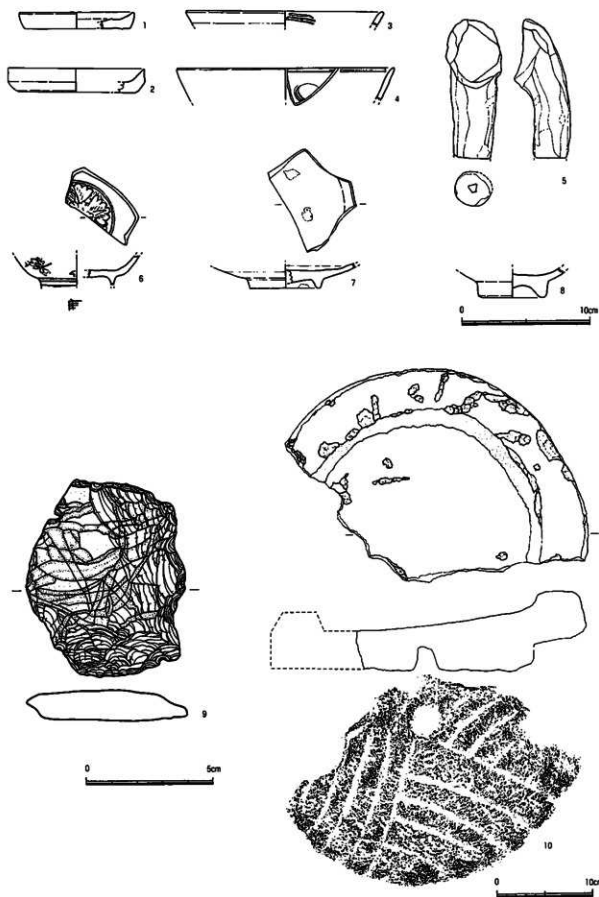
1は、土師器杯の加工品である。直径7.6cm、最大の厚さ1.3cmを測る。上面には渦巻き状のナデが、下面には回転糸切り痕が残っており、土師器杯の底部を打ち欠いて円形にし、二次加工を施している。

2は、土師質土器揃鉢である。内外面ともに口縁部は横方向のナデで、外面の胴部には押押さえの痕がある。

3は、同安窯系青磁碗である。大宰府編年のD期(12世紀中頃～後半)胎土は灰色を呈し、軸は黄色味がかった緑色をしている。内面は篋による文様、外面には拂目文が施されている。

4は、肥前系磁器染付小杯である。17世紀中葉のもので、復元口径6.8cm、器高4.6cm、高台径3.2cmを測る。見込み部分に砂が溶着している。底部から直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。底部は厚いものの、体部から口縁部にかけての器壁は薄い。畳付きのみ露胎である。

5・6は、唐津系陶器碗である。5は大橋編年Ⅲ期のもので、1650～1690年代に比定される。口径9.9cm、器高6.9cm、高台径4.3cmを測る。灰釉を掛けた後、土灰釉を流し掛ており、高台外面の一部と高台内面は無釉である。



第196图 B区 S002 出土器物实测图 (石罽 2/3 · 石白 1/4 · 他 1/3)



第197図 B区SD10出土遺物実測図 (1/3)

6は大橋編年IV期のもので、1690～1780年代に比定される。復元口径11.2cm、器高7.4cm、高台径4.4cmを測る。見込みには灰降り痕がある。胎土は黄色味がかった白色で、髹付け以外に透明釉が施される。

7は備前系細鉢である。乗岡編年近世2期～3期のもので、17世紀中葉～18世紀前葉に比定される。SD02から出土したものと接合した。口縁部断面は三角形で、外面には2条の凹線、内面の段は緩やかであり、摺り目は密である。また、焼成温度が低いためか、器面・内部とも赤褐色を呈する。8は備前焼である。復元口径12.8cm、器高5.9cm、底径9.7cmを測る。内外面とも口縁端部は回転ナデ、外面胴部と内面は回転ヘラケズリが施されている。

SD11・SD12・SD14

3条とも出土遺物である唐津系陶器片が小片であるため時期を明確に特定はできないものの、使用時期或いは廃絶時期は近世の範疇に収まるものと考えられる。また、ほかの溝状遺構同様、SD11では中世土師器片、SD12では中世土師器片、SD14では瓦質土器片といったように、中世の遺物も出土している。

井戸遺構

調査区の南西部分で、近接して2基の井戸遺構が検出されている。

SE25 (第198図)

J-4グリッドに位置し、平面プランは直径約2.6mのほぼ円形を呈する。約30cm以下では黄白色の硬化土壌で

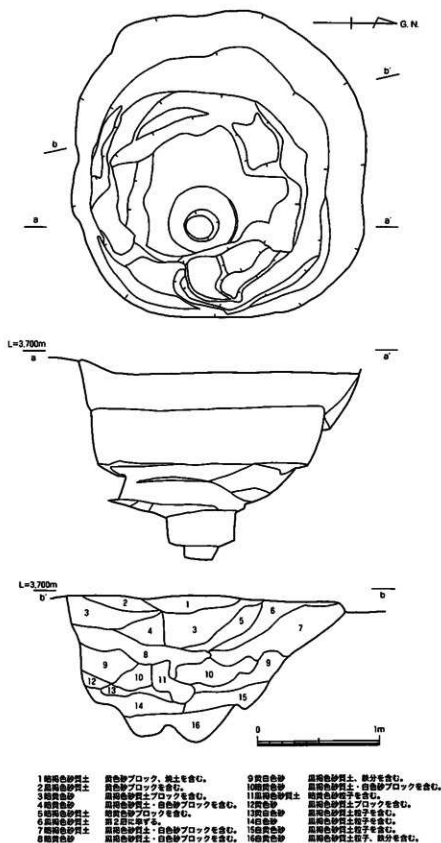
形成した裏込めが認められる。検出面から約30cmまでの埋土の周縁部には同様の土壌がブロック状に混入しており、上面にも裏込めが存在したが、自然に土中で崩落したものと推測される。最深部で約2.0mを測り、約1.0m下がった辺りで径が約0.85mと急に窄まり、その面に大小2つの曲げ物を2段に組み合わせた井戸枠が検出された。が、大=上段・小=下段いずれの井戸枠も上面5mm程度しか残存していない。第14～16層は水平に堆積しており一時に埋めた可能性が高く、それより上層はレンズ状で自然に埋没したと考えられる。遺物から最終埋没時期は、14世紀後半～15世紀前半と考えられる。

出土遺物 (第199図)

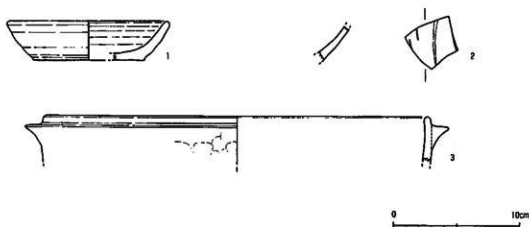
1は、土師腰環で、復元口径12.4cm、器高3.1cm、復元底径8.8cmを測る。摩滅がひどいため明確ではないが、器面調整は内外面ともロクロナデで、底部には回転系切り痕が残る。

2は、龍泉窯系青磁碗の胴部である。上田分類B類で、14世紀～15世紀のものと考えられる。胎土は灰色で、釉はくすんだ緑色を呈している。外面には片切彫で文様が描かれており、蓮弁文の一部と考えられる。

3は、土師質土器鍋で、



第198図 B区 S025 迎構実測図・断面見通し図・土層断面図 (1/30)



第199図 B区 S025 出土遺物実測図 (1/3)

復元口径は30.4cmを測る。突帯の上面が平らで、口縁端部と突帯との距離が近い。内面と口縁部から突帯部上面までは、回転ナデが施され、突帯部下面から下は、指頭圧調整痕がみられる。

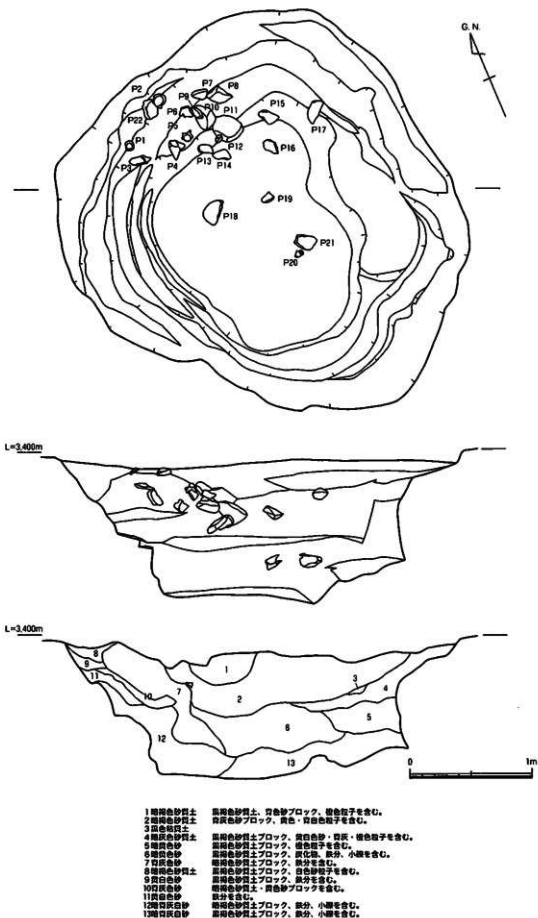
SE26 (第200図)

L-3・4グリッドに位置し、平面プランは直径約3.4mのほぼ円形を呈する。約30cm以下では白色の硬化土壌で形成された裏込めが認められ(第11・12層)、検出面から約30cm間での埋土の周縁部には同様の土壌がブロック状に混入しており(第7・8～11層)、上面にも裏込めは存在したが、土中で自然に崩落したものと考えられる。第1～6・13層は廃棄時に、第5・6・13層→第1～4層の順に一時に埋められたと推測され、上面に集中する遺物は裏込め土からなどの混入の可能性がある。遺物としては、中世土師器、土鍾、砥石の他、古墳時代前期の土師器なども混入する。下面に、SE25のような井戸枠や井戸枠が存在したような狭い空間は存在しない。最終埋没時期は遺物から13世紀末～14世紀初頭と考えられる。

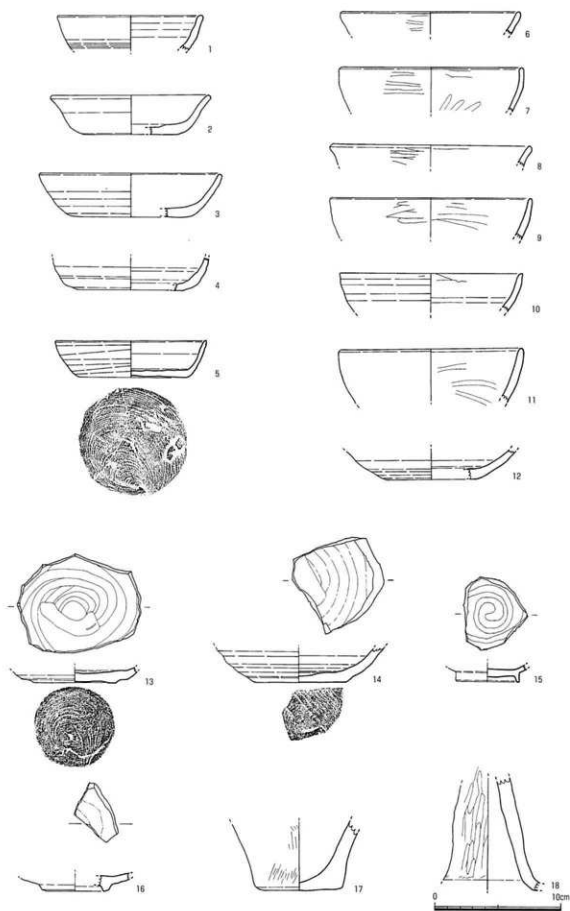
出土遺物 (第201・202図)

1～5は、上層出土の土師器坏である。1は、復元口径11.6cmを測る。器面調整は内外面ともロクロナデを施す。外面の体部下位には、成形時の水掻き痕を残す。2は、復元口径12.4cm、器高3.1cm、復元底径7.6cmを測る。器面は内外面ともロクロナデを施し、底部には回転糸切り痕を残す。3は、復元口径14.2cm、器高3.4cm、復元底径9.1cmを測る。器面がひどく摩滅しているが、外面はロクロナデと考えられる。4は、復元底径8.4cmを測る。器面はひどく摩滅しているが、器面は内外面ともロクロナデと考えられる。5(P2)は、国東半島でみられる土師器坏に類似しており、13世紀後半～14世紀前半に比定され、口径12.0cm、器高2.9cm、底径8.4cmを測る。器面には内外面ともロクロナデを施し、見込みに一方向ナデを施す。底部には回転糸切り痕を残す。

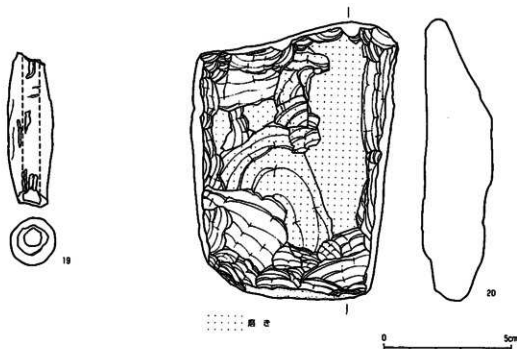
6～14は、瓦器碗で、6～8は上層から、9は2層から、10～12・14は下層から出土している。6は、復元口径14.0cmを測り、外面と内面の口縁端部に横方向のミガキが施される。7は、復元口径14.2cmを測る。器面は、内外面とも口縁部付近は横方向のミガキが施されおり、内面の胴部には斜め方向のミガキも見られる。8は、復元口径15.6cmを測り、外面と内面の口縁端部に横方向のミガキが施される。9は、復元口径15.8cmを測り、器面は、内外面とも横方向のミガキが施される。10は、復元口径14.4cmを測り、器面は内外面とも横方向のナデが見られる。11は、復元口径14.2cmを測る。外面は回転ナデで、内面にミガキが施される。12は、復元底径7.0cmを測り、平底で、内外面とも横方向のナデが施される。13(P1)は、復元底径6.3cmを測る。平底で、見込みに渦巻状のミガキがみられ、一方向ナデを施す。底部には、回転糸切り痕が残る。14は、東国東型瓦器碗のⅢ型式(13世紀末～14世紀初頭)で、復元底径7.2cmを測る。器面は、内外面とも回転ナデが施され、見込み部分



第200図 B区 SE26 遺構実測図・断面見通し図・土層断面図 (1/30)



第201图 B区SE26出土文物实测图① (1/3)



第202図 B区 SE26 出土遺物実測図② (2/3)

に土師器のように一方向ナデを施している。底部には、板状圧痕が残り、その下に回転糸切り痕が見受けられる。

15は、下層より出土した、吉備系土師器碗である。13世紀末～14世紀初頭のもので、復元高台径は、4.8cmを測る。高台が付き、高台内面は指頭圧調整痕がみられる。見込みに渦巻状のミガキが施されている。

16は、上層より出土した中国産白磁皿である。大宰府分類皿Ⅲ類で、D期(12世紀中頃～後半)に比定される。復元高台径4.6cmを測る。胎土は灰色で、軸は灰色がかった白色をしている。見込み部分の軸を輪状に剥ぎ取っており、外面胴部下位から高台内まで無軸である。

17(P5)は弥生土器甕である。弥生時代中期に比定され、底径6.5cmを測る。ほとんど摩滅しているが、一部にハケメが残る。18は、下層より出土した古墳時代土師器の高坏脚部である。布留式新相併行期に比定され、ほぼ全面に縦方向のミガキを施している。

19は下層より出土した土師質の土鍾である。上下端を使用によって若干欠損している。表面中央部に上端から下端にかけて掛け紐によると考えられる浅い二重の圧痕が、右側面から裏面にかけて網によると考えられる擦痕が顕著に認められる。

20(P3)は佐賀国産と考えられる緑泥片岩製の砥石である。左右・上下両縁は縁面が大きく残り、礫片を輪切りにしたような分厚い剥片を素材とし、周辺に若干の整形加工を施した後、表面のみに磨き整形を施して製作しており、裏面は素材の剥離面が残る。

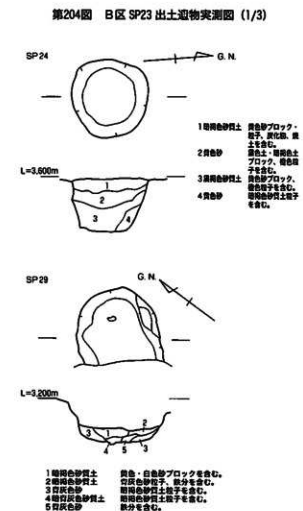
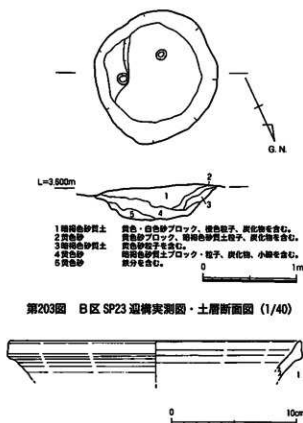
柱穴遺構

確認された8基の柱穴遺構は、調査区の中央から南にかけての西側部分に分布し、4基の柱穴遺構に関しては遺物が出土しておらず、時期は不明である。また、柱穴遺構間相互の明確な関連性は見受けられなかった。

SP23 (第203図)

J・K-3グリッドに位置し、円形で、直径約130cm、深さ約40cmを測る。

出土遺物 (第204図)



第205図 B区 SP24・SP27・SP29 遺構実測図・土層断面図 (1/40)

1 は、東播系中世須恵器細鉢或いはこね鉢である。
第II期第2段階(12世紀末葉～13世紀初頭)のもので、
復元口径23.0cmを測る。外面は回転ヨコナデを施す。

SP24 (第205図)

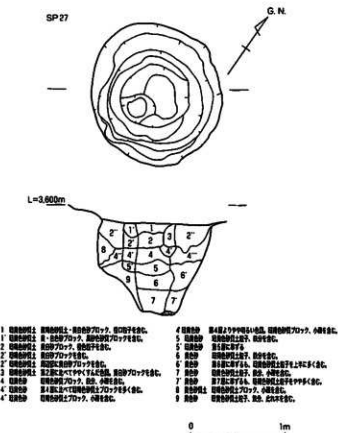
J-4・5グリッドに位置し、円形で、直径約80cm、
深さ約60cmを測る。古墳時代土師器の破片が出土して
いるが、混入品の可能性もある。

SP27 (第205図)

I-4・5グリッドに位置し、円形で、直径約140cm
を測る。直径約50cm、深さ約100cmの柱痕を持つ。古墳
時代土師器の破片が1点出土しているが、混入品の可
能性もある。

SP29 (第205図)

H-6グリッドに位置し、現状で直径約90cm、深さ約
20cmを測る。中世の瓦が出土している。



B区グリッド出土遺物及び一括遺物（第206～208図）

1は、土師器小坏で、復元口径7.7cm、器高2.2cm、底径5.7cmを測る。器面調整は、内外面ともクロコナデを施す。底部には回転糸切り痕が見られる。2は、土師器坏で、復元底径8.6cmを測る。器面調整は内外面ともクロコナデを施すが、外面の底部付近は成形時の水挽き痕を残す。底部には回転糸切り痕が残る。

3は、瓦質土器火鉢である。内面は火を受けており、残存部分下半の器面が剥落している。突帯の付け根には、突帯を貼り付けるために、強く横方向になた痕が残る。また、外面には菊花のスタンプ文があり、裏面から6回打ち欠いてある。

4は、瓦質土器摺鉢或いはこね鉢で、復元口径30.0cmを測る。外面口縁部は回転コナデを施し、胴部には指頭圧調整痕を残す。

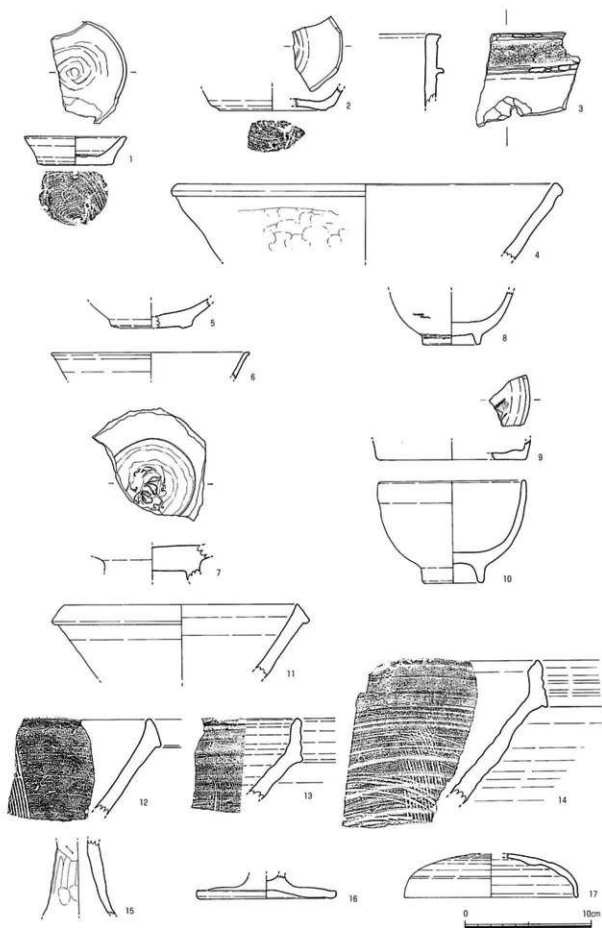
5・6は、中国産白磁碗である。5は、大宰府分類碗Ⅳ類で、C期(11世紀後半～12世紀前半)に比定される。復元底径6.4cmを測る。胎土は淡灰色で、内面は灰白色の釉を施し、外面は無釉である。6は大宰府分類碗Ⅶ類で、D期(12世紀中頃～後半)に比定される。復元口径15.6cmを測り、口縁部が外反する。胎土、釉ともに白色で、釉が非常に薄く塗布され、釉の下の調整が見える。器壁は薄い。7は、龍泉窯系青磁碗である。15世紀のもので、見込みにスタンプ文がある。胎土は灰色で、釉はややくすんだ緑色をしている。外面は高台まで施釉されており、高台内は無釉となっている。

8は、肥前系磁器染付碗である。大橋編年Ⅳ期の中でも18世紀後半のものと考えられる。高台径4.5cmを測り、皿付きのみ露胎である。9は、織部焼向付である。1600～1630年代に比定される。内外面に鉄絵が描かれ、灰釉がかかる。内面に布目の跡があり、型打ち成形であると考えられる。10は、唐津系陶器碗である。大橋編年Ⅲ期のもので、1650～1690年代に比定される。復元口径11.2cm、器高8.0cm、底径4.5cmを測る。高台が比較的高い。胎土は薄い黄土色で、釉は透明釉で皿付きのみ露胎である。

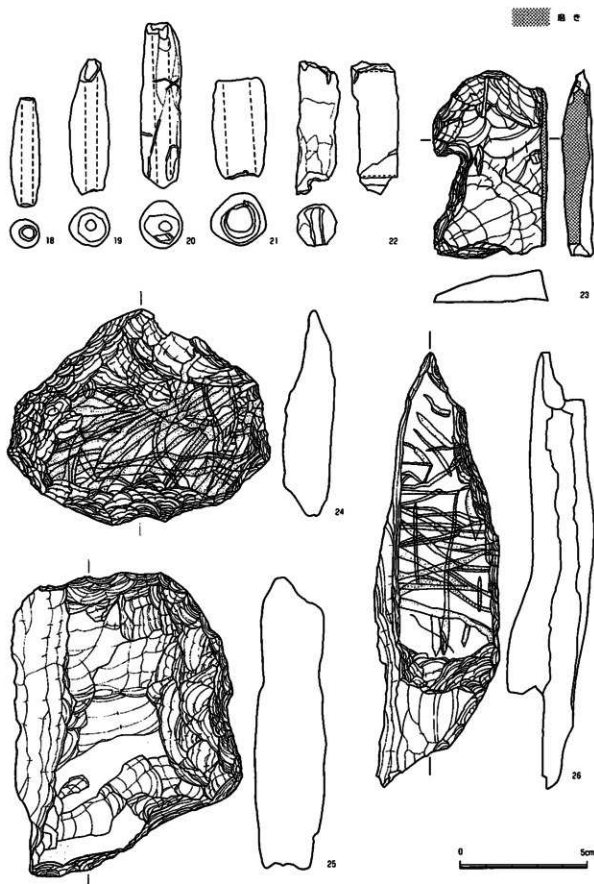
11～14は備前焼である。11は、摺鉢或いはこね鉢。乗岡編年中世3b期のもので、15世紀前葉に比定される。復元口径18.4cmを測る。口縁の肥厚部分は、下方への拡張が見られ、外面の口縁部が暗赤褐色を呈し、外面胴部と内面は灰色である。内外面とも回転コナデを施してある。12は、摺鉢で、乗岡編年中世4a期のもので、15世紀前葉に比定される。口縁の肥厚部分は上下に拡張が見られ、外面の口縁部が赤褐色を呈し、外面胴部と内面が灰色をしている。内外面とも回転コナデを施す。内面の下半には、使用による摩滅が見受けられる。13の摺鉢は、注口に近い部分と考えられ、乗岡編年中世6b期～近世1ab期のもので、16世紀中葉～末葉に比定される。口縁部の断面は薄板作りで、口縁部外面に灰降りが見られる。内外面とも回転コナデを施している。14の摺鉢は、乗岡編年近世1ab期のもので16世紀中頃～末葉に比定される。口縁部は薄板作りで3条の凹線があり、交差折り目である。器面調整は、内外面とも回転コナデを施す。

15・16は古墳時代土師器の高坏脚部で、布留式新相併行期に比定される。15の外面は、縦方向のミガキが施され、坏部との接合部付近にはナデが施され、根元付近には指頭圧調整痕が残る。内面は横方向のケズリを施している。16は、内外面とも調整はナデを施す。17は須恵器蓋坏の蓋である。6世紀後半のもので、復元口径13.6cmを測る。外面天井部分に回転ケズリが施されている。

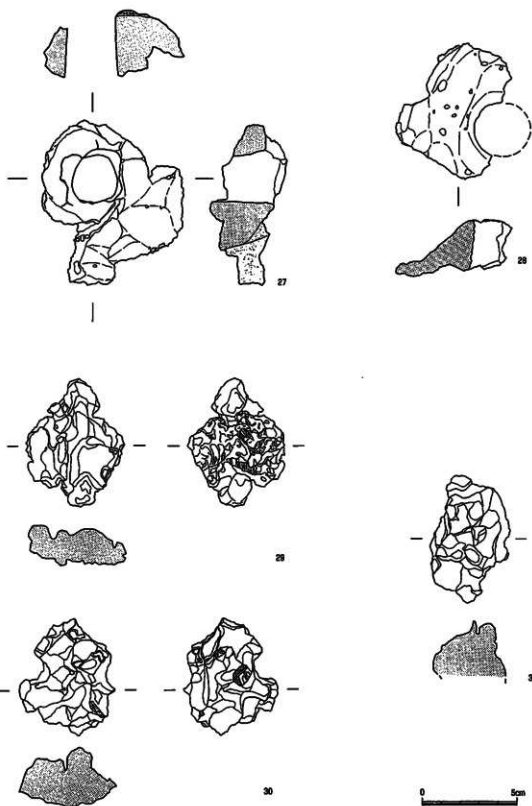
18～22は土鍾である。土師質と瓦質の土鍾が計6点出土しているが、胎土から古墳時代と中世の2時期に大きく分けられる。18はM～R-8～12グリッドの攪乱から出土しており、中世の所産と考えられる土師質の有孔土鍾である。19はN～P-6・7グリッドの攪乱から出土しており、古墳時代の所産と考えられるやや大柄で短形の有孔土鍾である。20はM～R-8～12グリッドの攪乱から出土しており、中世の所産と考えられる土師質の土鍾である。上下端に表から裏へ穿孔している。表面にはナデ整形が認められる。下端は若干欠損する。21は、攪乱から出土しており、中世の所産と考えられる土師質の有孔土鍾である。下端を若干欠く。表面には、ナデ整形が施されており、また擦痕が認められる。22はN～Q-9・10グリッドから出土しており、古墳時代の所産と考



第206図 B区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図① (1/3)



第207図 B区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図② (2/3)



第208図 B区グリッド出土遺物及び一括遺物実測図③ (1/2)

えられる土師質の有孔土鍾である。上下端を若干欠損する。

23～26は石器である。23はM～Q-8～10グリッドから出土しており、天草石製の砥石である。研ぎ面の表裏面とも破砕により残存せず。左側縁も裏面から表面への折れによる欠損が認められる。右側縁は磨き面の残存部で、石材の切り出し整形時の線条痕が全面に認められる。表面は破砕後に焼けて赤化。中世の所産である可能性が高い。

26はM～Q-9・10グリッドから出土しており、結晶片岩製の砥石である。扁平な礫片ないしは剥片を素材にしていると考えられ、上端右側を若干、左側縁下半、下端を大きく欠損している。左側面は切断面で、表面に面的な加工を施した後、右側縁には整形のための二次加工を行なっている。表裏面に縦横・左上-右下の3方向の研ぎによると推測される擦痕が顕著に観察される。

24はM～Q-9・10グリッドから出土しており、弥生～古墳時代の所産と考えられる結晶片岩製の石鍾である。扁平な礫片ないしは剥片を素材にしており、表裏面に面的な加工を施した後、周縁部に整形のための二次加工を行ない、更に、上端中央に表面から、下端中央に裏面から、打ち欠きによる抉りを入れている。表裏面に、掛け組によると推測される、右上-左下と左上-右下の2方向の浅い窪みが複数、表面の抉りに接する部分に薄い剥落が観察される。

25はM～Q-9・10グリッドから出土しており、中世の所産の結晶片岩製の砥石の未成品と考えられるが、弥生～古墳時代の石鍾の未成品の可能性もある。扁平な礫片を素材にしていると推測され、右半を裏から表への折れによる欠損が認められる。表裏面に簡単な面的な調整を施した後、上端及び右側縁に側面からの表面への整形のための二次加工を行なっているが、側面には大きく切断面が残り、下端は切断面のままである。

27・28は、土師質製輪羽口である。27・28とも先端部分を残し、欠損している。27は、復元口径2.8cmを測る。炉側にあつたと考えられる表面には、厚さ3mmほどの鉄と考えられるものが溶着している。28は、復元口径2.3cm～2.7cmを測り、溶解した鉄と考えられるものが付着している。

29～31は鉄滓である。29は長さ6.70cm、幅5.25cm、厚さ1.85cm、重さ60gを測る。上面は、金属が溶解したようになっており、下面は不純物が多く付着している。流状滓の可能性はある。30は、長さ5.95cm、幅5.05cm、厚さ2.95cm、重さ67gを測る。31は、長さ6.70cm、幅3.80cm、重さ65gを測り、片面が欠損している。

第3表 試掘出土土層観察表

図説番号	出土位置	P番号	層位	時	期	胎	土	長さ(cm)	外径(cm)	孔径上(cm)	孔径下(cm)	重(g)	備考
3	16			中世	土師	胎	土	5.90	1.45	0.45	0.35	11.0	圧痕・磨痕あり
3	17			中世	土師	胎	土	5.20	1.25	0.45	0.40	7.0	磨痕あり
3	18			中世	土師	胎	土	5.20	1.20	0.40	0.40	7.0	磨痕あり
3	19			中世	土師	胎	土	5.10	1.20	0.20	0.35	7.0	上端欠 磨痕あり
3	20			中世	土師	胎	土	4.70	1.40	0.35	0.30	6.5	側面磨痕あり
3	21			中世	土師	胎	土	4.40	1.30	0.40	0.50	8.0	上端欠 磨痕あり
3	22			中世	土師	胎	土	4.40	1.15	0.55	0.45	3.5	挟り痕あり
3	23			中世	土師	胎	土	5.05	1.90	0.65	0.75	12.5	擦痕・剥落多し
3	24			中世	土師	胎	土	6.50	3.20	1.85	1.90	50.5	

第4表 試掘出土土層観察表

図説番号	出土位置	P番号	層位	器	種	石	材	時	期	胎	土	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
3	25			既石	結晶片岩			中世				9.65	5.50	1.00	51.0	左右側縁欠損
3	26			既石	天草石			中世				(5.60)	(3.55)	(0.45)	12.4	左右側縁欠損
3	27			垂石	凝灰岩			弥生~古墳				2.45	2.65	1.2	7.9	変化 孔径 1.10 cm
3	28			既石	天草石			中世				(6.05)	3.55	1.25	40.8	上下端欠損
3	29			既石	天草石			中世				(5.05)	5.35	1.35	54.5	上半欠損
3	30			既石	結晶片岩			中世				(4.25)	(2.90)	0.60	11.4	上下端・左側欠損
3	31			既石	結晶片岩							(12.80)	3.40	1.95	12.59	上端欠損

第5表 A区出土土層観察表

図説番号	出土位置	P番号	層位	時	期	胎	土	長さ(cm)	外径(cm)	孔径上(cm)	孔径下(cm)	重(g)	備考
15	3	SP1117	括	中世	土師	胎	土	4.30	2.40	1.30	1.35	18.4	
22	9	SP343	括	中世	灰質			(2.40)	1.05	0.65	0.60	2.0	上半欠損
51	10	SP731	括	中世	土師	胎	土	(3.90)	1.65	0.60	0.80	9.6	
51	11	SP731	括	中世	土師	胎	土	5.20	1.50	0.70	0.90	10.0	全面磨け目
84	13	SD209	括	上層	中世	土師	胎	4.65	2.25	1.15	1.20	14.8	「丁」字磨み
84	14	SD209	括	中層	中世	土師	胎	4.80	1.60	0.60	0.70	12.2	
84	15	SD209	括	中世	土師	胎	土	(2.75)	1.50	0.75	0.60	(4.5)	上半欠損
66	13	SD221	括	中世	土師	胎	土	(4.35)	1.30	0.40	0.45	5.9	上下端欠損
119	18	SE435	括	4層	中世	土師	胎	5.50	1.95	0.60	0.70	18.0	
137	27	SE155	括	中世	土師	胎	土	(5.80)	2.10	1.05	1.25	20.6	上半欠損
146	1	SK156	括	中世	土師	胎	土	4.05	1.40	0.40	0.30	7.9	
158	2	SK643	括	中世	土師	胎	土	4.75	1.40	0.60	0.75	7.2	
167	30	SK260	括	上層	中世	土師	胎	5.00	1.55	0.55	0.65	11.2	
167	31	SK260	括	上層	中世	土師	胎	5.50	1.75	0.50	0.50	15.4	上端欠損
167	32	SK260	括	中世	土師	胎	土	(3.90)	1.45	0.55	0.70	(5.0)	上端欠損
167	33	SK260	括	中世	土師	胎	土	(3.10)	1.20	0.35	0.40	4.1	上半欠損
167	34	SK260	括	中世	土師	胎	土	6.30	1.70	0.45	0.50	13.4	
185	67	A-3-3-5	括	灰色土	中世	土師	胎	6.20	1.80	0.80	0.80	19.4	
185	68	A-2-2-6	括	腹見	中世	土師	胎	5.55	1.60	0.60	0.65	13.8	
185	69	A-2-2-6	括	腹見	中世	土師	胎	5.85	1.60	0.65	0.50	15.8	
185	70	A-2-2-6	括	腹見	中世	土師	胎	4.85	1.65	0.95	0.80	8.3	
185	71	A1区-括	括	表探	弥生~古墳	土師	胎	5.30	1.40	0.50	0.60	10.5	上下端欠損
185	72	A1区北部	括	表探	弥生~古墳	土師	胎	(2.60)	1.20	0.35	0.45	3.4	上半ガシリ欠損
185	73	A1区-括	括	中世	土師	胎	土	3.75	3.30	1.65	1.75	36.8	

第6表 A区出土土層観察表

図説番号	出土位置	P番号	層位	器	種	石	材	時	期	胎	土	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
29	1	SP1123	括	既石	天草石			中世				(5.65)	3.80	1.35	35.2	下端欠損
51	12	SP1029	括	既石	天草石			中世				(4.90)	2.80	3.25	64.5	下端欠損
63	2	SD012	括	石鐘	結晶片岩							5.95	7.10	1.65	93.6	
63	3	SD012	括	既石	結晶片岩			中世				(7.10)	5.30	3.30	133.2	下半欠損・変化
179	2	ST014	括	石鐘	結晶片岩							9.40	9.05	2.35	220.0	
120	20	SE435	P1	既石	天草石			中世				(6.50)	3.60	2.65	69.0	下端欠損
140	2	SK007	括	既石	砂岩			中世				13.75	9.40	7.65	1460	
77	8	SD021	括	既石	安山岩			中世				5.70	(4.80)	2.80	119.5	右側縁欠損
170	6	SK420	括	既石	天草石			中世				(3.70)	(2.95)	0.90	9.1	左側・下半欠損 変化
185	74	B・C・3	括	既石	天草石			中世				(4.50)	(3.65)	1.90	34.6	左右側縁・下端欠損
185	75	A-3-3-5	括	頸褐色土	既石	天草石		中世?				(4.85)	3.90	2.20	60.5	下半欠損・変化
185	76	A1区-括	括	既石	頁岩			中世?				6.00	(5.70)	1.20	47.8	右側縁欠損

第7表 B区出土土層観察表

図説番号	出土位置	P番号	層位	時	期	胎	土	長さ(cm)	外径(cm)	孔径上(cm)	孔径下(cm)	重(g)	備考
202	19	SE26	下層	古墳	土師	胎	土	(6.00)	1.85	0.70	0.70	18.0	上下端欠 圧痕
202	18	B-8-8-10	括	腹見	中世	土師	胎	4.25	1.10	0.50	0.45	5.0	
207	19	B-9-9-10	括	腹見	古墳	土師	胎	(5.30)	1.65	0.50	0.40	10.5	上下端欠損
207	20	腹見	括	中世	土師	胎	土	6.45	1.65	0.70	0.50	18.5	下端欠 圧痕あり
207	21	B-9-9-9	括	腹見	古墳	土師	胎	3.95	2.20	1.20	1.00	16.5	
207	22	B-8-8-12	括	腹見	中世	土師	胎	(5.25)	1.70			50.0	16.0

第8表 B区出土土層観察表

図説番号	出土位置	P番号	層位	器	種	石	材	時	期	胎	土	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
195	2	SD01	括	検出面	湖片	凝灰岩						5.00	5.30	1.55	42.6	
196	9	SD02	括	石鐘	結晶片岩							6.30	7.80	1.15	86.0	
193	9	SD08	括	石鐘	凝灰岩							1.55	1.30	0.40	1.3	
202	20	SE26	P3	既石	結晶片岩			中世				7.10	5.50	2.00	127.5	
202	23	B-9-9-10	括	既石	天草石			中世				(7.35)	(4.55)	(1.25)	40.8	表裏面・左側欠損
207	24	B-9-9-10	括	石鐘	結晶片岩							8.40	10.50	2.30	219.0	
207	25	B-9-10-11	括	既石未成	結晶片岩			中世				11.95	(7.20)	2.80	416.5	右側縁欠損
207	26	B-9-9-10	括	既石	結晶片岩			中世				(17.05)	(4.90)	3.80	278.0	上端・左側・下端欠損

第IV章 下志村遺跡第2次調査の自然科学分析

株式会社古環境研究所

1. 下志村遺跡第2次調査出土試料の放射性炭素年代測定

(1) はじめに

地球上の炭素には、炭素 12 (^{12}C)、炭素 13 (^{13}C)、炭素 14 (^{14}C) の3種類の同位体があり、これらは、 $0.99:0.01:2 \times 10^{-12}$ の比率で大気中に存在している。放射性炭素年代測定には、最も少量である炭素 14 が利用される。炭素 14 の量は約 5,700 年で半分に減ってしまう。したがって、時間の経過とともに炭素 14 は無くなってしまいが、宇宙線が大気圏の上層で窒素 14 (^{14}N) にあたることにより常に炭素 14 に変化しているため、大気中の炭素 14 の濃度はほぼ一定に保たれている。生物の体内の炭素 14 の濃度は大気中のそれとほぼ一定であるが、生物が生命活動を終えると炭素 14 の摂取が停止され、その量は減り始める。そこで、生物遺体の中に残っている炭素 14 の量を測ることにより、炭素 14 の摂取停止以降の時間を知ることができる。これが放射性炭素年代測定法である。

近年、加速器質量分析計を用いて、炭素 14 の原子数を直接カウントする方法が開発された。その原理は、真空中数 1,000 ボルトの下でエネルギーを受けた炭素原子を強力な磁場に通し、他の同位体より質量の重い炭素 14 を選別・計数するというものである。この方法が「加速器質量分析法 (AMS法)」と呼ばれるものである。従来の β -線計数法では、測定時間を長くしても炭化物が 2 g 程度 (通常の方法では 30 g) のものしか測定できなかったのに対し、加速器を用いると 0.005 g ほどの炭素でも測定が可能となった。また、測定できる年代も β -線計数法では 3 万年前以降であったのが、およそ 6 万年前以降と大幅に長くなった。

ここでは、下志村遺跡第2次調査より出土した試料について AMS 法による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

測定試料は、A区SK140出土土器付着炭化物、A区SE820出土井戸枠材、A区SP362出土木材の3点である (第9表)。

第9表 試料と方法

試料名	遺構・資料名	種類	前処理・調整	測定法
No.1	A区SK140出土土器	炭化物	酸-7%処理-酸洗浄、石炭調整	AMS
No.2	A区SE820出土井戸枠材	木材	酸-7%処理-酸洗浄、石炭調整	AMS
No.3	A区SP362出土木材	木材	酸-7%処理-酸洗浄、石炭調整	AMS

※1) AMS は加速器質量分析法: Accelerator Mass Spectrometry

AMS (Accelerator Mass Spectrometry) 法による年代測定は、以下のように行った。

- 1) 試料を蒸留水中で超音波洗浄して表面を機械的に洗い、塩酸 (HCl) - 水酸化ナトリウム (NaOH) - 塩酸 (HCl) 溶液の順に化学処理して二次的汚染有機物を除去する。再び蒸留水でよく洗浄したのち、定温乾燥機内 (80℃) で乾燥して試料を精製する。
- 2) 精製した試料から炭素を抽出してグラフアイト (石墨) ターゲットを調整し、イオン源内部にセットする。
- 3) 純粋なセシウム (Cs) を加熱して蒸発させ、約 1000℃ に加熱したタングステン膜を通過させて、表面電離法によりセシウムの陽イオンをつくる。このセシウムの陽イオンを試料ターゲットに当たって、ターゲットから飛び出した炭素原子の負イオンや炭素と水素が結合した分子の負イオンなどを加速器へ導く。

- 4) 加速器質量分析法により質量数 12 と 14 のイオンを選別し、質量数 12 のイオンは $^{12}\text{C}^+$ として電流値を測定し、質量数 14 のイオンは重イオン検出器で $^{12}\text{C}^+$ であることを確認して計数する。

(3) 測定結果

測定結果を第 10 表に示す。

第 10 表 放射性炭素年代測定結果

試料名	測定Na (Beta-)	^{14}C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦)	確率分布
Na 1	190046	590 ± 40	-24.9	590 ± 40	交点: cal AD 1400	
					1 σ : cal AD 1310 ~ 1370,	0.743
					: cal AD 1380 ~ 1410	0.257
Na 2	190048	350 ± 40	-23.3	380 ± 40	2 σ : cal AD 1300 ~ 1420	1.000
					交点: cal AD 1480	
					1 σ : cal AD 1450 ~ 1520,	0.374
Na 3	190846	400 ± 30	-25.8	390 ± 30	: cal AD 1590 ~ 1620	0.626
					2 σ : cal AD 1440 ~ 1640	1.000
					交点: cal AD 1470	
					1 σ : cal AD 1450 ~ 1500	1.000
					2 σ : cal AD 1440 ~ 1520,	0.731
					: cal AD 1580 ~ 1630	0.269

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950 年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表し、以下の計算式を用いる。

$$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{試料}] - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{標準}]}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{標準}]} \times 1000$$

ここでは、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C} [\text{標準}] = 0.0112372$ である。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサングの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約 19,000 年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000 年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と暦年代校正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ (68 % 確率) と 2σ (95 % 確率) は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。

(4) 所見

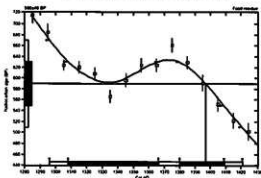
加速器質量分析法による放射性炭素年代測定の結果、A区 SK140 出土土器付着炭化物、A区 SE820 出土井戸枳材、A区 SP362 出土木材の年代は、それぞれ 590 年 BP、380 年 BP、390 年 BP の年代値が得られた。なお、暦年代校正した 2σ 暦年代範囲は、A区 SK140 出土土器付着炭化物が AD1300 ~ 1420 年、A区 SE820 出土井戸枳材が AD1440 ~ 1640 年、A区 SP362 出土木材が AD1440 ~ 1520 年(確からしさの確率 73.1 %)および AD1580 ~ 1630(同 26.9 %)、である。

ところで、大気二酸化炭素との交換速度が比較的遅い海洋などの炭素プールでは、放射線による¹⁴C濃度の減少が明らかである。また、海洋の深層水は長い時間をかけて絶えず循環しており、表面海水中の¹⁴C濃度は、¹⁴C濃度の低い深層水が湧昇する地域では希釈されて低くなる。こうしたことから、この地域の炭素を取り込んだ海産物試料については、放射性炭素年代値は実際の値よりも古くなることが知られている(海洋リザーバー効果)。ただし、今回測定の対象となった試料がこうした海産物の影響を受けていたか否かは不明であることから、海洋リザーバー効果について言及することはできない。

参考文献

- Stuiver, M., et. al., (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p. 1041-1083.
中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門, 古今書院, p. 1-36.

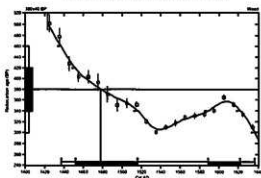
(Variable: C102 - 34914, note 1)

[illegible]

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

Fig.1 A区 SK140 出土土器付着炭化物

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS



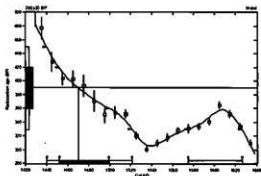
References

Reichardt and
Arlow
1. *Cellular Respiration*
2. *General Chemistry*
3. *General Chemistry*
4. *General Chemistry*
5. *General Chemistry*
6. *General Chemistry*
7. *General Chemistry*
8. *General Chemistry*
9. *General Chemistry*
10. *General Chemistry*

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

Fig.2 A区 SE820 出土井戸棒

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS



References

Anderson and
1978, 1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999
2000
2001
2002
2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2020
2021
2022
2023
2024
2025

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

Fig.3 A区 SP362 出土木材

2. 下志村遺跡第2次調査出土木製品の樹種同定

(1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

(2) 試料

試料は、A区 SE820 より出土した井戸枠サンプル1点、A区 SE165 より出土した木製品2点の合計3点の木材である。

(3) 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柃目と同義）、接線断面（板目と同義）の基木三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(4) 結果

結果を表1に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。なお各断面の顕微鏡写真を示す。

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 図版1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高ぐらいである。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

カバノキ属 *Betula* カバノキ科 図版2

横断面：やや小型から大型で丸い道管が、単独あるいは放射方向に数個複合して、ややまばらに散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～20本ぐらいである。放射組織は同性である。道管と放射組織の間の壁孔は極めて小さく密である。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で、1～4細胞幅である。道管相互の壁孔は極めて小さく密に配列する。

以上の形質よりカバノキ属に同定される。カバノキ属にはミズメ、ウダイカンバ、シラカンバ、オノオレカンバなどがあるが、本試料は分布域からミズメであると考えられる。ミズメは本州、四国、九州に分布する、日本特産の落葉高木で、高さ20m、径60cmに達する。材は弾力性に富み肌目は緻密で、木器、盆、漆器木地、箱物、家具などかなり広く用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版3

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

(5) 所見

同定の結果、下志村遺跡出土の木材は、A区 SE820 出土井戸枠サンプルがスギ、A区 SE165 出土木製品のうち①P13 サンプルがコナラ属アカガシ亜属、②サンプルがカバノキ属であった。スギは温帯に広く分布する樹木で、湿潤で多雨を好む。カバノキ属の内ミズメは、温帯域の山地に広く分布する。コナラ属アカガシ亜属は一般にカシと総称されるが、多くの樹種があり、西南日本に分布する照葉樹林を構成する主要高木であるが、二次林性のアラカシもある。いずれも周辺地域の森林ないし山地に分布し近隣からもたらすことのできる木材である。

第11表 下志村遺跡第2次調査出土木製品の樹種同定結果

試料	結果 (学名/和名)	
A区 SE820 出土井戸枠サンプル	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
A区 SE165 出土木製品①P13 サンプル	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
A区 SE165 出土木製品②サンプル	<i>Betula</i>	カバノキ属

参考文献

- 佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞。木材の構造。文永堂出版。p. 20-48。
 佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞。木材の構造。文永堂出版。p. 49-100。
 島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣。p. 296
 山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成。植生史研究特別第1号。植生史研究会。p. 242
 中川重年 (1994) 検索入門 針葉樹。保育社

下志村遺跡第2次調査出土の木材



断面図 ————— : 0.5 mm



放射断面 ————— : 0.5 mm



接線断面 ————— : 0.2 mm

1. A区 SE820 出土井戸枠サンプル スギ



断面図 ————— : 0.5 mm



放射断面 ————— : 0.5 mm



接線断面 ————— : 0.2 mm

2. A区 SE165 出土木製品②サンプル カバノキ属



断面図 ————— : 0.5 mm



放射断面 ————— : 0.5 mm



接線断面 ————— : 0.2 mm

3. A区 SE165 出土木製品① P13 サンプル コナラ属アカガシ亜属

第V章 考 察

1. 下志村遺跡第2次調査出土土師器について ～海部衆の土器予察～

1. 下志村遺跡第2次調査出土土師器の分類

下志村遺跡第2次調査区からは、多数の土師器・皿類が出土した。本節では、その器・皿類に関して年代観を与えるべく、大友氏の領国経営における中枢施設大友氏館跡の層位学的調査成果を援用しながら型式学的な検討を加える。まずは、下志村遺跡第2次調査出土土師器を概観し、大まかな類型化をおこなう。

下志村遺跡第2次調査出土土師器・皿類は、小皿・小杯といった小法量と、杯などの大法量に2分することができる。さらに、その大小二区分内において、大友氏館跡出土土師器の分類¹を参考にして、ロクロ成形品を2分した。それぞれをA群・B群とし、これに非ロクロ成形品である京都系土師器を加えてC群とした(第209図参照)。

A群

A群は、「粘土巻き上げ後ロクロ整形技法」を基本技術とする中世前期的な在地系土師の系列群と考えている。

A群土師器杯は、口径と底径の差が小さく(概ね3:2)、体部が直立気味にやや外傾して立ち上がる器形を呈する。A群土師器小皿も、また、同様である。

A群土師器小皿は、口径と

底径に差がほとんど無く、コースター形を採る。これらの土器は、内底面を顕著に平らに整形し、体部を直立気味に立ち上げるという特徴を備える。以上のように、器種としては、コースター形の小皿・杯と、ハコ形の小杯と杯・皿の3種が挙げられる。

B群

B群は、「粘土柱挽き出し技法」を基本的な技術とすると想定される土師器群で、中世後期的な系列群と考えている。口径と底径に差がある(概ね2:1)ことから、底部から口縁部へ向かって直線のもしくは内湾・外反しながら体部を開く器形を呈する。

B群土師器に関しては、器種として小皿と杯そして皿が確認されている。B群土師器杯は、器高が高く3.0cmを超

	A 群	B 群	C 群
小 皿	 1		
	 2	 15	
	 3	 16	
小 法 量 小 杯	 4		
	 5		
	 6		
	 7		
	 8		
大 法 量 大 杯	 9		
	 10		
	 11	 17	
	 12	 18	
皿	 13	 19	
	 14	 20	 21

0 10cm

第209図 下志村遺跡第2次調査出土土師器器種分類表 (1/6)

えるため、あまり外傾しないが、B群土師器皿に関しては、器高が3.0cm未満で坪と比較して著しく外傾する。小法量のものに関しては、皿のみしか確認できていないが、大友氏館跡出土土師器では、現状で6～7法量程度に分化することが確認されている。

なお、大友氏館跡出土土師器においては、右回転ロクロによる成形品しか確認されないA群に対して、B群内には一定量の左回転ロクロによる成形品が確認される⁴⁾。

C群

C群は、手捏ね成形品である。C群土師器は、豊後において戦国期に導入される京都系の技術系列によって成形されたものであり、一型式として把握可能な土器群である。大友氏館跡における土師器出土状況から、C群土師器は、儀礼の導入を背景とした採用が考えられ、形式的には「皿形」で、法量も分化した状態で導入されたものと考えられる。大友氏館跡出土土師器から、現状で6～7法量には、法量分化していることが判明している。

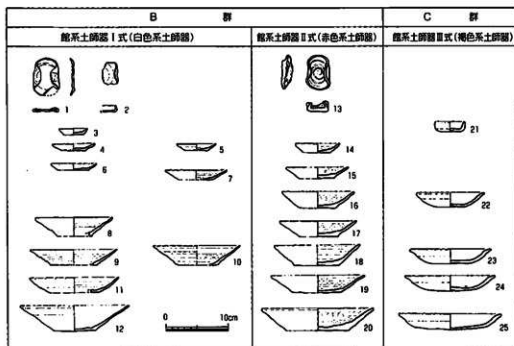
2. 大友氏領国内における土師器編年との対照

(1) 大友氏館跡出土土師器における型式の設定

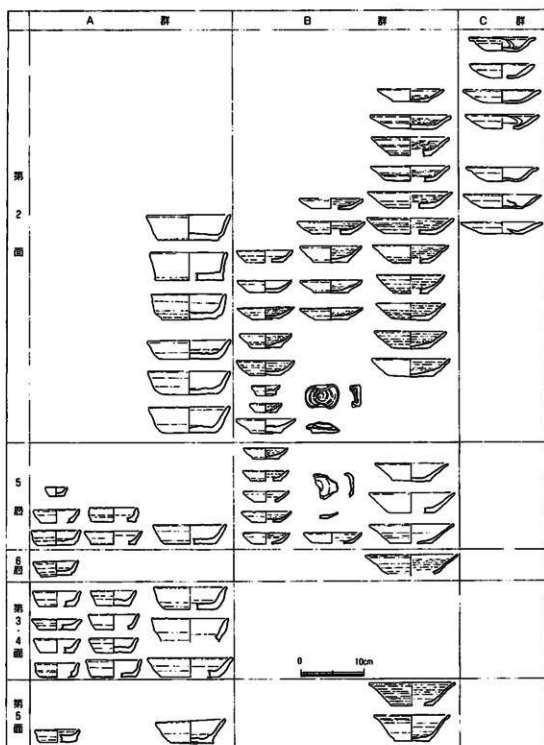
本節で、大友氏館跡出土土師器の変遷傾向を参照するにあたって、最近の大友氏館跡の調査における成果を交え、土師器の型式設定をおこなっておきたい。第210図は、大友氏館跡において特徴的に出土する土器型式を法量別に整理したものである。法量に関しては、良好な一括資料として捉えられたものではないが、同時期と考えられる、いくつかの一括資料を組み合わせることで補填が可能である。

館系土師器Ⅰ式 (B群・乳白色胎土)

館系土師器Ⅰ式 (第210図1～10) は、乳白色粘土を用い、回転速度の速いロクロを用いてへらで厚み1～2mm程の薄い器壁を挽き出すものと考えられる。器壁の内外面には、ロクロ挽き痕が顕著に残される。



第210図 大友氏館系土師器設定表 (1/6)



第211圖 大友氏館跡第6次・第10次調査区出土土器基本層序対応表 (1/6)

法量は、4～5法量以上を備え、その組成には耳皿を含む。後出するⅡ・Ⅲ式と比較すると、法量分化の程度や斉一性の面において未成熟な点が指摘される。器高に関しては、経年変化により、次第に減じてゆく傾向が把握されている。また、館内において、出土量的に減少する傾向にある。

Ⅰ式は、14世紀末～15世紀中頃に導入される土器型式であると考えている。

館系土師器Ⅱ式（B群・赤橙色胎土）

館系土師器Ⅱ式（第210図13～20）は、赤橙色の胎土を用いている。器壁は、Ⅰ式と比較すると3～4mmとやや厚いが齊一性に関しては進展している。器面は、外面がクロコナデによる平滑仕上げ、内面にはへら挽きによる螺旋状の窪みが観察される。より古段階と考えられるものに、螺旋状の窪みの無いⅠ群も確認されている。

法量は、6～7法量以上を備え、その組成には、耳皿を含む。

Ⅱ式は、15世紀後半頃に法量分化が整えられる土器型式であると考えている。

館系土師器Ⅲ式（C群・黄白色胎土）

館系土師器Ⅲ式（第210図21～25）は、黄白色の胎土を用いている。器壁は、導入時には2～3mmと薄いものが、後に5mm前後と次第に厚くなる。法量は、6～7法量以上を備える。今回は、提示できていないが、その組成には、耳皿を含む。出土状況から、Ⅲ式は、当初から大量生産そして大量使用品であったものと考えられる。

Ⅲ式は、16世紀前半に法量分化した状態で導入される京都系の技術系譜に乗る土器型式である。

（2）大友氏館跡出土土器の層位学的検討

土師器の年代観に関しては、クロコ成形土師器と京都系土師器の相対的な位置付けが考察されている千人塚遺跡（上野1999）[＊]と、通時的に層位学的検討の施された大友氏館跡第6次調査区出土土師器における分類と年代観（上野2001）[＊]を中心として用いる。千人塚編年の年代観としては、千人塚遺跡Ⅰ期を15世紀後半～16世紀初頭、Ⅱ期を15世紀末葉～16世紀初頭、Ⅲ期を16世紀前半～中頃、Ⅳ期を16世紀後半～末葉と考えている。京都系土師器に関しては、千人塚a期が16世紀前半～中頃、千人塚b期が16世紀後半～末葉と考えている。

また、大友氏館跡第6次調査における層位学的検討（第211図参照）においては、大友氏館跡第6次調査④層が千人塚Ⅳ期に、大友氏館跡第6次調査第2面が千人塚Ⅲ～Ⅳ期に、大友氏館跡第6次調査⑤層・⑥層は千人塚Ⅱ期に、それぞれ該当する。

千人塚遺跡（上野1999）と大友氏館跡第6次調査区の分類と年代観（上野2001）の両成果において、以下のような傾向が把握されている。

傾向1）A群→B群→C群という出土量の変遷

傾向2）B群における器高の縮小傾向

傾向3）器種組成（法量体系）の変化

器種組成の変化に関しては、①A群小皿+A群杯+B群杯 → ②A群小皿+A群小杯+A群杯+B群杯 → ③A群小杯+A群杯+B群法量分化 → ④B群法量分化 → ⑤B群法量分化+C群法量分化という大まかな変遷が把握される。

豊後府内は、豊後における伝統的政治都市であったといえる。その府内に設置された大友氏館跡は、政事の場であると同時に、故実の世界観に基づいて形成された儀式の場でもあった。儀式の場としての大友氏館跡は、大友支配の「正当性」を再生産するイデオロギー装置として機能し、大友氏を権威付けることによって安定した政局をもたらすものとして機能していたと理解することができる。そして、大友氏は、「正当化」・「倫理化」という作用を生み出す装置として、方形館体制など、伝統的な支配の道具として用いられてきた「階層化装置」を領国内に設置したのと考えられる。したがって、豊後国の守護所たる大友氏館跡の土師器組成は、領国内各地の土師器組成の遷移に対してイニシアティブをとることが想定され、その土師器組成の変遷の応用は、大友領国内において、ある程度の有効性を発揮するものと思われる。

よって、大友氏館跡における土師器組成の遷移で把握された「傾向」を用いて、下志村遺跡第2次調査区出土土師器に型式学的検討を加える。

3. 下志村遺跡第2次調査出土土師器の型式学的検討

(1) 下志村遺跡第2次調査出土土師器における問題点

本項では、第1項における下志村遺跡第2次調査区出土土師器分類を、第2項における大友氏館跡出土土師器の遷移傾向を応用し、型式学的検討を加え時系列上に整序する。しかし、当調査区出土資料は、以下のような問題点を抱える。

問題点① 陶磁器など広域流通品の共伴事例が少ない点。

問題点② 全国的にも数少ない14・15世紀を中心とした中世遺跡であるため、編年研究が進展していない年代にあたる点。

問題点③ 遺構間における切り合いや層位における相対的前後関係など、層位学的検討を加えることができない点。

問題点④ 良好な一括資料が少ない。

問題点⑤ 年代観に関しては、土師器というものが使い捨ての調度品であり広域流通品ではないという側面から、理想的には、少なくとも旧「郡」や旧「郷」単位による編年研究の積み上げが成されるべきであることに対して、旧豊後国内における他地域の型式学的成果を援用するに留まる点。

今回の検討に関しては、以上の4点の問題点を補わなくてはならないが、それぞれ、問題点①に関しては、数少ない吉備系土師器碗や防長系瓦質土器細鉢・鍋、東国東型瓦器碗などの中域流通品を共伴したセットを用いて年代観を把握する。

問題点②に関しては、C14年代測定法を活用したい。SK140は、土師器坏・皿類と土師質土器鍋を用いた動物祭祀遺構である。その共伴した土師質土器鍋には、炭化した吹きこぼれが付着しており、これをC14年代測定法にて計測をおこなったところ暦年代較正した2σ暦年代範囲AD1300～1420年を得ている。この成果を、時系列上、定点として用いる。

問題点③・④に関しては、大友氏館跡第6次調査における層位学的検討のように、客観的な積み上げではなく、やや恣意性の強い型式学的年代観を積み上げることになるという問題点の指摘であるが、これには前項にて述べた大友氏領国経営の核である大友氏館跡における土師器変遷傾向を適用することで補う。

また、今回の検討にはN-14°-W方位軸に乗る遺構、もしくは、それに付随する非戸遺構等からの遺構群出土品のみを用いることで、「居住空間として機能した期間」という一貫性、ひいては一括性を保っているものと考えている。

問題点⑤に関しては、後項にて、若干の補足をおこなう。

以上のような手法で、下志村遺跡第2次調査における問題点を補ってゆく。

(2) 中域流通品・C14年代測定法を用いた時系列上における定点の確保

まずは、上記の問題点を補填する手法を用いて、時系列上における定点の確保をおこないたい。

①防長系製品との共伴関係における定点

定点1 SEI31出土瓦質土器細鉢は、防長型細鉢を伴っている。防長型細鉢の編年と対比すれば、I型式に比定される。I型式は、14世紀前半に位置付けることができる。

定点2 SK140出土土師質土器鍋は、防長型製品とは異なる胎土を用いているが、口縁部形態を見た場合、十分

その影響下にある製品であるといえる。防長型銅の編年と対比すれば、Ⅲ型式に位置付けることができ、概ね 14 世紀後半～15 世紀中頃に位置付けることができる。

定点3 SE118 出土瓦質土器銅鉢は、防長型銅鉢を作っている。防長型銅鉢の編年と対比すれば、Ⅱ～Ⅲ型式に比定される。Ⅱ～Ⅲ型式は、14 世紀後半～15 世紀後半に位置付けることができる。

定点4 SE435 出土瓦質土器銅鉢は、防長型銅鉢を作っている。防長型銅鉢の編年と対比すれば、Ⅲ～Ⅳ型式に比定される。Ⅳ型式は、15 世紀後半～16 世紀初頭に位置付けることができる。

②放射性炭素年代測定法による定点

定点5 SK140においては、共存した土質土器銅に付着していた炭化した吹きこぼれをC 14 年代測定法にて計測をおこなったところ、暦年代校正した2σ暦年代範囲AD1300～1420年が得られている。型式学的に共存土器銅・小杯を14世紀前半に位置付けることはできないため、結果、人文科学上、実質14世紀後半～15世紀初頭という年代的な位置に位置付けられる。

(3) 大友氏館跡出土土器の層位学的検討の応用

下志村遺跡第2次調査においては、A群を主体とした遺物組成が把握されている。A群に継ぐのがB群であるが、その確認点数は極少量で、C群(京都系土器)に関しては、遺構出土品は確認されていない。

したがって、大友氏館跡第6次調査における層位学的検討に対比すると、傾向1) A群→B群→C群という出土量の変遷の内、A群→B群という層位に比定される。

また、傾向3) 器種組成(法量体系)の変化に関しては、千人塚1期以前と大友氏館跡第6次調査第2面以下の層位が対象となり、①A群小皿+A群杯+B群杯 → ②A群小皿+A群小杯+A群杯+B群杯 → ③A群小杯+A群杯+B群法量分化という過程が含まれると想定される。

また、出土量の最も多いA群土器に関しても小法量と大法量が共存して出土する例は、僅かにSE435・SD025・SK140・SE202のみで、出土量的には、大法量である杯・皿の方が多く確認されている。よって、杯・皿類を優先して形態変遷を把握し、それに近い形態的特徴を備える小法量器種を時系列上に配列する手法を採る。

前項で得られた時系列上の定点を整理すると、SE131(14世紀前半)→SK140(14世紀後半～15世紀初頭)→SE118(15世紀後半)→SE435(15世紀後半～16世紀初頭)という変遷案が出来上がる。これに、大友氏館跡第6次調査における層位学的成果、傾向2) B群における器高の縮小傾向を適用すると、SE435に後出するものとしてSP275・SK280・SK285が挙げられる。従って、SE131→SK140→SE118→SE435→SP275・SK280・SK285という5期区分が出来上がる。

しかし、この5期区分ではSK140→SE118間に型式学的な空白を生じてしまう。勿論、この時期に集落が断絶した可能性も考えられるが、この空白期間に、最も器高の高い一群であるSP632・SK360出土土器杯(第212図11・12)を代入することによって、スムーズな形態変遷が描けるようになる。

第212図は、下志村遺跡第2次調査A区出土の土器に、前述の傾向を適用し、時系列上の定点と型式学的方法を組み合わせ、整序したものである。I～VIまでの6期区分をおこなっている。小皿・小杯に関しては、出土点数が少なく、スムーズな経年変化を把握することはできなかった。しかし、杯に関しては、出土点数は少量ながらも、スムーズな経年変化を追うことができていた。

なお、前述の通り、第212図において提示した土器杯・皿類は、全てN-14°-W方位軸に乗る遺構、もしくは、それに付随すると考えられる非戸遺構等の限定した遺構群出土品を用いている点において、「居住空間とし

て機能した期間」という一貫性、ひいては一括性を保つことができていると考えている。すなわち、N-14°-W方位軸プランに規制されて居住していた時間幅の中に編年が収まっているものと考えている。

よって、この6期区分前後の遺物群として、SE155・SE165に代表されるO期と、京都系土師器が該当するVII期が存在するが、この前後には空白すなわち断絶期間が存在すると考えられるため、今回の編年表にはO期・VII期の前後2区分は挿入していない。

(4) 編年試案の作成

今回の編年試案に用いた資料は、井戸遺構や溝状遺構などある程度の使用期間を見立てなければならないものが多く、前述の「傾向」を用いた型式学的検討に拠る部分が大きいのが現状である。

O期「A群小皿+A群小杯」(13世紀)

「A群小皿+A群小杯」といった中世前期的な器種組成を呈する。SE155・SE165が提示される。これら両井戸遺構は、玉縁状口縁の中国産白磁碗や東国東型瓦器碗を含み、13世紀頃の年代を与えることができる。

I期「A群小皿+A群小杯+A群小」(14世紀前半)

SE131出土資料(第212図2)が充てられる。防長型桶鉢I型式との共伴が確認されており、14世紀前半の資料に比定される。「A群小皿+A群小杯+A群小」という器種組成を採る。器高の低いSE239出土A群土師器小杯(第212図3 復元口径7.4cm、器高1.95cm、復元底径5.4cm・復元口径8.0cm、器高2.0cm、復元底径5.6cm)とSP554出土A群土師器杯(第212図4 復元口径11.85cm、器高4.0cm、復元底径8.3cm)を、この時期に充てる。SP554出土A群土師器杯(第212図5)に関しては、I縁部が細く真っ直ぐに斜め上方に挽き上げられる。

II期「(A群小皿)+A群小杯+A群小」(14世紀後半～15世紀初頭)

動物祭祀遺構であるSK140出土資料が当てられる。SK140においては、共伴した土師質土器類に付着していた炭化した吹きこぼれのC14年代測定法計測から、暦年代校正した2σ暦年代範囲AD1300～1420年が得られている。

SK140出土土師質土器類は、胎土は異なるが、I縁部形態を見た場合、その影響下にある製品であるといえる。防長型碗の編年と対比すれば、II型式に位置付けることができる。II型式は、概ね14世紀後半～15世紀初頭に位置付けることができるため、やはり、当該期が14世紀後半～15世紀初頭の時期に据え置かれることは間違いない。また、共伴土師器小杯・小皿に関しても、型式学的に14世紀前半代に位置付けることはできないことも、この年代観を支持するものと考えられる。

小杯・小皿ともに、体部過半は粘土柱から外側に押し広げられ、I縁部は細く外反するように挽き上げられる。SK140におけるセット関係から「A群小杯+A群小」という器種組成を採ることが分かる(第212図6・7)。また、同一括資料は、同一人が、小杯・小皿(概ね小杯:I径8.0cm、器高2.5cm、底径6.0cm、杯:I径12.0cm、器高4.0cm、底径7.0cm)の小・大2法量を製作していたことを示唆する。若干法量が大きいが、同様の形態的特徴を示すSK250出土A群土師器杯も当該期に含まれる(第212図8)。

III期「(A群小皿)+A群小杯+A群小(+B群小)」(15世紀前半)

型式学的に、「A群小杯+A群小」という器種組成を採り、小杯・小皿ともに器高が最も高くなる時期と考え設定した。それぞれ、小杯はSP375・SK270(第212図9・10)、杯はSP632・S360(第212図11・12)が該当し、SK270出土小杯・SK360出土杯に関しては胎土・形態ともに類似するのでセット関係にあると考えられる。

SK270出土小杯・SK360出土杯の形態的特徴を挙げると、I縁部は若干の外反傾向を残しながらも器高を伸ばす

ため上方に挽き上げられ、体部過半に関してはロクロ挽き痕を消し丁寧に丸く収められる。この面期より、器壁が肥厚し始める傾向にある。

IV期「A群小坏+A群坏+B群坏」(15世紀中頃・15世紀後半)

SE118出土資料が充てられる(第212図17)。防長型細鉢II～III型式との共伴が確認されており、14世紀後半～15世紀後半の資料に比定される。この面期から、B群坏が確認され始め、「A群小坏+A群坏+B群坏」という器種組成を探ると考えられる。しかし、やはり主体はA群小坏+A群坏によって占められる。

SE118出土B群土師器坏は、法量、復元口径12.2cm、器高3.6cm、復元底径6.6cmを測る。また、SP909出土土師器(第212図16 復元口径12.5cm、器高4.05cm、復元底径6.8cm)も当該期に含まれるものとする。

この面期のA群土師器坏は、ロクロ挽き成形痕を顕著に残し、外面は口縁部付近にのみナデ調整が施され、体部過半の調整には、注意が払われなくなる。この特徴は、千人塚遺跡1期に共通するものである。当該期においては、同様の調整痕を持つ2種類の形態が並存するものと考えられる。

1類に関しては、口縁部の直立化が進行したものとして、SP275(第212図13 復元口径13.1cm、器高4.35cm、復元底径12.0cm)・SK145(第212図14 復元口径13.5cm、器高4.05cm、復元底径11.7cm)出土資料が挙げられる。体部過半を丸く収めることを止め、粘土柱から真っ直ぐ上方に引き上げるだけの簡略化が進行し、口縁部付近にのみナデ調整が施されている。また、口縁部には若干の肥厚が見られる。

2類に関しては、体部の外傾化と共に口縁部の外反が進行したものとして、A区一括SX204出土資料(第212図15 復元口径14.1cm、器高4.15cm、復元底径9.6cm)が挙げられる。体部を外傾させるもので口縁部には若干の肥厚が見られる。体部過半は、ロクロから挽き出したままで、口縁部付近にのみナデ調整が施されている。

型式学的に、1類が先行形態であると考えられ、2類に関しては当該期より出現するB群土師器坏の影響を受けたものと考えられる。

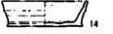
V期「A群小坏+A群皿+B群小皿+B群坏」(15世紀後半～末)

SE435出土資料(第212図28～35)が充てられる。防長型細鉢IV型式との共伴が確認されており、15世紀後半～16世紀初頭の資料に比定される。この面期から、B群小皿が確認され始め、「A群小坏+A群坏+B群小皿+B群坏」という器種組成を探ると考えられる。B群小皿に注目すると、SD025からも出土していることが分かる(第212図23)。また、SD025出土A群土師器坏(第212図24～27)に関しては、SD026・SE202出土A群土師器坏(第212図20～21・19)と同類のものであり、以上のような共伴関係の連鎖から、当該期には、SE435・SD025・SD026・SE202の4遺構が含まれることが判明する。

SE202・SD025出土資料(第212図18・22)には、A群小皿が含まれるが、これは混入品かイレギュラーな遺物であると考えられ、この時期の一般的な組成に含まれるものではないと考えられる。SE202・SD025・SD026出土資料に含まれるA群皿に関しては、先行形態であるSX204出土A群坏(第212図15)の器高を、そのまま減じた形態を探り、体部過半は、ロクロから挽き出したままで、口縁部付近にのみナデ調整が施されており、成形痕や器面調整に関しても共通の特徴を備える。また、坏から皿への器種転換が起こっている点が指摘される。

SE435出土B群土師器坏(第212図34・35)に関しても、やはり先行形態であるSE118出土B群坏(第212図17)の器高を、そのまま減じた形態を探り、成形痕や器面調整に関しても共通の特徴を備える。

また、SE435・SD025出土B群小皿に関しては、口径が8.0cm～10.0cmと大型化が指摘され、その背景に法量文化の進展が推察される。

		小 法 国		大 法 国	
		A 群	B 群	A 群	B 群
I	SP236				
	SE131				
	SE239				
	SP554				
II	SK140				
	SK250				
III	SP370				
	SK270				
	SP632				
	SK360				
IV	SP275				
	SK145				
	SK204				
	SP909				
V	SE118				
	SE202				
	SO026				
					
VI	SO025				
					
	SE435				
					
VII	SP370				
	SK280				
	SK285				

第212図 下志村遺跡第2次調査出土土師器編年試案 (1/6)

VI期「B群小皿+B群皿」(15世紀末～16世紀初頭)

当該期は、型式学的な検討の中で、大友氏館跡第6次調査における層位学的成果、傾向2) B群における器高の縮小傾向の適用から、V期に後出する画期として設定したもので、SP370・SK280・SK285 出土資料(第212図36～37・39・38)が充てられる。

B群皿が確認され始め、「B群小皿+B群皿」という器種組成を採ると考えられる。B群皿に関しては、B群杯の器高の減少から皿形化が達成されたものと考えられる。また、A群杯の器高の減少から皿形化が達成されたものも存在すると考えられる。SK285 出土B群土師器皿(第212図38)に関しては、大友氏館跡にて特徴的に出土する館系土師器I式で、大友氏館跡第6次層位第2面～⑤・⑥層に位置付けられるものである。

また、SP370 出土B群小皿(第212図36～37)に関しても、口径が8.9cm・11.5cmと大型化が指摘され、その背景に更なる法量分化の進展が推察される。したがって、少なくともこの時期には、3法量以上の法量分化が達成されていたことを読み取ることができる。

VII期「C群法量分化」(16世紀後半)

当該期の遺構は確認されておらず、表土から京都系土師器が1点のみ出土している。大友氏館跡第6次の層位学的検討においては、大友氏館跡第6次調査④層に相当する資料で、16世紀後半代に比定される。

以上、下志村遺跡第2次調査出土土師器をⅠ～Ⅶの7時期に区分した。Ⅰ～Ⅶ期の6期は、14・15世紀内に含まれる。すなわち、土師器の検討を通して、当調査区の主体を占めるN-14°-W方位軸に乗る遺構群に関しては、ほぼ14・15世紀代に収まるものであることを指摘することができる。

また、15世紀後半である下志村Ⅳ～Ⅶ期が15世紀後半代に当たり、15世紀前半代以前の下志村Ⅰ～Ⅲ期の遺構・資料が少ない点は指摘しておく必要があろう。

4. おわりに — 今後の展望と課題 —

(1) 海部郡における15世紀代の土師器について

前項までの検討から、下志村遺跡第2次調査出土土師器の大半が14・15世紀代に帰属するものであることが判明した。14・15世紀代を主体とする中世遺跡は、全国的にも稀有な存在であり、何某かの展望と課題を述べておく必要があろう。ここでは、特に空白の15世紀前半問題について展望を加え終章とする。

豊後の中世土器研究において15世紀前半代に関しては、型式学的に空白期間であるとされる。これは下志村Ⅲ期に当たるが、この15世紀前半の型式学的空白問題は、全国的に看取されるものである。

この15世紀問題に関しては、根本的に次の問題を検討する必要がある。15世紀前半の土師器資料は、出土しているのか、出土していないのかである。出土していないとすれば、それは時系列上における資料の欠落であり、型式学的空白期である。しかし、出土しているとすれば、それは15世紀前半代の資料を識別できないという点から問題が生じていることになる。予察としては、大友氏館跡における層位学的成果に断絶が無いものとすれば、15世紀前半代の組成は、①A群小皿+A群杯+B群杯 → ②A群小皿+A群小杯+A群杯+B群杯 → ③A群小杯+A群杯+B群法量分化という過程を含むものであることが想定される。

ここで、中世土器研究に関しては、少なくとも旧「郡」や旧「郷」単位による編年研究の積み上げが成されるべきであるとの観点から、まずは旧海部郡内における14・15世紀に帰属すると考えられる中世土師器の抽出をおこなっておきたい。

北部の土器

北部エリアに関しては、現行政区分で大分市東部を指す。このエリアにおける中世土師器研究は、今回の下志村遺跡第2次調査において端緒に着いたといえる。したがって、良好な一括資料が皆無であるため、本稿においては、大野川を挟んで対岸に位置する旧大分郡内の鶴崎御茶屋跡出土資料を挙げておく。

第213図1は、B2区P-10出土B群土師器小坏である。第213図2～10は、鶴崎御茶屋跡B2区埋納ビット出土資料である。ビットからは、9個体以上のA群土師器坏がサシ銭状の30枚の銅銭と共に検出されている。それぞれ、土器の特徴から判断すると、B2区P-10出土土師器小坏は下志村IV期に、B2区埋納ビット出土資料に関しては下志村III期に比定される。

中部の土器

中部エリアに関しては、臼杵荘と、その周縁のエリアを含む。

まずは、下志村第2次調査0期の対比資料として、II臼杵荘に隣接する旧野津院に含まれる野津町八里合五輪塔整地層出土資料を挙げる。第213図11～15は、弘安8(1285)年の記年銘が刻まれている五輪塔下部の整地層に含まれていた土師器である。

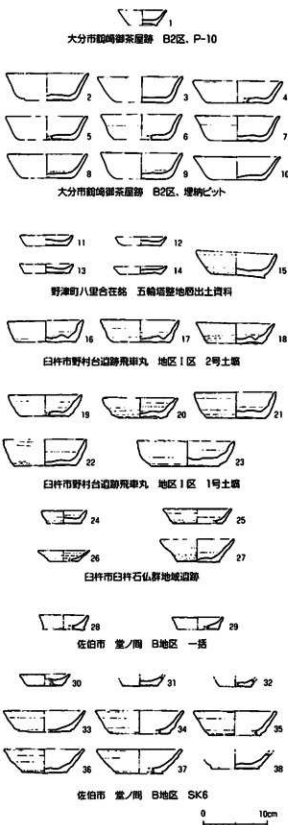
次に、15世紀代の資料として、野村台遺跡やF1杵石仏群地域遺跡の資料を挙げる。

野村台遺跡飛車丸地区1区では、2基の地下式土壇が確認されている。それぞれ、第213図16～18は、2号土壇出土A群土師器坏、第213図19～23は、1号土壇出土A群土師器坏である。

それぞれ、土器の特徴から判断すると、2号土壇出土土師器は下志村IVa期、1号土壇出土土師器は下志村IVb期に比定される。

第213図24～27は、F1杵石仏群地域遺跡第18次調査出土資料である。24・25は、柱穴出土資料で15世紀代の資料であると考えられる。26・27は、1号井戸出土資料である。共伴資料として、15世紀末～16世紀初頭頃の備前焼指鉢が挙げられる。

土器の特徴から判断すると、1号井戸出土土師器は下志村VI期に比定される。



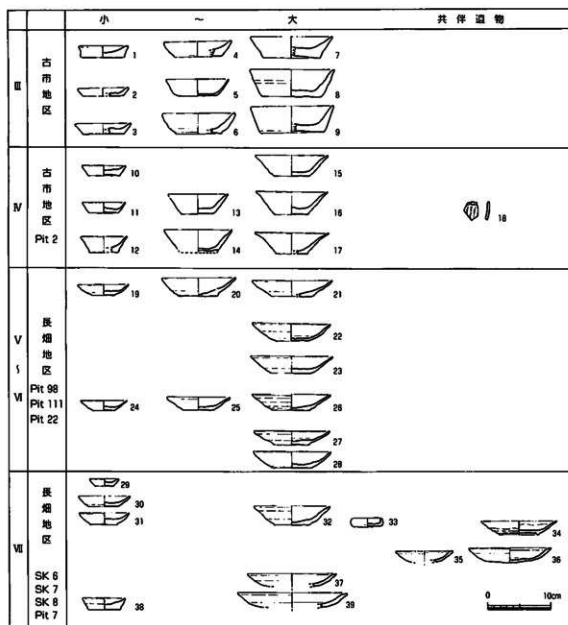
第213図 旧海部郡内出土土師器 (1/6)

南部の土器

南部は、佐伯荘を指すエリアである。

佐伯氏関連の史跡は多く残されているが、代表的なものに梶牟礼城跡関連遺跡が挙げられる。梶牟礼城の築城時期に関しては、明らかとされていないが、伝承では大永年間(1521～1527)頃、佐伯惟治が築いたと伝えられている。中世山城の全国的な傾向から考えると、15世紀中頃の築城或いは改修が施されたものであると推察される。周辺地では梶牟礼城跡関連遺跡として、それを遡る古市地区や長畑地区といった居館跡比定地などの調査がおこなわれている。

本項においては、梶牟礼城跡関連遺跡において検出されたトレンチ或いは遺構一括資料を大友氏館跡第6次調査において把握された変遷傾向を用いて、時系列上に配列してみた(第214図参照)。



第214図 梶牟礼城跡関連遺跡出土土器編年試案 (1/6)

第214図1～9は、古市地区出土遺物で、A群土師器小皿・小坏・坏が含まれる。トレンチ一括遺物で、一括性は弱い。土器の特徴と組成から、下志村Ⅲ期頃に包括される資料であると考えられる。

第214図10～18は、古市地区Pit2出土遺物である。A群小皿・A群小坏・B群小坏・B群坏が含まれる。土器の特徴と組成から、下志村Ⅳ期に比定される。B群小坏・坏は豊後沿岸部において特徴的に出土する形態である。

第214図19～28は、長畑地区Pit98・Pit111・Pit22出土資料である。B群土師器皿によって構成される。

それぞれ、土器の特徴から判断すると下志村Ⅴ～Ⅵ期頃に比定される。

第214図29～39は、長畑地区SK6・SK7・SK8・Pit7出土資料である。B群土師器小皿・皿とC群土師器小皿・皿によって構成される。

それぞれ、土器の特徴から判断すると下志村Ⅶ期に比定される。

また、佐伯市の内陸部に当たる佐伯市所在の堂ノ間遺跡においても、15世紀代と考えられる土師器が出土している。第213図28・29は、堂ノ間遺跡B地区一括出土資料である。第213図30～38は、堂ノ間遺跡B地区SK6出土資料である。

それぞれ、B地区一括出土資料は下志村Ⅳa期に、B地区SK6出土資料は下志村Ⅳb期に比定される。

以上、下志村遺跡第2次調査出土土師器の検討を通して旧海部郡内と、その縁辺部における出土土師器を概観したところ、4遺跡において15世紀代の土師器を抽出することができた。

現状で、旧海部郡内において確認されている15世紀代の土師器は、そのほとんどがA群土師器であることが判明した。B群土師器は、白杵石仏群地域遺跡と梶杵礼城関連遺跡以外では、あまり確認されていないようである。やはり、B群土師器には、居館や寺院跡などの拠点的な遺跡から出土する傾向が指摘できるのではないだろうか。

(2) 空白の15世紀前半問題の解釈案

前項における検討から、旧海部郡内においては、積極的に15世紀前半に位置付けられる資料として、鶴崎御茶屋跡B2区埋納ピット出土資料と古市地区トレンチ一括出土資料を抽出することができた。そこで、下志村遺跡第2次調査出土土師器の型式学的検討に、大友氏館跡出土土師器の層位学的検討の結果を合わせ、15世紀前半代における土師器組成の予察を提案しておく。

予察① 土師器組成上、小法量に関しては、A群土師器小皿からA群土師器小坏を主体とする組成へと移行する時期。

予察② 同一組成内に、器高の高いA群土師器坏と、器高の低いA群土師器坏が共存する。

予察③ 型式学的には、A・B土師器両群における器高の高伸長化のピーク期に当たる。

予察④ 組成内に、B群土師器が導入される時期である。

予察⑤ 土師器組成上、A群土師器主体からB群土師器主体への移行期に当たる。

以上のような特徴が、15世紀前半代における土師器資料に見受けられると想定される。

では、何故、15世紀前半の資料は、抽出されにくいのであろうか。次の3つの解釈案が考えられる。

a. 15世紀前半の遺物は、存在するが未だ表出(出土)していないという解釈。

b. 15世紀前半の豊後における土師器生産個体数自体が少ないという解釈。

c. 15世紀前半の組成は、土師器組成が多様多様で複雑であるため、前後関係の識別が困難であるとの解釈。

a案に関しては、偶然、出土していないのか、それとも、出土しにくい状況下にあるのかという点を考慮しなければならない。14世紀後半～15世紀前半という時期は、集村化の時期とされ、たびたび、現行集落との重複が指摘される時期である。よって、出土しにくい状況下にある可能性が十分に考えられる。今後、中世府内町跡など、現行の市街地、或いは、集落の地下に眠る都市遺跡の発掘調査が進展することによって、資料数は増加する

ものと考えられる。

b・c案に関しては、土師器が儀器であるとの観点から理解するのが有効であると思われる。この観点を通すと、b案を、「土師器生産個体数の減少は、間接的に土師器儀礼の減少を示すものである」という観点から眺めることができる。しかし、15世紀前半という時期は、中央政権において、15世紀後半の伊勢氏に代表される故実世界の標準化に際して、「先例」として「範型化」の対象とされる時期である。問題は、この中央における「範型」の形成時期に、地方では南北朝内乱期の名残として式微状況にあった可能性が考えられることである。また、この時期に、儀器としての土師器の存在価値が低下した可能性も考慮する必要がある。

c案に関しては、15世紀前半という時期が、14世紀後半という南北朝内乱期にある「前段階」と、15世紀後半という武家故実世界の標準化の進展が各地に影響を及ぼし始める「後段階」の狭間にあるということを再確認しておく必要がある。この前後段階の解釈として、14世紀後半段階の土師器群が多様・不斉にあり混沌とした組成状況にあることに関しては、南北朝内乱期における政権の求心性の低さを示すものとして、また、15世紀後半における故実世界の標準化に関しては、戦国時代を迎えるに当たって新しい統治イデオロギー論理が生じた現れであるものとして、それぞれ受け止めることができる。したがって、15世紀前半は、14世紀後半の混沌とした状況から、15世紀後半の故実世界の標準化へ向けた故実世界の収束期に当たると考えられる。

勿論、中央政権からの武家故実世界の波及が、即時、海部郡などの遠隔地の組成に現れるとは考えられない。しかし、大友氏館跡をはじめとした守護居館クラスにおける土師器組成に関しては、ダイレクトに表出している可能性が十分に考えられる。そして、この波は、武家儀礼執行の場としての居館などのイデオロギー装置とそのネットワーク下に、いち早くもたらされたものと考えられる。在京、或いは、後の上洛志向の強い守護の領国であればなおのことである。

そのような理解のもと、故実世界における「混沌期」(14世紀後半)→「収束期」(15世紀前半)→「標準化」(15世紀後半)と、過渡期に位置する15世紀前半を識別する特徴として、予察③と⑤に共通するB群土師器の動向に注目する必要がある。上記設定した「館系土師器Ⅰ式」や「館系土師器Ⅱ式」に代表されるB群土師器は、豊後国内において、居館などの拠点的な遺跡・遺構から特徴的に出土する遺物である。この居館等において、武家儀礼などが執行されていたわけであり、武家儀礼におけるB群土師器使用の背景には故実世界が存在し、この故実知識という文化資本を統治イデオロギーに利用しようとする権力側の意志が見受けられる。

現段階で「館系土師器Ⅰ式」の導入は、14世紀末～15世紀中頃という時間幅の中、すなわち「収束期」に位置付けられる。「館系土師器Ⅱ式」に関しては、標準化が成し遂げられた15世紀後半段階にB群土師器の法量分化が進展する。また、「館系土師器Ⅰ式」は、大内氏館跡におけるA式土師器に酷似する。大友Ⅰ式と大内A式導入の先後関係に関しては、今後の課題となるが、Ⅰ式の導入が大内氏を経由しての間接的なものであったにせよ、権力側の意志の一端を示すものと考えられる。すなわち、居館跡などの局所的な出土しか見られない「館系土師器」に関しては、同時に型式変化の原動力が守護層等の特定領主層に求められる点が指摘される。

以上、15世紀前半の組成を示すものとして、B群土師器の存在がメルクマールとなることを指摘した。しかし、「館系土師器Ⅰ式」に代表される初期B群土師器は、館跡等の拠点場所からの出土に限られ、また、館跡等に関しても初期B群土師器の存在は稀有なものであったと考えられることから、一般集落における出土はあまり見込めるものではない。したがって、初期B群土師器を伴わなければ、A群小坏の割合と、高身長化したA群坏の存在という、組成の変化において確認できる転換であるため前後段階との識別が困難である可能性が高い。すなわち、土器形状の経年変化ではなく、組成の変化あるいは型式の導入に15世紀前半代を見出す鍵がある。もともと、廃れるA群土師器の経年変化は失速し、流行に乗るB群土師器の経年変化は加速するであろう。この「失速」と「加速」が、より識別を困難にしているものと考えられる。

今後、この識別案の、より一層の洗練が望まれる。

なお、本節を執筆する過程において、小柳和宏氏には土師器の組成観、後藤一重氏には共存関係や年代観の面にて、様々な御教示・御指摘を賜りました。記して感謝の意に変えさせていただきます。

- i 上野淳也 2000 「土師器について」『大友館跡』大分市教育委員会
- ii 土器底部の糸切り離し痕跡から、A群の成形に用いたロクロより、B群の成形に用いたロクロの方が回転の速いものであったことが指摘される。B群には、器壁が1～2mmを呈し、その成形から高度なロクロ成形技術が必要であったと推定される小群が確認される。その薄い器壁の成形には、速い回転が必要であったと考えられる。
- iii 上野淳也 1999 「千人塚出土土師質土器について」『千人塚遺跡』大分県緒方町教育委員会
- iv 上野淳也 2001 「土師器について」『大友館跡』大分市教育委員会
- v 型式や器種の変遷に関しては、小柳和宏氏から、ある程度の併行関係を保ちながらの変遷を考慮すべきとのご教示を得ている。しかし、良好な一括資料に恵まれない当調査においては、この併行関係を把握することはできなかった。今後の課題としたい。
- vi 器高の高いB群土師器環に関しては、特に四国方面で流行した形態のようである。豊後においても国東や海部など沿岸部における出土が散見され、海を介した交流が伺われる。
- vii 小柳和宏氏に、御教示を賜った。
- viii 事実、京都に幕府を開いた室町幕府は、京都において公家世界と同居することになったのであり、公家の故実世界を取り入れながら、武家故実世界を取りまとめていったものと考えられる。当然、南北朝内乱期には、その収束化は緩いものであり、満濟以後に急速に進められたものと考えられる。
- ix 大友氏には、在京志向は見受けられないが、14世紀中頃～後半の建武新政以降は大友貞宗・貞載・千代松丸（氏泰）が京都での戦闘に参加している。
- x 因みに、16世紀初頭に、大内氏が家臣の飯田・龍崎氏に命じて故実を伊勢氏に尋ねさせた『大内問答』という記録が存在した。この『大内問答』は、故実書として珍重され大友氏の家臣・竹氏氏は、この写本を手に入れている。「館系土師器Ⅲ式」の導入時期に関しては、この16世紀初頭頃が相応しいと考えられる。

参考文献

- 上野淳也 1999 「千人塚遺跡出土土師質土器について」『千人塚遺跡』大分県緒方町教育委員会
- 白杵市教育委員会 1999 「白杵石仏群地域遺跡 重要遺跡確認緊急調査報告書」
- 佐伯市教育委員会 1989 「野村礼城址と関連遺跡発掘調査概報Ⅰ 佐伯地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ」
- 佐伯市教育委員会 1991 「野村礼城址と関連遺跡発掘調査概報 佐伯地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ」
- 大分県教育委員会 2002 「鶴崎御茶屋跡」
- 大分県教育委員会 2003 「野村台遺跡」
- 大分市教育委員会 2001 「大友館跡出土土師器について」『大友館跡—発掘調査概報Ⅱ—』
- 大分市教育委員会 2003 「大友府内Ⅵ」
- 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001 「南近都市・豊後府内 都市と貿易」
- 大分市教育委員会 2004 「国指定史跡大友館跡—発掘調査概報Ⅴ—」『大分市市内遺跡確認調査概報』
- 神田高士 2001 「白杵荘期土器の再検討—その1. 野村台遺跡出土遺物を検討する—」『大分・大友土器研究会論集』大分大友土器研究会
- 本荘村教育委員会 1997 「堂ノ間遺跡」

2. 下志村遺跡第2次調査地点出土銭貨について

1. 出土銭貨について

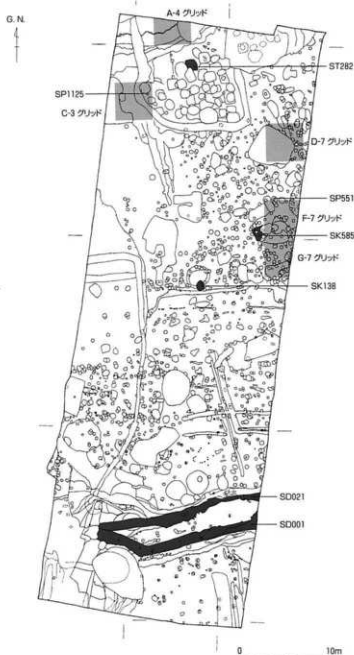
下志村遺跡第2次調査区からは、計32枚の銭貨が出土している。出土枚数は、それぞれ、A区30枚、B区2枚が確認されている。A区出土銭貨に関しては、(銭種が判明しているものに関しては、)全てが中国銭で、B区出土銭貨に関しては、2枚ともが国産の寛永通寶(古)(1636初鋳)である。

中国銭に関しては、中国王朝や皇帝の交代に起因して、短期間に何度も新銭が鋳造され、常に数世代前の旧銭と併用されていたので、常に数種の銭貨が流通し、銭文の如何はあまり問題とはされていなかったようである。よって、一定の形態と大きさ、そして、重量が揃っていれば容易に流通するものであったと考えられている。

しかし、考古学上の年代特定遺物としては、それがマイナス要因となり、私鑄銭・模鑄銭の問題などを含めて考えた場合、銭種のための判断に関しては初鋳年代の上限資料でしかなく、考古遺物としての出土銭貨は、一応の下限年代を提示するものに過ぎない。

しかし、砂丘上の遺跡であり、遺構のほとんどが柱穴遺構であるため遺物の少ない当調査においては、実年代に迫ることのできる数少ない貴重な存在である。よって、本節では、遺構配置との関係を考慮しながら、その位置付けをおこないたい。

まずは、当調査区出土銭貨の整理をおこなう(第12表参照)。



第215図 A区出土銭貨出土状況 (1/400)

- 1 A-4 グリッド出土銭は、銭種不明である。
- 2～8 C-3 グリッド出土銭は、7枚がサシの状態出土した。銭種は、1094年初鋳の「紹聖元寶」1枚を除いて判読不明である。
- 土坑の脇に存在するピットから出土しているため、その土坑が墓墳であった場合、供獻銭になる可能性がある。
- 出土 pit には、4 遺構との切り合い関係が確認されている。順序としては、(新) SD012 → pit → ST → SE260 (旧) の順である。切り合い順序を、逆転して進行法的に解釈すると、①中世後期の溜井が埋まった後、②その保水性の良い土壌に墓墳が掘り込まれる。③その墓墳の縁を壊して pit が掘り込まれ、中に 7 枚の銭が供獻される。④その墓墳を避けるように、墓域を取り囲む溝が形成される。以上のように、当資料が、墓への供獻資料である可能性は極めて高いものであると指摘される。すなわち、C-3 グリッド出土資料は、7 枚ではあるが、六道銭であると考えられる¹⁾。六道銭を蘭葬する習俗は、中世後期には始まっていたとみられているので、当調査区における近世墓群の初源にも関わる問題である²⁾。
- また、C-3 グリッド出土資料は、溜池状遺構や溝状遺構といった遺構に取り囲まれ、保水性の良い土壌の影響で銭貨同士の錯着が著しく、1 枚を除いて、銭種の特定は不可能であった。
- 9～21 D-7 グリッド出土銭は、12 枚がサシの状態出土した。銭種は、上から「熙寧元寶」(1068 初鋳)、「洪武通寶」(1368 初鋳)、「永楽通寶」(1408 初鋳)、「明道元寶」(1032 初鋳)、「熙寧元寶」(1068 初鋳)、「永楽通寶」(1408 初鋳)、「洪武通寶」(1368 初鋳)、「永楽通寶」(1408 初鋳)、「大觀通寶」(1107 初鋳)、「元祐通寶」(1086 初鋳)、「元祐通寶」(1086 初鋳)、「熙寧元寶」(1068 初鋳)となる。この 12 枚の銅銭は、永楽銭を最新銭とし、いずれも品質がよく遺存状況も良好である。意図的に良貨を埋納したものである可能性がある。良貨を選んでいるという行為には、注目せねばならず、最初の撰銭令といわれる大内氏の撰銭令が發布されたのが 15 世紀末葉であり、16 世紀に決定的となる撰銭の慣習を示す可能性が指摘される。「大觀通寶」(1107 初鋳)に関しては、「大」の文字に文字ヤセが確認される。
- D-7 グリッド出土銭は、浜堤上段の掘立柱建物群に復元される柱穴遺構群エリアから出土しており、この掘立柱建物群との併行関係が窺われる。
- 22 F-7 グリッド出土銭は、元豊通寶(1078)である。F-7 グリッド出土銭は、浜堤上段の掘立柱建物群に復元される柱穴遺構群エリアから出土しており、この掘立柱建物群との併行関係が窺われる。
- 23 G-7 グリッド出土銭は、紹聖元寶(1094)、開元通寶(960-621)である。G-7 グリッド出土銭は、浜堤上段の掘立柱建物群に復元される柱穴遺構群エリアから出土しており、この掘立柱建物群との併行関係が窺われる。
- 24 2 次 A 区 SD021c 下層出土銭は、洪武通寶(1368)である。当溝状遺構は、何度も掘り返しが認められ、近世の遺物も認められることから、混入品であると考えられる。
- 25・26 A 区 SK138b 上層・P1 出土銭は、天祐通寶(1017)である。A 区 SK138b 下層・P2 出土銭は、開元通寶(960-621)である。
- 27 2 次 A 区 ST282 出土銭は、熙寧元寶(1068)である。墓墳の形態、深さから見て、座棺であると考えられ、17 世紀代の備前焼播鉢が出土していることから、近世墓であると考えられる。周辺墓からの六道銭が混入したものである可能性が考えられる。
- 28 2 次 A 区 SP551・P1 出土銭は、銭種不明である。SP551 出土銭は、浜堤上段の掘立柱建物群に復元される柱穴遺構群エリアから出土しており、この掘立柱建物群との併行関係が窺われる。

第12表 下志村遺跡第2次調査出土銭貨一覧表

		出土遺物	銭種	初鋳年 (cm)	破損度	出土層位	備考	唐銭	北宋銭	明銭	近世銭	不明	
A区	1	2次A区A-4グリッドP1	不明	2.45		淡茶色砂質土						1	
	2	2次A区C-3グリッドP1	紹聖元寶	1094年	2.45				1				
	3		不明	2.45						1			
	4		不明	2.48		灰褐色砂質土					1		
	5		不明	2.45		(鉄分沈着)					1		
	6		不明	2.4	1/2 残存	2~8は、銅質銭一括					1		
	7		不明	2.2							1		
	8		不明	2.45							1		
	9	2次A区D-7グリッド一括	熙寧通寶	1068年	2.52				1				
	10		洪武通寶	1368年	2.32					1			
	11		永楽通寶	1408年	2.6						1		
	12		明道元寶	1032年	2.58				1				
	13		熙寧元寶	1068年	2.45				1				
	14		永楽通寶	1408年	2.58						1		
	15		洪武通寶	1368年	2.4						1		
	16		永楽通寶	1408年	2.6						1		
	17		大徳通寶	1107年	2.4					1			
	18		元祐通寶	1086年	2.45					1			
	19	元祐通寶	1086年	2.48			9~21は、銅質銭一括		1				
	20		熙寧元寶	1068年	2.5				1				
21	2次A区F-7グリッド一括	元祐通寶	1078年	2.45				1					
22	2次A区G-7グリッドP1	紹聖元寶	1094年	2.48					1				
23	2次A区G-7グリッドP1付近	開元通寶	(621)年	2.48				1					
24	2次A区SD 021 C 下層	洪武通寶	1368年	2.3	1/2 残存					1			
25	上層・P1	天祐通寶	1017年	2.6									
26	下層・P2	開元通寶	(621)年	2.5	割れ3ヶ		1						
27	2次A区 ST282	熙寧通寶	1068年	2.45					1				
28	2次A区 SP551・P1	不明	2.4	4/5 残存							1		
29	2次A区 SK585・P8	元祐通寶	1086年	2.5					1				
30	2次一括	不明	2.35	表擦									
B区	31	2次B区 SD01 上層	寛永通寶(古)	1636年	2.5						1		
	32	2次B区 Q・R-9 グリッド・散乱	寛永通寶(古)	1636年	2.48						1		
								計	2	13	6	2	9
								%	6	41	19	6	28

- 29 2次A区 SK585・P1 出土銭は、元祐通寶(1086)である。SK585 出土銭は、浜堤上段の掘立柱建物群に復元される柱穴遺構群エリアから出土しており、この掘立柱建物群との併行関係が窺われる。
- 30 2次一括出土銭は、銭種不明で表上からの出土である。
- 31 2次B区 SD01 上層出土銭は、寛永通寶(古)(1636 初鋳)である。
- 32 2次B区 Q・R-9 グリッド散乱出土銭は、寛永通寶(古)(1636)である。

2. まとめ

当調査区における出土銭貨は、32枚と少ないものであるが、一応の統計的な、解釈を加えておく。今回の調査では、唐銭・北宋銭・明銭・近世の国産銭貨である寛永通寶(古)が確認された。出土枚数は、それぞれ、唐銭2枚/北宋銭13枚/明銭6枚/近世2枚/不明9枚の総数32枚である。パーセンテージに直すと、それぞれ、唐銭6%/北宋銭41%/明銭19%/近世6%/不明28%となる。不明を除くと、唐銭9%/北宋銭57%/明銭26%/近世9%となる。

因みに、A区のみでは、唐銭2枚/北宋銭13枚/明銭6枚/不明9枚の総数32枚である。パーセンテージに直すと、それぞれ、唐銭7%/北宋銭43%/明銭20%/不明30%となる。不明を除くと、唐銭9%/北宋銭57%/明銭26%となる。B区のみは、近世2枚、近世100%となる。

この内、唐銭である開元通寶に関しては、後の北宋時における鋳造品である可能性が高く、実情は、北宋銭の割合が若干高くなると考えられる。また、一般的な中世の遺跡と比較して、明銭の割合が若干高いように見受けられるが、6枚中、5枚は同一グリッドにおいて、さし銭の状態で出土し、また、良貨を意図的に選んでいる可能

性が指摘されるため、若干、実情に反している割合と言えるかもしれない。

貨幣の出土が表すものは、その遺跡に居住した人々が、貨幣を必要とした者たちであったことを表すと同時に、貨幣流通が浸透していた社会に生活していたことの傍証となる。

C-3-D-7 グリッド出土遺物及び遺構配置状況から、中世後期を中心とした遺構構成を表す遺跡であることが改めて指摘される。

i 鈴木公雄氏がおこなった全国的・全時代的な検討・分析において、6枚一組になる六道銭は全出土六道銭の40%に過ぎないことが判明している。

鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』 東京大学出版会

ii 前掲書（鈴木 1999）。六道銭は、中世から近世にかけての埋葬において、浄土信仰が庶民の間に普及し、地獄のイメージが定着した中世後半に起源を持ち、近世においてもっとも普及したことが判明している。

3. 掘立柱建物跡について

第III章1で、当調査区の掘立柱建物跡の特徴として、以下の3点を挙げた。

1. SB ㉔を除いた建物跡は、桁・梁行、底の柱穴跡が一直線に並び、身舎桁行の柱穴配置は建物長軸の中心線(梁行の垂直二等分線)で、線対称となっている。
2. 総柱建物跡を除いた多くの建物跡は、桁行の柱間寸法が、ほぼ均等になっている。
3. すべての建物跡の建物軸が、座標北からやや西に傾いている。

本節では、下志村遺跡第2次調査で検出された掘立柱建物跡について更に検討を加え、掘立柱建物跡から読み取れる遺跡の位置付けをおこないたい。

(1) 下志村遺跡第2次調査検出の掘立柱建物跡

上記以外の特徴の抽出を試みることにする。抽出する際の問題点として、検出された掘立柱建物跡の多くが、調査区外へ展開することが挙げられる。また、それに伴い、桁・梁行間数などが確定できない。確定している建物跡のみを対象とした場合、その数は40棟中の半分にも満たない。よって、今回は、確定している建物跡と、建物の7割以上が検出されていると想定でき、かつ身舎面積の分かるものを原則として検討対象とし、その場合の各値は、最小値を採ることとした。

1. 掘立柱建物の規格性

柱穴遺構の土層観察からは、柱痕を留めていると考えられるものが多数確認され、また実際に柱の一部が残存している柱穴遺構もあった。SP362の残存していた柱の一部は、現状で直径10cmにも満たないもので、土層断面図から推測される柱痕直径は、18cmを測る。このように、実際の木材の直径と柱痕から推測される直径には差がみられ、原因としては、周辺環境や時間による劣化により、木材が萎縮している可能性が考えられる。よって、柱痕は、実際の柱の径をある程度反映しているものと考え、はじめに、その柱痕直径から掘立柱建物跡に使用された柱について検討していく。

Fig.4は、身舎面積の広狭と柱痕直径の大小との相関性を示している。このグラフからは、広い身舎面積を持つ建物跡の柱痕直径が必ずしも大きくないことが分かり、身舎面積と柱痕直径との相関関係は弱いことが見て取れる。このことは、建物規模により、柱の径の太さが変化するというのではなく、どの規模の建物に対しても同程度の径の柱を使用していたことを示唆するものである。

掘立柱建物跡を構成する柱穴遺構の中で、土層断面図から柱痕直径が測定できるものを162基確認している。Fig.5は、柱痕直径を1cm単位で区切り、その基数分布を示したものである。このグラフから、柱痕直径は、10cm～30cmの間にほぼ収まり、14cmの18基をピークに14cm～21cmの間に6割強が集中していることが見て取れる。

同一掘立柱建物を構成する柱において、桁行側柱、梁行側柱、屋内柱、底の柱といった柱の役割(配置)の違いによる柱の径に差異があるかを検討していく。第13表は、各建物跡の役割(配置)に応じた柱痕直径の一覧である。

同一の掘立柱建物跡を構成する底と側柱の柱痕直径を比較した際、両者に大きな格差は存在しないことが見て取れる。ただし、SB ㉔に関しては、底の柱痕直径は側柱のそれより、やや細い傾向にある。これは、SB ㉔が他の建物跡と異なり桁行側に底を持つことに起因する可能性がある。

総柱建物跡であるSB ㉔(第13表)の屋内柱と側柱の柱痕直径には、差異はない。また、底、屋内柱、梁行の中間柱と側柱の柱痕直径を比較したところ、一部の建物跡の底と梁行の中間柱に、側柱よりやや細いという傾向が認められたが、明瞭な差ではなかった。よって、同一建物を構成する柱においては、柱の役割(配置)にあまり影響することなく同程度の径の柱を使用していたのではないかと推察される。

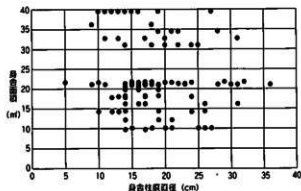


Fig.4 身舎柱直径と身舎面積

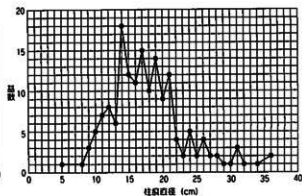


Fig.5 柱直径の基数分布

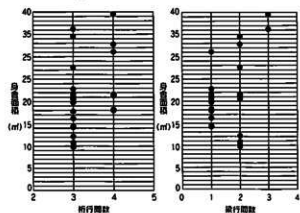


Fig.6 桁行間数と身舎面積

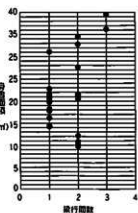


Fig.7 梁行間数と身舎面積

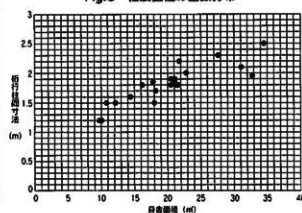


Fig.8 身舎面積と桁行柱間寸法

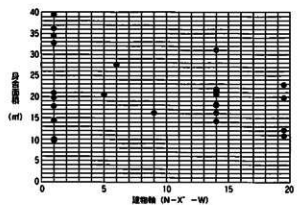


Fig.9 建物軸と身舎面積

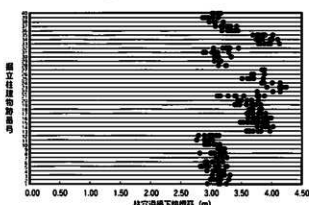


Fig.10 柱穴道橋下端標高

第13表 柱穴配置別柱直径値

独立柱 建物番号	SP番号	柱直径 (cm)	柱穴の種類
7	543	11	底
7	544	17	底
7	179	14	側柱
7	170	16	側柱
7	178	19	側柱
8	521	12	梁内柱
8	452	13	梁内柱
8	455	15	梁内柱
8	522	19	梁内柱
8	795	10	側柱
8	359	11	側柱
8	886	14	側柱
8	519	16	側柱
8	181	19	側柱
8	520	27	側柱

独立柱 建物番号	SP番号	柱直径 (cm)	柱穴の種類
9	759	15	底
9	745	10	梁行の中間柱
9	704	10	側柱
9	562	21	側柱
11	082	22	梁行の中間柱
11	193	9	側柱
11	192	12	側柱
15	600	13	底
15	797	14	底
15	795	15	底
15	798	17	底
15	796	19	底
15	800	14	側柱
15	801	18	側柱
15	792	20	側柱
15	799	20	側柱
15	793	22	側柱
15	791	24	側柱
15	794	25	側柱

独立柱 建物番号	SP番号	柱直径 (cm)	柱穴の種類
19	433	12	底
19	425	10	梁行の中間柱
19	637	5	側柱
19	638	16	側柱
19	864	20	側柱
19	599	21	側柱
19	632	21	側柱
19	605	24	側柱
25	1019	12	梁行の中間柱
25	888	19	側柱
25	914	19	側柱
30	346	15	梁行の中間柱
30	348	15	側柱
30	446	20	側柱
39	46	12	梁行の中間柱
39	61	12	側柱
39	41	14	側柱
39	50	15	側柱
39	47	20	側柱

以上の柱痕直径の検討から、掘立柱建物の柱は、建物規模や同一建物を構成するの柱の役割にさほど左右されることなく、ある程度同じ径の柱を使用していたことが指摘できる。また、柱痕直径が10cm～30cmにほぼ収まることも含めると、柱に規格が存在していた可能性もある。

次に、身舎面積、桁行・梁行間数、桁行柱間寸法の関係から、掘立柱建物跡の特徴を検討していく。身舎面積は桁行と梁行の長さに規定され、両者が長くなれば身舎面積もそれに比例して広がる。Fig.6・7は、桁行間数・梁行間数と身舎面積の相関性を示したグラフである。身舎の桁行間数は3間のものが21棟、4間のものが7棟で、梁行間数は、1間のものが14棟、片側2間のものが12棟、3間のものが2棟ある。Fig.6で注目されるのは、桁行4間のものが3間のものより、必ずしも身舎面積が広くはないということである。また、Fig.7の梁行においても、3間のものは総柱建物であるため面積は広いが、2間のものが必ずしも1間のものより広くはない。このことから、桁・梁間数の多少と身舎面積の広狭との相関性は、さほど強いことが窺える。また、同一建物軸で桁行柱間寸法が一定ということもない。一方、Fig.8は桁行柱間寸法と身舎面積の相関性を示したグラフである。両者は比例関係にあり、桁行柱間寸法の長い建物跡の身舎面積は広くなっており、身舎面積と桁行柱間寸法の相関性が強いことが窺える。

以上のことから、予め統一された1間あたりの柱間寸法が存在していたのではなく、各掘立柱建物の桁行の長さと同数(間取り)に応じて柱間寸法を決定し、掘立柱建物を建築していたと考えられる。

ii. 掘立柱建物の機能性

Fig.9は建物軸別に身舎面積をプロットしたグラフである。このグラフからは、同軸の建物跡が4棟以上あるN-1°、14°、19.5°-Wの軸において、身舎面積が広いグループと狭いグループとに2分化する傾向が看取され、広い建物跡と狭い建物跡との間に何らかの差異があった可能性が考えられる。

また、総柱建物跡、屋内柱を持つ建物跡、庇がある建物跡など、掘立柱建物の構造上の違いも確認されており、身舎面積の広狭も含め、掘立柱建物に機能差が存在した可能性が指摘される。

iii. 掘立柱建物群の計画性

Fig.10は、掘立柱建物跡の立地を検討するため、建物跡ごとに構成する柱穴遺構の下端標高をプロットした。A区の遺構検出面で確認された段差の上段に展開する掘立柱建物跡(SB⑬～⑯、⑱～㉑)は下端標高が高く、下段に展開する建物跡(前述以外の建物跡)の下端標高は上段に比べ低いことがわかる。このことから、掘立柱建物建築時からすでに、この上下段が存在しており、掘立柱建物は、この上下段を認識したうえで建築されていたことを示している。そして、N-14°-Wは上段に、N-1°-Wは下段に建物跡が集中していることから、上下段のそれぞれの状況によって、建物配置が規制されていた可能性がある。

当調査区の掘立柱建物跡は、同一地点での建物の密集度が高い。また、建物軸を揃えており、この点に関しては計画性が高いと言える。さらに、いわゆる上段に展開する建物軸N-14°-Wの掘立柱建物跡は、同じ軸を持つSD221、SD222の西側には展開が確認されていない。つまり、ある一定範囲内に建物建て、そして建替えなければならないという規制が存在していたと考えられ、意図的に掘立柱建物を配置していたようである。よって、掘立柱建物の配置については、非常に高い計画性が指摘される。

第217図は、掘立柱建物跡40棟の相関関係を示した図である。矢印は建物跡の新旧関係を、破線は建物の併存が可能なものを示している。また、建替えと考えられる建物については、遺構配置図にその位置を示した。

建替えと考えられる19.5°のSB⑬とSB⑭は、SB⑯とほぼ同位置にSB⑱を建替えている。両建物とも現状で柱穴配置は、同じ桁行3間×梁行2間で、身舎面積はSB⑱が12.15㎡以上、SB⑭は10.8㎡以上となっており、やや規模を縮小して建替えている。

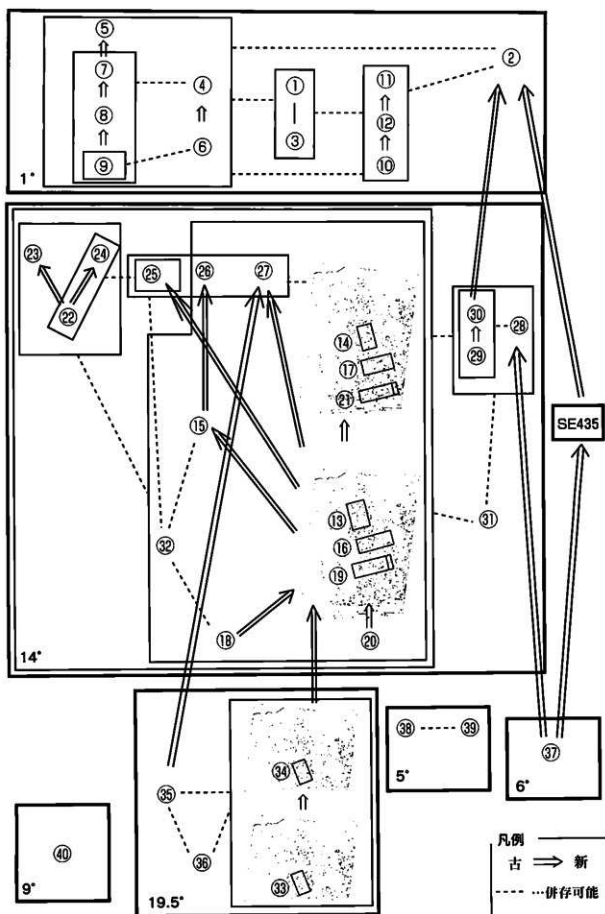
今回、併存していたと考えられる建物がSB⑬・SB⑭・SB⑮である。それぞれの桁行柱間寸法は、SB⑬が1.85m、SB⑭とSB⑮がほぼ1.8mと値が近く、建物跡と建物跡の間隔が1.8mずつ均等に離れている。そして、この3棟の建替えがSB⑬・SB⑭・SB⑮と考えられる。前者3棟と後者3棟とは、柱穴配置や身舎面積に若干の違いがあり、SB⑬、SB⑭、SB⑮の建物間隔は1.7m、2.8mと一定ではない。調査において、SB⑬・SB⑭・SB⑮とSB⑬・SB⑭・SB⑮とは、切り合いなどによる明確な新旧関係は確認できなかったが、高い規格性をもって建てたSB⑬・SB⑭・SB⑮から、同程度の規模を保ち、南に若干位置を移動させた、SB⑬、SB⑭、SB⑮へと建替えたものと考えられる。

SB⑬・SB⑭・SB⑮からSB⑬・SB⑭・SB⑮への新旧関係以外は、すべて建物跡の切り合いに基づき、新旧関係が把握されている。このことも含め、建物跡の平面的な重複状況を鑑みると、異なった建物軸の掘立柱建物跡が、同時に併存していた可能性は低く、建物軸19.5°・6°→14°→1°掘立柱建物へと移り変わったと考えられる。掘立柱建物建築当時から上下段が存在していたことを指摘した際に、建物軸N-14°-Wは上段に、建物軸N-1°-Wは下段に建物跡が集中することを述べた。建物軸N-1°-Wでは、総柱建物跡や屋内柱を持つ建物跡が確認されているが、それ以前の建物軸N-19.5°・6°・14°-Wでは、確認されておらず、両者の間には、掘立柱建物の構造上の差異がみられる。よって、建物軸の変化のみならず、建物の中心が上段から下段へ移ったこと、建物の構造に差があることから、14°から1°への変遷の間には、なんらかの断絶があったと考えられる。さらには、建物軸の変遷ごとに、断絶があった可能性も指摘される。

建物軸N-1°-Wの建物跡であるSB⑮から出土した柱の一部は、放射性炭素年代測定法によりAD1440～1520年、AD1580年～1630年の値が出ている。建物軸N-1°-Wの建物跡は、遺構の切り合い関係から、建物軸N-14°-Wのより後出することが、判明しており、建物変遷を考慮すると、SB⑮は、AD1580～1630年に比定されと考えられる。現在、建物軸N-1°-Wのみ総柱建物跡が確認されている。建築史的に総柱建物跡は、時代が下るにしたがって屋内柱が除去されてゆき、間仕切りの柱のみが残る近世的な間取りが成立するとされている。しかし、建物軸N-1°-Wの総柱建物跡は、桁行側柱と梁行側柱の交点全てで柱穴遺構が確認されている。よって、建物軸N-1°-Wの掘立柱建物跡は、一般的な建物ではなく、特殊な建物であった可能性が考えられる。

i～iiiで検討した特徴を下志村遺跡第2次調査検出の掘立柱建物跡の特徴として以下にまとめ、冒頭に述べた3点に付け加える。

- 掘立柱建物跡の柱は、建物規模や同一建物内の柱の役割(配置)に関係なく、10cm～30cm程度の柱を使用していた可能性がある。また、柱に規格が存在していた可能性も指摘される。
- 1間あたりの柱間寸法は、統一されておらず、各掘立柱建物の桁行の長さと同数(間取り)に応じて柱間寸法を決定し、掘立柱建物を建築していたと考えられる。
- 身舎面積の広い建物跡群と狭い建物跡群との差、建物跡の構造上の差は、掘立柱建物跡の機能差を示している可能性がある。
- 掘立柱建物建築時に上下段が存在し、掘立柱建物は、この上下段を認識し上下段に規制され建築されている。
- 同一地点への建物の密集、建物軸の統一など、計画性の高い掘立柱建物配置をしている。
- 建物軸19.5°・6°→14°→1°掘立柱建物へと変遷した。また、軸が変わるごとに、時期的或いは質的な断絶があった可能性がある。特に建物軸14°から1°への変遷の間は、その可能性が高い。また、建物軸N-1°-Wの掘立柱建物跡は、特殊な建物であった可能性がある。



第217图 A区独立柱建物跡相關關係圖

掘立柱建物跡自体、またその配置には、規格性がみられ、特に建物配置の計画性は高い。建築当時から上下段が存在しており、この段差が自然地形によるものか、人為的なものなのかは、現状では判断し兼ねる。たとえ段差が自然地形によるものであったとしても、地形的要因のみで軸を揃えた建物をほぼ同位置に何度も建替えることは考え難く、そこには、自然地形をも取り込んだ人の意図が、掘立柱建物配置の計画性の大部分を占めるものと思われる。以上のことから、当調査区に展開するこれらの掘立柱建物跡は、自然的・社会的環境を含んだ人々に基づき規格的・計画的に建てられた掘立柱建物群と考えられる。

(2) 掘立柱建物跡からみた遺跡

ここでは、大分県内で調査され、中世の掘立柱建物跡を検出した遺跡の内、17 遺跡について検討する。

17 遺跡の時期に関しては、13 世紀～16 世紀と幅広いものとなっている。

Fig. 11 は、遺跡ごとに身舎面積をプロットしたものである。ここで取り上げた 17 遺跡は、調査者により、その性格が示されているものである。

①水田耕作に伴う集落…塩屋条里遺跡山田地区¹、八坂久保田遺跡²、坂口遺跡³、信重遺跡1次⁴・2次⁵

②曲輪、出城、陣跡…上門手遺跡曲輪1⁶、小城原遺跡南部地区⁷、釘野千軒遺跡⁸

③屋敷、居館…重藤遺跡⁹、寺田今藤遺跡¹⁰、八坂中遺跡(居館1～3)¹¹、稲田市遺跡¹²、小城原遺跡北部地区¹³、小路遺跡A地区¹⁴

④方一町規模の居館…古庄屋遺跡¹⁵、小路遺跡B地区¹⁶、上城遺跡¹⁷

掘立柱建物跡から①～④の特徴を抽出する。

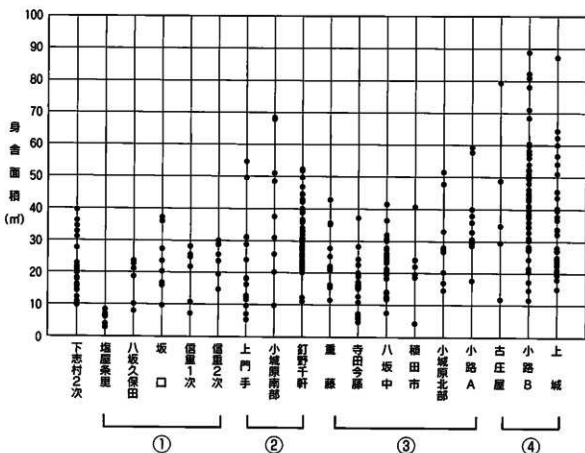


Fig. 11 遺跡別掘立柱建物跡身舎面積

1. 掘立柱建物跡の規格性

①～④と17遺跡の身舎面積とを比較したところ、約30㎡以下の建物の遺跡が①に、70㎡を越す建物が存在する遺跡が④に、その他の遺跡が②・③にあてはまる。さらに、桁行間数が6間を超える建物が存在するのは、④のみとなっており、④方一町規模の居館は、70㎡を越す建物、桁行間数6間以上の建物が存在し、掘立柱建物の規模自体が、他の遺跡とは明らかに隔絶している。④を除いて、60㎡を超える建物が存在する遺跡は、出城(②)と考えられている小城原遺跡南部地区のみであり、60㎡以上の建物、桁行間数6間以上の掘立柱建物跡の存在が、方一町規模居館の指標の1つとして差し支えないと思われる。そして、①に関しては、約30㎡以下の建物で構成されることが1つの指標として挙げられる。

②とした上門手遺跡曲輪1、小城原遺跡南部地区、釘野千軒遺跡は、③の居館であると考えられる小城原遺跡北部地区、小路遺跡A地区と同様、身舎面積が、④に次ぐ様相を持つ。②の3遺跡の掘立柱建物跡は、歪んだプランや桁行柱筋の通らない掘立柱建物跡が、検出建物跡の3割程度を占めており、③の2遺跡に比べ目立つ。出城と考えられている小城原遺跡南部地区は、建物のプランが平行四辺形を呈するなど、歪んだプランや桁行柱筋の通らない掘立柱建物跡が、5割にものぼる。よって、掘立柱建物の建て方が粗いことは、②の遺跡が、曲輪や出城といった、定住を主目的としていないためと推察される。しかし、①や③の中にも歪んだプランを持つ建物や桁行柱筋の通らない建物の割合が高い遺跡もあり、必ずしも掘立柱建物の建て方が粗いことが即、定住の意思のないことを表すものではないと考えられる。だが、③のいわゆる居館とされる遺跡や④の遺跡の掘立柱建物跡をみると、プランや桁行の柱筋は整っており、各建物跡の柱間寸法も均等なものが多い。

このことから、掘立柱建物跡の規格性が低い建物跡が目立つ遺跡に関しては、その遺跡内での規制及び定住の意思の現れとみて、差し支えないと考えられる。

下志村第2次遺跡では、予め統一された1間あたりの柱間寸法が存在したのではなく、各掘立柱建物の桁行の長さと同数(間取り)に応じて柱間寸法を決定し、掘立柱建物を建てた可能性があることを指摘した。Fig. 11で挙げた遺跡に関しても、桁行間数の多い建物の身舎面積が、少ない建物のそれより必ずしも広くはない。また、同一桁行間数である建物跡の桁行柱間寸法は、建物跡によって異なり、必ずしも一致していない。Fig. 12・13は、釘野千軒遺跡のものである。この釘野千軒遺跡は、47棟の掘立柱建物が、3～5年程度の短期間にも機能していたと考えられている遺跡である。よって、時間差による間尺の変化は、極めて小さいと考えられ、同一時期の掘立柱建物跡の様相を示していると考えられる。

Fig. 12は、桁行間数と身舎面積の関係を示している。桁行間数4間の建物跡の身舎面積が、桁行間数3間のそれより必ずしも広くはない。1間あたりの柱間寸法が予め統一されていたのであれば、4間の建物跡の身舎面積が、3間のものより広くなるはずである。

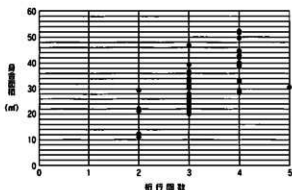


Fig. 12 釘野千軒遺跡 桁行間数と身舎面積

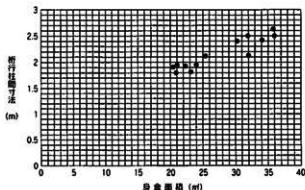


Fig. 13 釘野千軒遺跡
身舎面積と桁行柱間寸法 (桁行3間の建物跡)

次に Fig. 13 は、桁行 3 間の建物跡の柱間寸法と身舎面積の関係を示している。同じ桁行 3 間の建物跡であるが、桁行柱間寸法が 1.8 m ～ 2.6 m と一定ではない。また、身舎面積の広狭と桁行柱間寸法の長短には相関関係がみられる。よって、釘野千軒遺跡においても下志村遺跡第 2 次調査と同様に、予め統一された 1 間あたりの柱間寸法が存在したのではなく、各孤立柱建物の桁行の長さと同数(間取り)に応じて柱間寸法を決定し、孤立柱建物を建てた可能性があることが指摘される。また、他の遺跡についても桁行柱間寸法と身舎面積の相関性があることを確認している。

「孤立柱建物ごとで柱間寸法が異なる」、「同一建物跡でも左右で柱穴の位置が違う」、「柱間寸法が異なる」などの原因は、予め統一された 1 間あたりの柱間寸法が存在したのではなく、各孤立柱建物の桁行の長さと同数(間取り)に応じて柱間寸法を決定していたことによると考えられる。

ii. 孤立柱建物の機能性

①～④の遺跡の孤立柱建物中には、総柱建物跡、屋内柱を持つ建物跡、庇を持つ建物跡、内部施設を持つ建物跡など、孤立柱建物跡にバリエーションがある。それらの建物跡は、身舎面積などの諸要素も含め、倉庫、櫓、厩、厩、主屋、主殿などに比定されており、孤立柱建物に機能差のあることが推察されている。また、定住が想定される④や③の寺田今藤遺跡と八坂本庄遺跡²⁴(Fig. 11 には含まれていない)は、建物跡のバリエーションが豊富である。そして、①の信重遺跡も、検出建物跡数は少ないが、建物跡にバリエーションがある。

以上のことから、建物跡のバリエーションは、定住を判断する場合の根拠を補助する要素であり、遺跡そのものの性格に直結するものと考えられる。

iii. 孤立柱建物群の計画性

④と③の八坂中遺跡(居館 1 ～ 3)、小城原遺跡北部地区、小路遺跡 A 地区では、多数の孤立柱建物跡が、区画施設によって配置や建物軸を規制されており、同一地点での建物跡の密度が高い。これは、建物配置が区画施設に規制され、建物の建替え時にもその規制が働いている結果と考えられる。

以上の i ～ iii を踏まえ、①～④の特徴をまとめたものを下記に記す。

①身舎面積約 30 m²以下の建物群。明確な区画施設がない。同一地点での孤立柱建物跡の密度が低い。建物軸などによる、建物への強い規制がない。

②歪んだプランを持つ建物や桁行の柱筋が通らない建物の割合が③-1 に比べ高い。土塁などの施設や道などにより、建物配置・主軸方位などが規制を受ける。

③建物群内において、最大身舎面積を持つ建物跡の面積が、およそ 30 m² ～ 60 m² である。1 と 2 の 2 つのタイプに分類できる可能性がある。

- ー 1. 区画施設などによる、建物群への規制が緩やかである。同一地点での孤立柱建物跡の密度が低い。
- ー 2. 区画施設(複数の建物を区画する施設)などにより、建物群全体の建物配置・主軸方位などが強い規制を受ける。同一地点での孤立柱建物跡の密度が高い。歪んだプランを持つ建物や柱筋が通らない建物の割合が低い。

いわゆる居館といわれるものがこの類に該当すると考えられ、さらに敷地面積に基づき細分される可能性がある。

④方一町規模の区画施設を持つ。建物群が区画施設などにより、建物配置・主軸方位などが強い規制を受ける。孤立柱建物跡の密度が高い。歪んだプランを持つ建物や柱筋が通らない建物の割合が低い。身舎面積 60 m² 以上の建物跡、桁行間数 6 間以上の建物跡が存在する。

今回検討した遺跡中には、官衙的遺跡、寺院、市、町屋などの遺跡は、含まれておらず、また、大分県内すべての遺跡を網羅したものでもない。付け加えるならば、③・④の遺跡に関しては、居住目的だけではなく、公的役割或いは宗教的役割を負った遺跡も含まれると考えられる。特に③は名主、町人、僧侶、武士といったさまざまな層の居住空間を内包している可能性がある。よって、①～④の遺跡の性格に基づく分類も更なる検討の必要がある。また、ここに挙げられた特徴は、数値や細部においての検討の余地は大きく、それぞれ①～④に分類した遺跡が、①～④の特徴として列挙したすべての特徴を満たしているわけではない。①～④のそれぞれの特徴及びその性格は、必ず満たされるものではなく、おおよその傾向である。今回含まれていない遺跡や今後の調査事例も含め、さらに検討していく必要がある。

(3) 掘立柱建物跡からみた下志村遺跡第2次調査

下志村遺跡第2次調査で検出された掘立柱建物跡は、身舎面積10.08～39.5㎡を測る。建物配置・主軸方位などに強い規制があり、ほぼ同じ場所に同軸の建物を建替えるなどして、掘立柱建物跡の密度も高い。総柱建物跡・屋内柱を持つ建物跡・庇を持つ建物跡があり、建物跡のバリエーションもある。また、現段階で、並んだプランを持つ建物跡はなく、柱筋が通らない建物跡も40棟中1棟のみで、建物跡の多くは、同一建物における桁行柱間寸法が、均等であり、定住の意志が見て取れる。以上のことを鑑みると、当遺跡の特徴は、③屋敷、居館に当たると考えられ、特に③-2の特徴の多くと符合する。

掘立柱建物跡からみた下志村遺跡第2次調査の位置付けは、以上である。当調査地の建物跡の中には、桁・梁行間数が確定できないものが含まれている。また、遺跡の性格を判断するには、掘立柱建物跡の検討だけでは、不十分であり、出土遺物、他の遺構との関係、周辺環境の検討なども欠かせない。よって、出土遺物や他の遺構との関連も含め、再度、第VI章で下志村遺跡第2次調査の位置付けをおこないたい。

-
- i 安岐町教育委員会 2001 『塩屋条里遺跡』 安岐町文化財調査報告集第9集
 - ii 大分県教育委員会 2003 『八坂の遺跡』 I
 - iii 香々地町教育委員会 1995 『香々地の遺跡』 II
 - iv 香々地町教育委員会 1994 『香々地の遺跡』 I
 - v iiiに同じ
 - vi 大分県教育委員会 2004 『上門手遺跡』
 - vii 久住町教育委員会 2002 大分県教育委員会『小城原遺跡・中原遺跡』
 - viii 九重町教育委員会 1997 『釘野千軒町遺跡』 I
 - ix 国東町教育委員会 1991 『重藤遺跡 下平遺跡』
 - x 豊後高田市教育委員会 1994 『寺田今藤遺跡』 小田原地区遺跡群発掘調査報告書(1)
 - xi 大分県教育委員会 2003 『八坂の遺跡』 II
 - xii 大分県教育委員会 1994 『植田市遺跡』
 - xiii viiiに同じ
 - xiv 久住町教育委員会 2000 『小路遺跡 上屋敷遺跡』
 - xv 大分県教育委員会 2002 『古庄屋遺跡』
 - xvi xivに同じ
 - xvii 久住町教育委員会 2002 『上城遺跡』
 - xviii iiに同じ

4. 動物祭祀遺構 (SK140) について

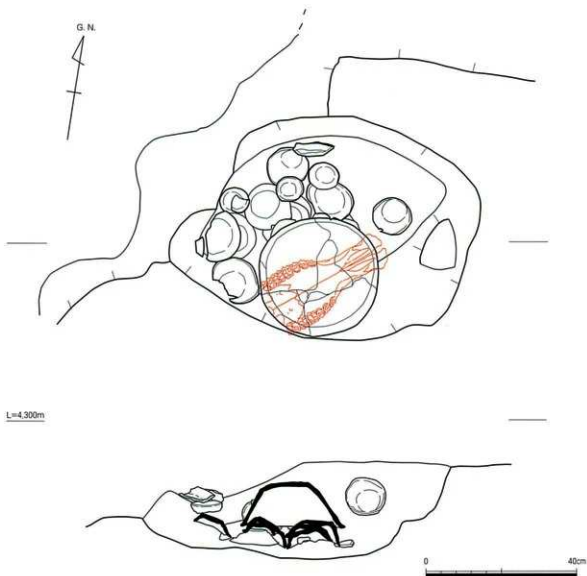
(1) 出土状況

SK140 からは、土師器坏 15 点と土師器小坏 7 点、底の破られている土師質土器鍋 1 点、そして、動物遺存体として牛歯が 5 点出土した (第 218 図参照)。土師器は、伏せられた坏が 8 点、合わせ口の小坏が 2 点、その他の坏 7 点、小坏 5 点、計 12 点は正位置に置かれていた。

一般的に動物祭祀遺構は、その認定に困難な場合が多く、考古資料・出土状況から、どのように動物祭祀を認定し、どのような祭祀がおこなわれたかを解明するかが問題となる。

当遺構に関しては、土坑という閉じた遺構の中に、動物骨と土器を遺構内で意図的に配置したもので、明らかに埋葬や廃棄行為と区別されるものである。また、出土状況を検討することによって、ある程度の埋置過程、すなわち動物祭祀の一過程を復元することが可能であると考えられる。

しかし、幾つかの問題をクリアせねば、その動物祭祀の動機と形態にまで迫ることはできず、あくまでも土器埋置遺構に留まる。本節においては、認定に当たって生じるいくつかの問題をクリアすべく、動物依存体、出土状況に関して検討を加える。



第218図 A区 SK140 遺物検出状況 (1/10)

(2) 祭祀過程の復元

本項では、土師器や動物依存体、土師質土器鍋の出土状況から、それらの埋置過程を復元する。その過程は、遺物の上下関係から、把握が可能である(第219図参照)。

SK140の遺物群は、上位から順に、大まかに4群に分けることができる。1群は最上位の土師質土器鍋を取り囲むように配置される土師器の坏と小坏、2群は土師質土器鍋、3群は土師質土器鍋の中に位置していた牛歯、4群は土師質土器鍋の下位にうつ伏せに埋置されていた土師器坏である。これは、本来、上位から遺物を順に取り上げてゆく過程(調査過程)においても、実証が可能である。これら、4群の上下関係を整理したものが、第222図である。

すなわち、溯及法的過程解釈が可能である。以下の祭祀過程復元は、その溯及法的過程解釈を逆転したものである。

- | | |
|-------------------------------------|------|
| 手順① 鉄鉋を置く。 | ……5群 |
| 手順② ①の上に、8点の坏を伏せて東側から3・4・1と重ね置く。 | ……4群 |
| 手順③ ②の上に、牛頭骨を裏返し、北東側に鼻先に向けた状態で据え置く。 | ……3群 |
| 手順④ ③の上に、底を打ち欠いた土師質土器鍋を被せる。 | ……2群 |
| 手順⑤ ①・②・③・④の周りに、小坏や坏を配置する。 | ……1群 |
| 手順⑥ 埋める。 | |

(3) 動物依存体 — 3群—

出土した牛歯は、5点全てが上顎大白歯で、頭骸骨に付属するものである。白歯は、右側が上顎第1・第2・第3大白歯、左側が上顎第1・第2大白歯との鑑定を受けた(第220図参照)。白歯は、骨格上、正位置に並び、歯根を土坑底面に向けた状態で検出された。

歯根が土坑底面を向いた状態で検出された所見は、頭蓋骨が裏返された状態で埋置されたものであることを示す。頭蓋骨から、歯の部分のみをきれいに並んだ状態で取り出すことは困難であると考えられるため、本来、頭骸骨に付随していたものが、強固なエナメル質を持つ白歯のみを残して溶解したものと推定される。なお、出土した牛歯の状態から、生前の牛は、かなりの老齢であったとの指摘を受けている。

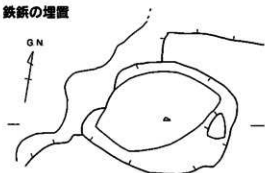
土坑の平面形状は、長径80cm、短径50cmの楕円形を呈する。牛頭骨は、サイズ・歯の並びから、鼻先を北東に向けて供献されていたと復元される(第281図参照)。しかし、この向きでは、牛頭骨の内、牛角部分が土坑内に収まらないため(第220図←b→)、この部分は欠損していた可能性が高い。

牛角部分は、角芯とこれを覆う半透明の光沢のある角鞘からなっており、角鞘部分は竹製品の素材資源として活用されるため、通常の焼牛処理に従えば欠損する部分であることが理解される。焼牛処理とは、皮を剥ぎ、角をはずし、肉を取るといった一連の行程のもと、死んでしまった牛の遺体を資源として最大限に活用しようとする行為である。肉を取った後に残る骨の内、骨細工に使われる焼骨や頭骨、上腕骨、中手骨、大腿骨、中足骨以外の骨にあまり実用的な利用方法はなかったようであるが、頭骸骨に関しては曝して、白骨化させたものを、祭祀のために備蓄していたものと考えられる。すなわち、頭骸骨に関しては、実用性以外にマジカルな意味で需要・必要性が存在したため資源として備蓄されていたのである。

中・近世における馬の埋葬には、頭部或いは頭骸骨を欠く例が多く見受けられ、その頭骸骨が備蓄の対象であったという推察がなされている。これは、取り去られた遺骸からの推察となるが、この推察は、民俗事例でも確認されており、佐々木喜善によって報告された岩手県陸中上閉伊郡における、馬が死ぬとその首を家々の門口に立てておくといった習俗は、この推察をさらに現実味のあるものとしている。

よって、当遺構出土牛頭骨に関しては、下顎骨とともに牛角が欠落しているという所見から、この牛頭骨は、供儀、すなわち、生贄として捧げられたものではなく、備蓄牛頭骨を用いた祭祀であったと考えられる。すなわち、牛頭骨は、祭祀をおこなう時点で白骨化していたことが指摘される。

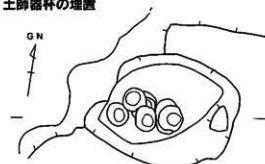
1. 鉄鉾の埋置



L=4,300m



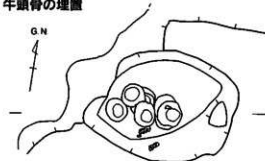
2. 土師器杯の埋置



L=4,300m



3. 牛頭骨の埋置



L=4,300m



4. 土師質土器網の埋置



L=4,300m



5. 土師器小杯・杯の供献

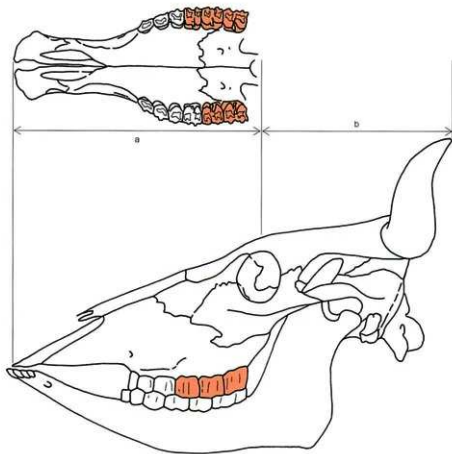


L=4,300m



0 40cm

元来、古代において動物祭祀は、犠牲獣すなわち生贄を伴う祭祀であった。しかし、中世に入ると、貴重な労働力であり資源でもある動物を犠牲にすることを避けるようになり、その代替品として、その獣の骸の内、象徴的な部分を用いたものと考えられる。この変化は、この祭祀が一般的な広がりを見せ、需要が伸びた結果、生贄よりも容易に手に入る代替品を用いる機会が増加した結果であるとの指摘も可能であろう。



第220図 A区 SK140 出土牛頭骨臼歯位置図

(4) 土師質土器鍋について — 2群—

当遺構では、土師質土器鍋が牛頭骨に被せられた状態で出土している。SK140 出土土師質土器鍋は、特徴として、底に穴が空いている点が挙げられる(第221図参照)。この牛頭骨に、鍋を被せるという行為は、祭祀の意味を考えるにあたって、重要な一過程である。SK140 出土土師質土器鍋は、口縁部形態のみを見れば、防長型足鍋Ⅳ型式の特徴を備える。すなわち、口縁部は、「端部を内側へ屈曲させ、内面に蓋受け状の段が見られる」形態を採る。しかし、当遺構出土土師質土器鍋には、足は付いておらず、防長型鍋の特徴である格子目のタキキ痕も有さない。胎土も、防長型のものが白色であるのに対し、当遺構出土資料は赤褐色の色調を呈する。また、鍋の底は、故意に打ち破られている。

土師質土器鍋に付着していた炭化した吹きこぼれをC14年代測定法にて計測をおこなったところ、暦年代校正した2σ暦年代範囲AD1300～1420年が得られている。次項でおこなった検討によると、共伴土師器坏・小坏を型式学的に14世紀前半代に位置付けることはできないため、結果、人文科学上、実質14世紀後半～15世紀初頭

という年代幅中に位置付けられる。

当遺構に関しては、土坑という閉じた遺構の中に、動物骨と土器を遺構内で意図的に配置したもので、明らかに埋葬や廃棄行為と区別されるものである。また、出土状況を検討することによって、ある程度の埋置過程、すなわち動物祭祀の一過程を復元することが可能であると考えられる。

(1) 器面観察

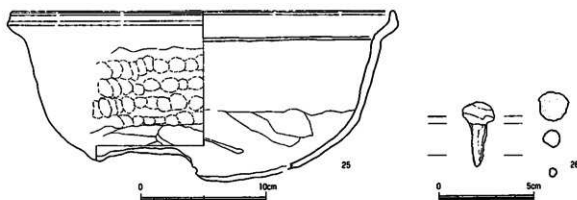
器面観察における所見として、器面内面が、やや黒色に変色し使用痕があまり観察されないのに対し、器面外面は、底部に直径 18 cm ほどの円形状に無煤の部分がある以外は、吹きこぼれや煤が多量に付着している点が指摘される。この吹きこぼれや煤に関しては、五徳などを使用した影響であると考えられる。

(2) 断面観察

割れ口は、長径 10 cm、短径 7 cm の 2 つの楕円形が横に連結した形状を呈する。割れ口の断面観察から、鍋内面の破砕面よりも鍋外面の破砕面の面積が広く、器壁の剥離面が外面に確認されるため、鍋底は、内面から外面に向かって故意に突き破られたものであることが判明する。

突き破り方は、鍋の内面から外面へ向けて 2 度に渡って棒状のもので突き破ったものと推定される。

以上のように、(1)器面観察における所見からは、動物祭祀をおこなうに当たって新品の土鍋を使用するのではなく、ある程度、使い古した土鍋を祭祀に使用している点が、(2)断面観察における所見からは、故意に底が突き破られているという所見が、それぞれ導き出される。



第221図 A区 SK140 出土土師質土器鍋 (1/3)・鉄紙 (1/2)

(5) 出土土器について —1群・4群—

SK140 からは、土師器 15 点と土師器小坏 7 点が出土した。

坏は、全て右回転のロクロ成形で、体部過半を粘土柱から外へ 1 cm ほど押し広げた後、薄く外反するように挽き上げる。口縁端部には、面取り調整が施される。法量は、概ね口径約 12 cm・器高 4 cm・底径約 7 cm を測る。

小坏も、全て右回転ロクロ成形で、体部過半は強いロクロナデが施され、口縁端部は面取り調整をおこないながらも丸くおさまられる。法量は、概ね口径約 8 cm・器高約 2.6 cm・底径約 6 cm を測る。

坏・小坏いずれも、石英・赤色粒子・角閃石・結晶片岩を胎土に含み、特に結晶片岩粒は、在地産であることを示すものであると考えられる。また、いずれの器種も同じ職人が作ったものといっても過言ではないほどの斉一性が認められる。この斉一性の強い組成は、祭祀のために一括購入或いは製作された可能性を示すものである。

土師器は、伏せられた坏が 8 点、合わせ口にされた小坏が 2 点、その他の坏 7 点、小坏 5 点、計 12 点は正位置に置かれていた。これら土師器の配置は、その上下関係から、2 つの群に分けられる。

1 群

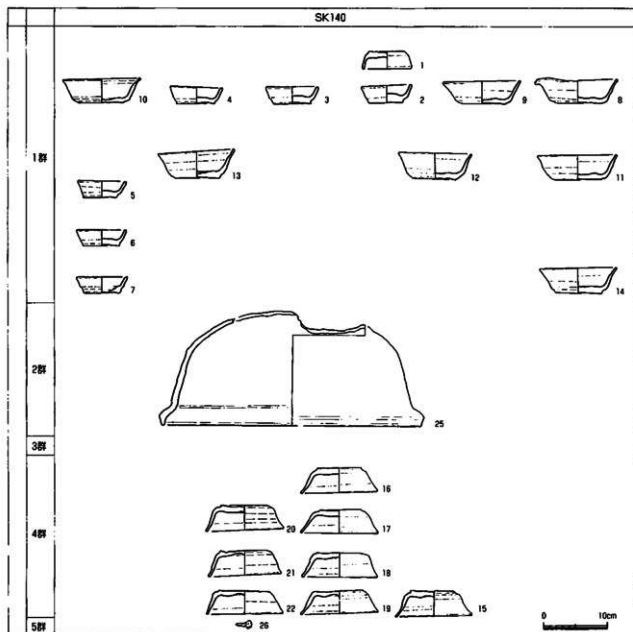
上位の群である。上位埴属資料としては、坏が8・9・10・11・12・13・14の7点、小坏が1・2・3・4・5・6・7の7点、計14点である。1・2が合わせ11とされている以外は、すべて正位置に、すなわち、土器内面が上を向くように据えられている。

4 群

下位の群である。下位埴属資料としては、坏が15・16・17・18・19・20・21・22の8点である。すべてが、東側から3・4・1と伏せて積み重ねられている。

第219図を模式化したものが、第222図である。この図からも把握されるように、上位と下位の群は、土鍋の存在を境として分かれる。また、上位の群に関しては、土坑北東部に攪乱を受けてはいるが、坏が7点・小坏が7点と点数の一致には注目される。

また、1群と4群との違いに関しては、1群は使用品、4群は未使用品との分類も可能である。



第222図 A区 SK140 出土埴物祭祀過程概念図 (1/6)

(6) 祭祀過程に見る精神性

民俗学の成果は、現代に残る様々な習俗の深層から、中世人の思考様式を掘り起こしてくれる。民俗学は、掘り起こした現代人一般の思考様式とは異なる不可解な古の思考様式について、それをモデルとして提供する。すなわち、「地鎮」や「エナ」の取り扱いのような一つの「行為」の考え方を提供する。現代人たる考古学研究者は、発掘調査に当たって、不可解な事例に遭遇したとき、その民俗学の成果により抽出された思考様式モデルを用いて、類推的(アナロジー)に照合を試みる。これは、プロセス考古学派における、所謂、中範囲理論(ミドルレンジ・セオリー)の適用プロセスであり、文化人類学的方法である。すなわち、遺構・遺物の検出に留まらず、「行為の検出」をおこなうものである。

今回、検出された中世の動物祭祀遺構に関しては、県内において管見では他に類例を見ない。しかし、完形の土師器を埋置した例に関しては、若干の類例が確認されるので、まずは、簡易ではあるが中世土器埋置遺構検出状況の類型化をおこない、その中に SK140 を位置付けたい。

中世土器埋置遺構検出状況の諸類型

中世土器の埋置遺構の検出状況に関しては、簡易ではあるが、以下の諸類型が考えられる。

A. 掘り込みが有る

B. 掘り込みが無い

a. 完形検出

1. 土器埋置に規則性の認められるもの埋置

2. 土器埋置に規則性の認められないもの埋置

b. 破砕片検出

1. 細片化した土器を埋めたもの大量破片廃棄

2. 完形土器埋置が結果的に細片化したもの

A・B両類型に関しては、A類型が圧倒数確認されている。しかし、B類型に関しても中世府内町跡など都市遺跡をはじめとした整地行為が多数確認される多層位遺跡調査の中において確認数が増加してきている。すなわち、造成時の「地鎮」遺構として捉えられる行為である。a・b類型に関しても、a類型の場合が圧倒数確認されている。b-1類型の確認数が少ないことに関しては、b-1類型が土器の大量破片廃棄を意味し、その検出が館跡などにおける「武家儀礼執行」、或いは「共同飲食」を意味するものであるため、館跡という検出場所の限定を原因とする。b-2類型に関しては、本質的にはa類型に含まれるものである。

よって、SK140は、A-a類型の中において位置付けられる。SK140出土遺物は、土師器大 15点と土師器小 7点、底の破れている土師質土器鍋 1点、牛歯 5点、鉄飯 1点の計 29点が出土した。土師器は、伏せられた坏が 8点、合わせ口の坏が 2点、その他の坏 7点、小坏 5点、計 12点は正位置に置かれていた。土師器に関しては、坏と小坏の2種類に分けられるが、両者は極めて画一的なものであり、当祭祀に際して用意された未使用品であったと考えられる。

土師器坏皿類は、中世には「かわらけ」と呼ばれ、使い捨ての調度として伝えられており、儀式・儀礼に関しては、未使用のものをを用いることに意味が見出され、古代以来、清らかなもの・聖なるものとして捉えられている。出土状況・遺物観察からは飲食器、灯明皿、埋葬供献品といった使用方法が窺われるに過ぎない。すなわち、その先の「行為の検出」に関しては出土状況から、解釈・理解せざるを得ない。土師器埋置遺構に関しては、その機能として物理的な機能は認められないため、何らかの儀式・儀礼など精神的機能或いは行動・思考様式を反映する遺構であると考えられる。祭祀や儀式・儀礼というのは、社会的なものであり、その背後に、その儀式・儀

札を有益なものと判断する行動・思考様式を共有する集団－共同体－の存在が伺われる。

しかし、土坑内には、使い捨て調度として磨りかきもの・聖なるものとして捉えられているかわらけと、何處も使用された痕跡のある土師質土器鍋とが混在している。土鍋については、4項で検討した通り、日常使用していたものに、手を加え底部を破砕し、使用不可能としたものである。牛歯に関しても、3項で検討した通り、元来、供儀として捧げられるべき生贄の代替品として、斃牛処理後の白骨化した牛頭骨が用いられていることが判明している。牛頭骨に関しては、生贄とは聖なるものであるのか、穢れたものであるのかという判断に関しては一考を要する。また、4群土師器下に出土した鉄鉾に関しても、何らかの意味を持つものと思われるが、その依存状況からは、判断が困難である。

この土坑の中を未使用品と使用品であると考えたならば、未使用品は、土師器の内、おそらく4群のもののみである。1群に関しては、祭祀の最後に供献品として使用されていると考えられるからである。したがって、以下のよう整理することができる。

⑤ 1群土師器	……………	祭祀の最後に供献品として使用	……………	正位置
④ 土師質土器鍋	……………	日常生活において使用	……………	逆位置
③ 牛頭骨	……………	斃牛の頭骨を使用	……………	逆位置
② 4群土師器	……………	未使用	……………	逆位置
① 鉄鉾	……………	不明	……………	不明

また、正位置・逆位置という位置関係に関しても、上記のように整理することができる。

鍋を被せるという行為に関しては、民俗事例などから、一般的に封じ込めるという意味合いが強いものと考えられる。例としては、疫病にかかって死亡した人物の遺体に、鉄鍋を頭に被せて埋葬するという習俗などが伝承されている。すなわち、逆位置のものに関しては、封じるという意味合いが強いものである可能性がある。また、すべては埋め置かれたものであることも、やはり、同様の意味を持つと考えられる。したがって、当遺構は、現状においては「地鎮」行為であると推察される。

地鎮であれば竪立柱建物跡との位置関係について検討を加えねばならないが、SK140は、N-14°-Wの竪立柱建物群の西側、N-1°-Wの竪立柱建物群の北側に位置する。土師器や土師質土器の年代観を考慮すると、SK140は、N-14°-Wの竪立柱建物群の形成時期と併存関係になる。また、地籍図などから、N-14°-Wの竪立柱建物群の正面は、東側であると考えられ、SK140は背割溝と考えられるSD221とSD222の外側に形成されていたことが推測される。その推察からも、この遺構形成地点が、「境界」の場に形成されていることが理解される。この理解は、SK140が、「地鎮」行為或いは「破邪」の効果を期待するものと考えられる「境界の祭祀」であることを支持するものである。この行為に動物依存体が必要であった意味合いに関しては、今後、民俗学的なモデルの提示が必要とされる。

1 松井章 2001 「VII 祭祀と葬送 2 動物祭祀」『図解 日本の中世遺跡』

2 牛歯は、木村幾多郎氏・松井章氏の両者に鑑定していただいた。

3 岡山市鹿田遺跡の井戸跡出土牛頭骨は、13世紀初頭の廃絶時に執り行われた井戸祭祀に伴うものである。牛頭骨は、左右ともに前頭骨の角芯の基部が壊され角鞘も抜かれていたことから、通常の斃牛処理法に従い、皮を剥ぎ、角をはずし、肉を取った後、頭骸骨だけを曬して、備蓄しておいたものを用いたとされている。また、10世紀後半の防府市周防国府跡の井戸跡出土牛頭骨も、同様に角が取り去られた状態で出土している。

4 千葉県マミヤク遺跡出土の近世馬の埋葬例。

5 当遺構と同じ、室町時代の遺跡として、広島県草戸千軒町遺跡・池SG3450号遺構では、牛馬を殺したり、死んだ場合に頭骸骨を取り去った例が確認されている。

参考文献

西本豊弘 松井章 1999 『考古学と動物学』同成社

第VI章 まとめ

1. 下志村遺跡第2次調査の遺構変遷

下志村遺跡第2次調査では、古墳時代、中世～近・現代の遺構が確認された。時期を追って当調査地点の遺構変遷を見ていく。13世紀～16世紀に関しては、第V章で提示した土師器編年と掘立柱建物跡の変遷を基に、遺構変遷をおこなっている。

①古墳時代

古墳時代前期にあたる。遺構としては、B区SK04がこれに該当する。また、試掘で確認された土器埋置遺構も当該期である。B区の中世～近世にかけての遺構の埋土からも、古墳時代の土器が一定量出土しており、遺構密度は低いものの、当調査地に古墳時代の遺構が展開していると考えられる。

②13世紀～14世紀初頭頃（第223図）

土師器編年0期（13世紀）のA区SE155、SE165がこれにあたる。また、A区SE155、SE165より、後出する遺構としてB区SE26が挙げられる。土師器編年0期との対応関係は不明だが、掘立柱建物跡の変遷からは、A区建物軸N-6°-Wと建物軸N-19.5°-Wの掘立柱建物跡が、該当し、建物軸N-19.5°-Wについては、少なくとも2回以上の建替えが想定される。そして、建物軸N-19.5°-Wの建物跡の立地や出土遺物を鑑みると、建物軸N-19.5°-Wから、次の建物軸N-14°-Wへと移り変わっていくと考えられる。

③14世紀～15世紀頃（第223・224図）

土師器編年Ⅰ～Ⅵ期の建物軸N-14°-Wの掘立柱建物跡が該当する時期である。B区SD08、SD13、SE25もこの時期にあたると思われる。また、下記に含まれていないA区建物軸N-14°-Wの掘立柱建物跡、SD023、SD028、SD221、SD222、SE117、SE450、SE820、土坑の大半、SX260も当該期と思われる。この時期を、土師器編年に従って6期に細分する。

土師器編年Ⅰ期（14世紀前半）	A区SP236、SE131、SE239、SP554、SB㊸
土師器編年Ⅱ期（14世紀後半～15世紀初頭）	A区SK140、SK250、SB㊹
土師器編年Ⅲ期（15世紀前半）	A区SK270、SK360、SB㊺（SP370）、SB㊻、SB㊼、SB㊽（SP632）
土師器編年Ⅳ期（15世紀中頃～後半）	A区SP275、SK145、SX204、SP909、SE118、SB㊾、SB㊿、SB㊽
土師器編年Ⅴ期（15世紀後半～末）	A区SE202、SD026、SD025、SE435、SB㊾
土師器編年Ⅵ期（15世紀末～16世紀初頭）	A区SP375、SK280、SK285、SB㊿

④16世紀末～17世紀中頃（第224・225図）

掘立柱建物跡の変遷からは、建物軸N-1°-Wの建物跡が該当すると思われる。さらにこの建物軸内で、少なくとも4回以上の建替えが想定される。建物軸N-1°-Wの建物跡は、総柱建物跡や墨内柱を持つものが存在し、それらは、検出された40棟の掘立柱建物跡の中で身舎面積が比較的大きな建物であり、前段階の建物跡とは、掘立柱建物の構造が変化しているように思われる。また、建物の立地も、前段階の建物軸N-14°-Wの建物は上段が中心であったのに対し、建物軸N-1°-Wの建物跡は、下段のみに展開しており、建物群の中心が下段に移っている。

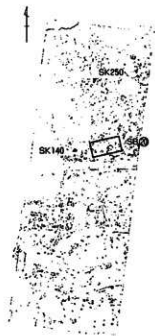
建物軸N-1°-Wの建物跡と併存していた可能性の高い井戸遺構が、A区SE230・SE097・SE290である。井戸遺構からは、中世遺物の他、大橋編年Ⅰ期～Ⅲ期（1580～1690年代）のものが出土していることから、16世紀



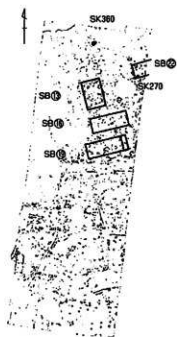
②13世紀～14世紀初頭頃



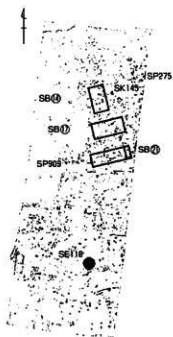
③14世紀前半頃
土師器編年Ⅰ期



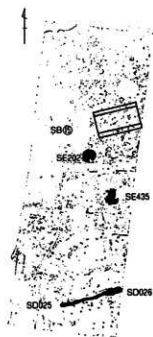
③14世紀後半～15世紀初頭頃
土師器編年Ⅱ期



③15世紀前半頃
土師器編年Ⅲ期



③15世紀中・後半頃
土師器編年Ⅳ期



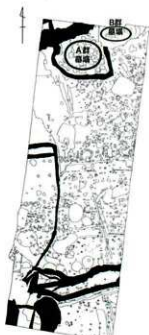
③15世紀後半～末頃
土師器編年Ⅴ期



③15世紀末～16世紀末初頭頃
土師器編年Ⅵ期

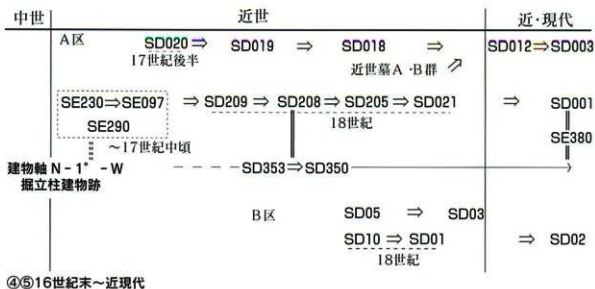


④16世紀末～17世紀末中頃



⑤17世紀後半頃～近・現代

第224図 下志村遺跡第2次調査遺構変遷図2



第225図 下志村遺跡第2次調査遺構変遷図3

末～17世紀中頃まで機能し、廃絶したと考えられる。A区 SE097、SE230、SE290 は、五輪塔などを使用した石組みの井戸枠を持つ堅牢な井戸遺構で、農業用の井戸とは考えられず、明らかに生活に伴う井戸遺構である。このことから、建物軸 N-1° - W の建物跡と併存する可能性が指摘される。

⑤ 17世紀後半頃～近・現代（第224・225図）

第224・225図に挙げられているA区の溝状遺構・墓・SE380、B区の溝状遺構が当該期の遺構である。17世紀中頃に井戸遺構が廃絶されて以降、近・現代になるまで、溝状遺構と墓のみ確認されており、④以前とは様相を異にする。A区の「長池」と推定されるSD350、SD353は、近世から近・現代に渡って使用されていたと考えられ、近世においては、SD208と近現代においてはSE380(SD429)と連結していたようである。A区SD001、SE380以降、上段は畑(果樹園)、下段は水田として使用されていたことが地籍図や地図から判明しており、その後、土地区画整理事業を経て、現在に至る。

2. 下志村遺跡第2次調査の性格

ここでは、再度、下志村遺跡第2次調査における遺跡の性格について考えていく。

(1) 14世紀～15世紀頃の下志村遺跡

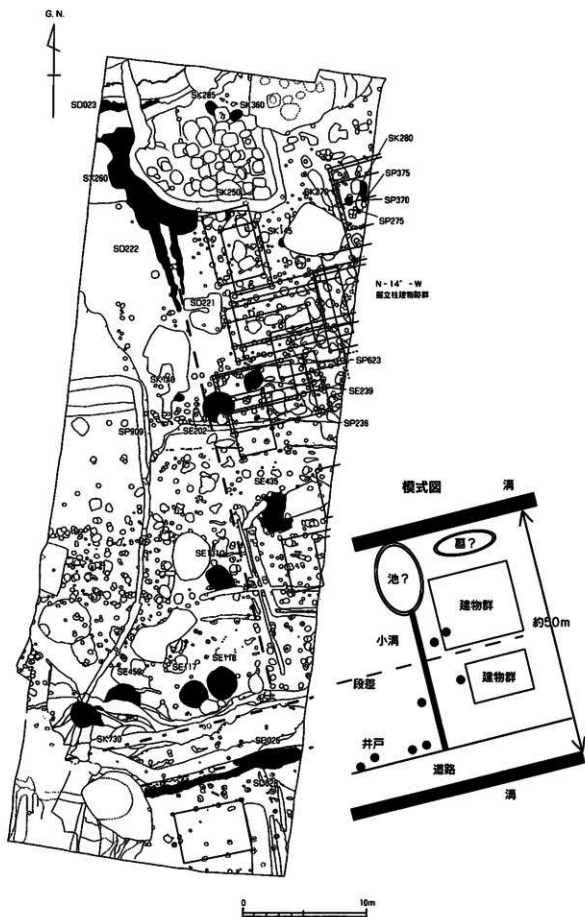
当該期は、遺構・遺物から、下志村遺跡第2次調査の中心となる時期であると考えられる。

第226図は、建物軸N-14°-Wの掘立柱建物跡と同時期であると考えられる遺構を示したものである。SD023からSD025の間は、約50mを測る。この2条の間に展開する掘立柱建物跡は、SD221、SD222およびその延長線上の西側に、全く展開しない。また、井戸遺構はSD221、SD222及びその延長線上の東西、近世の溝状遺構であるSD021の北側に沿って確認されている。SD025と近世のSD021の間には若干の硬化面が見られ、この2条の溝状遺構に挟まれた空間は、道路遺構であった可能性が指摘される。また、A区中央で掘立柱建物建築当時から上下段が存在していたことが確認されており、その段差の規制を受けながら掘立柱建物跡が展開していた。SD221、SD222及びその延長線上に関しては、井戸遺構やSK140が、その西側にも展開することから、掘立柱建物を区画する溝状遺構であったと思われる。また、③土師器編年Ⅱ期のSB㊟と境界の祭祀遺構と想定されるSK140は、SD221、SD222の延長線を挟んで、東西に展開していることも興味深い。このように当該期では、区画の存在が想定できる。そして、③の遺構変遷(第223・224図)からは、掘立柱建物跡が、その区画に規制され、ほぼ同位置に、計画的に変遷していくことが見て取れる。

当該期では、掘立柱建物跡の規格性の高さ、井戸遺構の存在、生活関連遺物の出土から、定住していたことが窺える。また、近世・近代墓群のA群の一部とSK285が、中世まで遡る墓群である可能性を考えれば、区画と思われるSD023の南側と掘立柱建物跡の北側との間に墓群が展開していた可能性も考えられる。前述のように、墓群が存在していたのであれば、このことも、世代を越えた長期に渡る定住を示す根拠の1つとなるだろう。

遺物は、土師器類、瓦質土器、土師質土器、貿易陶磁器、備前焼、土師、砥石、五輪塔、銭貨など多彩な遺物が出土している。この中には、防長系足銅・銅鉢、古瀬戸の瓶子が含まれ、時期は異なるが、東播系中世須恵器、吉備系土師器類も出土しており、瀬戸内地域との繋がりを連想させる。そして、1点のみであるが館系土師器Ⅰ式、威信材と考えられる青磁盤の出土は、当該期の性格を考える上で重要である。また、17世紀中頃に廃絶した井戸遺構から、石轆と考えられるものが出土している。この石轆に関しては、小柳氏により居館との関連が指摘される遺物であり注目される。

当該調査地は、第Ⅰ浜堤の中でも、内陸のほうから数えて2列目の浜堤上の縁辺部に位置していた。また、後背湿地を挟んだ東側は、最も内陸側に位置する1列目の浜堤の西端であり、南側には、大野川に向かって開ける後背湿地が広がっていた。このような場所に立地することから、当該跡は、伊予街道(近世)の前身となる道、或いは、それから派生し大野川へ通じる道との関連が深いものと考えられる。また、先にも述べたが、後背湿地を挟んで東側は、最も内陸側に位置する1列目の浜堤の西端であることから、内陸部の第Ⅰ浜堤から海岸部の第Ⅲ浜堤と抜ける道との関連も注目される。そして、当該跡は大野川から非常に近く、海部郡の西端に位置している。このような状況から、当該跡は交通の要衝に位置していたと考えられる。



第226図 ③ 14世紀～15世紀墳遺構配置圖 (1/300)・模式図

竪立建物跡の状況からは、屋敷、居館の可能性を指摘した。区画、それに規制され展開する遺構群と建替えられた竪立建物群、そして出土遺物の状況も、屋敷、居館である可能性をより強く裏付けるものである。よって、当遺跡は、14～15世紀代を中心に、交通の要衝に位置した、威借材を持ちうる層の屋敷または居館であると想定される。

(2) 16世紀末頃以降の下志村遺跡

16世紀中頃に断絶の後、16世紀末～17世紀中頃に、A区下段に建物軸N-1°-Wの建物跡とSE230・SE097・SE290が展開したと考えられる。第V章3で、建物軸N-1°-Wの建物跡は、建築史的に見て一般的な建物ではなく、特殊な建物群であった可能性を指摘した。

ST216と切り合う遺構から7枚の銭貨が出土している。この7枚の銭貨は六道銭である可能性があり、また北宋銭を含むことから、16世紀後半～17世紀前半ごろの組成を示すものである可能性が指摘される。よって、ST216は、建物軸N-1°-Wの建物跡やSE230・SE097・SE290と併存していたと考えられる。

当調査地一帯は、区画整理事業以前、「ホンガンジャシキ」と呼ばれていた。これは以前に存在していた「本泉寺（ホンカジ）」に由来しているとのことである。フロイスによると16世紀後半、大在地域には、キリシタンが多く居住していたとされており、このような状況下では、寺院が当地域から離脱したと推察される。その後、大友氏が豊後の地から改易され、キリスト教が禁教となる中、離脱していた寺院が、大在の地に戻りはじめたことは想像に難くない。そして、これらの寺院は、「寺請制度」の一端を担ったと考えられる。『豊後長光寺縁起』によると、現在、大在中央町にある長光寺が、1633年に「ホンガンジャシキ」と呼ばれる当調査地（大西村）へ移ったとのことである。そして、1667年に火事にあい、現在の場所へ移ったとされている。

ここで当遺跡の状況を見ると、16世紀末～17世紀初頭の間に、建物軸N-1°-Wの建物跡のSB⑥（総柱建物跡）が建築された可能性が高く、建物軸N-1°-Wの建物跡に伴うと推察される井戸遺構は、17世紀中頃に廃絶したと考えられる。寺院境内墓地の初瀬は、16世紀末～近世初頭であり、出土した7連の銭貨と、ST216との関係も注目される。

17世紀中頃以降は、それ以前とは異なり、溝状遺構と竪穴とが展開する閑散とした状況が想定される。

16世紀末以降の下志村遺跡第2次調査の様相は、年代や竪立建物跡の特殊性などが『豊後長光寺縁起』の記述と符合し、その符合点の多さは、注目に値する。「ホンガンジャシキ」と言われる当調査地一帯には、近世初期、長光寺が移って来る以前に「本泉寺」があったということである。よって、14・15世紀代の当遺跡は、屋敷または居館であるとしたが、寺院であった可能性も指摘される。

3. 問題点と今後の課題

今回の調査では、遺跡の一部を調査したに過ぎず、竪立建物跡や柱穴遺構がその主体を占めるため、出土遺物も乏しく、その全容は不明であり、現段階での当遺跡の性格は、推測の域を出てはいない。

また、遺構変遷においても明確でない部分がある。当遺跡では、中世の溝状遺構を近世・近・現代の溝状遺構が踏襲しており、中には区画整理事業前の地籍図に描かれているものもある（第227図）。近・現代であっても大字・小字の形状が、浜堤に規制されていることから、長年に渡って踏襲された溝状遺構に関しても、地形に規制された結果と考えられる。このような溝状遺構の状況を見ると、当遺跡は中世から現在まで、連綿と遺構が展開していたかのような印象を受ける。しかし、16世紀中頃は断絶していた可能性が高く、また13世紀頃の遺構の様相は明らかではない。

現段階で、当遺跡を取り巻く政治的・社会的背景は、明らかとなっていない。乏しい出土遺物からは、瀬戸内地域との繋がりが考えられ、1点のみ出土した簡系土師器Ⅰ式からも、外部との関係が窺われる。そして、海部郡



第227図 地籍図上における調査区配置図 (1/1500)

の西端に位置する当遺跡の立地を考慮し、館系土師器Ⅰ式が存在を通すと14世紀末～15世紀初頭に海部北部に進出した大友氏との関係も注目される。

今後、下志村遺跡第2次調査地周辺における調査の進展により、当遺跡の政治的・社会的背景が明らかにされ、歴史的位置付けがなされることを期待したい。

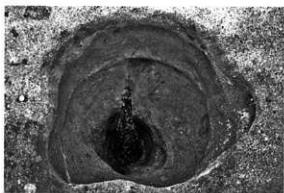
i 宗像・植田地区の居館と考えられる区画のコーナー付近に、いずれも戦国期から近世前期と考えられる石幢が建っていることを指摘されている。

小柳和宏 1994 「鎮西における居館の出現と展開」『城と館を掘る・読む』山川出版社

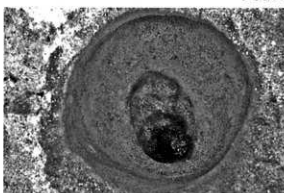
ii 大在淳空氏(長光寺 16 代目住職)、首藤隆人氏からの聞き取り調査による。

iii 大在淳空氏(長光寺 16 代目住職)からの聞き取り調査による。

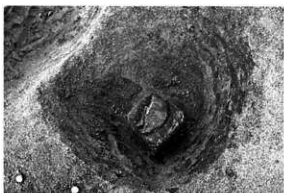
写 真 图 版



1. A区 SP362



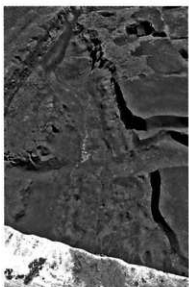
2. A区 SP314



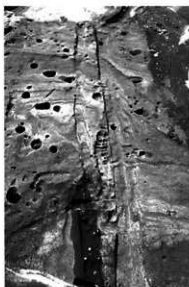
3. A区 SP618



4. A区 SP802



5. A区 SD023



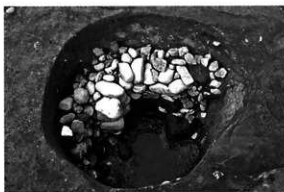
6. A区 SD025



7. A区 SD028



8. A区 SE380



7. A区 SE097

図版 2



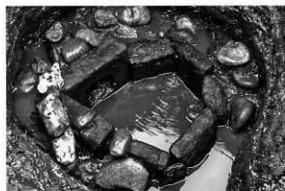
2. A区 SE230 井戸枠



2. A区 SE230



3. A区 SE290 井戸枠 1段目



4. A区 SE290 井戸枠 3段目



5. A区 SE450
井戸枠



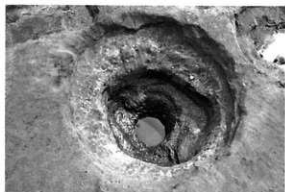
6. A区 SE300



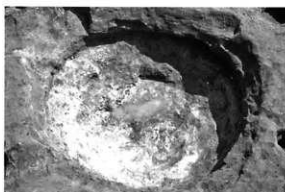
7. A区 SE820 井戸枠



8. A区 SE435



1. A区 SE118



2. A区 SE117



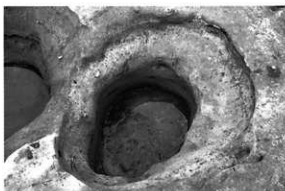
3. A区 SE239



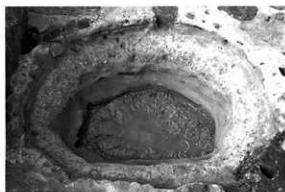
4. A区 SE202



5. A区 SE131



6. A区 SE165



7. A区 SE155



8. A区 SE830

图版 4



1. A区 SK140



2. A区 SK280



3. A区 SK285



4. A区 SK730



5. A区 SK1094



6. A区 SX260



7. A区 SX200



8. A区 SX390



1. A区 ST210



2. A区 ST220



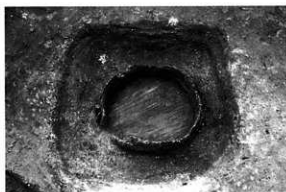
3. A区 ST237



4. A区 ST306



5. A区 ST297



5. A区 ST303



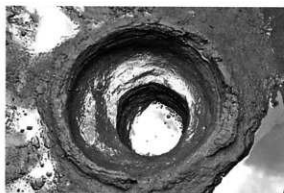
6. A区 ST298



7. A区 ST299



1. B区全景



2. B区 SE25 井戸枠



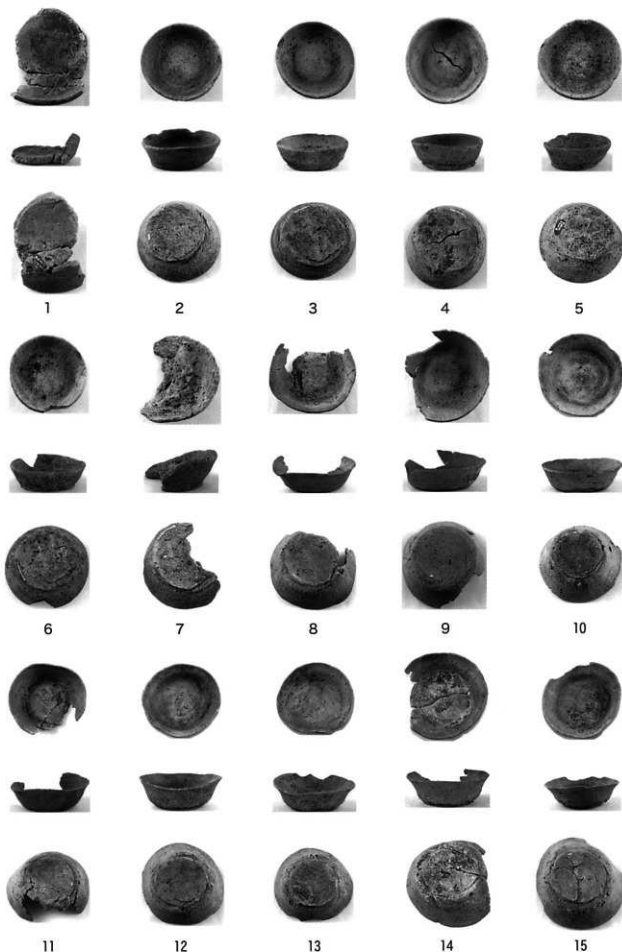
3. B区 SE25



4. B区 SE26



5. B区 SK04



图版 8



16

17

18

19

20



21

22

23

24

26



25



A区 SK140 出土遺物②



1. A区 SE435 出土遺物



2. A区 SE118 出土遺物



3. A区 SE117 出土遺物



4. A区 SE239 出土遺物



5. A区 SE202 出土遺物



6. A区 SE131 出土遺物



7. A区 SE165 出土遺物



8. A区 SE155 出土遺物



7. A区 SE165 P13 出土木製品



2. A区 SE165 出土木製品



3. A区 SE097 出土五輪塔 梵字①



4. A区 SE097 出土五輪塔 梵字②



5. A区 SE290 P1 出土五輪塔 梵字



6. A区 SE290 P19 出土五輪塔 梵字①



7. A区 SE290 P19
出土五輪塔 梵字②



8. A区 SE290 P19
出土五輪塔 梵字③



9. A区 SE290 P19
出土五輪塔 梵字④



1. A区 S0221 出土遺物



2. A区 S0025 出土遺物



3. A区 S0026 出土遺物



4. A区 SP618 出土遺物 5. A区 SP802 出土遺物 6. A区 SK285 出土遺物



7. A区 SX260 出土遺物



8. A区 ST306 出土遺物

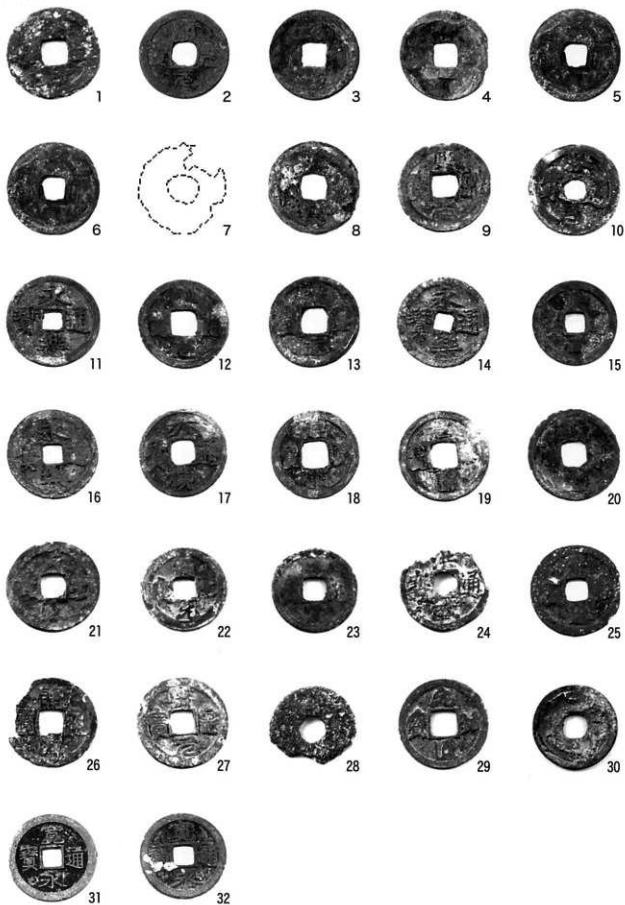


9. B区 SE26 出土遺物



10. B区 SK04 出土遺物

図版12



報 告 書 抄 録

ふ り が な	しもしむらいせきだい2じちょうさ							
書 名	下志村遺跡第2次調査							
副 書 名	大在西小学校建設工事に伴う発掘調査報告書							
巻 次	—							
シ リ ー ズ 名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告							
シ リ ー ズ 番 号	第54集							
編 集 者 名	上 野 淳 也 ・ 水 町 裕 子							
編 集 機 関	大分市教育委員会							
所 在 地	〒 870-0046 大分市荷揚町2番31号 T E L (097) 534-6111							
発 行 年 月 日	2005年3月31日							
所 収 遺 跡 名	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積	調 査 原 因
		市 町	遺跡番					
下 志 村 遺 跡	大分県 大分市 角子原 1丁目	44210	332182	33度 14分 36秒	131度 42分 36秒	20021107 ～ 20030529	3450㎡	学校建設工事
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特 記 事 項
下 志 村 遺 跡	包蔵地	古墳時代 中世		土坑 掘立柱建物跡 溝状遺構 井戸遺構 土坑 溜井状遺構 集石遺構 溝状遺構 墓壇		古墳土師器 中世土師器 瓦器碗 中国産陶磁器 備前焼 銭貨 近世陶磁器		中世の掘立柱建物跡、井戸遺構、溝状遺構、溜井状遺構などが検出され、中世の定住の跡を確認するに至った。
		近世						

大分市埋蔵文化財発掘調査報告 第54集

下志村遺跡第2次調査

大在西小学校建設工事に伴う発掘調査報告書

発 行 日 2005年3月31日

編 集 ・ 発 行 大分市教育委員会文化財課

〒 870-0025 大分市荷揚町2番31号

T E L (097) 534-6111

印 刷 いづみ印刷株式会社

大分市大字下郡字丁畑 3119-1